

バトルシップイレブン
～艦娘とサッカー少年
達の出会い～

ヒビキ7991

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グランドセラスタギヤラクシーを終えて

再び雷門中へと戻ってきた天馬、剣城、神童の三人。

そんなある日、三人の前に謎の少女が現れる。

少女の後を追いつ、三人がたどり着いたのはなんと

艦娘と深海棲艦が存在する世界だった!?

たどり着いた天馬達は不思議な艦船の力を

手にし、激戦が繰り広げられる世界に新たなる

革命“カゼ”を起こす!

目次

Episode 0 / 始まりの出会い	1
Episode 1 / 鎮守府での出会い	14
Episode 2 / 敵聖地を撃破せよ	44
!	
Episode 3 / 激闘! 長門VS	71
天馬!!	
Episode 4 / 天馬と吹雪の大特	95
訓! 《前編》	
Episode 4 / 天馬と吹雪の大特	95
Episode 5 / W島攻略作戦	127
訓! 《後編》	
Episode 6 / さようなら、	159
Episode 7 / 金剛型四姉妹登場	187
月・・	
!	
Episode 8 / 南西海域を攻略せ	227
よ!	
Episode 9 / 結成! 第五遊撃部	256
隊!!	
Episode 10 / 私が旗艦で俺が	290
指揮艦!?	
Episode 10 / 天馬と吹雪の大特	334

E p i s o d e 1 1 / サツカーやりま しよう!	368	霊	591
E p i s o d e 1 2 / 接近する二人		E p i s o d e 1 8 / 幽霊を探せ!	
430 E p i s o d e 1 3 / 加賀と瑞鶴とヲ 級と	467	623 E p i s o d e 1 9 / 明かされる真実	
E p i s o d e 1 4 / 嫌い嫌いも好き		E p i s o d e 2 0 / 夕立のパワー アップ!	671
のうち	497	E p i s o d e 2 1 / 悲劇は突然に	
E p i s o d e 1 5 / 大和とヤマト		696 E p i s o d e 2 2 / 吹雪改への道!	
535 E p i s o d e 1 6 / 大和、海へ!		《前編》	727
E p i s o d e 1 7 / トラック島の幽		《後編》	754

Episode 23 / ついに結成！バ トルシップイレブン！	778	動砲！！	952
Episode 24 / 発動！MI作戦		Episode 30 / 悲しい過去、希 望の未来	981
！	819	Episode 31 (終) / 戦いを終え て	999
Episode 25 / 定められた運命 と希望の光	842	Season 2 / 鉄底海峡を抜けて	
Episode 26 / 棲地MIを撃破 せよ！	869	Episode 32 / もう一人の山城 ！マーズの決意！	1012
Episode 27 / オペレーショ ン・ライトニング！！	901	Episode 33 / 吹雪、最大の危 機！	1065
Episode 28 / ヤマト、敗北：		Episode 34 / ショートランド と謎の声	1125
Episode 29 / 放て！俺達の波	931	Episode 35 / 如月と加賀	

ムサウンド突入作戦

1179

Episode 37 / アイアン・ボト

1163

Episode 36 / 深海棲艦の正体

1143

Episode 0 / 始まりの出会い

私立雷門中学校 グラウンド

ここは東京のとある町、稲妻町にあるサッカー名門、私立雷門中学校にあるグラウンド。このグラウンドでは現在、この学校の顔とも言えるサッカー部の一軍が練習をしていた。季節は夏真っ盛り。暑い日差しがキラキラと照らす。

神童

「天馬！剣城にパスだ！」

天馬「はい！」

ドリブルでボールを運ぶ彼は、背番号8番《松風天馬》。ポジションはミッドフィールダー、学年は1年。雷門中サッカー部のキャプテンで、地球代表アースイレブンのキャプテンとしてチームをグラウンドセレストタギヤラクシー優勝へと導いた少年でもある。風のように素早いドリブルを得意とする。

指示を出す彼は背番号9番《神童拓斗》。ポジションはミッドフィールダー、学年は2年。神のタクトと呼ばれる腕前を持つ天才ゲームメーカー。女子からの人気が高い。天馬と共にグラントセラスタギャラクシーでアースイレブンの司令塔を勤めた。

天馬

「剣城！ シュート決めろ！」

剣城

「おう！」

天馬からパスを受け取った彼は、背番号10番《剣城京介》。ポジションはフォワード、学年は1年。チームのエースストライカー。サッカー管理組織フィフスセクターの元シード。天馬の一番のライバルでもある。天馬、神童と同じくグラントセラスタギャラクシーでエースストライカーを勤めた。

剣城

「いっくぞー！」

劍城はボールを片足で器用に持ち上げ、持ち上げた足とボールが平行になる高さまであげると素早く足を戻す。

そして急に足から離され空中に放り出されたボールに素早く蹴りを入れると、ボールは黒いオーラを纏う。そしてボールの前で手刀を剣のように縦に振るう。

劍城

「《デスソード》！」

ボールは長剣のようにゴールへ伸びていく。

信助

「絶対に止める！」

ゴールを守るのは背番号20番《西園信助》。ポジションはゴールキーパー、学年は1年。サッカー部員の中でもかなり小柄だが、その体を活かした得意のジャンプで

それをカバーしている。彼も天馬達同様、グランドセレストアギヤラクシーへの出場経験を持つ。

信助

「さくざー！」

信助は一瞬でゴールの前からコーナーに移動しゴール中央に向かって全速力で走る。そして剣城のシュートにジャンピングパンチを叩き込んだ。

信助

「《ぶつとびパンチ》！」

パンチを叩き込まれたシュートはゴールの斜め右上を通過してフィールドの外へ飛んでいった。

天馬

「ナイス信助！」

信助

「えへへ。」

するとそこへ、ヘアバンドを着けた一人の若い男性が現れた。彼の名は《円堂守》。雷門中サッカー部の監督であり卒業生。10年前の雷門中サッカー部と、日本代表イナズマジャパンを大会優勝に導いた男だ。

円堂

「よし、今日の練習はここまでだ！みんな、脱水症状と熱中症には気をつけろ！」

一同

『お疲れ様でしたー！』

〈商店街アーケード〉

練習を終えた天馬、劍城、神童の三人は商店街を歩いていた。今日発売の限定スパイクを買うためだ。

天馬

「例の限定スパイク、まだあるかな？」

劍城

「さあな。こんな時間じゃ、流石にもう売り切れてるんじゃないか？」

神童

「行ってみる価値はあるんじゃないか？」

天馬

「そうですね！それじゃ・・・ん？」

突如動きを止め、その場で立ち止まる天馬。

神童

「どうした天馬？」

天馬

「あれ。」

天馬の視線の先には一人の少女がこちらを見ていた。少女は上に来ている服と境目が分からぬ程の白い肌に青色に輝く瞳と青みを帯びた銀の髪。大きな口がついた大きな帽子のようなものを頭に乘せ、黒いマントを羽織り、黒いブーツをはき、黒いステッキのようなものを手に持っていた。

少女

「……。」

天馬

「あ、あの……。」

少女は天馬の呼び掛けには動じず、ただじつとこちらを見ていた。すると……

少女

「……イケル。彼ラナラ、キット……アナタ達、私ニツイテキテ。」

少女はそう言う走り出した。

神童

「誰なんだ？」

劍城

「さあ、分かりません。」

天馬

「ついて行ってみましょう。」

天馬、神童、劍城の三人は少女の後を追う。

┌ 商店街裏通り 廃ビル ┐

三人は商店街の裏通りの一角にある廃ビルへとやって来た。

天馬

「いったい、何処へ向かってるんだ？」

少女

「コッチ・・・」

少女は迷路のように複雑なビルの中をスイスイと走っていく。天馬達も少女の後を一生懸命追いかける。だが追いかけた先に少女はおらず、代わりに木製のレトロな扉があった。

天馬

「あれ？」

劍城

「誰も居ないな……」

神童

「さっきの人は何処に消えたんだ？」

天馬

「もしかして、この扉の奥かな？」

天馬はドアノブに手をかけ、そして恐る恐るゆっくりと扉を開ける。そして、扉の先にあったのは……

ザブ
ン
……
ザ
ザ
ン
……
……

扉の先は、灯台のある港の栈橋。目の前には雲ひとつ無い青空と青色にキラキラと輝く海が広がっていた。

天馬

「ここは、港？」

劍城

「綺麗だな…」

神童

「ただの港と言うわけでは無さそうだ。」

三人は振り向くと、前方にレンガ造りの大きな建物が複数とグラウンドがある。

天馬

「見たところ学校みたいですね。」

劍城

「そのようだな。」

神童

「丁度いい、こここの関係者を探してここが何処なのか聞こう。」

天馬

「そうですね。」

三人はその場を後にし、学校とおぼしき施設へ向かった。だが、このとき三人はまだ知らなかった。この施設は学校ではなく、ある謎の敵と戦うために作られた鎮守府という施設だった。

Episode 1 / 鎮守府での出会い

↳ 鎮守府 敷地内↳

天馬達三人は、鎮守府の中を歩き回っていた。
が・・・

天馬「それにしても、この学校

結構広いですね……」

神童「そうだな……

始めの場所から相当歩いたと思うが……」

劍城「弱音を吐くのは好きじゃありませんが、

流石に腹減って来ました……」

神童「俺も同じことを言おうと思っていた……」

天馬「俺も……」

三人は鎮守府の中で関係者を探し回っていたが、一時間歩き回って誰にも会えないでいた。

流石に体力が限界に近い様子だ。

すると、前方に「甘味処」と書かれた

赤旗を発見した。

天馬「甘味処つてことは、お菓子屋さんですかね？」

神童「丁度いい。

少し休んでいくとしよう。」

劍城「そうですね。」

く宮間 処味甘く

天馬 「みやま ところみかん？」

神童 「《かんみどころ まみや》だ。」

劍城 「逆読みつてことは、結構古いお店

なんでしようか？」

神童 「わざと逆読みにしているのかも

知れないぞ。」

天馬 「とにかく、入ってみましようよ。」

三人は暖簾を潜り店内に入る。

店内は土壁にテーブル席と座敷の両方があり

中央には囲炉裏と鉄鍋。

壁には木の札に書かれたメニューがズラリと並び、

いかにも老舗という雰囲気漂ってくる。

三人は一つのテーブル席に座ると、奥から

綺麗な女性がやって来た。

間宮 「いらつしやいませ。

あら、男の子のお客さんなんて

初めてですわ！」

天馬 「初めてなんですか？」

間宮 「ええ、この店を開けてから男の子のお客さんは

一人もいらしておられません。」

神童 「そうなんですか。」

間宮 「おっと、お喋りがすぎてしまいました。

ご注目は何にされますか？」

神童 「俺はおはぎを。」

劍城 「俺は焼き団子とかき氷をお願いします。」

天馬 「俺は名物の特盛あんみつをお願いします！」

間宮 「かしこまりました。

特盛あんみつは少々時間を頂きますが

よろしいですか？」

天馬「大丈夫です。」

間宮「かしこまりました。」

間宮は厨房に入り調理を始める。

数分後

間宮「はい、おましたせ。」

おはぎと焼き団子とかき氷です。」

神童「ありがとうございます。」

劍城「これは、実に美味しそうだ。」

間宮「それから・・・よいしょっと。」

間宮はおはぎと焼き団子とかき氷に続き

今度は大きな丼に山盛のあんみつを持ってきた。

間宮「はい、名物の特盛あんみつです。」

天馬「うわっ、凄いボリューム…

いただきます。」

天馬はスプーンであんみつを口一杯ほうばり、
劍城と神童も自らが頼んだ菓子を味わう。

天馬「美味しい！」

神童「あんこの甘さが丁度いいな。」

劍城 「団子の焼き具合もいいですよ。」

間宮 「ありがとうございます。」

天馬 「ところで、えーつと……」

間宮 「間宮で構いません。」

天馬 「じゃあ間宮さん、この学校って

なんて名前なんですか？」

間宮 「ここは学校じゃありませんよ。」

「ここはですね……」

「ハハッポイよー！」

間宮が話そうとする前に、店に三人の少女が入ってきた。

一人は茶髪の髪に茶色い瞳、

そして青と白のセーラー服。

もう一人は赤紫の髪に赤い瞳、

そして緑と白のセーラー服。

そしてもう一人は白い髪のロングヘアーに緑色の瞳
そして黒と白のセーラー服の少女だ。

睦月「こんにちは。」

間宮「いらつしやい。」

あら、睦月ちゃんの新しいお友だち？

吹雪「特型駆逐艦の《吹雪》です！

よろしくお願ひします！」

間宮「よろしく。」

天馬「特型駆逐艦？」

吹雪「えっ？」

吹雪、睦月、夕立の三人は、天馬達に気づき

少し驚いている。

三人は天馬達が座っている席の隣の席に座った。

夕立「男の子のお客さんがいるツポイ！」

天馬「君達、この学校の生徒？」

睦月「ここは学校じゃないよ。」

「ここは鎮守府っていう施設だよ。」

天馬「鎮守府？」

神童「かつて日本海軍の根拠地として、

艦隊の後方を統轄した機関だ。」

天馬「なるほど。」

「ところで、特型駆逐艦って言ってたけど

君達は何者？」

吹雪「私達は、《艦娘》っていうの。」

天馬「カン・・・ムス？」

睦月「艦娘っていうのは、戦船の魂を持つ

女の子達のことです。」

剣城「なるほど。」

「じゃあ、三人とも、その艦娘なのか？」

睦月「はい！」

「私は睦月型駆逐艦の1番艦、睦月です！」

夕立「私は白露型駆逐艦の4番艦、夕立ッポイ！」

劍城「ポイって、知らないのか？」

夕立「これは口癖ッポイ！」

吹雪「そして私は、特型駆逐艦の1番艦

吹雪です！」

天馬「みんな駆逐艦か。」

吹雪「そういえば、あなた達の名前

まだ聞いてないけど？」

天馬「おっと、ごめん。」

俺は松風天馬！

俺のことは天馬って呼んで！」

劍城「劍城京介だ。」

神童「神童拓斗だ、よろしく。」

天馬「ところで、戦船の魂を持つって言ってたけど

もしかして何かと戦ったりするの？」

吹雪「私達は《深海棲艦》と戦い、

制海権を取り戻すのが仕事なの。」

神童「深海棲艦？」

何なんだそれは？」

睦月「深海棲艦は、文字通り深海から出現する

謎の艦艇軍のことです。

駆逐艦から超弩級大型戦艦まで多才を極める

深海棲艦の攻撃によって、人類は

制海権を損失してしまった。」

夕立「そんな深海棲艦と互角に戦える存在が、

私達艦娘！」

私達は《艤装》っていう武器を装備して

深海棲艦と戦うの！」

天馬「深海棲艦……」

聞くだけで恐ろしい相手だね。」

神童「ああ……」

睦月「ところで、天馬君達は何処から来たの？」

天馬「えっ？」

俺達は、えーっと……」

天馬が質問に答えようとしたその時・・・

『ウウウウウウウウウウウウウウウ……』

鎮守府内全域に警報が響き渡る。

天馬「なんの音？」

睦月「出撃の準備を知らせる警報だよ。」

夕立「急いでドックに行くツпой！」

睦月、夕立、吹雪の三人は店を後にし、

出撃ドックに向かう。

天馬、剣城、神童の三人も店を後にし、

三人の後を追いかける。

く鎮守府 地下ドックく

ドックには、吹雪達三人の他にも複数の艦娘が集まっていた。

空母《赤城》と《加賀》を中心とする第一機動部隊。戦艦《金剛》と《比叡》を中心とする第二支援艦隊。

そして吹雪達の所属する、軽巡洋艦《神通》を旗艦とした第三水雷戦隊だ。

天馬達三人も、ドックに来ていた。

そして準備が整い、ドック内に秘書官の声が響き渡る。

長門『秘書艦の長門だ。』

第四艦隊が佳日、遠征中に敵深海棲艦と遭遇。

その際、敵基地を発見した。

この鎮守府正面海域を制圧している艦隊の

棲地であることは間違いない。

これより、ここを強襲する！」

艦娘一同「おおー！」

天馬「強襲つてことは、敵の基地を

攻撃するつてことですよね・・・？」

神童「ああ・・・」

赤城「強襲・・・」

いよいよ反撃ですね！」

加賀「ここは譲れません。」

金剛「ウオー！」

鼻息が鳴るネー！」

比叡「お姉様、間違つてます。」

長門『布陣は、一航戦 赤城 達を拠点とした

第一機動部隊が敵棲地を強襲。

第二支援艦隊はこれを援護。

第三水雷戦隊はこれらの主力の前衛として

警戒にあたる。

いいな?』

一同「はい!」

長門『本作戦の目標は、深海棲艦の脅威を排除し、

この鎮守府正面海域からの護衛航路を

回復することにある。

各自、心して作戦にかかってほしい。

満身は禁物だ。』

暁「誰に言ってるのかしら?」

響「ハラショー。」

長門『では、第三水雷戦隊、主力に先攻して出発!

暁の水平線に勝利を刻むのだ!』

ドツクの扉が開き、前方に広い海が広がる。

吹雪達、第三水雷戦隊はカタパルトで
出撃エリアまで移動する。

だが、

吹雪（ど、どうしよう・・・）

吹雪は何やら心配な様子。

睦月「さあ、頑張って行きましょう！」

吹雪「う、うん・・・」

でも、私実は・・・」

夕立「さあ、素敵なパーティーにしましょう！」

天馬「吹雪さん！」

頑張ってきてください！」

遙か上から吹雪を応援する天馬。

吹雪（ここまで来たら、行くしか無いよね!?)

『第三水雷戦隊、出撃してください。』

海中に明かりが灯り、第三水雷戦隊六人の前に

「出撃」と大きく書かれた巨大なスイッチが現れた。

吹雪「特型駆逐艦 吹雪、行きます！」

吹雪はカタパルトから勢いよくジャンプし

出撃スイッチを踏む。

スイッチが反応し、足元から光が放たれ

吹雪の体を囲む。

さらに足元から様々な機械が現れ、足裏に推進機
股に三連装魚雷の艀装を装備。

外海へ出る途中、門の上部に吹雪と表示され

鎖が巻き上げられていく。

そして海中から駆逐艦吹雪の艦橋を模した艀装を背中に
7.7mm単装機銃を模した艀装を右手に装備し
仲間の第三水雷戦隊と共に大海原へ出る。

『続いて、第二支援艦隊・第一機動部隊

出撃してください！』

赤城「一航戦赤城、出ます！」

加賀「加賀、出撃します。」

第一機動部隊の赤城・加賀の二人も、

片手に弓を持ち出撃スイッチを踏み足に艀装を装着。

更に赤城は右腕に、加賀は左腕に甲板を模した

艀装を装着。

背中に矢の入った矢筒を背負い大海原へ出撃した。

同様に第一機動部隊のメンバーと第二支援艦隊も

艀装を装着し大海原へ出撃。

作戦海域に向かう。

↳ 鎮守府 指令室↳

大淀 「全艦隊、出撃しました。」
長門 「よし、頼んだぞみんな。」

↳ 鎮守府 地下ドック↳

ドックにはまだ天馬達がいた。

神童はドック内部で使えそうな道具が無いか探し、

天馬と剣城は双眼鏡を覗いて吹雪達の様子を見ていた。

かなり高性能な双眼鏡なのか、第三水雷戦隊の

六人の姿がハッキリと見える。

天馬「いたいた。

吹雪さん達発見しました。」

神童「こつちも見つけたぞ。」

神童の手には三つのトランシーバーがある。

神童は、天馬と剣城にトランシーバーを

一つずつ渡した。

天馬「これ動くんですか？」

剣城「ちよっと試してみるか。」

天馬と劍城と神童は、トランシーバーの電源を入れ
周波数を調節する。

すると・・・

『・・・調子悪いッポイ?』

天馬「夕立さんの声だ。」

天馬は双眼鏡で吹雪達の様子を見ながら

吹雪達の会話をトランシーバーで聞く。

すると、何やら吹雪の様子がおかしいことに気づく。

天馬「吹雪さん、どうしたんだろう?」

神童「どうした?」

天馬「吹雪さんの様子がおかしいんです。」

神童は双眼鏡を覗いて吹雪達第三水雷船隊の様子を見る。

すると、何やら転んでばっかりの吹雪の姿が見える。

神通『吹雪ちゃん、もしかしてあなた・・・』

吹雪『えっ？』

い、いや・・・その・・・』

天馬・劍城「ん？」

『実戦経験がない（ツポイ）?!』

天馬「えええっ?!」

川内『ゼロって、じゃあ今日が初出撃?!』

睦月『出撃させてもらえなかったの?』

吹雪『もらえなかったと言うか

無理って言うか………』

那珂『無理?』

何で?』

吹雪『だって私、運動が……』

と言うか天馬君、私達の会話盗み聞き

してるでしょ!!』

天馬（ギクツ!）

吹雪『無線から声が駄々漏れだよ!』

天馬「ご、ごめんなさい……」

すると、剣城のトランシーバーと神童のトランシーバーに別々の通信が入った。

赤城『こちら第一機動部隊の赤城！

現在、敵深海棲艦と交戦中！

大至急、第二支援艦隊を向かわせてください！』

剣城「第一機動部隊が深海棲艦とぶつかったそうです。」

金剛『こちらナンバー2支援艦隊の金剛デース！

敵深海棲艦と遭遇しました！』

神童「こっちも同じだ。

だが、どうなっているんだ？

まだ第一も第二も敵海域に到達して

いないはずだが……」

（指令室）

神通 『こちら第三水雷戦隊！』

敵深海棲艦と交戦中！

敵艦隊、空母又級1・軽巡下級2

駆逐艦多数！』

夕立 『どんどん増えてるツポイ！』

長門 「何とか持ちこたえろ！

すぐに援軍を向かわせる！」

長門 「だが、どうする？

第一も第二も敵と交戦中。

援護には向かわせれない

だが今から他の艦隊を向かわせるにしても

時間が足りない・・・

どうすれば・・・」

大淀 「敵深海棲艦、更に増大していきます！

このままでは、退却も不可能に！」
長門「くそっ！」

く地下ドックく

ブリッジの様子を、天馬達は無線で聞いていた。

劍城「深海棲艦・・・」

敵は俺達が思っているより強敵のようですね。」

神童「ああ・・・」

天馬「もう居ても立ってもいられません！」

天馬はジャージを脱ぎ捨てユニフォーム姿になり
ドックから階段を下って出撃エリアへ向かう。

神童と劍城も慌てて天馬の後を追いかける。

出撃エリアにはまだ出撃スイッチが作動したままに
なっていた。

天馬はスイッチの前に立ちジャンプの体制になる。

神童「おい天馬！」

何をする気だ！」

天馬「俺も海に出て吹雪さん達のところへ行きます！」

劍城「無茶を言うな天馬！」

だいたい俺達は艦装をもっていない！

海に出たとしてどうする!?

泳いで向かうにしても間に合わないぞ！」

天馬「それでも俺は行く！」

俺はみんなを助けたいんだ！」

天馬は勢いよくジャンプして
出撃スイッチを踏む。
すると、吹雪達と同じ光が現れ体を囲む。

天馬「こ、これは!？」

足にはまるで宇宙船のエンジンのような
グレーの推進機。

股と脛に四連装魚雷の艀装。

そして手には錨のついた鋼鉄製の指なし手袋を装着。

そして背中には、巨大な三連装砲を2つ搭載した

巨大な艀装と、ある戦艦の艦首を真つ二つに

切断したかのような艀装を装備。

そして両手の甲に一回り小さな三連装砲を、

腕に複数の対空砲を装備。

さらに鋼鉄製の弓と矢筒、そして数本の矢を背負い

大海原へと出撃する。

天馬「松風天馬

宇宙戦艦ヤマト、抜錨します！」

神童「俺達も行くぞ！」

劍城「はい！」

神童と劍城も出撃スイッチを踏み

艦装を装着する。

そして、神童は足に宇宙船のエンジンのような

青い推進機、

背中には大砲が2つ付いた巨大な翼の様な青い艦装、

腰に三連装ビーム砲の艦装を2つ装着する。

劍城は足に宇宙船のような緑色の推進機、

両腕には回転する円形の砲台がついた長手袋、

そして左腕に円柱形の大砲を、右手の甲に

5連装ビーム砲を装備し神童と共に出撃する。

神童「神童拓斗

デウスーラ2世、出撃する！」

劍城「劍城京介

メガルダ、出る！」

三人は吹雪達が戦う海域へと向かう。

天馬「待っててください吹雪さん！

今、助けに行きます!!」

Episode 2 / 敵聖地を撃破せよ!

〈鎮守府 指令室〉

長門「何か、何か策は無いのか?!」

鎮守府では秘書艦の長門が慌てていた。

予想以上に数が多い深海棲艦に、

出撃中の艦隊は防戦一方。

援軍を向かわせることも不可能。

もはや打つ手は無いと思っていたその時……!

大淀「長門秘書艦!」

長門「どうした!?!」

大淀「第三水雷戦隊が戦っている海域へ

猛スピードで接近する艦があります!」

長門「新手の敵艦隊か!？」

大淀「戦艦3隻、敵性反応無し！」

鎮守府から発進したものだと思われませう！」

長門「身元を割り出せるか!？」

大淀「1隻の身元が判明しました！」

艦名は・・・

宇宙戦艦ヤマトです！」



↳ 鎮守府正面海域 エリアA ↳

正面海域では第三水雷戦隊が深海棲艦と
交戦していた。

だが戦況は第三水雷戦隊が防戦一方、おまけに
敵の数がどんどん増えてきている。

ズドーン!

ズドーン!

那珂「うわあああ!

やめてー!」

川内「こんのおおお!」

ズドン！

容赦なく砲撃してくる駆逐艦イ級に

攻撃を仕掛ける川内。

だが相手の装甲が厚いのか効果が薄い。

吹雪「まずいですよ！

後ろからも深海棲艦が近づいてきます！」

川内「なんだって!?!」

第三水雷戦隊の遙か後方から深海棲艦の駆逐艦

口級、ハ級、二級が2杯ずつ接近してくる。

夕立「このままじゃ挟み撃ちにされるッポイ！」

睦月「どうしよう……」

もはや絶体絶命かと思われたその時……

ドカーン!

後方から接近していた駆逐艦が突如爆発沈没した。

神通「深海棲艦が爆発?」

吹雪「いったい、何が……?」

すると、爆煙を通り抜けて接近してくる巨大な艦装を着けた3人の人影が見えた。

川内「援軍か?」

吹雪「あれは……!」

吹雪は3人の姿を見て驚いた。

第三水雷戦隊の元へやって来た3人の正体は・・・

天馬「吹雪さん、お待ちせしました！」

吹雪「天馬君!!」

現れたのは、艦装を装着した天馬・劍城・神童の3人。

神通「吹雪さん、その人達は・・・？」

吹雪「私の新しい友達です！」

天馬「雷門中学校1年、松風天馬です！」

劍城「同じく1年、劍城京介！」

神童「同じく2年、神童拓斗！」

睦月「ねえ天馬君、その艦装は？」

天馬「俺達もよくわからないんですけど、

俺の艦装は、《宇宙戦艦ヤマト》！」

剣城「俺のはメダルーサ級殲滅型重戦艦

《メガルーダ》。」

神童「俺のは特一等航空戦闘艦

《デウスーラ2世》。」

神通「どれも聞いたことない艦ね・・・」

天馬「ここは俺が引き受けます！」

剣城は第二支援艦隊、

神童さんは第一機動部隊の援護に

向かって下さい！」

剣城「了解した！」

神童「任せろ！」

神童は第一機動部隊が戦う海域へ、

剣城は第二支援艦隊が戦う海域へと向かった。

天馬「さあ、いっちょドカンといきますか！」

主砲・副砲、三式弾装填！」

天馬は艤装の二つの砲塔を回転させ、敵深海棲艦に照準を合わせる。

天馬「照準よし！」

撃ち方始め！」

ズドーン！　ズドーン！

左右の主砲から砲弾が計6発勢いよく放たれ、深海棲艦の駆逐イ級6隻に見事命中、駆逐イ級6隻は爆発し海に沈んだ。

天馬「副砲、撃ち方始め！」

ズドーン！　ズドーン！

両手の甲の副砲から砲台が計6発放たれ、
深海棲艦の軽巡ホ級2隻、軽巡ト級4隻に命中。
命中した6隻は爆発し沈んだ。

天馬「よし！」



↳ 鎮守府正面海域 エリアB↳

赤城「流石に数が多すぎます……」
加賀「矢も残りわずかです。」

海域の別のエリアでは、赤城率いる第一機動部隊が
深海棲艦と交戦していた。

雷「なんか、撃っても撃っても沈まないのは

私の気のせい?!

電「同じこと考えてたのです!」

何度攻撃して破壊しても、深海棲艦は

止まることを知らず、逆にドンドン

増えていく一方だった。

すると・・・

バシューン!

一同の横を6本の赤いビームが勢いよく通過し

光線は深海棲艦6隻のボディを貫通。

ボディを貫かれた深海棲艦は静かに沈んでいった。

赤城「いつたい何が・・・？」

一同は振り向いて後ろを見る。

そこにいたのは神童だった。

神童「手伝いに来ましたよ。」

加賀「あなた、誰？」

神童「俺の名は神童拓斗。」

後でゆっくりお話します。」

神童は体を深海棲艦の集団に向け

腰の砲塔の照準を合わせる。

神童「三連装ビームキャノン、発射！」

バシユーン！

左右の砲塔から6本の赤いビームが放たれ、
光線は敵の軽巡ホ級2隻と駆逐口級4隻の
ボディを貫通。

6隻は火も煙もたてずに静かに沈んでいった。

神童「ふんっ」



く 鎮守府正面海域 エリアC く

金剛 「バーニング・ラープ!!」

ズドーン!

別のエリアでは、金剛率いる第二支援艦隊が
深海棲艦と交戦していた。

比叡 「お姉様、敵の数が多すぎます!」

暁 「このままじゃ殺られちゃうわよ!!」

響 「こういうときこそ、落ち着いて。」

数に圧倒されている第二支援艦隊。

すると・・・

劍城 「お疲れさま。

ちよいと交代しましょうか？」

金剛 「ワッツ？

ユーは何者ですネー？」

劍城 「俺は劍城京介、あんたらの味方だ。」

劍城は右手甲の5連装砲を敵深海棲艦に向けて構える。

劍城 「5連装ビームキャノン、撃つ！」

バシューーン！

砲塔から放たれた5本の緑色のビームは深海棲艦の駆逐二級3隻、雷巡子級2隻を貫通、更にその後方にいた重巡り級2隻、軽母又級2隻、

戦艦ル級1隻に命中。

計10隻は爆発・炎上し海に沈んだ。

劍城「ふっ・・・」



く 敵聖地 周辺海域く

天馬と第三水雷戦隊は、敵棲地周辺海域へと
やって来た。

空はいつの間にか厚い雲に覆われ、海は荒波をたてる。
遙か前方には多数の深海棲艦と、棲地中心には
泊地棲姫がいた。

吹雪「あれが、敵棲地？」

天馬「主砲、シヨックカノンに切り替え！

エネルギー装填！」

神通「どうするの？」

天馬「この距離で仕留めれるかやってみます！」

天馬は主砲の照準を泊地棲姫に合わせる。

天馬「照準よし！」

撃ち方始め！」

バシューーン！

2つの主砲から青色のビームが遙か前方の

泊地棲姫に向けて放たれた。

命中かと思われたが・・・

泊地棲姫「フツ……」

ガンツ!

泊地棲姫は障壁を展開しビーム攻撃を防いだ。

その直後、泊地棲姫の前に多数の深海棲艦が集結し厚い壁を作り出す。

吹雪「いつの間に……」

天馬「この距離じゃショットクカノンでも

深海棲艦にダメージを与えられるかは難しい……
だったら……!」

天馬は、真つ二つに切断された艦首の機装を自分の正面で合体させ、艦首形の大砲を作る。そして大砲の左右にある引き金を持つ。

天馬「波動砲、発射用意！」

セーフティロック解除！

強制注入機、作動！

薬室内、タキオン粒子圧力上昇！

エネルギー充填120%！」

波動砲へエネルギーが送られ、発射口辺りに
エネルギーが集まり始める。

天馬「みんな、俺の後ろへ避難してください！」
神通「わかりました！」

神通達第三水雷戦隊は天馬の後ろへ下ががる。
一同は、これから何が起こるのかと思つて
ドキドキしている。

吹雪「いったい、何が起こるのかな・・・？」

夕立「凄いことが起こるツポイよ！」

天馬「波動砲………発射!!」

発射の掛け声と共に、天馬は波動砲の引き金を引く。

バツシユウウウウウウウ!!

発射口から、超極太の青いビームが敵泊地棲姫に向かって放たれた。

厚い壁を構成していた深海棲艦は一瞬で風ぎ払われ、泊地棲姫も障壁を展開し防ぐが、

波動砲の攻撃に対して障壁は破られ、泊地棲姫は光の中に消え、爆発。

攻撃が終わると、先程までいた深海棲艦達は

まるでその場に居なかったように消え去り、先程までの厚い雲が天馬の上空から真つ直ぐに切り裂かれ、青空が広がっている。

そして、泊地棲姫がいた場所から黒い煙が上がっていた。

吹雪「凄い・・・！」

睦月「あの深海棲艦をあつさりと・・・」

そこへ、第一機動部隊と第二支援艦隊、さらに神童と剣城がやって来た。

赤城「第三水雷船隊、ご苦労様です。」

金剛「ワッツ!!？」

もうバトルはフィニッシュですかー？」

神通「はい、彼のお陰で敵棲地を撃破

することが出来ました。」

神童「よくやったな、天馬。」

神童は天馬の後ろから肩に手をかける。
すると突然、天馬は後ろに倒れた。

バシャーン!

吹雪「て、天馬君!?!」

天馬「はあ……はあ……」

波動砲を撃つのもって、結構体力を

使いますね……」

夕立「お疲れさまッポイ。」

比叡「早く鎮守府に戻って休みましょう。」

一同は、鎮守府へと戻っていった。



〈鎮守府 指令室〉

大淀 「敵棲地、撃破。」

海域、解放されました！」

長門 「第一と第二が来る前に、第三水雷戦隊が

敵棲地を撃破したというのは本当か？」

大淀 「そのようです。」

旗艦 神通からの通信によれば、『今まで

見たことのない強力なビーム砲を用いて

敵棲地を撃破した。』と。」

長門 「そのビーム砲で撃破した艦の名は？」

大淀 「宇宙戦艦ヤマト、だそうです。」

長門 「そうか・・・」

少し出掛けてくる。」

長門はブリッジを後にした。



く甘味処 間宮く

天馬・神童・劍城の3人は、間宮の店で
休憩をとっていた。

そこには第三水雷戦隊全員と赤城の姿もあつた。

睦月「さっきの天馬君の攻撃、超凄かったよ！」

神通「お見事でしたわ。」

赤城「神童君も中々の腕でした。

劍城君も初めてとは思えないほどの
戦闘能力だったと聞いてます。」

劍城「いや、俺達も艤装を着けて戦えるとは
思ってませんでした。」

神童「そうだな。

あの力があれば、皆さんと一緒に
深海棲艦と戦うことができる。」

吹雪「そういえば聞いてなかったけど、

天馬君達は何処から来たの？」

天馬「えくつとです、俺達は……」

天馬が話をしようとする……

「少し失礼するぞ。」

一同の所に鋭い目をした一人の艦娘がやって来た。

腰まであるロングストレートの黒髪と
真紅の瞳をしている。

天馬「あなたは？」

長門「私はこの鎮守府の秘書艦、

長門型一番艦の長門だ。

先程の戦闘で敵棲地を巨大な大砲で

撃破したって戦艦は誰だ？

確か、宇宙戦艦ヤマトとか言う……」

天馬「俺です。」

長門「お前か。」

名は何と言う？」

天馬「松風天馬です。」

長門「そうか……」

では松風、早速だが秘書艦の私が

お前に命令を下す……」

天馬「はい。」

長門「……今すぐ仲間の二人と共に

この鎮守府から出ていけ。

以上だ……」

天馬「えっ?」

吹雪「えっ?!」

一同「えええええええええええつ?!」

E p i s o d e 3 / 激闘！

長門VS天馬！！

長門「では松風、早速だが秘書艦の私が

お前に命令を下す・・・」

天馬「はい。」

長門「・・・今すぐ仲間の二人と共に

この鎮守府から出ていけ。

以上だ・・・」

天馬「えっ?」

吹雪「えっ?!」

一同「えええええええええつ?!」

赤城「どうしてですか長門さん!

今回あの状況で勝てたのは、彼ら3人の

お陰と言っても過言ではありません!

あの時、もし彼らが来てくれてなかったら、

私達は確実に全滅していました。」

川内「そうだよ!

天馬達がいいたからこそ勝てたのに!」

長門「だからと言ってこのまま鎮守府に

止まらせる訳にはいかん!

ましてや外海の人間などごもつともだ!

艦装のテクノロジを悪用されるかもしれん。」

睦月「そんな・・・」

那珂「そんなの、那珂ちゃんは認めない!」

長門「お前達、もう一度言うぞ？」

今すぐこの鎮守府から出ていけ。」

神童「・・・仕方ない。」

二人とも、出ていくとしよう・・・」

劍城「・・・はい。」

神童と劍城は席を立ち、その場を離れようとした。だが天馬はその場から動こうとしない。

長門「何をしている？」

今すぐ出ていけと言うのがわからんのか？」

すると突然、天馬は席を立ち長門の前に近づく。

長門「やっと出ていく気になったか？」

天馬「ええ・・・」

でも長門秘書官、一つお願いがあります。」

長門「お願い？」

天馬「俺と勝負してください！」

一同「えええっ!？」

長門「勝負だと？」

天馬「長門さんと俺の1対1で勝負を行い、

俺が長門さんに勝つことができたら、

俺達をこの鎮守府の仲間と認めてください!」

長門「大した自信だな・・・いいだろう。

結構は今日の夕方、港前で行う。

せいぜい、楽しませてくれ。」

長門はそう言うのと店を後にした。

話を聞いていた一同は、天馬が長門に勝てるとは思ってなかった。

吹雪「天馬君、本気なの?」

赤城「長門さんはああ見えて、鎮守府の守護神って

言われてる艦娘なのよ。

今のあなたじゃ勝てるわけないわよ……」

天馬「だからって、このままノコノコと

帰るわけにはいきませんよ！

俺に皆を守る力があるってことを

長門さんに証明してやるんだ！」

天馬は店を跳びだし、ある場所に向かった。

神童「おい天馬！」

劍城「何処へ行く気だ！」

劍城と神童、そして吹雪・睦月・夕立は

天馬の後を追いかける。

く 港 棧橋 く

天馬は最初にやって来た棧橋の灯台へやって来た。
そして、灯台の扉を開けて灯台の中に入った・・・
と思いきや、扉の先は廃ビルの中。

天馬「よかった、まだ繋がってた!」

天馬は廃ビルの外へ出ると、木枯らし荘に向かった。

く木枯らし荘 104号く

木枯らし荘に着いた天馬は、ポストンバッグに
ジャージとスパイクを詰め込み、何やら

支度をしていた。

秋「どうしたの天馬？」

急に荷物なんか詰め込んで。」

天馬「ちよつと特訓してくる！」

天馬は荷物を持って木枯らし荘を後にすると再び廃ビルへと向かった。



◇ 鎮守府 棧橋 灯台前◇

一方、天馬の後を追っていた神童と劍城は

灯台の前にいた。

どうやら途中で見失ったようだ。

さらにそこには、吹雪・睦月・夕立の3人もいる。

吹雪「なんで、灯台に来たの？」

神童「実は、俺達はここから鎮守府に来たんだ。」

睦月「この灯台から？」

劍城「信じてくれないかも知れませんが」

俺達、どうやら別世界から

来たみたいなんです。」

夕立「別世界？」

神童と劍城は、吹雪達にこの鎮守府へ来るまでの経路を話した。

吹雪「・・・なるほど。」

で、その扉の先がビルの一室ではなく

ここだったと・・・」

睦月「本当なのかなあ？」

夕立「ちよつと除いてみるッポイ！」

夕立は灯台の扉を開けようとドアノブに手を伸ばすが、その前に扉が開き天馬が出てきた。

吹雪「天馬君！」

天馬「吹雪さん！」

何でこんなところに？」

睦月「それはこつちの台詞……」

夕立は開いた扉から灯台の中を見る。

その先は灯台の中ではなく暗い通路だ。

夕立「さっきの話、どうも本当ツポイ……」

〈 鎮守府 港 〉

夕方、鎮守府の港の海には、艤装を装着した

天馬と長門が、港の埠頭には吹雪達

第三水雷戦隊を始めとする艦娘達が勢揃いしていた。

そして、那珂の右手には何故かマイク。

那珂『さあ、間もなく始まります！』

司会実況はこの私、艦隊のアイドル

那珂ちゃんです！

それじゃ対戦者を紹介しちゃおうよ！

先ずは・・・世界のビッグ7！

怒れる41センチ砲！

鎮守府の守護神、長門さん！』

長門「ウム・・・」

那珂『対するは・・・期待の新星！

艦娘の誰もがビックリする驚異の破壊力！

宇宙戦艦ヤマト、松風天馬君！』

天馬「この戦い、絶対に勝ってみせる！」

那珂『ルールは、2人に1対1の砲雷撃戦を

行ってもらい、先に相手の砲塔を全て

破壊した方が勝利です！

ただし、艦載機を使ってでの雷撃、

連射式の砲台を使つての砲撃は
反則とします!』

天馬「確認します!

俺がこの勝負で勝つたら、俺達3人を

鎮守府の仲間と認めてください!」

長門「私が勝つたら、お前達3人はその場で

鎮守府から出ていってもらう。」

吹雪「天馬君、頑張れー!」

那珂『さあ、間もなくバトルスタートです!

3・・・2・・・1・・・』

長門・天馬「主砲、三式弾装填・・・」

那珂『スタート!!』

長門「全門斉射!!」

ズドーン!

天馬「撃ち方始め!!」

ズドーン!

スタートの合図と共に、天馬と長門は主砲から三式弾を放つ。

放たれた三式弾は二人の丁度中間でぶつかり爆発し煙をあげる。

天馬「副砲、エネルギー装填!

撃ち方始め!」

バシューーン!

天馬は手の甲の副砲からショックカノンを

長門に向けて放つ。

長門は紙一重で攻撃を避けるが、一発が長門の右副砲に辺り、損傷した。

那珂『おっと!』

長門さん副砲を一つ損傷!

先制は天馬君です!』

雷「いいわよ天馬!」

電「頑張れなのですー!」

長門「なかなかやるな……

では、今度はこちらからだ!」

ズドーン！ズドーン！ズドーン！

長門は主砲と副砲から三式弾計9発を上向けに放ち、
曲射砲での砲撃を行う。

長門の三式弾は天馬の真上から落下していく。

天馬「曲射砲ですか……」

「こんな場所を変えれば！」

長門「甘い……！」

長門の三式弾9発は天馬の頭上、約10メートルの
辺りで突如爆発。

ババババババババツ!!

そして大量の弾子が雨のように降り注ぎ

天馬を直上から攻撃する。

天馬「痛い痛い痛い!

なんだこれ!?!」

ドカーン! ドカーン!

弾子の数発は二つの主砲に命中。

装甲を貫通し破壊した。

那珂『あーつと!』

長門さんの三式弾攻撃が炸裂つ!!

天馬君、一気に主砲二つを損傷!

これは痛ーいつ!!』

天馬「くっそお!

これでも喰らえ!!」

ズドドドドドドドーン!!

天馬は脛と股の艤装から、ミサイル式の魚雷を計16発、長門に向けて発射。

魚雷は長門目掛けて勢いよく飛んでいく。

長門「ふんっ！」

ズドーン!

長門は主砲の砲撃で魚雷を撃ち落とす。

だが、魚雷1発を撃ち落としそこね、

長門の右主砲に直撃。

ドカーン!

黒い爆煙をあげて主砲を損傷。

同時に長門自信を中破まで追い込んだ。

天馬「もう一丁!!」

ズドドドドドドドーン!!

天馬はミサイル式魚雷16発をもう一度

長門に向かって発射する。

長門「同じ手は2度も食わぬ!」

ガンツ!

長門は魚雷が目の前に来たと同時に、内1発を
足で蹴り返す。

蹴り返された魚雷が他の魚雷にぶつかり、

全ての魚雷が一斉に大爆発を起こす。

だが、うち一発が生き残り飛んでくる。

天馬は魚雷の行き先にあるものを見た。

そして、あるものの前で盾となり魚雷を食らった。

ドッカーン!!

命中し爆発した魚雷は今までにない爆風と爆音をたて

天高く爆煙をあげる。

爆煙がおさまると、そこには艀装が大破し

傷だらけの天馬がいた。

唯一無事だった手の甲の副砲二つも、破壊され

煙をあげていた。

那珂『あーつと！

天馬君の砲塔全てが破壊されました！

この勝負、長門さんのしょ・・・』

長門 「いや・・・私の負けだ……………」

那珂 『えっ?』

天馬は体を後ろに向けると、
こう言った。

天馬 「大丈夫でしたか?」

天馬の視線の先には、自分を応援してくれていた
吹雪がいた。

吹雪 「天馬君、なんで・・・?」

長門 「たとえ、戦いを捨ててまでも

大切な仲間を命懸けで守る・・・

彼は戦いよりも、仲間を選んだんだ。

実にすばらしい。」

天馬「長門秘書艦……」

長門「松風……いや天馬、私の負けだ。

約束通り、お前達3人は今日から

この鎮守府の新たなる仲間だ！」

天馬「長門さん……！」

ありがとうございます!!」

天馬は長門に元気よくお礼をした！

那珂『さあ皆さん！

天馬君の勝利と我々の仲間となったことを

祝って胴上げしましょう!!』

一同「おおー!!」

天馬「えっ？

ねえ、ちよつと皆さん!？」

試合を見ていた艦娘達が天馬の周りに集まり
そして天馬を胴上げする。

『ワーツシヨイ! ワーツシヨイ! ワーツシヨイ!』

天馬「ちよちよつと皆さん!

やめてくださいーい!」

胴上げの掛け声と天馬の叫び声が
鎮守府全体に響き渡る。

Episode 4 / 天馬と吹雪の大特訓！ 《前編》

く木枯らし荘 104号室く

正式に仲間として認めてもらい、取り合えず

ひと安心した天馬達。

その為、3人はしばらくの間鎮守府で

過ごすことになった。

現在、天馬は鎮守府に滞在する為の準備をしている。

秋も準備を手伝っている。

ちなみに秋は天馬から鎮守府や吹雪達のこととは

既に聞いていた。

秋「忘れ物ない？」

天馬「もうバツチリだよ！

じゃあ秋姉、行ってくる！」

秋「行ってらっしゃい天馬。

吹雪さんよろしくって伝えてね。」

く 廃ビル 鎮守府へ通じる扉く

天馬は鎮守府へ通じる扉へとやって来た。
扉の前には既に神童と剣城がいる。

天馬「おはようございます!」

神童「遅いぞ天馬。」

劍城「もうすぐで置いていくところだったぞ。」

天馬「すみません…

じゃあ行きましようか。」

天馬・劍城・神童の3人は

扉を開けて鎮守府へと向かった。



〽鎮守府寮 第三水雷船隊 寢室A〽

天馬「と言うわけで改めて、

本日付で、第三水雷戦隊に配属になりました、宇宙戦艦ヤマトこと

松風天馬です!

よろしく願います!」

神童「特一等航宙戦闘艦デウスーラ2世こと

神童拓斗です。」

神通「第三水雷船隊旗艦、神通です。

今後ともよろしく願います。」

川内「ほほう、中々いい顔つき

体つきしてんじゃない!」

睦月「ちよつと川内さん……」

川内「ねえねえ宇宙戦艦!」

天馬「ヤマト……あいや天馬です……」

川内「あんた達、夜って好き?」

天馬「夜ですか？」

神童「嫌いじゃないですよ？」

川内「そうだよねえ！」

やっぱ夜はいいよねえ！

アンタとは上手くやっていけそうだよ！」

川内は天馬と神童の顔を触りながら言う。

夕立「相変わらず夜戦バカッポ〜イ……」

川内「ば、バカ言うな！」

神通「姉がご迷惑をお掛けします……」

すると……

「第三水雷船隊の、那珂ちゃんですーす！」

一同「ん？」

窓の外から何やら元気な声が聞こえる。
正体は……

神童 「あの人って確か……」

那珂 「艦隊のアイドル、那珂ちゃんの
ファーストライブやります！
みんなー、来ってねー」

天馬「思い出した！」

この間、実況を担当してくれた那珂さんだ！」

神通「妹がご迷惑をお掛けします……」

く第四水雷戦隊 寝室く

天馬・神通は第三水雷戦隊の寝室で過ごすことになったが、人数の都合で剣城は第四水雷戦隊の寝室で過ごすことになった。

劍城「今日からここでお世話になることになった、

メダルーサ級殲滅型重戦艦メガルータこと

劍城京介だ。」

夕張「旗艦の、軽巡洋艦 夕張よ。」

球磨「軽巡洋艦の球磨だクマ〜!

よろしくクマ〜!

多摩「軽巡洋艦の多摩ですにや。」

劍城「猫キャラか?」

多摩「名前はタマだけど猫じゃないにや。」

望月「望月です。」

弥生「弥生です。」

あの、気を使わなくていい……です。」

劍城「わ、わかった……。」

ん?」

劍城は一人の艦娘に目が行く。

ゆるやかなウェーブのかかった栗色のロングヘアに
ピンクの玉に三枚の羽根飾りが付いたような
髪飾りを付け、トロつとした紫の
落ち着いた瞳をしている。

剣城 「あなた、確か睦月さんの姉妹艦の・・・」

如月 「如月です。」

睦月ちゃんとは仲良しなの。」

剣城 「そうなのか。」

今後とも、よろしくお願いします。」

如月 「こちらこそ、よろしくお願いします。」

ところで、睦月ちゃんは元気になりましたか？」

剣城 「ええ、今ごろ間宮さんのところで

3人仲良くあんみつ食べてるんじゃないですかね。」

ないですかね。」

如月 「そうですか。」

剣城 「ところで、如月さんは・・・」

いつの間にか劍城と如月の二人だけの
会話になっている。

球磨 「あの二人、初対面のハズなのに

仲良いクマね。」

多摩 「ホントだにゃ〜。」

そんなこんなありながら、3人は1日を終えた。



〈教室 駆逐級〉

次の日、神童と剣城は鎮守府の一角に儲けられた教室にやって来た。

教室には既に、吹雪達と同じ駆逐艦の艦娘が四人いた。

腰まである紺色のロングストレートに

薄紫色の瞳をした、暁型一番艦の《暁》。

クールな性格で不死鳥と形容された暁型二番艦《響》。

口癖はハラシヨー。

癖のある茶髪のボブヘアに薄茶色の瞳の

暁型三番艦《雷》。

優しくて穏やかな性格で慌てん坊な

暁型四番艦《電》。

金色の目をしており、茶色い長髪を

アップヘアにして束ねているようだ。

神童「劍城、第四水雷戦隊の様子は

どうだったんだ？」

劍城「みんな優しい感じの人達でしたよ。

それに・・・」

雷「電、リボン曲がつてるわよ。」

電「あわわ！」

ありがとうございます！」

と、そこへ吹雪・天馬・睦月・夕立の四人が
やって来た。

だが夕立は何故か吹雪の腕にしがみついて
泣いている。

夕立「わーん！」

吹雪ちゃん、見せてっポイー！」

吹雪「また？」

天馬「何かあつたんですか？」

吹雪「夕立ちちゃん、宿題忘れちゃった

みたいなんだ……」

睦月「ダメだよ！

昨日一緒にやろうって言ったのに

やらなかったのは夕立ちちゃんだよ！」

夕立「睦月ちゃんケチッポイー！」

雷「夕立、また宿題やって来なかったの？」

夕立「えーん！ツポイー！」

するとそこへ……

如月「おはよう。」

劍城「如月さん、おはようございます！」

睦月「如月ちゃん！

ねえ聞いてよ！

夕立ちちゃんってば、また宿題

やってこなかったんだよ!

如月「そうなんだー。」

天馬「そういえば睦月さんって、如月さんのこと

結構好きですよね。」

吹雪「姉妹艦だからかな?」

すると、またしても艦娘がやって来た。

大きなうさ耳リボンと、鼠蹊部くらいしか隠れていない超ミニスカートを身に着けた

島風型1番艦の《島風》。

足下には3体の連装砲ちゃんも一緒。

島風「オツハヨー!」

電「おはようなのですー。」

暁「もう、大声出さないで!

レディーにはレディーの振る舞いが
あるんだから！」

島風「あれ？」

暁「おちちゃん、また背縮んだ？」

暁「縮まないわよ!!」

もうっ!!」

響「ハラシヨ。」

天馬「アハハ……」

く 演習場 く

ホームルームの後、一同は演習場へ移動し

演習の授業を受けていた。

授業の担当は重巡洋艦の利根と姉妹艦の筑摩。
現在、天馬と吹雪が演習を行っている。

利根『天馬！

今度は水上を走りながら足を上向きに

してみろ！』

天馬「はい！」

メガホンで指示を出す利根の言う通りに

天馬は水上を走りながら足を上向きにし、

推進機が下を向くようにする。

すると・・・

ゴオオオオオオオオツ!!

足が水から離れ、身体が宙に浮く。

天馬「凄い！

飛んだ！」

利根『いいぞ！

そのまま空中でバランスを取る

練習をしておれ！』

天馬「はい！」

筑摩「彼、結構飲み込みが早いですね。」

利根「じゃな。

それに比べてあやつは・・・」

吹雪「うわあ！」

バツシャーン！

吹雪はバランスを崩して水面に転倒した。

筑摩 「知識は十分なのに・・・」

利根 「こうなってしまうのじゃ……………」

吹雪 「ああ……………」

利根 『重心を落とせと言つとるだろ!!』

筑摩 「姉さん、あの子トップヘビーなんだから

大目に見てあげないと……………」

利根 「わかっておる!」

吹雪 「もう一度お願いします!」

利根 『おう!』

吹雪は体制を立て直し再び走り出す。

睦月達は近くで様子を見ていた。

利根 「根性はあるんだがなあ……………」

如月「大丈夫？」

このままでと吹雪ちゃん、いつちやうかも。」

睦月「そうだよね……」

すると……

天馬「おとととと！

だあああああああ！」

吹雪「うわあああああああ！」

ガン！

天馬と吹雪はお互いバランスを崩し

水面から突き出た丸太の柱に顔面から激突。

そして……

ザバーン!

◇放課後◇

〜甘味処 間宮〜

放課後、吹雪・睦月・夕立・天馬・劍城・神童の6人は間宮さんの店にいた。だが吹雪はテーブルの上に突っ伏している。

吹雪「はあく…」

ダメだあく…」

天馬「大丈夫ですか?」

睦月「睦月もね、最初は失敗したり怖かったりしたんだよ。」

だから吹雪ちゃんも、もっと練習すれば
きつと上手くなるよ！」

吹雪「そうかなあ……」

でもね、こんな艦娘は初めてだって

噂になってるんだって……」

劍城「噂？」

誰がそんなことを？」

吹雪「夕立ちちゃんが……」

睦月「もう、夕立ちちゃん!!」

夕立「嘘言ってもしょうがないッポイ。」

神童「利根さんは何と？」

吹雪「我輩を筆頭に鎮守府にはいいお手本が

沢山いるから、それを見て学べ”って……」

夕立「なんかテキト〜ッポイ。」

天馬「お手本か……」

すると、吹雪は何か思い付いたかのように勢いよく立ち上がる。

吹雪「赤城先輩は!？」

一同「えっ?」

吹雪「お手本の為に、赤城先輩を見に行く

というのはどうだろうか!？」

夕立「吹雪ちゃん、口調変わってるツポイ……」

睦月「でも、赤城さんは正規空母だし……」

吹雪「でも、かつこいいよ!!」

吹雪の憧れの目はキラキラと輝いている。

これでは流石に断れない……。

天馬「俺も赤城先輩に、弓矢の使い方とかも

教わりたいな。

俺のヤマトにも艦載機を積んであるって

聞きましたし。」

神童「そうだな。」

1度弓道場に行ってみましょう。」

一同は弓道場へ向かった。

く弓道場く

弓道場へやって来た天馬達。

だが、弓道場にいたのは第一航空戦隊の正規空母赤城と加賀ではなく、第五航空戦隊の正規空母翔鶴と加賀と最も仲が悪いと噂の瑞鶴だった。

天馬「ごめんくださいーい。」

瑞鶴 「一航戦のお二方ならいないわよ。」

天馬 「まだ何も言ってませんけど……」

瑞鶴 「ここに来る連中の目当てって、大概

一航戦の二人だからね。」

私達五航戦になんか何の興味も無いわよ。」

天馬 「はあ……」

翔鶴 「赤城さんなら、今頃入渠でもしてるのでは

ないでしょうか？」

天馬 「そうですね、ありがとうございます。」

えーつと……」

瑞鶴 「私は第五航空戦隊の正規空母瑞鶴。」

あちらは姉妹艦の翔鶴姉。」

天馬 「じゃあ瑞鶴さん翔鶴さん、1つお願いが

あるんですけど、いいですか？」

翔鶴 「お願い？」

天馬 「俺に弓矢の使い方教えてくれませんか？」

瑞鶴 「弓矢の使い方？」

でも、あんた確か戦艦でしょ？」

天馬「この間聞いたんですけど、俺にも艦載機が積んであるみたいなんです。

だから今後の為にも、せめて矢を射れるようになりたいって。」

翔鶴「・・・わかりました。

なら今から始めましょう。

弓と矢筒を持ってきてください。」

天馬「わかりました。」

神童「俺達は、引き続き赤城さん探しだな。」

吹雪「うん！」

じゃあ天馬君、また後でね！」

吹雪達5人は、赤城を探しに弓道場を後にした。

そして数分後、天馬は自分の弓と矢筒を持ってきて弓道の練習を始めた。

翔鶴 「矢を射るときのコツは、余計な力を入れず

目標一点に集中すること。

やってみて。」

天馬 「はい！」

天馬は弓を引いて構え、遙か前方の的に

矢の照準を合わせる。

天馬 「余計な力を入れず、目標一点に集中……」

天馬は矢を引いていた手を放す。

矢は勢いよく放たれ、炎を纏い、紺色ベースの戦闘機

99式空間戦闘攻撃機 コスモファルコンへと

姿を変える。

ファルコンは的に向かって、2丁の機銃から

銃弾を連射するが惜しくも当たらず、ファルコンは

そのまま大空へと上昇していった。

翔鶴「惜しかったですわね・・・」

天馬「ええ・・・」

瑞鶴「取り合えず、今日は矢が無くなるまで

練習しよっか。」

天馬「はい！」

く 鎮守府食堂く

その日の夜、天馬は練習を終えて鎮守府食堂で夕食を食べていた。

メニューはカツカレー並盛とコンソメスープ。

天馬「にしても、結局1発も当たらずに

終わっちゃったなあ・・・

俺、こんなんで大丈夫なのかなあ・・・?」

あれこれ考えながらカレーを食べていると・・・

天馬「・・・ん?」

窓の外に誰かいるのが見えた。

だが、その姿は艦娘ではない。

天馬「誰だろう?」

天馬は席を立ち、食堂の外へ出た。

く 茂みの中く

謎の人影を追いかけて、天馬は茂みの奥へと
やって来た。
が・・・

天馬「あれ？

見失ったかな？」

すると・・・

「ヤハリ、アノ艤装ノ適合者ハ、アナタ達ダツタ。」

突然、天馬の後ろから声がする。

振り向くとそこには、稲妻町の商店街で見た少女がいた。

天馬「君って、確か商店街で・・・」

ヲ級「私ハ、《空母ヲ級》。」

アナタ達ガ深海棲艦ト呼ブ艦隊ノ正規空母。」

天馬「空母ヲ級か。」

俺は・・・」

ヲ級「松風天馬。」

雷門中さつかー部ノきやぶてん。」

天馬「えっ？」

俺のこと知ってるの？」

ヲ級「エエ。

以前、アナタニ会ツタコトガアルカラ。

マ、今ハイイワ。」

天馬「ねえヲ級、俺達をこの鎮守府に導いたのつて

もしかして君なの？」

ヲ級「ソウ、アナタ達ナラ、アノ特殊ナ艤装ヲ

思イ通りニ扱エル。

アノ怪物カラ、我々ト彼女達ヲ

救ツテクレル。

ソウ私ハ思ツタ。」

天馬「その怪物つていうのは？」

ヲ級「ソレニツイテハ、次期ニ話ストキガクル。

ソノ時ガ来タラ・・・天馬、マタアナタノ前ニ

私ハ現レルワ。」

そう言い残すと、空母ヲ級は茂みの奥へと姿を消した。

天馬「空母ヲ級……」

E p i s o d e 4 / 天馬と吹雪の大特訓！ 《後編》

～ 教 駆逐級 ～

次の日の放課後、天馬は昨日ヲ級が言っていた言葉が気になっていた。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

ヲ級 『アナタ達ナラ、アノ特殊ナ臙装ヲ

思イ通りニ扱エル。

アノ怪物カラ、我々ト彼女達ヲ

救ツテクレル。

ソウ私ハ思ツタ。』

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

天馬「特殊な艀装・・・

そして怪物・・・

「どういふことなんだ？」

天馬は教室を後にし工場へと向かった。

く工場く

工場では、夕張が剣城の艀装を改造している
真っ最中だった。

天馬「剣城、夕張さん。」

劍城「よお天馬。」

夕張「どうしたの？」

「こんなところに顔出してくるなんて。」

天馬「ちよつと夕張さんに聞きたいことがあって・・・

でもその前に、二人は何やってるんですか？」

夕張「メガルダーダに新兵器を取り付けてる最中なの。」

天馬「メガルダーダ？」

「確か、劍城の艦装だったよね？」

劍城「俺のメガルダーダと神童先輩のデウスーラ

そして天馬のヤマトは、夕張さんが作った

艦装なんだが、メガルダーダとデウスーラは

まだ武装がいくつか未完成なんだ。」

夕張「で、今は完成した兵器を取り付けてる段階なの。

これでメガルダーダは前よりもっと

強くなれるわ！」

劍城「夕張さんに聞いた話だと、俺のメガルダーダと

神童先輩のデウスーラにも、天馬の波動砲並に

強力な大砲があるらしい。」

天馬「へえー、凄いなあ。」

夕張「ところで、私に聞きたいことって？」

天馬「ええ、昨日聞いたんですけど、

俺達3人の艀装は特殊だつて。

どういふことですか？」

夕張「うん。」

ある日、提督のところへ謎の送り主から

1通の封筒が届いたの。

封筒の中に入つてたのは、3隻の宇宙戦艦を

模した艀装の設計図。

特一等航宙戦闘艦デウスーラ2世・・・

メダルーサ級殲滅型重戦艦メガルダ・・・

宇宙戦艦ヤマト・・・

そして、ヤマトとデウスーラを動かすのに

必要不可欠な次元波動エンジンの設計図。

ヤマトのショックカノンやデウスーラの

陽電子ビーム、ヤマトの波動砲や波動防壁のエネルギーにも波動エンジンのエネルギーを使っているわ。

私は提督に頼まれて、何とか設計図通りに艦装を完成させた。

けど、誰一人その艦装を扱える艦娘は何処の鎮守府を探してもいなかった・・・私は艦装を扱える適合者が誰なのかと送り主に手紙を送った。

そして返ってきた返事の手紙に、艦装を扱える適合者に必要なスキルが書いてあったの。」

天馬「スキル？」

夕張「デウスローラ2世の適合者に必要なのは

《艦隊を勝利へと導くリーダー》。

メガルーダの適合者に必要なのは、

《敵の装甲を貫く程の威力を生む撃鉄》。

そして、宇宙戦艦ヤマトの適合者に必要なのは

《決して止まらないエンジン》。」

天馬「決して止まらないエンジン?」

夕張「天馬君達があの艦装を扱えたってことは

さっきの適合者に必要なスキルを

あなた達が持っているってことになる。

適合者がそのスキルの意味を理解すれば、

さらに強くなれる。

そう書いてあったわ。」

〈教室 駆逐級〉

教室へ戻った天馬は、夕張が言っていた

キーワードについて考えていた。

天馬「艦隊を勝利へと導くリーダー……

敵の装甲を貫く程の威力を生む撃鉄……

決して止まらないエンジン……

どういう意味なんだろう？」

かれこれ考えていると……

夕立「吹雪ちゃん、大丈夫ツポイ？」

天馬「ん？」

天馬の席の後ろの方では、吹雪の席の周りに艦娘達が群がっていた。

だが吹雪は机に突っ伏して居眠りをしている。

吹雪「スピー……クウ……」

むにやむにや・・・」

天馬「吹雪さん、何かあったんですか？」

睦月「昨日の夜中から、同じ三水戦の

川内さんと神通さんに特訓してもらった

みたいなんだけど……」

夕立「そのせいで全然寝れてなくて

こうなったツポイ……」

神童「大変ですね……」

すると・・・

那珂「吹雪ちやくん！」

天馬「那珂さん？」

那珂「ねえ起きてー！」

起きてよー！」

那珂は吹雪の体を揺すって起こす。

吹雪「ふえっ？」

那珂「ちよつと一緒に来て！」

天馬君も！」

天馬「えっ？」

くグラウンドく

那珂は吹雪と天馬を連れて、グラウンドにあるステージの上へと連れてきた。

ステージの周辺には多数の艦娘達がいる。

那珂 『みんなー!』

艦隊のアイドル、那珂ちゃんでーす!

今日は新しい子が入ったから紹介するね!

特型駆逐艦の吹雪ちゃんと、

宇宙戦艦ヤマトの天馬君!』

吹雪・天馬 「えっ!?!」

いきなりマイクを渡されて戸惑う二人。

吹雪 『ふ、吹雪です。』

天馬 『て、天馬です。』

那珂 「そんなんじやダメだよー!」

アイドルは、スマイル!

ニコッ!」

天馬・吹雪 「・・・ニコッ?」

那珂に連れられて笑顔をつくる二人。

那珂「アイドルはパワー！」

そして、キュート！」

天馬と吹雪はポーズを決めて笑顔で挨拶をする。

吹雪『吹雪です！』

天馬『天馬です！』

那珂「そうそう！」

やれば出来るじゃん！」

吹雪「でも恥ずかしいです！」

と言うか、どうしてこれが特訓に

なるんですか!?!」

那珂「だって、艦娘にとって一番大切なのは、

いかにアイドルになれるかだよ？」

天馬「アイドルになれるか？」

那珂「そう！」

並みいる無数の艦娘の中で、

いかに目立ち！

いかに羽ばたき！

いかにセンターを奪うか!?

それが、旗艦や秘書艦になるために

大切なことなんだよ！」

吹雪・天馬「そうなんですか？」

那珂「そうなんだよ！」

だから、吹雪ちゃんも天馬君も

頑張つて歌つてみて！」

天馬「歌ですか？」

吹雪「そんないきなり……」

那珂「おっ！」

その前に、北上さくん！」

突然マイクを放り投げてステージを降りる那珂。

吹雪「えええつ?!」

天馬「ちよつと那珂さん?!」

那珂が向かった先には、重雷装巡洋艦の

大井と北上がいた。

那珂「探してたんだ〜!

ねえねえ、吹雪ちゃんに魚雷の撃ち方

教えてよ!」

北上「魚雷?」

大井「見ればわかるでしょ?

私達、今忙しいの。」

那珂「ええ〜いいでしょ〜?

ちよつとだけ・・・」

那珂が北上の手を握って頼み込むと・・・

大井 「ああっ!! . . .

あなた! 何してケツコルんです!!」

何故か嘯みながら激怒する大井。

那珂 「ケツコル?」

大井 「な、何でもありません . . .

行きましよう北上さん。」

大井は北上を連れてその場を離れる。

那珂 「もうっ!

訳分かんない!」

吹雪 「それは私の台詞です」

すると . . .

天馬『アー、アー、テストス・・・』

それでは、宇宙戦艦ヤマトこと松風天馬

歌わせていただきます！

聞いてください、《そよかぜドリーム》！』

♪そよかぜドリーム

曲が流れ、天馬のライブが始まった。

那珂は自分のステージを奪われて不機嫌なのか
ほっぺたを膨らませている。

だが吹雪を含む他の艦娘達は、天馬の歌を
熱心に聞いていた。

く第三水雷戦隊 寢室Aく

その日の夜、吹雪と天馬は寢室にいた。
が、既にくたくたの様だ・・・

吹雪・天馬「はあく、疲れた……」

睦月「お疲れさま。」

夕立「3人で寄って集って特訓なんて

いじめツポくイ。」

吹雪「そんなことないよ……」

みんな私のためなんだし……」

すると、玄関の扉が勢いよく開き

川内が入ってきた。

川内「特型駆逐艦、いる!？」

吹雪「川内さん？」

川内「さあ、今日も特訓だよー!!」

と、突然誰かが後ろから川内の襟を掴む。
犯人は神童だ。

神童「その前に、ちよつと話を。」

川内「ん？」

〈第三水雷戦隊 寝室B〉

神童は、川内と神通と那珂と睦月を寝室に集めて
特訓の件で話をするが・・・

神通「じゃあ姉さんと那珂ちゃんも

吹雪ちゃんに特訓を？」

川内「だって神通が心配そうにしてたから・・・」

神通「心配してたのは姉さんでしょ？」

那珂「那珂ちゃんは心配してないよ？」

神通「那珂ちゃんには聞いてません。」

神童「駆逐級の人達から色々聞いていましたけど、

吹雪さんのためとは言えやりすぎです。」

睦月「神童君の言う通りです！」

このままじゃ吹雪ちゃんが轟沈

してしまいます！」

川内「でも、これには事情があつて・・・」

〈数分後〉

神童「吹雪さんを艦隊から外す?!」

睦月「長門秘書艦が?」

川内「ああ、近々出撃があるからそれまでに

出撃可能が見極めたいと。」

神通「もしダメだったら、吹雪さんを艦隊から

外すよう提督に進言すると・・・」

那珂「せっかく同じ艦隊に入ったんだから、

メンバーは欠けることなく最後まで一緒に

いたいもん!」

神通「でも、姉妹でちゃんと話し合うべきでした・・・

いくら吹雪さんの為とは言え・・・」

すると、

ガチャッ

部屋の扉が開き、夕立が入ってきた。

睦月「夕立ちゃん、どうしたの？」

夕立「吹雪ちゃんと天馬君が……」

くグラウンドく

一同は吹雪と天馬を探してグラウンドへとやって来た。
グラウンドではユニフォーム姿の天馬と

体操着姿の吹雪がサッカーの練習をしていた。

天馬「じゃあ、あの木に付けてある目的掛けて

シュートしてみてください。」

吹雪「わかった。

いっけええええ!!」

バシユウウツ!

吹雪は的に目掛けてボールをシュートする。

だが、ボールは的の右横を通りすぎていった。

天馬「もう少し左寄りですね。」

吹雪「でも、なんでこれが命中率を上げる

特訓になるの?」

天馬「サッカーのシュートを通して、真つ直ぐ目標に

当てれる体制を身体に覚え込ませるんです。」

吹雪「なるほど。」

天馬「もう一回、やってみましょう。」

吹雪「うん！」

そんな様子を三水戦一同は見ていた。

睦月「吹雪ちゃん……」

夕立「どうも天馬君に特訓をお願いしたっばい。」

川内「ホント、根性だけはあるなあ……」

神童「で、どうする？」

神通は特訓をしている吹雪の真剣かつ

楽しそうな顔を見て思う。

神通「第三水雷戦隊の旗艦として、あのよう

に心がキチンとしている子には、艦隊に

いてほしいです。」

那珂「那珂ちゃんも賛成だよ。」

夕立「睦月ちゃんは？」

睦月「そんなの決まってるでしょ？」

一同は吹雪と天馬が練習している場所へと向かう。
二人は背後に人の気配を感じ、振り向いた。

天馬「あ、皆さん。」

神通「吹雪ちゃん、天馬君、私達も協力します。

みんなで頑張りましょう。」

那珂「アイドルに一番必要なのは、根性だよ!!」

夕立「夕立も手伝うツポイ！」

神童「俺も一緒に付き合おう！」

睦月「次の戦いは、この8隻で出撃しよう！」

吹雪「みんな・・・」

うん！」

天馬「みんな・・・ありがとう！」

一同は円陣を組み、中央に右手を伸ばし、お互いの手を重ね合わせる。
そして・・・

睦月「それじゃあみんな!

頑張っていきましょー!!」

一同「おおー!!」

こうして、吹雪の特訓が始まった。

吹雪は空いてる時間があれば、川内と共に

足腰とバランス感覚を鍛える特訓を・・・

神通と共に砲撃の命中率を上げる特訓を・・・

基礎体力と運動能力を上げるために、

天馬・劍城・神童とサッカーの特訓を行い、

那珂の協力のもと、北上から魚雷の撃ち方を教わった。

天馬も、五航戦の翔鶴と瑞鶴に弓矢の特訓を受けた。



◇数日後◇

〈提督室〉

提督室には長門と、鎮守府の提督がいた。

提督「吹雪は、頑張ってるみたいだな。」

長門「はい、本日も演習が行われてるはずです。」

提督「長門、すまないが吹雪の様子を見てきてくれ。」

出撃できそうかどうかは、

お前の判断に任せる。」

長門「わかりました。」

その場で最終判断をし、彼女達に伝えます。」

く 演習場 く

演習場では既に吹雪が演習を行っていた。身体中には絆創膏やシップが張つてある。棧橋の上では三水戦のメンバーと利根が様子を見ていた。

長門 「調子はどうだ？」

神通 「長門秘書艦。」

以前よりかは、格段に成長していますが・・・」

吹雪は水面を走り、水面に浮くぶいを避けて進んでいく。
だが・・・

吹雪「うわああ!？」

バツシャーン!

案の定転んでしまった。

川内「身のこなしも砲撃も、まだまだ

実戦レベルとは言えません・・・

ですが・・・」

長門「？」

吹雪は直ぐに体制を立て直し、再び走り出す。

吹雪「まだまだああ!!」

神通「ですが彼女には、それを補った余りある

《水雷魂》があります。

直すべきところを教え、進むべき道を示し、
経験を重ねていけば、彼女は飛躍的に
成長していくでしょう。」

川内「忖らず……」

那珂「恥じず……」

神通「恨まず……」

その心が有る限り……

長門「水雷魂か……」

吹雪「天馬君!

サッカーボールお願い!」

天馬「はい!」

天馬は棧橋の上から吹雪に向けて
サッカーボールを蹴り飛ばす。

利根「おい!!」

何をする気じゃ!?!」

吹雪「三水戦や皆との特訓の成果を発揮できたから、

今度は天馬君達との特訓の成果を

お見せします!」

吹雪はボールを受けとると、ボールに気を集中させる。

吹雪「はあああああ!!」

すると、ボールに白い冷気が徐々に集まり

氷の塊と化していく。

吹雪はボールを的に向けて放ち、ボールは強烈な

吹雪を起こしながら突き進む。

それは、彼女と同じ名を持つ、雪原のストライカーと

呼ばれたサッカー選手の必殺技。

吹雪「《エターナルブリザード》!!」

吹雪のエターナルブリザードは的に見事し、
的を粉々に砕く。

気づけば吹雪と的の間の海面が凍っていた。

睦月「吹雪ちゃん!」

利根「凄いいではないか!

こんな短期間であのような技を

身に付けるとは!」

吹雪「天馬君達のおかげです!」

川内「あいつ、いつの間に・・・」

長門「ほう、面白いな。」

第三水雷戦隊、旗艦神通！」

神通「はい！」

長門「8杯の編成で、このまま出撃準備にかかれ。

今度の作戦は・・・

お前達に掛かっている!」

Episode 5 / W島攻略作戦

（作戦室）

演習後、吹雪達四人は作戦室に来ていた。

今度の作戦についての説明があるからだ。

吹雪は扉の前に立ち扉に手を伸ばすが・・・

天馬「どうしたんですか？」

吹雪「作戦説明なんて初めてだから、

き、緊張してるで”ごじやる”。」

夕立「吹雪ちゃん、また口調

変わってるツポイ・・・」

吹雪「えっ？

私、何か変なこと言った？」

夕立「気ついてないツポイ!？」

睦月「大丈夫だよ！」

さ、早く入ろ！」

吹雪「う、うん……」

ガラガラガラ……

吹雪達は扉を開けて中に入る。

部屋の中には、既に三水戦の神童と川内型三姉妹、
劍城達四水戦のメンバーがいた。

その中には、睦月が大好きなあの子の姿も。

如月「あ、睦月ちゃん！」

睦月「如月ちゃん！」

睦月と如月は、お互い嬉しそうに手を取り合う。

睦月「もしかして、如月ちゃんも

この作戦に？」

如月「ええ！」

睦月「うわあ〜！」

久しぶりに一緒だね！」

如月「そうね！」

そんな様子を、天馬は劍城と共に見ていた。

劍城「聞いた話なんだが、睦月さんと如月さんは

姉妹艦の中でも一番のベツタリコンビらしい。」

天馬「あながち嘘じゃ無さそう・・・」

そんなこんな言っていると・・・

ガラガラガラ・・・

再び扉が開き、長門と姉妹艦の陸奥が入ってきた。

長門「本作戦は、その試金石とも言える作戦。

目標はここ、”W島”だ。」

長門は海図に描かれている島を示す。

長門「この島を守備している敵水雷戦隊を、

夜戦による奇襲で殲滅してもらいたい。」

川内「やったー！」

待ちに待った夜戦だー！」

長門「基本の作戦は、第三水雷戦隊がおとりとなり

敵を引き付けて転進。

第四水雷戦隊が停滞している海域へと

誘導し、二隊で撃退する。

W島を攻略できれば、哨戒線を仕上げ

更なる作戦展開が可能となる。

覚悟はいいか？」

一同「……。」

作戦内容を聞いた一同は、黙り混んでいた。
すると……

那珂「那珂ちゃん、意見具申しまーす！」

神通「ちよつと那珂ちゃん！」

長門「なんだ？」

那珂「この間の作戦で天馬君が使った

波動砲を使えば敵水雷戦隊をすぐ殲滅

できるんじゃないの？」

長門「ああ、私達もW島攻略に波動砲を使おうと

提督に進言したんだが、提督は波動砲の

所持者である天馬の許可を得られれば

採用するとおっしゃられた。

だが天馬はその作戦は許可できない

とのことで却下された。」

那珂「えー、どうしてー？」

天馬「波動砲は威力が大きすぎるとはなす。下手をすれば、敵水雷戦隊どころか、

W島その物を破壊してしまいます。

それは出来ません。」

那珂「そっかー…」

長門「と言うことだ。」

お前達、もう一度聞く。

覚悟はいいか？」

一同「……」。

く甘味処 間宮く

作戦説明後、吹雪達四人は間宮の店にいたが、吹雪は凄く心配な顔を浮かべている。

吹雪「夜戦の奇襲かあゝ…

緊張するね…」

夕立「吹雪ちゃん、顔色悪すぎッポイ？」

睦月「そんなに心配しなくても…」

すると…

雷「三水戦のみんな、出撃するのね？」

吹雪「ふえっ？」

天馬「暁型四姉妹の皆さん。

どうしたんですか？」

電「今度の作戦は夜戦だと聞いたのです。

ですからこれ、吹雪さんに食べてほしいのです。」
天馬「吹雪さんに？」

電はテーブルの上に、器に山盛りに盛られた
青紫の果物を置く。

吹雪「あ、ありがとう。」

天馬「これって、ブルーベリー？」

響「寮の裏庭に生えてる木から、みんなで
取ってきた。」

暁「目にいいって言うでしょ？」

これで夜戦もバツチりなんだから！」

すると・・・

「吹雪ちゃん♥

出撃ですって？」

後方から甘い声で吹雪を呼ぶ女性の声。

振り向くと、そこには二人の艦娘。

一人は金髪碧眼のセミロングで、もう一人は

黒のボブヘアに赤眼。

そして二人共青を基調としたキャビンアテンダントのような制服を着用し、手には白襟に黒の手袋をはめ、頭に青い丸帽子を乗せている。

天馬「えっと、あなた達は？」

睦月「重巡洋艦の愛宕さんと高雄さんだよ。」

高雄「もしかしてあなたですか？

物凄い大砲を持っているっていう

噂のサッカー少年君は。」

天馬「はい、松風天馬と言います。」

愛宕「うむ、元気があつてよろしい！

それでは・・・」

愛宕はポケットからあるものを取り出し
吹雪に渡す。

愛宕 「パンパカパーン♪

吹雪ちゃん、これ貰って。」

天馬 「これって?」

吹雪 「お守り?」

高雄 「敵の砲弾が当たらないおまじないです。

実は、中には愛宕ちゃんの・・・」

愛宕 「高雄ちゃん!!」

高雄 「フフツ

私達からも、無事を祈らせてください。」

吹雪 「あ、ありがとうございます。」

すると今度は・・・

間宮「はい、おまたせ。

沢山食べてくださいね。」

間宮が突然、特盛あんみつを持ってきた。

吹雪「えっ？

いや、私頼んで・・・」

利根「我輩からじゃ！」

天馬「利根さん、いつの間に!？」

利根「なーに、お主らがソイツらの相手をしておる

間に入ってきたのじゃ。

それより吹雪！

悔いの無いよう、思う存分食べておけ！

武運長久を祈るぞ！」

吹雪「あ、ありがとうございます・・・」

一同は、見舞品を渡すと店を後にした。

天馬「吹雪さん、大人気ですね。」

吹雪「て言うか・・・」

すると今度は・・・

大井「退きなさい！」

北上さんの邪魔よ！」

大井と北上がやって来た。

吹雪・天馬「す、すみません！」

北上「ほう、お見舞い品ドツサリだね。」

大井「次の作戦で一番被弾する確率が高いの、

この子だもんね。」

大井は吹雪を指差して言う。

吹雪は少し縮こまる。

吹雪「はうう……」

睦月「吹雪ちゃん、しつかりだよ！」

北上「まあ、今さらじたばたしても始まらないし、

気楽にやれば？」

大井「いいこと？」

北上さんが私との時間を裂いてまで

教えてくれたんだから、1発くらいは

当てて来なさいよね！」

吹雪「は、はい……」

大井と北上はそのまま店の奥に向かった。

吹雪「私、訓練してくる……」

天馬「ちよつ、ダメですよ！」

今晚は明日に備えてゆっくり休めって

言われたじゃないですか！」

吹雪「でも私、このままじゃみんなの

足手まといになるだけだし……」

天馬「そんな……！」

睦月「そんなことないよ！」

吹雪「睦月ちゃん？」

睦月「大丈夫！きつと出来るよ！」

吹雪ちゃん、あんな一生懸命

特訓したんだもん！

私は信じてる……自信を持って！

吹雪ちゃんなら、きつと大丈夫だよ！」

吹雪「睦月ちゃん……うん！」

そんな様子を、近くの木の影から

剣城が見ていた。

剣城「信じてる……か。」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇
◇夜◇

↳第三水雷戦隊 寝室A↳

その日の夜、風呂を済ませて寝室で寝る準備を
している吹雪達。

だが、吹雪の顔にもう心配の文字はなかった。

天馬「吹雪さん、もう平気ですか？」

吹雪「うん！」

睦月ちゃんのお陰だよ！」

睦月「わ、私は前に如月ちゃんに同じようなことを

言われて、凄く元気になれたから・・・」

吹雪「如月ちゃんに？」

天馬「劍城から聞いたんですけど、如月さんは
睦月型の二番艦なんですけど、睦月さんより
就役が少し早いお姉さんなんですって。」

夕立「へえー、何か珍しいツポイ。」

睦月「うん。」

それで、私が鎮守府に着任して

すぐ実戦があつて、何にもしないまま

先輩達が片付けてくれたけど、私

傷害しちやつたの・・・

そしたら、如月ちゃんがつきつきりで

面倒見てくれて・・・

励ましてくれて・・・

凄く、感謝してるの・・・」

吹雪「なんだか、私と睦月ちゃんみたいだね！」

睦月「えっ？」

わ、私なんて全然・・・」

吹雪「そんなこと無いよ！」

睦月ちゃんが側にくれたから、

頑張れたんだよ！」

睦月「吹雪ちゃん・・・！」

吹雪「天馬君にも感謝してるよ！」

天馬君が私にサツカーを教えてくれたから

ここまで強くなれたんだよ！」

天馬「吹雪さん・・・！」

あの一、とても良い雰囲気なんだが、誰か
忘れていないだろうか？

夕立「ブー！」

夕立が頬を膨らませて怒っている。

夕立「夕立邪魔ッポイ!？」

吹雪「そ、そんなこと無いよ！」

夕立にも凄く感謝してるから！」

夕立「えーん！」

取つて付けたツポイー！」

吹雪「ほ、本当ですうう！」

夕立「嘘ツポイイ！」

吹雪「ホントにホントですうう！」

夕立「嘘ツポイイ！」



く 演習場 く

次の日の早朝、吹雪は艀装を着け演習場で

自主連を行っていた。
すると・・・

赤城「頑張っていますね。」

そこへ、一航戦の赤城がやって来た。

吹雪「あ、赤城先輩!!」

く寮(周辺)く

一方そのころ、天馬は寮の周りをドリブルで走っていた。

天馬「ほっほっほっほっ……」

すると……

「イヨイヨ出撃ネ……」

天馬「……!?!」

茂みの中から聞き覚えのある声が聞こえた。

天馬は立ち止まって茂みの方を見る。

そこにいたのは、以前会った深海棲艦の

正規空母ヲ級だった。

天馬「君は、確かこの間の空母ヲ級……」

ヲ級「天馬、アナタ”覚悟”ハデキテルノ?」

天馬「ああ、相手がどんなに強敵でも、

迷わずに戦う覚悟はできてるよ!」

ヲ級「ソウ、ナラ一ツアナタニ忠告シテオクワ。」

天馬「忠告？」

ヲ級「今回ノ作戦デ、アナタノ仲間ノ誰カガ

海ニ沈ムワ……」

天馬「えっ？」

ヲ級「誰ナノカハワカラナイケド、アナタ達ハ今日、

大切ナ何カヲ失ウトイウ”絶望”ヲ

知ルコトニナル……

ソレダケハ覚エテオキナサイ……」

ヲ級はそのまま、闇の中へと消えていった。

天馬「仲間を失うという絶望……」

く地下ドックく

数時間後、第三・第四水雷戦隊は
地下ドックへ集まった。

川内「夜戦だ夜戦だ！

腕が鳴るうううう!!」

中には浮かない顔をする者が一人いる。

天馬（昨日ヲ級は、今回の作戦で仲間の誰かが

沈むって言ってた・・・

もしかして、その人は三水戦の中に

いるのかな・・・

いや、もしかした四水戦の誰か・・・）

天馬の隣では睦月と如月が話をしていた。

睦月は何やらモジモジしている。

如月「睦月ちゃん、なあに？」

睦月「その……この作戦が終わったら

お話したいことがあるんだ。」

如月「あらあ、愛の告白かしら？」

睦月「違うよ!!」

て、あんまり違わくないけど……」

如月「わかったわ。

約束、ね。」

如月はウインクをして答える。

睦月も頬を赤くしながら笑顔を見せた。

天馬（睦月さん……如月さん……）

天馬は神童と劍城を呼んで話をする。

神童「急にどうした？ 天馬。」

天馬「みんなには伝えないでほしいんですけど、もしかしたらこの作戦で、誰かが沈むかも知れないんです。」

劍城「なんだと!？」

神童「確かなのか？」

天馬「昨日の夜、夢の中で聞いたんです。」

” 今回の作戦で仲間の誰かが

海に沈むだろう。覚悟しろ” って。」

劍城「なるほど、もしそれが予知夢なら

今回の作戦では、俺達が思いもしない予想外の

出来事が起こる可能性が高いな。」

神童「よし、十分に気を付けよう。」

く指令室く

大淀 「全艦、出撃準備完了しました！」

陸奥 「いよいよね。」

長門 「ああ。」

く地下ドックく

長門 『これよりW島攻略作戦を発動する。』

第三・第四水雷戦隊及び、特殊支援艦隊
出撃せよ！』

一同 「はい！」

第三・第四水雷戦隊一同は艤装を装着し
大海原へと出撃。

その後、天馬・神童・劍城の3人も
出撃の体制に入る。

天馬「松風天馬、宇宙戦艦ヤマト！」

神童「神童拓斗、デウスーラ2世！」

劍城「劍城京介、メガルーダ！」

天馬「特殊支援艦隊《チーム雷門》！

いざ出撃!!」

天馬は宇宙戦艦ヤマトを、

神童は武装をパワーアップしたデウスーラ2世を、

劍城は新たに新兵器を搭載したメガルーダを

装備し、3人は大海原へ出る。

そして天馬と神童は第三水雷戦隊と共に、
劍城は第四水雷戦隊と共に作戦海域へと向かった。

Episode 6 / さようなら、如月……

く W 島 作戦海域く

作戦海域に到着した第三水雷戦隊。

岩影から那珂と神童が敵水雷戦隊を監視していた。

那珂「みーつけ！」

神童「今のところ、まだ気付かれては

いないようです。」

神通「了解。

では作戦通り、このまま敵の動向を探りつつ

夜を待ちます。

姉さん、零式水偵を。」

川内「OK！」

川内と神通は右腕のカタパルトに
零式水上偵察機をセツトする。

そして勢いよく放ち、2機の零式水偵は
大空へと飛び立つ。

神通「天馬君、コスモ・ゼロの発艦準備を

お願いします。」

天馬「わかりました！」

天馬は背中中の艀装から2本のカタパルトを出現させ
両肩に1本ずつ装備する。

そして、カタパルトに零式52型空間艦上戦闘機
通称《コスモ・ゼロ》をセツトする。

右肩のゼロは機首が赤色の《アルファ1》

左肩のゼロは機首が橙色の《アルファ2》

どちらともパイロットが乗っているのか
アルファ1からは若い男性の声が、

アルファ2からは若い女性の声が無線から聞こえる。

天馬「コスモ・ゼロ アルファ1・アルファ2

発艦してください！」

α1『アルファ1ラジャー！』

クリアーフオーテイクオフ！』

α2『アルファ2ラジャー！』

クリアーフオーテイクオフ！』

2機のコスモ・ゼロはカタパルトから

勢いよく飛び立ち、神通と川内の零式水偵の

後に続いた。

神通「吹雪ちゃん、夕立ちちゃん、睦月ちゃん、

あなた達には交代で、目視による哨戒を

お願いします。」

3人「はい！」



◇数分後◇

偵察機を飛ばして数分後、何も変化の無いまま時間だけが過ぎた。

神通達の水偵も天馬のゼロも中々帰ってこない。

川内「水偵が中々帰ってこないね・・・」

那珂「集録がおしてるのかな？」

神通「少し心配ですわね・・・」

天馬君、ゼロからの連絡は？」

天馬「まだありません。」

異常が見つかった場合はすぐ連絡してくれと

伝えてありますけど……」

天馬は場所を変えて目視による警戒を行う。
すると・・・

吹雪「ねえ、天馬君。」

天馬「なんですか？ 吹雪さん。」

吹雪「私、天馬君のこと・・・」

大好きだよ！」

天馬「おととと！」

「だああああ!？」

バシャーーン！

吹雪のいきなりの発言に驚き、天馬はバランスを崩し後ろに倒れた。

吹雪「だ、大丈夫？」

だが一瞬で立ち上がった。

天馬「ととつ唐突すぎますよ!!」

いきなりどうしたんですか吹雪さん!!」

すると・・・

夕立「唐突すぎる!!」

睦月ちゃん、緊張のあまり

壊れちゃったツポイ!?!」

夕立が天馬と似たようなことを言つて

睦月に怒っていた。

吹雪「あ、もしかして睦月ちゃんも

夕立ちゃんに?」

睦月「うん!」

天馬「二人とも、何かあつたんですか?」

吹雪「実はね、今朝演習場で自主連しているとき

赤城先輩と睦月ちゃんに会つて、一緒にお話し
してらうちに思つたんだ。

私、睦月ちゃんにお世話になりっぱなしで

「どうやったたら恩返しが出来るのかなって。」

睦月「私も、如月ちゃんや先輩達に

「どうやってお礼すればいいのかなって。」

吹雪「でも、赤城先輩が教えてくれたんだ。」

~~~~~

赤城「誰も恩返しなど望んでいません。

「だから、ただ言えればいいのです。」

「ありがとう」って、想っていることを

素直に・・・」

吹雪「えっ!？」

睦月「それだけで、いいんですか!？」

赤城「私達艦娘は、存在したその瞬間から



戦うことを運命付けられています。

反攻作戦が開始されれば、戦闘は

激化するでしょう・・・

今、この鎮守府にいる艦娘達も

どれだけが無事でいられるか・・・

でも、それでも私は、艦娘で良かったと

思います。

大切な人を守ることが出来る。

大好きな仲間と、戦えるのだから・・・」

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

吹雪「鋼の艦装は戦う為に・・・

高鳴る血潮は守る為に・・・

秘めた心は愛する為に・・・

ありがとう、大好き、素敵、嬉しい

大切な人への大切な想いを伝えることを  
ためらわないで。

明日、会えなくなるかもしれない

私達だから・・・”

赤城先輩はそう教えてくれたの。」

天馬「想いを伝えることをためらうな、か・・・」

夕立「ちよつと素敵っぽい。」

睦月「でしよ？」

それで思ったの。

睦月、夕立ちゃんにはあんまり

言えてなかったなつて・・・」

夕立「そ、そういうことなら私も・・・」

すると・・・

ピロン！

α1 『こちらアルファ1』 古代”!

ヤマト、至急応答願う!”

天馬「こちら宇宙戦艦ヤマト。

古代さん、どうしましたか?”

古代 『謎の敵艦載機集団が出現!

零式水偵2機が迎撃された!

現在敵機と交戦中!”

川内「なんだって!?”

吹雪「うそ……!?”

すると……

α2 『こちらアルファ2』 山本”!

敵艦載機の1機がW島へ向け飛行中!

アルファ2は現在、敵機を後方から追撃中!

あと10秒で作戦海域上空を通過します!”

通信が途切れた直後、一同の頭上を  
敵艦搭機とコスモ・ゼロアルファ2が  
猛スピードで通過。

山本『逃がさない！』

ダダダダダダダダ・・・!!

山本のコスモ・ゼロはW島上空で敵機を  
機銃で攻撃。

ドカーン!!

敵機は銃弾が命中し爆発。  
粉々に碎け散った。

天馬「山本さん、助かりました！」

神通「でもどうということ？」

ホ級に動きは無かつたはず・・・」

神童「それより、偵察機に発見された

ということ・・・」

那珂「敵の艦隊が動き出したよ!!

こっちに向かってくる！」

川内「指令部に打電を！」

急げ！」



〈鎮守府 指令室〉

大淀 「第三水雷戦隊、神通より入電！

” 我、敵偵察機に発見されたし。

直ちに指示を”」

長門 「バカな・・・！」

陸奥 「どうするの？

三水戦が敵に発見されら時点で

奇襲作戦は破綻よ。

四水戦を向かわせて正面対決に持ち込む？

それとも天馬君と神童君に敵の殲滅を

要請する？」

長門 「いや、三水戦を下がらせる。

全速力で現海域より離脱するよう

伝えてくれ。」

大淀 「わかりました。」

陸奥 「でも、敵は軽巡2に駆逐艦4の計6隻。

天馬君のヤマトと神童君のデウスーラでなら

殲滅は可能なはずだけど。」

長門「敵がそれだけならな・・・」



「W島沖合い 60km」

長門の指示で、第三水雷戦隊は待機していた  
海域から離れ移動していた。

遙か後方から敵水雷戦隊がついてくる。

すると、前方に巨大な2隻の深海棲艦がいた。

その深海棲艦は口から沢山の艦載機を

打ち出している。

神童「艦種識別！

軽空母又級2隻！」

夕立「うそ・・・！」

神通「輪形陣！」

全艦、対空戦闘用意！」

天馬「主砲・副砲、エネルギー装填！」

パルスレーザー発射準備！」

全ミサイル発射管、ミサイル装填！」

波動防壁、展開！」

神童「陽電子レーザー砲1番から18番発射準備！」

魚雷発射管1番から24番、魚雷装填！」

神童のデウスーラのハッチが開き、中から

計16の砲塔が現れ、第三水雷戦隊の周りに

ドーム状のバリアが現れる。

戦闘の準備が整うと同時に、敵艦載機は集団で

急降下してくる。

天馬「敵機、急速接近！」

川内「撃ち方始め!!」



ズドーン！

バシユーン！

ババババババババツ！！

天馬「ミサイル発射！」

ズドドドドドドドーン！！

一同は多数の敵機に向けて一斉に攻撃を行う。

天馬「古代さん、山本さん！

今すぐ援護に来てください！」

睦月（帰るんだ、みんなと一緒に！）



◇ 指令室 ◇

陸奥 「空母が2隻!？」

長門 「やはりまだいたか・・・」

陸奥 「このままじゃ三水戦は敵の水雷戦隊に

追い付かれて挟み撃ちに・・・」

長門 「させないさ。」

大淀、四水戦に打電。

敵水雷戦隊の足止めを。」

大淀 「わかりました。」

陸奥 「でも、どうするの？

長門 「今から増援を出しても間に合わないわ。」  
「いや、まだ手はある。」

だがそれまで時間稼ぎをする必要がある。

四水戦の剣城に打電。

火焰直撃砲を用いて敵艦載機の殲滅を。

それと・・・

遠征中の第二艦隊に打電を送ってくれ。」



◇ W島沖合い 56km ◇

長門の指示を受け、第四水雷戦隊は作戦海域から敵水雷戦隊の足止めに向かっていった。

球磨「敵水雷戦隊を発見したクマ！」

夕張「砲雷撃戦用意！」

剣城「火焰直撃砲発射準備！」

エネルギーダンパー起動！

薬室内、圧力上昇！

エネルギー転送跳躍管、開け！」

左腕の大砲にエネルギーが集まり、まるで太陽のような炎球を作り出す。

剣城「照準合わせ！」

火焰直撃砲、発射！」

バシユウウウウウウウウ！！

大砲から炎のような超高熱エネルギー弾が放たれた

かと思うと、一瞬で消えた。

剣城「エネルギー転送完了！」



◇ W島沖合い 60 km ◇

一方、第三水雷戦隊はヤマトの波動防壁で敵機の攻撃を防ぎながら防壁内側から敵機を攻撃し続けていた。

上空からコスモ・ゼロの古代と山本が援護するが、敵機はとどまることを知らず、上空から容赦なく攻撃をしてくる。

那珂「那珂ちゃんはみんなのものなんだから！」

そんなに攻撃しちゃダメなんだよー!!」

神童「敵機の数が多すぎる！」

天馬「このままじゃ防壁がもちません！」

すると・・・

バシユウウウウウウウ!!

一同の頭上をプロミネンスのような炎が現れる。  
炎の中に巻き込まれた敵機は一瞬で蒸発し  
周辺の敵機も炎をあげて爆発した。

天馬「なんだ!？」

剣城『天馬、大丈夫か?』

天馬「剣城!

さっきの攻撃、お前なの?」

剣城『ああ、夕立さん特製の新兵器

火焰直撃砲を使ったんだ。』

天馬「すごいよ剣城!」

劍城『だが、さっきの攻撃で火焰直撃砲が

オーバーヒートしてしまった。

次は撃てん。』

天馬「でも助かったよ。

ここからは俺達で何とかする！」

劍城『了解した、気をつけろよ！』

天馬は劍城と通信を切る。

するとその直後、天馬の艀装から爆発音と共に

黒い煙が上がった。

天馬「くそっ！」

コンバーターがオーバーヒート

した！

防壁消失します！」

防壁が無くなったと同時に、敵機は急降下しながら



集団で攻撃を始めた。

神通はヌ級に向けて魚雷を発射するが敵機に撃ち消されてしまう。

神通「ダメですわ……」

すると突然、川内の声が飛んだ。

川内「睦月！」

その位置から撃て！」

睦月と空母ヌ級の間には敵機がおらず、絶好のチャンスと言える。

睦月「でえええい!!」

ズドドン!!

睦月は又級に向けて魚雷を発射する。  
だが、もう1隻の又級から発艦した敵機の  
攻撃によつて撃ち消されてしまう。

睦月「そんな・・・」

すると、発艦した敵機の内1機が睦月の斜め上から  
急降下してくる。

翼には爆撃用の爆弾が搭載されているのを見て  
睦月は息を飲んだ。

睦月「・・・!？」

夕立「睦月ちゃん!!」

茫然と立ちすくむ睦月に襲いかかってくる敵機。

もはや轟沈は確実と思われたその時・・・

「うわあああああ!!」

ズドーン!

ドカーン!

一人の艦娘が睦月の前に立ち敵機を撃ち落とした。

吹雪だった。

だが今度は別の敵機1機が二人に襲いかかってくる。

その時……

天馬「やらせるかあああ!!」

ガツーンツ!

天馬は急いでかけつけ、敵機を回し蹴りで破壊した。

天馬「大丈夫ですか？」

吹雪「ええ・・・」

睦月「吹雪ちゃん！」

そこから魚雷を撃つて！」

今の吹雪達とヌ級の間には障害になる物がなく、  
正に正面对決状態だ。

吹雪「よし、天馬君！」

天馬「了解！」

天馬はコスモ・ゼロアルファ1の古代に指示を送る。  
送り終わると、吹雪はヌ級に向けて魚雷を放つ。

吹雪「(自分を信じて・・・)

お願い！

当たってください！」

ズドドン!!

放たれた魚雷はヌ級目掛けて一直線に進み  
見事に全弾命中した。

ドカーン!

天馬「古代さん、今です!!」

古代『ミサイル発射!!』

ズドドン!!

古代のコスモ・ゼロはヌ級に目掛けて  
ミサイルを放つ。

ミサイルはヌ級の口の中に進入し爆発。

ドカーン！

又級は黒い煙をあげて海に沈んだ。

天馬「よっしやー！」

神童「気を抜くな！」

まだ敵は残ってるんだ！」

確かに、まだ空母又級1隻と多数の艦載機が残っている。

すると、水平線の向こうから赤い砲弾が数発飛んできた。

バババババババババツ！！

砲弾は敵機集団の中で爆発し、大量の弾子が撒き散らされ敵機集団を攻撃する。

敵機集団は火を吹き墜落していった。

天馬「今の、三式弾？」

神通「水平線の向こうから？」

すると、今度は白い砲弾が同じ方角から飛んでき  
又級に直撃。

ドカーン！

又級は爆発し沈んだ。

神通「そうだわ、やっぱり・・・」

遠征に出ていた第二艦隊です！」

W島沖合い 56km

夕張「そっか、この海域の近くまで

戻ってきてたんだ！」

球磨「見るクマ！」

敵の残存艦が撤退していくクマ！」

劍城「これで、みんな無事ですね。」

如月「ええ。」

ヒュウウウ……



如月が眩いた直後、やさしいそよ風が吹き  
二人の髪を揺らした。

如月「やだあゝ、髪の毛が痛んじやう……」

劍城「フフツ」

劍城は静かに微笑むと、少しだけ後ろを向いた。

劍城「なあ如月さん、あんた……」

劍城が如月に何かを聞こうとした直後……

ドカーン！

すぐ後ろで爆発音がした。

劍城は慌てて振り返ると、先程まで如月がいたところは炎に包まれていた。

劍城「!？」

如月さん!!」

劍城は炎の中に叫び、如月の名を呼んだ。

だが返事はない。

今度は海に飛び込み海中を見た。

すると、傷付いた体でゆっくりと沈んでいく

如月がいた。

劍城は潜って追うが追いつかない。

劍城「如月さん!!」

如月は何も言わず、ただ沈んでいくだけだった。

だが・・・

如月「如月のこと、忘れないでね・・・」

如月はそう言い残し、暗い深海へと姿を消した。

剣城「如月さん・・・」

うわああああああああああ!!」

海中に、剣城の叫び声が響く・・・



〈鎮守府 港〉

夕方、第三水雷戦隊が鎮守府に帰ってくると多数の艦娘達が出迎え拍手を送ってくれた。

利根「金星を取ったようではないか！

よくやったの、吹雪！」

電「凄いのです！」

響「ハラショー！」

吹雪「みんなのお陰です！」

本当に、ありがとうございます！」

だが、出迎えてくれた艦娘達の中に第四水雷戦隊の姿は無かった。

睦月「あの、四水戦の皆さんはまだ？」

利根「ああ、まだじゃ・・・」

睦月「わかりました！」

睦月はその場から走り出した。

吹雪「睦月ちゃん、何処行くの？」

睦月「岬！」

一番最初に、如月ちゃん達を

お迎えしたいの！」

吹雪「待って！」

私も！」

吹雪も睦月の後を追う。

睦月（それで言うんだ。

”大好きです、ありがとう！”って！

きつと如月ちゃん、最初は驚くよね？

でもその後きつと、すつごく照れて

笑ってくれるはず！）

神通と利根は浮かない顔で見ている。

利根「言っておらぬのか？」

神通「まだ、確定していませんから・・・

少しでも希望があるうちは・・・」

利根「じゃが、その方が残酷なときもあるぞ・・・」



〔提督室〕

長門「提督、ご報告いたします・・・

本日ヒトゴロンフタ、

W島沖56kmの海域にて、

駆逐艦如月、敵艦載機の爆撃により、  
大破・炎上。

夕張達が搜索を続けていましたが、もはや

絶望的と判断し、11分前に搜索を

断念しました。

轟沈です・・・」

提督 「そうか・・・  
如月、今までありがとう・・・」



## E p i s o d e 7 / 金剛型四姉妹登場！

ㄋ 第三水雷戦隊 寢室A ㄋ

W 島攻略作戦から数日過ぎたある朝  
何時ものように起きる吹雪。

だが、寢室には睦月の姿が無かった。

吹雪「睦月ちゃん、今日も・・・」

睦月は港の波止場で海を見ていた。

彼女は如月が轟沈したことを知らず、帰りを  
待ち続けていた。



く W 島沖合い 56 km 海底く  
その頃、W 島沖海底では剣城が打ち切りとなった  
如月の捜索を続けていた。

剣城「何処にいるんだ、如月さん！」



く 鎮守府 指令室く

そして、指令室では長門と陸奥が書類の  
整理をしていた。

陸奥「夕張からの最終報告書。

隊から損耗を出したこと、

相当悔やんでるみたい。」

長門「FS作戦発動時より覚悟していたことだが、

駆逐艦1杯と引き換えにW島海域奪回を

成し遂げたと考えれば、むしろ幸運だったと

考えた方がいい。」

陸奥「知ってる？

あなた嘘を言うとき、少し早口になるのよ？」

長門「次は南西海域だ。」

この作戦は、止める訳にはいかぬ。」



く 駆逐級 く

カーン カーン

その日の午後、校舎中に今日の授業の終わりを

知らせる鐘が響き渡る。

だが・・・

神童「劍城、今日も授業に出なかつたな。」

天馬「球磨さんと多磨さんに聞いたら、まだ

夕張さんと、W島沖56kmの海域を

ずっと捜索してるみたいですよ。」

夕立「んにゃー、やっと授業終わったッポーイ。」

夕立は疲れたのか机の上に突っ伏す。

暁「まったくもう、だらしないわね……

そんなんじや一人前のレディーなんて

程遠いわよ！」

響「いや、これはこれで気持ちがいいな。」

と、響も同じような体制をとる。

暁「響も真似してるんじゃないわよ！」

雷「あれ？」

ねえ電、今日の授業って何したつけ？」

電「もう、雷ちゃんはたるんでるんです。

でも、何をしましたつけ？」

睦月「あれ？」

みんな、元気ないね？」

一同「ん？」

睦月「そうだ、間宮さんのところに行かない？」

甘い餡蜜でも食べれば、きっと元気出るよ！」

一同「・・・」

一同は睦月の隣の空いた席を見る。

そこは、ついこの間まで如月が座っていた席・・・

吹雪「む、睦月ちゃん!」

睦月「なあに、吹雪ちゃん?」

吹雪の呼び掛けに笑顔で対応する睦月。

だが、吹雪は何も言わなかった。

吹雪「いや、やっぱり何でもない……」

睦月「そっか。」

吹雪は席に着く。

天馬「伝えられないのも、無理ないですよ……」

吹雪「うん、もし睦月ちゃんが本当のことを

知ったら、どれだけ悲しむかと思うと……」

すると……

ガラガラガラ・・・

教室の扉が開き、一人の艦娘がやって来た。

妙高型重巡洋艦の四番艦で、お嫁さんになりたい艦娘ランキング1位の羽黒だ。

羽黒「天馬君、吹雪ちゃん、いませんか？」

天馬「羽黒さん、どうしたんですか？」

羽黒「あ、いました。」

二人とも、長門秘書艦が提督室にお呼びです。

何やら、特別任務だと。」

吹雪「特別任務？」

〈提督室〉

---

提督室にやって来た天馬と吹雪、そして島風。

だが部屋に提督はおらず、代わりに長門と陸奥、

そして任務娘として働いている軽巡洋艦の大淀がいた。

吹雪「特別任務なんて、何だか物凄く緊張するね……」

天馬「ええ……」

陸奥「大丈夫よ。」

どうせすぐ、そんなに緊張してるのが

バカバカしくなるから。」



二人の緊張を他所に、相変わらず元気で落ち着きがなく走り回っている島風と、何やら頭を悩ませる長門。そして仕事に没頭する大淀。

島風「ねえねえ！

それより任務ってなあに？」

長門「少し待て、全員揃ってから説明する。」

吹雪「全員？」

天馬「俺たちの他にも、誰かいるんですか？」

陸奥「ええ。」

今回、三人は金剛を旗艦とした南西方面艦隊に

一時的に配備されることになったの。」

天馬「一時的にかあ。」

吹雪「・・・って、金剛さん!？」

あの人もカッコ良かったなあ。」



ロングヘアに、巫女のような衣装。  
そう、この人が噂の金剛である。

金剛「バアアアアニングウ！ラアアアアブ！！」

金剛は勢いよくジャンプし、宙返りで大淀に抱きついた。

が、どうやら本人は大淀を提督と間違えてるようだ。

天馬「えええ……」

金剛「テートク〜♥

ってアレ!?

これはテートクじゃなくて、オウ淀デース！」

大淀「大淀です。」

長門「生憎だが提督は席を外している。」

金剛「シツツ！」

金剛は悔しがりながら大淀から離れた。

金剛「でも次は負けません!

テートクのハートを掴むのは、私デース!!」

ポオオオオオオオオオツ!!

金剛からまるで炎のようなオーラが伝わってくる。

吹雪「こ、金剛さん?」

金剛「ん?

オウ、ユー達が噂のニューフェイスねえ?」

吹雪「はい、特型駆逐艦の吹雪です!」

天馬「宇宙戦艦ヤマトこと、松風天馬です!」

金剛「オオ!

元気のいいガールとボーイネー!

でも元気の良さなら、私だって  
負けないネー！」

吹雪「・・・？」

と、いつの間にか金剛の後ろには  
同じ衣装を身に付けた艦娘が3人。  
姉妹艦の比叡、榛名、霧島である。

金剛「金剛型一番艦！」

英国で生まれた帰国子女、金剛デース！」

ズドーン！

比叡「同じく二番艦！」

恋も戦いも負けません！

比叡です！」

ズドーン!

榛名「同じく三番艦!

榛名、全力で参ります!」

ズドーン!

霧島「同じく四番艦!

艦隊の頭脳、霧島!」

ズドーン!

比叡・榛名・霧島「我ら、金剛型四姉妹!!」

金剛「デース!!」

ズドドドドーン!!

アピールは大成功をおさめた。

天馬「凄い迫力・・・」

吹雪「あ・・・ああ・・・」

だが、このアピールを見てから吹雪の  
イメージの金剛に・・・

ピキッ

ヒビが入り始めた。

そして、後方では陸奥が笑いを堪え、

長門は呆れていた。

長門「全く、何のつもりだ？」

榛名「それが、遠征から帰還後の初任務

ということだ・・・」

霧島「提督にアピールしようと、金剛お姉様の

テンションが上がりがりまくりまして。」

長門「そもそも比叡達はいつから準備をしていた？」

比叡「そりやもちろん、こっそり迅速に

忍び込んで・・・サツ！」

長門「そんなことをするための高速戦艦では

無いだろうに・・・」



この様子を見て、吹雪のイメージの金剛は  
ついに・・・

ガツシヤーン

砕け散った・・・

ガチャ

すると、またもや扉が開き、誰かが入ってきた。  
今度は軍の制服を着た男性だ。

「お、みんな揃ってる様だな。」

声に反応したのか、金剛は真つ先に振り向く。  
そして、笑顔でその男性に抱きついた。

金剛 「テートク!!」

会いたかったデスヨー!!」

天馬 「この人が、提督?」

提督 「ん?」

提督は天馬の声に気づき、顔を向ける。  
その顔は・・・

吹雪 「あれ?」

なんか、提督と天馬君の顔、何処と無く似てる様な……」

霧島「本当ですわ。」

確かに、髪型は帽子を被っていてわからないが、顔付きは天馬に似ている。

提督「君かい？」

宇宙戦艦ヤマトを動かしたっていう

噂のサッカー少年は。」

天馬「はい！」

松風天馬といいます！」

提督「天馬君か。」

私はこの鎮守府の提督だ。

君の活躍は鎮守府中の艦娘から

聞いているよ。」

天馬「ありがとうございます！」

提督は自分の椅子に座ると、真剣な目付きで一同を見る。

提督「では、全員揃ったところで

みんなに今回の作戦を伝える。」

一同「はい！」

提督「今回の目標は、南西海域に眠る豊富な資源だ。

今後激化する戦いに備えて、何としても

抑えておきたいところだが、どうやら

深海棲艦も狙いは同じ。

戦艦2隻を中核とした艦隊の接近を

既に確認している。

そこで、これを洋激するため編成されたのが

君達、南西方面艦隊だ。

理由は……」

霧島「現在、南西海域で発生している

スコールですね？」

榛名「つまり、一航戦の様な航空戦力は

使えないから……」

提督「そうだ。

高速戦艦の機動力をもって敵艦隊を撃滅する。

以上が、本作戦の主な内容だ。

何か質問はあるか？」

吹雪と霧島達は意味を理解している様だが……

比叡「……ほう？」

金剛「……ワッツ？」

提督「まったく……」

霧島、榛名、お姉様方に分かりやすく

教えてやってくれ……」

霧島「要するに、凄い速さで向かって・・・」

榛名「一気にドカーン！」

つてことです。」

比叡「なるほど、わかりやすい！」

天馬「なんか、思ってたより馴染みやすそうな

人達ですね。」

吹雪「この任務、どうなっちゃうのかなあ？」

すると・・・

金剛「ヘーイ！」

ブッキー！ マツター！ ゼカマシー！」

金剛が後方から3人を抱き寄せる。

吹雪「ぶ、ブッキー?!」

天馬 「マツツーって……」

島風 「ブー！」

あたしゼカマシじゃない！」

金剛 「心配しなくても、私達がついているので

ノー・プロブレムなのデース！」

提督 「作戦決行は明日、以上だ……」



く灯台前く

その日の夜、天馬は灯台の側で海を眺めていた。

遙か彼方には黒い雲がゴロゴロと音をたてている。

天馬 「明日、出撃か……」

天馬はその場から立ち上がり、灯台を後にしようとしたとき、灯台の向こうにある波止場に一人の人影が見えた。

天馬「睦月さん、今日も・・・」

「彼女ハ真実を知ラナイ限り、永遠ニ

波止場ニヤツテ来ルワ・・・」

天馬はまたしても聞き覚えのある声を聞いた。振り向くと、そこには空母ヲ級がいた。

天馬「また会ったねヲ級。」

ヲ級「天馬、アナタツテ不思議ネ・・・」

アンナ事ガアツタノニ、絶望ニ沈ムドコロカ

浸ツテモイナイ・・・」



天馬「仲間を失ったことは、確かに悲しいし悔しい。

でも、だからこそ、俺たちは戦わなきゃ

いけないって思ってたら、絶望してる

暇なんてないよ。

過去を変えることは出来なくても、

これから先の未来を変えることは出来る。

だから俺、心に誓ったんだ。

もう二度と、仲間を失わないために

戦い続けるって。」

ヲ級「ソウ……」

天馬「ところで、ヲ級が前に行ってた怪物って

いったい何なの？」

ヲ級「ソノ怪物ハ、私タチ深海棲艦ノ最高ノ

地位ニオラレルオ方ガ、自ラノ僕トシテ

作り出シタ深海棲艦……」

ソノ名ハ、《戦艦棲姫》……」

天馬「戦艦棲姫……」

ヲ級「戦艦棲姫ハ現在、我々ガ拠点トシテイル  
何処カノ島デ眠ツテイル。」

ダガ、モシ戦艦棲姫ガ目ヲ覚マセバ

コノ海ニ生キル全テノ生命ガ滅ンデシマウ。

人間モ、深海棲艦モ、艦娘モ全テ・・・

デモ天馬、アナタガ持ツ宇宙戦艦やまとノ

チカラヲ持ツテスレバ、戦艦棲姫ヲ

倒スコトガデキル。」

天馬「俺の持つ、ヤマトの力・・・」

ヲ級「ソノチカラヲ、信ジルカ信ジナイカハ

アナタ次第ヨ・・・」

ヲ級はその場を後にした。

天馬「もし、戦艦棲姫と戦うことになったら

俺がみんなを守らなきやな・・・」



く地下ドックく

次の日、天馬達南西方面艦隊は出撃のため地下ドックに来ていた。が、何故か島風と霧島の姿がない。

金剛「ムツキー!!

どうしてゼカマシーは、いつまで待っても来ないですカー!?!」

比叡「今、霧島が指令室に連絡してますから・・・」

金剛「ブツキーとマツツーは何か

聞いてないですカー?」

吹雪「いえ、私は特別何も・・・」

すると・・・

天馬「あ、霧島さん帰ってきましたよ。」

霧島「お姉様!

大淀さんに確認して来ました!」

~~~~~

大淀「間違いなく任務を忘れていますね。

何とか合流して任務に向かってください。

ただ、以前は提督の私室の炬燵の中に

潜んでいたりと、鳳翔さんの膝枕で

眠っていたりと、とにかく自由な艦娘なので
見つけるには少々手間取るかと思われます。」

~~~~~

霧島「とのことです。」

吹雪「島風ちゃんってば・・・」

金剛「フツフツフ・・・」

なら私に！」

天馬「俺にいいアイデアがあります！」

金剛「つてちよつと!？」

榛名「いいアイデアですか？」

天馬「俺に任せてください！」

はたして、天馬のアイデアとはいったい？

# Episode 8 / 南西海域を攻略せよ!

↳ 鎮守府 グラウンド ↳

一同は天馬のアイデアに乗り、島風を誘き出す  
作戦を実行していた。

が、一同は何故かグラウンドの端で巨大な机を広げ  
何やら調理をしていた。

ザクツ ザクツ ザクツ

天馬と吹雪は、ナス・トマト・キュウリなどの  
夏野菜をザクザクと切り・・・

グツグツ・・・

比叡は何やら鍋で赤いものを煮込み・・・

ガチャン！ ピツ

金剛は何かをオーブンで焼き始め・・・

ストン……ストン……ストン……

榛名と霧島は、ジャガイモ・ニンジン・タマネギを切っていた。

吹雪「ねえ天馬君、そろそろ教えてよ。

なんで島風ちゃんを探すのにこんなところで

料理をする必要があるの？」

天馬「いいですか？

例えば、部屋に閉じ籠って出てこない人がいるとします。

でも、時間が経過すれば当然お腹が空いてきますね？

そんな状態の人が突然、美味しそうな料理の匂いを嗅ぐと、食欲を抑えきれなくなり

自然と部屋から出てくる。

つまり、美味しそうな香りで食欲を刺激し、誘い出すという作戦です！」

吹雪「なるほど。」

霧島「見つけるのが難しいのなら、

いつそ島風さんの方から出てきてもらおう。」

榛名「さすが天馬君！」

見事な発想の転換です！」

金剛「ホントはワタシも同じこと

言おうとしたネー……………」

吹雪「でもそんな上手くいくのかなあ？」

天馬「吹雪さん、切った野菜を鍋に入れてください。」

吹雪「あ、はい……………」



ゴロゴロゴロ……

吹雪は天馬の指示通り、切った野菜を肉と一緒に鍋に入れる。

入れると今度は、天馬が鍋に水とコンソメを加え火にかける。

天馬「あとは少し待つだけ。」

徐々に熱が伝わり温まってくると、野菜のエキスが水に溶け出し、スープが出来た。

金剛「ソー、野菜とコンソメのいい香りデース！」

天馬「まだ完成じゃないですよ？」

ここに、秋姉直伝の特製カレー粉を加えます。」

霧島「ちなみにスパイスの比率は？」

天馬「それは秘密です。」

カレー粉を加えたことで、さらに美味しそうな

匂いが漂ってくる。

その匂いは風に乗る、一気に鎮守府中に広がった。

すると・・・

赤城「何だか美味しそうな香りがしますね。

カレーでしょうか？」

匂いにつられたのか、赤城がやって来た。

吹雪「赤城先輩！」

えっと、これはその・・・」

天馬「島風さんを誘い出す作戦です。

俺達の料理はもうすぐですから、

もう少々待ってください。」

すると・・・

チーン

どうやら金剛の料理が出来たようだ。

金剛「やつと焼き上がったネー！」

金剛はオーブンから、何やら大きな肉のような物体を取り出す。

表面は香ばしく焼けており、そして切ってみると中は鮮やかな紅色。

金剛はその肉を薄く切り、皿に盛り付け、そしてソースをかけて完成した。

金剛「完成ネー！」

金剛特製”ローストビーフ”ネー！」

赤城「美味しそう・・・(ジュルリ)」

一方こちらも・・・

比叡「完成しました！」

比叡特製”激熱チリビーンズ”です！」

一同は名前を聞くと、とっさに比叡の鍋の中を除き込んだ。

鍋の中では赤い何かがグラグラと煮たっている。

天馬「激熱って”辛い”からかな？」

吹雪「それとも”煮たってる”から？」

比叡「取り合えず味見を・・・」

比叡はスプーンでチリビーンズのスープを少しすくい、  
そして口に運ぶ。

すると、口に入れた直後、比叡の顔は赤くなり  
口から火を吹いてその場から勢いよく走り出した。

比叡「ひええええええええ!!」

ポオオオオオオオオオオ!!

金剛「両方かもネー……」

一方こちらも……

榛名「出来ました!」

霧島「榛名と霧島特製の”肉じゃが”です!」

そしてこちらも完成した。

天馬「よし、後は盛り付けだ！」

天馬は深めの皿に炊きたたのご飯を盛り、そこに夏野菜がタツプリ入ったカレーをかける。そして・・・

天馬「完成です！」

松風天馬特製、「夏野菜ゴロゴロカレー」!

金剛「オー！」

これは中々美味しそうデース！」

赤城「美味しそう! (ジュール)」

と、いつの間にか赤城の後ろには鎮守府の艦娘達が集まっていた。

中には島風の姿も。

天馬「うわっ！

皆さんいつの間！？」

島風「なんだかいい匂い。

私も食べるー！」

長門「その、秘書艦の私が言うことではないが、

私も食べてみたい・・・」

愛宕「どれも美味しそう。」

高雄「お腹と背中がくつつくどころか、

背中にめり込んでくるわ・・・」

那珂「那珂ちゃんも食べたーい！」

天馬「よし、じゃあみんなでお昼にしましょう！」

艦娘達が大勢集まり、グラウンドで楽しい

ランチタイムとなった。

赤城「天馬君のカレー、とっても美味しいです！」

長門「不思議だ、辛口のはずなのに辛いものが

全くダメな私でもスイスイ食べられる。

どんな比率で配合したスパイスを

使ったんだ？」

島風「どれも美味しい♪」

天馬「島風さんを誘い出すはずが、なんか

イベント事になっちゃいましたね……」

吹雪「だね……」

金剛「さあ、ランチの後は深海棲艦と

パーティーネー！」



〈波止場〉



その頃、波止場では睦月が一人ぼつりと如月の  
帰りを待っていた。

如月が轟沈したとも知らず・・・

睦月「如月ちゃん……………」



くW島沖合い56kmく

同じ頃、劍城と夕張は未だ如月の搜索をしていた。  
だがここ数日、劍城が海に潜って海底を搜索  
しているが、如月の艦装の残骸すら発見  
できていない。

夕張「今日も見つからなかったね・・・」

劍城 「ええ・・・」

夕張 「どうする？」

搜索まだ続ける？」

劍城 「いや、もう止めましょう・・・」

如月さんの件は、俺が自分から睦月さんに話しておきます。

今頃、如月さんが轟沈したとも知らず

一人波止場で、帰りを待つてるんじゃない

ないでしょうか？」

夕張 「・・・わかった。

じゃあ、帰ろっか・・・」

劍城と夕張はその場を離れ、鎮守府に向かった。



く南西海域く

その頃、天馬達南西方面艦隊は昼食を済ませ南西海域にいた。

海域では雨が降り、風が吹き、海は荒れていた。

吹雪「凄い雨・・・」

霧島「確かに、これでは航空戦力と投入は無意味。

速度に優れた艦隊が編成される訳です・・・」

天馬「俺のコスモファルコンを展開しますか？

ファルコンなら、雨の中でも敵を攻撃

することが出来ます。」

霧島「いえ、ファルコンはいざというときの

切り札として置いておきましょう。」

島風「みんなおっすーい！」

島風はスイスイと吹雪達を追い抜いていく。

榛名「島風ちゃん潜航し過ぎです!」

比叡「そうだ!

旗艦は金剛お姉様よ!

島風「かけっこしたいの?

負けないよー!」

島風はそのままドンドン前へ出ていった。

比叡「人の話を聞けー!!」

天馬「ダメだこりや……………」

吹雪「フフフツ」

金剛「やつとスマイルを見せたね、ブツキー!」

吹雪「えっ?」

金剛「雨も滴る良い艦娘デース!」

すると……

天馬「レーダーに艦あり！」

前方約3km！」

島風が潜航する先に、黒いオーラが見える。

オーラの中から、戦艦ル級が2隻と駆逐口級と八級が2隻ずつ、計6隻の深海棲艦が出現した。

金剛「比叡！」

斬り込み役は任せたネー！」

比叡「任せてください！」

でええええええええい!!」

ズドン！

比叡の放った砲弾は敵艦隊の正面で爆発し水飛沫を上げる。

敵艦隊は駆逐艦と戦艦に別れ、互いに距離を取り始めた。

金剛「ル級の相手は私達ネー！」

ブツキーとマツツーとゼカマシーは

駆逐艦の足止めよろしくネー！」

吹雪「わかりました！」

天馬「了解！」

島風「ゼカマシじゃないし・・・」

金剛「撃ちます！」

ファイヤー!!」

ズドン！

金剛は戦艦ル級2隻に向けて砲弾を撃つ。だが、惜しくも外れた。

金剛「もう一回、ファイヤー!!」

ズドーン!

2発目は直撃コースとなったが、ル級は障壁を展開し攻撃を防いだ。

だが金剛達は攻撃を止めず、ひたすら撃ち続ける。

吹雪「凄い……」

天馬「俺達も負けていられませんよ!

撃ち方始め!!」

ズドーン!

天馬は駆逐口級に向けて三式弾を放つ。

三式弾は見事八級に命中し、口級は轟沈した。

島風「五連装酸素魚雷、行っちゃってー!」

ドドドドドン!!

島風は背中中の艤装から5発の魚雷を駆逐八級に向けて放つ。

魚雷は全弾命中し、八級は怯んだ。

吹雪「大丈夫、この前は上手く出来たもん!

いっけええええ!!」

ズドドン!!

吹雪は八級に向けて魚雷を放つ。

魚雷は1発も外れることなく、全て命中した。



吹雪「やった！」

これならもつと！」

吹雪はもつと近くで攻撃できると思い、  
思いきつて前に出た。

だが・・・

比叡「吹雪ちゃん！前出過ぎ！」

吹雪「えっ？」

ドカーン！

吹雪「うわああ!!」

吹雪は突然、何者かの砲撃を受けた。

吹雪「な、何？」

体は中破し、体は徐々に海に沈んでいく。

そして、前方には不気味な笑みを見せる

戦艦ル級の姿があった。

ル級は中破した吹雪に向けて容赦ない攻撃をしてくる。

そんな中、吹雪の脳裏には睦月の姿が映っていた。

吹雪「そんな・・・嫌だよ・・・」

吹雪は恐怖し、怯え、恐れていた。

このままでは自分も如月の様に轟沈し、二度と

大好きな仲間にあえなくなる。

そう思っていた最中、ル級は吹雪に向けて

砲弾を放つ。

もはや直撃かと思われたその時・・・

ガンツ！                    ゴーンツ！

誰かがル級の砲弾を殴り飛ばした。

砲弾は上空で爆発した。

殴り飛ばしたのは、天馬だった。

天馬「吹雪さん、大丈夫ですか？」

吹雪「天馬君……」

天馬は優しい笑みを浮かべ、吹雪を見ていた。

吹雪「その、私……」

天馬「分かります、怖かったですよね？

もう仲間に会えなくなると思い……」

吹雪「うん……」

天馬は吹雪の手を取り、吹雪は立ち上がった。

天馬「安心してください。

吹雪さん達は、俺が絶対守ってみせます！」

天馬は体を反転させると、全速力で金剛達の所へと向かった。

かと思いきや、素通りしていった。

金剛「マツツー何するデース!？」

天馬「奴は俺が倒します！」

大丈夫！」

潜航する天馬を見て、ル級2隻は砲撃を行う。

ズドーン！

ズドーン！

天馬「バリアが使えるのはお前達だけじゃない！

波動防壁、展開！」

ピカーン！

天馬は自分の周りに波動防壁を展開し

ル級の攻撃を防いだ。

攻撃を防いだ直後、天馬はショックカノンを

ル級2隻に向けて放つ。

ル級2隻は互いに攻撃を避けたが、避けた拍子にお互いの身体が接触してしまった。

天馬「今だ!

三式弾、撃ち方始め!」

ズドーン!

天馬は、ル級同氏が接触した瞬間を逃さず  
三式弾を放った。

ドカーン!

三式弾はル級に全弾命中し、ル級は爆発し  
海の藻屑となった。

ドカーン!

島風「こつちも完了だよー!」

どうやら駆逐艦の方も片付いた様だ。

金剛「凄いネー、マツツー！」

榛名「流石、宇宙戦艦ヤマトの使い手ですね！」

天馬「吹雪さん！」

俺、やりましたよ！」

吹雪「うん！」

---

く 鎮守府 波止場く

夕方、天馬と吹雪は鎮守府に帰る次いでに睦月がいるであろう波止場によった。

だが、睦月の姿はなかった。

吹雪 「あれ？」

睦月ちゃん、もう帰っちゃったのかな？。」

天馬 「いつもなら、この時間帯でも波止場に

いるはずなのに・・・。」

---

↳ 第三水雷戦隊 寝室A

二人は寝室にやって来た。

すると、そこには窓から海を眺めている

睦月の姿があつた。

吹雪 「睦月ちゃん、ただいま。」

睦月 「吹雪・・・ちゃん・・・。」



睦月は吹雪の声に気づき、ゆっくりと振り向く。その目からは、大粒の涙が溢れ出ていた。

睦月「吹雪ちゃん、吹雪ちゃんは如月ちゃんか？」

轟沈したこと知ってたの？」

吹雪「・・・ゴメン。」

睦月「・・・どうして教えてくれなかったの？」

どうして如月ちゃんが轟沈したって

教えてくれなかったの?!

吹雪「如月ちゃんのことを知ったら、睦月ちゃん

とっても悲しむと思ったから

言えなかつたんだよ!」

睦月「吹雪ちゃん・・・」

天馬「如月さんのこと、誰から聞いたんですか？」

睦月「劍城君だよ・・・」

彼が自分から話してくれたの・・・」

〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕

数時間前、吹雪達が南西海域にいたるときのこと・・・

睦月「如月ちゃん、遅いなあ・・・」

睦月は、ひたすら如月の帰りを待っていた。  
するとそこへ・・・

劍城「ここにいたんですか、睦月さん。」  
睦月「あ、劍城君。」

劍城は睦月の隣に腰掛ける。

劍城「……如月さんの帰りを待ってるんですか？」

睦月「うん！」

帰ってきた時に誰もいなかったら

寂しいでしょ？」

劍城「……そうですね。」

劍城は顔を下にして、小声で呟く。

睦月「劍城君？」

劍城「……！！」

劍城は顔を上げ睦月の方を向く。

そして睦月の肩を掴み、話し始めた。

だがそのときの劍城の顔には、今まで見せなかった

涙が流れていた。

劍城 「睦月さん、頼む！」

聞いてくれ！」

睦月 「ど、どうしたの？」

劍城 「如月さんは、もう二度と帰ってこない……！」

睦月 「えっ?!」

劍城 「W島攻略作戦で、深海棲艦が撤退した後、

如月さんは敵の艦載機の生き残りの最後の

爆撃で、轟沈してしまっただんです……

俺は四水戦の人達と一緒に、

如月さんを探し続けました……

でも……」

劍城はポケットからある物を取り出す。

それは、如月が着けていた髪飾り。

睦月 「そんな……」

劍城「俺は、あのとき直ぐ隣にいたのに

何も出来なかつた自分が憎い・・・！

もし俺が敵の艦載機の存在に気づいていれば

俺が艦載機を撃ち落とせたかもしれないし

最悪俺が身代わりになれたかもしれないのに、

仲間が狙われていると知らず・・・

俺は・・・！ 俺は・・・！！」

く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く

睦月「その時の劍城君、凄く悔しがつてた・・・

近くにいたのに何も出来なかつた自分が

とつても憎いつて・・・」

天馬「劍城・・・」

睦月「でもね、睦月も薄々思ってたんだ。

もしかして如月ちゃん、敵に

やられちゃったんじゃないかって……」

吹雪「睦月ちゃん……」

天馬「大丈夫ですよ。」

睦月「えっ？」

天馬「如月さんのことは、俺達も残念です。

でも、睦月さんは一人じゃありません。

吹雪さんや夕立さんのような仲間や友達が

沢山いるじゃないですか。」

睦月「仲間や友達が……」

天馬「大切な人を失ったことは、確かに

悲しいし悔しいです。

でも、だからこそ、俺たちは戦わなきゃ

いけないと思うんです。

過去を変えることは出来なくても、

これから先の未来を変えることは出来る。

だから俺、心に誓ったんです。

もう二度と、仲間を失わないために

戦い抜くつて。」

睦月「天馬君・・・」

天馬「安心してください。」

睦月さんの大切な人達は、俺達が守ります！」

睦月「・・・うん！」

# Episode 9 / 結成!第五遊撃部隊!!

〜稲妻町 木枯らし荘〜

ある日の午後、天馬・劍城・神童の3人は

稲妻町にいた。

3人は大きな何かを木枯らし荘の庭へと運んでいた。

天馬「よし、そこの塀に立て掛けてください。」

神童「了解だ。」

劍城「おう。」

3人は運んでいた大きな何かを塀に立て掛けた。

運んでいたのは、稲妻町と鎮守府を繋ぐ魔法のドア。

どうやら廃ビルから運んで来たようだ。



天馬「あとは、このドアを固定すれば完了です。」

神童「これで安心して、鎮守府に行けるな。」

劍城「もうあんな気味悪い廃ビルを通るのは

勘弁ですよ。」

天馬「そうだ！」

いっそのこと、吹雪さん達を稲妻町に

招待しませんか？」

劍城「いいんじゃないか？」

神童「そうだな、それは良さそうだ。」

かれこれ話していると・・・

「じゃあね、バイバーイ。」

3人の前を一人の女性が歩いていった。

女性は3人に気付かず素通りしていったが、

3人はその姿に見覚えがあつた・・・

天馬「あれって、如月さん？」

神童「まさか、如月さんはこの間のW島攻略の時

轟沈したはずだ。

だいいち、俺達の世界にはいないはずだ・・・」

劍城「ですが、あの顔つき・瞳・髪の毛の長さ

髪の色・雰囲気まで如月さんとよく

似ていました。」

天馬「そんなばかな・・・」

神童「とにかく、今は鎮守府に戻ろう。

いつ出撃命令があるかわからんからな。」

3人はドアを潜って鎮守府に向かった。



〈鎮守府 第三水雷戦隊 寢室A〉

その後、天馬は寝室で考え事をしていた。

天馬「さつきの女の人、ホント如月さんに

そっくりだったなあ。

いや、瓜二つって言ってもいいくらいだ。

・・・ん？　　そういえば・・・」

その時、天馬は思い出した。

鎮守府の提督と自分も似ていることに。

天馬「もしかして、この世界の人間と

吹雪さん達の世界の人間って、何か

繋がりがあるのかな？」

かれこれ考えていると・・・

ガチャッ

部屋の扉が開き、吹雪が入ってきた。

吹雪「いた!

天馬君、一緒に指令室に来て!」

天馬「吹雪さん、急にどうしたんですか?」

吹雪「うん、何でも長門秘書艦から私達三水戦に

大事な話があるんだって。」

天馬「三水戦に?」

---

〈指令室〉

数分後、指令室に第三水雷戦隊のメンバー全員が集まった。

そして、長門から聞かされたのは・・・

神通「再編成？」

長門「ああ、提督から正式に通達があった。

第三水雷戦隊は現時刻をもって解散。

他の艦と共に、新たな艦隊を編成する。」

神童「艦隊を全てですか？」

吹雪「そんなく！」

---

く第三水雷戦隊 寢室Aく

その日の夜、吹雪達は寢室で荷造りをしていた。

吹雪「これで全部だね。」

睦月「うん!」

天馬「でも、変ですよ。」

どうして急に再編成なんて・・・」

吹雪「もしかして、私のせい?」

睦月「ううん!」

他の艦隊にも解散が通達されたらしいし。」

夕立「はあ……次は誰と一緒にになるツポイかな?」

吹雪「怖い人だったらどうしよう・・・」

睦月「大丈夫だよ!」

また一緒に艦隊になるかも知れないし。」

吹雪「そっか、そうだよね!」

睦月「それどころか、赤城先輩と一緒に艦隊に

なったりとか？」

吹雪「赤城先輩と？」

エヘヘ・・・」

どうやら既に妄想の中に入ってしまったようだ……

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

赤城『よく頑張りましたね。

助かったわ、吹雪さん。』

吹雪『あ、ありがとうございます！』

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

吹雪「それほどもおく……」

すると・・・

ジャーン!!!

吹雪・睦月・夕立「うわあああ!」

部屋中に物凄い音が響いた。

見渡してみると、何故か天馬の手にはシンバルが。

天馬「目が覚めましたか?」

吹雪「そのシンバル、どうしたの?」

天馬「ちよつとね・・・」

睦月「フフツ

じゃあ、明日も早いからそろそろ寝よ。」

吹雪「そ、そうだね・・・」

天馬「俺、ちよつと散歩してきます。」

天馬はシンバルを置くと、部屋を後にした。



く波止場く

天馬は波止場の周辺を散歩していた。すると、前方の栈橋に見覚えのある人影が見えた。

天馬「あれ、ヲ級だ。

ちようどいいや、ちよつと聞いてみよう。」

天馬はヲ級のところへと駆け寄った。

気配に気付いたのか、ヲ級は体をこちらに向けた。

ヲ級「アラ、マタアツタワネ。」

天馬「やあヲ級。」

ヲ級「ソノ様子ダト、私ニ何カ用？」

天馬「うん、君に聞きたいことがあるんだ。」

ヲ級「私ニ聞キタイコト?」

天馬「実は今朝、自分の世界にいたとき

如月さんに物凄くそっくりな人が歩いて

くるのを見たんだ。

それで思い出した、俺と提督も何処と無く

似ていることに。

だからもしかしたら、この世界と俺達の世界は何か関係があるんじゃないかって思ったんだ。」

ヲ級「鋭イ読ミネ、天馬。」

天馬「ねえヲ級、教えてよ。」

この世界の人間と俺達の世界の人間って、

何か関係があるの?」

ヲ級「アルワ。」

コノ世界ハアナタタチノ世界トハ別ノ世界、

イワユル”ばられるわーるど”ト言ツタトコロ。

コノ世界ニ生キル人間ハ艦娘モ含メ全テ、

「アナタたちノ世界ノ人間ト」魂ヲ共有シテ生キテイル。

魂ヲ共有シテイル者同士ハ、見タ目ヤ

性格、声ノ音程ニ話シ方モ似テシマウノ。

魂ヲ共有シテイル者同士ノ片方ガ死ネバ

モウ片方モ死ンデシマウ。」

天馬「でも、俺達は俺達の世界で如月さんに

そっくりな人が歩いて行くのを見た。

てことは……」

ヲ級「ソウ、魂ノ繋ガリガマダ切レテイナイ証拠。

ツマリ、ソノ如月トイウ艦娘ハマダ生キテイル

可能性ハアルワネ。」

天馬「まだ希望はあるってこと？」

ヲ級「ソウイウコトヨ。」

ヲ級はそう言うと、何処かへ消えていった。

天馬「如月さん、まだ生きてるのか・・・

でも、もし生きていたとしても

あの深海からどうやって地上に

上がってくるんだらう?

それか、海の底で眠っているのかな?」

かれこれ考えていると・・・

吹雪「いた!

天馬くーん!」

天馬「吹雪さん、睦月さん。

どうしたんですか?」

睦月「天馬君と同じだよ。」

天馬「そうですか。」

3人は、棧橋から海を見た。

空には満月が輝き、その光で海はキラキラと光る。

吹雪「綺麗だね。」

睦月「月が明るいからかな？」

天馬「川内さんが見たらきつと大喜びしますよ。

”夜戦だー!!”って。」

3人で話していると・・・

夕立「2人だけズルいッポイ！」

吹雪「あれ？夕立ちちゃん！」

睦月「寝てたんじゃなかったの？」

夕立「・・・最後だと思うと、ちよつと

寝れなかつたッポイ。」

天馬「そうなんですか？

夕立さんって、あまりそういうのは  
気にしてないと思ってましたけど。」

夕立「ひ、酷いッポイ!

吹雪ちやんと睦月ちやんが寂しそうに  
してたから言えなかつただけッポイ!

ねっ!

夕立の後ろには、神童と川内三姉妹がいた。

天馬「神童さん、劍城。」

睦月「川内さん達に、夕張さんまで。」

川内は棧橋の先に立ち、海に向かって叫んだ。

川内「おお、夜だ!!

やっぱり夜はいいね!血が騒ぐよ!

神通「姉さん、夜戦に来たわけじゃないでしょ?」

川内「わかつてるって!」

川内は、吹雪の左手を右手と繋ぎ、神通が川内の左手を、那賀が神通の左手を、夕立が那賀の左手を、睦月が夕立の左手を、神童が夕立の左手を、天馬が神童の左手を、そして吹雪が天馬の左手を右手と繋ぐ。そして、いつしか大きな輪ができた。

神通「別々の艦隊になっても、この

第三水雷戦隊で培った水雷魂は

ずっと持ち続けていきましょう。」

劍城「私達よりも先に散っていった

如月さんの思いも。」

吹雪「神通さん、劍城君・・・」

川内「なんかシツクリ来ないなあ。

神通と劍城は真面目すぎるんだよねえ。

天馬！」

天馬「はい！

じゃあみんな、新たな艦隊になっても、  
水雷魂で、頑張つて行こうぜええ!!」

『おぉー!!』

こうして、第三水雷戦隊は最後の夜を終えた。



く提督室前く

次の日、天馬と吹雪は提督室の前の行列に並んでいた。

吹雪「ど、どうしよう・・・」



天馬「き、緊張しますね・・・」

大淀「次、駆逐艦 吹雪

及び宇宙戦艦ヤマト 松風天馬。」

天馬・吹雪「は、はい！」

天馬と吹雪は、二人一緒に提督室へと入った。  
室内では提督が二人の履歴書を見て待っていた。

吹雪「駆逐艦 吹雪、参りました！」

天馬「宇宙戦艦ヤマト 松風天馬、参りました！」

提督「よし、では二人の所属する艦隊を伝える。

艦隊の名は・・・」

く廊下く

数分後、天馬と吹雪は資料を貰って部屋から出てきた。だが二人とも、心配なのか不満な表情を浮かべている。するとそこへ、劍城と睦月がやって来た。

睦月「吹雪ちゃん、天馬君。」

吹雪「睦月ちゃん、劍城君。」

劍城「それで、二人は何処の艦隊になったんだ？」

天馬「俺達は、”第五遊撃部隊”だつて。」

睦月「凄い！」

新しく結成された特別艦隊だよ、それ！」

吹雪「そうなの？」

天馬「劍城と睦月さんは？」

劍城「俺は、第三艦隊」。

別名、”MO 攻略支援隊”だ。」

睦月「私は、第四艦隊」・・・」

吹雪「そつか・・・」

睦月「しようがないよ、演習の時はこれからも

一緒に頑張りよう！」

吹雪「うん・・・」

睦月「じゃあ私たち、こっちだから。」

劍城「またな。」

睦月と劍城はその場を後にした。

---

く 鎮守府僚 二階く

睦月達と別れた後、天馬と吹雪は第五遊撃部隊の

寢室を探していた。

吹雪「えーつと、第五・・・第五・・・」

天馬「あ、ありましたよ。」

二人は部屋の扉を見つけ、前に立つ。

そして、緊張しながらもノックして部屋に入った。

コンコンコン ガチャツ

天馬・吹雪「あのく、こんにちは・・・」

寢室には雷巡の大井と北上がいた。

だが、二人には全く気づいていない。

大井「それでね、ここにお花を置いたら

いいと思うの。

それで、この壁に私と北上さんの写真を

沢山貼って・・・」

北上「いいんじゃない？」

でもまさか大井ツチと一緒に艦隊に

なれるなんて思っても見なかったよ。」

大井「運命です！

何があっても、二人は離れられない

運命なのよ！」

天馬・吹雪「あのく……」

大井・北上「ん？」

やっと気づいたようだ。

天馬・吹雪「こんにちは……」

北上「ああ、アナタ達確か第三水雷戦隊の・・・」

大井「部屋を間違えてるみたいね。

ちよつと案内してくるわ。」

大井は北上の手を離れると、吹雪と天馬を強引に部屋の外に引つ張り出した。

大井からは怒りの赤黒いオーラが出ている。

大井「何の用かしら？」

吹雪「えーつと、その・・・」

天馬「俺たち、今日からこの艦隊に・・・」

大井「あなた達の部屋はそっちよ。」

わかったら、邪魔しないでもらえますか？」

そう言い残すと、大井は部屋へと戻っていった。

ドタン!

『大丈夫だった?』

『ええ、親切に案内してあげたわ!』

何処がじゃ・・・

天馬「大井さんの場合、シスコンって

言うんでしょうか？」

吹雪「うん、多分ね・・・」

二人は、今度は隣の部屋に入った。

ガチャツ

天馬・吹雪「あのく……」

部屋の中には、鎮守府一仲が悪いと噂の一航戦の加賀と五航戦の瑞鶴が背中を向けあつて口喧嘩をしていた。

加賀は相変わらずクールだが・・・

瑞鶴 「つまり、提督の編成が気に入らないってこと?」

加賀 「いいえ、私はただ五航戦の子なんかと

一緒になりたくないだけ。」

瑞鶴 「ほう、随分ハッキリ言ってくれるじゃない?」

加賀 「嘘はつきたくないから。」

瑞鶴 「嘘?!」

つまり一航戦の方が上だから五航戦の私と

一緒になりたくないってこと?!」

加賀 「そうよ、それで?」

瑞鶴 「ほう……」

怒りがヒートアップしたのか、瑞鶴は立ち上がると

加賀に殴りかかろうとする。

が、咄嗟に天馬が後方から瑞鶴を止めに入る。

天馬 「瑞鶴さん、落ち着いてください!」



瑞鶴「放しなさい天馬！」

とうか、アンタいつから・・・」

すると、今度は翔鶴がやって来た。

翔鶴「瑞鶴、やめなさい。」

天馬「翔鶴さん。」

瑞鶴「翔鶴姉・・・」

翔鶴「加賀さんは一航戦の正規空母。」

私達よりも、艦隊にとって重要で

力も上なのですよ。」

瑞鶴「でも！」

翔鶴「いい？」

この前の戦いで私達が活躍できたのも、

全て”随伴艦”の皆さんが頑張ってくれた

お陰なのよ。」

加賀「随伴？」

天馬「どういう意味なんですか？」

瑞鶴「文字通り随伴する艦、要はお供って意味よ。」

翔鶴「無礼、申し訳ありませんでした。」

今後とも瑞鶴をよろしくお願いします。」

そう言うと、翔鶴は部屋を出ていった。

瑞鶴は天馬を振り払うと、椅子の背もたれを

前にして、若干怒りぎみの加賀の後ろに座った。

瑞鶴「よろしくお願いします、随伴艦さん。」

加賀「少し、腹が立ちました。」

それであなただちは？」

天馬「俺たち、実は今日から・・・」

吹雪「部屋を間違えました!!

失礼します!!」

吹雪は慌てて部屋を出ていった。

天馬「あれ、吹雪さん？」

加賀「あなた、確か天馬とか言ったわね。

五航戦の子達に弓矢の扱いを

教えてもらったそうね。」

天馬「えっ？ はい・・・」

加賀「なるほど、じゃああなたも五航戦の子達と

同類ってことね。」

瑞鶴「ちよつと加賀!!

アンタ、私達はともかく天馬まで

侮辱する気!!」

加賀「侮辱はしてないわ。

ただ教えてもらった相手が悪かったわねって

言っただけ。」

瑞鶴「それが侮辱してるって言ってるのよ!!

というか、天馬は全く関係ないでしょ!!」

かれこれ喧嘩していると・・・

大井「うるさいですよ!

もうちよつと静かにしてください!」

隣の部屋から大井と北上が、廊下から吹雪と

金剛がやって来た。

「どうやら全員揃ったようだ。」

金剛「ワーオ、これが

ナンバーファイブ遊撃部隊ですか?」

部屋の中は、加賀と瑞鶴のせいもあってか  
ピリピリしている。

金剛「ティータイムにしますか?」

・  
・  
・  
。

大井「早く終わらせてもらえますか？

そろそろ北上さんと食事に行きたいので。」

北上「でも、先ずはちゃんと部屋割り決めないと。」

加賀「私は、五航戦の子とは別の部屋にして。」

瑞鶴「私も、一航戦と一緒にお断りよ。」

大井「言つとききますけど、私と北上さんが同じ

部屋じゃなかった場合、61cm四連装魚雷が

黙ってませんけどいいですか？」

吹雪「い、いや・・・でも・・・」

金剛「これは中々ファニーな艦隊デース!

こうなつたらみんな、相撲でウィナーを

決めるといいですね!!」

吹雪「面白がつてる場合じゃないですよ!」

---

↳ 駆逐級↳

その後、何とか部屋割りは決まり、天馬と吹雪は教室にいたが、吹雪はグツタリしている・・・教室には、劍城と睦月と夕立の姿があった。

吹雪「ダメだあゝ……」

睦月「そんなことがあつたんだ・・・」

大変だったね・・・」

吹雪「うん、部屋にいても落ち着かないし

なんかみんなピリピリしてるし・・・」

剣城「金剛さんは何て言ってたんだ？」

天馬「えーつと・・・」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

金剛『何とかなるネー！』

暑さ寒さも彼岸までネー！』

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

天馬「つて、言ってた。」

吹雪「意味わかんないよ〜！」

夕立「それで、睦月ちゃんの艦隊は

どんな感じッポイ？」

睦月「うん、睦月の艦隊には最上さんがいて・・・」

天馬「最上さん？」

ああ、あの男の子口調の!」

睦月「そうそう!」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

最上『僕で良ければ、いつでも教えるよ?』

睦月『はい!』

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

吹雪「いいないいな!

いいなあ〜……」

睦月「夕立ちゃんは?」

夕立「夕立は那賀ちゃんと一緒だったツポクて……」





リズムに乗って♪

那賀・夕立『ホイホイホイホイッ!』



吹雪「いいないいな!

いいなあ〜……」

睦月「楽しそうだね。」

天馬「剣城はどうだったの?」

剣城「俺は夕張さんとまた一緒だった。

同時に、夕張さんの開発アシスタントに  
任命されたんだ。」



夕張 『今後の戦いに備えて、新装備の開発をするから  
劍城君も手伝ってね。』

劍城 『はい!』

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

天馬 「また同じ艦隊になれてよかったね。」

劍城 「ああ。」

吹雪 「はあく…」

それに比べて私は……」



く甘味処 間宮く

その後、天馬と吹雪は間宮の店にいた。

間宮「あら、いつもの二人は？」

吹雪「新しい艦隊の親睦会があるとかで・・・」

間宮「そっか、まあ元気出しなさい。」

吹雪が間宮と話をしていると、二人のお客がやって来た。

ガラガラガラ

間宮「いらつしやい！」

天馬「あ、神童先輩！」

吹雪「赤城先輩！」

赤城と神童も二人に気づき、二人と同じ席に座った。

赤城「間宮さん、いつものをお願いします。」

間宮「はい。」

天馬「神童先輩、もしかして赤城さんと同じ艦隊に？」

神童「ああ、そう言う天馬は吹雪さんと

また同じ艦隊か？」

赤城「そういえば聞きましたよ。」

お二人とも、加賀さんと同じ艦隊に

なっただすって？」

吹雪「は、はい！」

そうなんです！」

正規空母の先輩と一緒に艦隊なんて

私、光栄です！」

赤城「大丈夫？」

加賀さん、五航戦の子と一緒になっ

侵害だとか言っていましたけど……」

吹雪「あはは……」

実は、その……」

吹雪は第五遊撃部隊での出来事を話した。

赤城「そうですか、そんなことが……」

吹雪「私、あの艦隊が上手くいくなんて

とても思えないんです……」

司令官は、どうしてあんな編成に

したんだろう？」

赤城「私にもわからないけど、恐らく

”FS作戦”が影響してるんじゃないかと。」

天馬「FS作戦？」

神童「この前開始された、反攻作戦の正式名だ。

南方に存在が確認されている2つの巨大な

深海棲艦の棲地。

その2つを結ぶ海路を分断し無力化する。

そうすれば、今まで謎に包まれていた

深海棲艦が何処から現れ何を目的としているか

わかるかもしれないらしい。」

赤城「ただ、作戦を成功させるためには

私達自身の練度を高め、あらゆる状況に

対応できる力を身に付けなくてはならない。」

吹雪「だから、司令官は・・・」

赤城「あくまで推測ですけど、提供が何の意図も無しに

艦隊を編成するはずが無いと思うんです。

きつと、何か意味があるのよ。」

神童「それに吹雪さん、あなたはあの艦隊が

上手くいくとは思えないようだが

それは間違いですよ。」

吹雪「そうなの、神童君?」

神童「ええ、そのことは天馬が誰よりも

よく分かっています。」

天馬「俺と神童さんと剣城は以前、少年サッカー  
世界大会の日本代表になったことがあります。  
あの時のチームは、みんなサッカー未経験で  
得意な分野もバラバラで、しかもある出来事が  
引き金となって、チームでの連携が出来なく  
なってしまったんです・・・」

吹雪「ある出来事？」

天馬「試合の直前、あるチームメートの財布が  
無くなるという事件がありました。」

そして、財布を無くしたチームメートは  
メンバーの一人に疑いをかけたんです。」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

真名部『盗むなんてことするの、君しか

いないんですよね、瞬木君。』

——そして俺達は、その彼に犯罪歴があることを知りました。

真名部 『瞬木君は、以前盗みをして捕まった

ことがあるそうです。

だから、この中で財布を取るとしたら、

君しかないわけです。』

瞬木 『俺はやってない……』





赤城「そんなことが・・・」

天馬「でも、実際には彼の弟が盗みを働き

彼がそれを庇ったからなんです。

それからというもの、チームはバラバラになつてしまつて、彼は他のチームメートに

パスを貰えず、フォローしてもらえず、

一人フィールドに取り残されて

しまつたんです・・・」

吹雪「そんな・・・」

神童「ですが、その時の天馬の言葉で、

チームは変わりました。

” 何故、彼にパスを出さない。

同じフィールドにいる以上、仲間じゃないか。

仲間のことが信用できなくてどうするんだ。”

この天馬の言葉で、メンバーは彼に

パスを繋ぎ、無事に試合に勝つことが  
出来ました。」

天馬「相手にどんな事情があったとしても、

チームとして大切なのは信じあうこと。

第五遊撃部隊だって今はあんな感じですけど

お互いを理解することが出来れば、

艦隊としてきつと上手くいくと思うんです。」

吹雪「そっか・・・

そうだね!」

赤城「ところで、財布の件は

結局どうなったんですか?」

神童「メンバーから聞いた話だと、ジャージの

ポケットに入ってたそうです。

それがメンバーの前で公になり、後で

攻め立てられたそうですよ。」

赤城「あらら・・・」

吹雪「私、艦隊に戻ります!

天馬君のお陰で、やる気出て来ました！」

赤城「そう、それは良かった。」

吹雪「天馬君、一緒に行こ！」

天馬「はい！」

天馬と吹雪は、同時に席を立つと店を後にし大急ぎで第五遊撃部隊の部屋へと向かった。

赤城「彼、凄い人ですね。」

誰よりも他人のことを気にかけて、

そしてやる気を奮い立たせる。」

神童「それが、”松風 天馬”という男ですよ。」



金剛「オウ、ブッキーにマツツー♪

フラッグシップを決めているところデース！」

吹雪「フラッグ・・・旗艦ですか？」

瑞鶴「そうなの。」

この艦隊で一番旗艦に向いているのは誰か。

あなた達はどう思う？」

天馬・吹雪「えっ？」

えーつと・・・」

今のメンバーの状態から察するに、これは・・・

天馬・吹雪「あはは、難しいですね・・・」

瑞鶴「なによそれ？」

金剛「やはり、戦艦であるミーが勤めますネー！」

瑞鶴「英国帰りの帰国子女が、いきなり勤まるの？」

加賀「私は辞退します。」

みんなのレベルに合わせた指示を出す

自信がないです。」

瑞鶴 「わかったわ。」

じゃあ、私ができるわ！」

加賀 「それは反対。」

瑞鶴 「どうしてよ!？」

大井 「戦艦と空母の先輩達がちゃんとしないと、

安心して戦えないわ！」

北上さんに何かあったらどうするんです?」

瑞鶴 「軽巡だからって、私達に任せてちゃダメよ。」

大井 「重雷装巡洋艦」です！」

そんなことも分からないの?

”甲板胸”が。」

瑞鶴 「(カチン)か、甲板……

今なんて?」

大井 「あなたの様な未発達な艦に旗艦は勤まらないわ。」

私がやった方がましよ。」

北上「えっ、大井ツチが？」

嫌だなあ、旗艦だと標的にされるのも

多いだろうし……」

大井「北上さん！」

私のことをそこまで……

いいわ、ならこの甲板胸にやらせましょう！」

瑞鶴「待てい!!」

今なんて言った!？」

ホントに未発達だ、色んな意味で……

天馬「これじゃあ、旗艦が誰か決めるのは

難しいですね……」

北上「だったら、天馬君が旗艦をやるってのは

どうだろう？」

大井「確かに、彼はサッカーチームでキャプテンを

勤めてると聞いてます。」

瑞鶴 「となると、この艦隊で一番旗艦に

向いてるのは今のところ天馬ね。」

加賀 「それは同感。

それに彼は戦艦、いや宇宙戦艦です。」

天馬 「確かに俺はキャプテンですけど、

チームへの指示はゲームメーカーである

神童先輩がやっていました。

だから俺は旗艦に向いてないんじゃないかと。」

瑞鶴 「あちゃー、ダメか……」

金剛 「わかったネー!」

じゃあ試しに一人ずつ旗艦をやってみて

MVPがフラッグシップになるデース!」

吹雪 「えっ?」

瑞鶴 「それで良いんじゃない?」

一航戦と五航戦、どれほどの差があるか

どうかも分かるだろうし。」



吹雪「ええっ!？」

加賀「そうね、今後の為にも自分の實力は知っておいた方がいい。」

吹雪「ええっ!？」

金剛「では決まりですネー？

ブッキー・マツツー、準備を！」

天馬「了解!!」

吹雪「ええええええっ!？」

---

く地下ドックく

一同はドックへとやって来た。

金剛「さあ、ではまず私からですネー？

行くですヨー! follow me!!」

先ず最初に、金剛が試しに旗艦を勤めたが・・・

ドカーン!

失敗・・・

---

く入渠ドックく

テスト後、天馬以外の6人は入渠ドックで傷を癒していた。

中はドックと言うより銭湯と言った方がいいだろう。天馬は6人が出るまで、扉の向こうで待っている。

金剛「失敗したですネ〜……」

加賀「作戦が強引過ぎます。」

北上「大井ツチ、大丈夫？」

大井「ううう……」

瑞鶴「まったく、だから言ったじゃない……」

次は私がやるわ！」

その後、今度は瑞鶴が旗艦で試してみた。  
が……

ドカーン!!

これも失敗・・・

瑞鶴 「はあく……」

北上 「結果は同じだったね……」

瑞鶴 「アンタが指示に従わないから

こうなったのよ！」

加賀 「明らかに間違った指示に

従うわけにはいかない。」

瑞鶴 「ほくう……」

加賀 「やはり五航戦の子なんか

任せておいたのが間違い……私がやる。」

が・・・

ドーン！

失敗・・・

---

加賀「やっぱり、このレベルに合わせるのは

難しかったようね。」

瑞鶴「緒戦でいきなり中破したのは何処の誰よ？」

加賀「ムッ」

その後、大井と北上も旗艦をやってみたが・・・

バーン!

ズドーン!

この二人も失敗に終わった・・・

北上「どうして上手く行かなかったんだろう?」

金剛「指示がナツフィングでしたネー!」

大井「私と北上さんは完璧だったはずなのに!」

加賀「北上中心の輪形陣に、いったい何の意味が

あったのでしょうか?」

吹雪「はあく……!」

誰も上手くいかず、吹雪は一人溜め息をつく。

すると、加賀が手拭いで何かを作っているのが目に入った。

吹雪「可愛い！」

それ、ウサギですか？」

加賀「ええ、赤城さんに教わったの。」

入渠している時間が長いことが多いから。  
いる？」

吹雪「いいんですか？」

ありがとうございます！」

吹雪は加賀から手拭いウサギを貰った。  
すると・・・

コンツコンツ

天馬『あのー、まだ掛かりますか？』

流石に傷口がヒリヒリしてきました・・・』

瑞鶴「アンタの場合、消毒液と絆創膏があれば

すぐ直るでしょ？」

金剛「それより、今度はマツツーが旗艦を

やってみたらどうですネー？」

天馬『えっ、俺がですか？』

加賀「確かに、ダメ元でも一度やってみた方が

いいと思います。」

天馬『・・・わかりました、やってみます！』

この後、天馬が旗艦でのテストをやったが……

ドン！

失敗・・・



だが爆発の大きさは7人の中で最小だった。

〔第五遊撃部隊 寝室A〕

その後、一同は寝室に集まったが  
皆、表情は暗かった。

天馬「やつぱり、俺でもダメでした・・・」

瑞鶴「こうなったら、提督に話してくる。

こんな状態で本格的な反攻作戦になったら、  
他の艦隊の足を引っ張るだけよ。

編成を変えてもらうしか無いわ。」

金剛「フアニーな艦隊ですけどネ・・・」

瑞鶴「フアニーかどうかじゃないでしょ？」

瑞鶴 「そもそも、構成されているメンバーのバランスも悪いです。

編成の再編成を提督に進言した方が  
いいと思います。」

大井 「賛成です。」

吹雪 「ちよつと待ってください!」

瑞鶴 「何よ、反対なの?」

吹雪 「反対というか・・・

でも、せつかく新しい艦隊になった

ばかりなのに・・・」

瑞鶴 「だからこそ早い方がいいのよ。

どうしたって解り合えない関係というのは  
存在するの。

そんな者同士が一緒にいたって、互いに

辛いだけでしょ?」

吹雪 「でも・・・」

天馬「俺は吹雪さんに賛成です。」

瑞鶴「天馬？」

天馬「俺、この艦隊で頑張りたいんです！」

始まる前から諦めるなんて、絶対に嫌です！」

瑞鶴「……。」

天馬の言葉に、口を閉ざす瑞鶴。  
すると……

『ウウウウウウウウウウウ……』

鎮守府中にサイレンが鳴り渡る。

大淀『偵察機より入電！』

鎮守府近海に敵深海棲艦、雷巡子級を

中心とする艦隊を発見！

鎮守府目指して北上中です！』

長門『第五遊撃部隊は直ちに出撃し、

これを駆逐せよ!』

天馬「皆さん、急ぎましょう!」

天馬の掛け声で、第五遊撃部隊は地下ドックへと向かい、そして艀装を装備し、深海棲艦のいる海域へと向かった。

---

く 鎮守府近海く

金剛「エネミー、何処ですか?」

瑞鶴「雷巡数隻って言ってたわよね?

楽勝じゃないの!」

大井「北上さん、一気に片付けて来ましょう!」

北上「うん!」

大井と北上は、瑞鶴達を追いこし先行していく。

瑞鶴「待つてよ、私も行く！」

瑞鶴も後を追おうとするが・・・

吹雪「待つてください！」

3人は吹雪に呼び止められた。

吹雪「敵の戦力に関わらず艦隊として規律を持つて

戦うことが大切だって、いつも演習で

教わってきませんでしたか？」

大井「じゃあ、どうしろというの？」

吹雪「瑞鶴さんと加賀さんは、先ず索敵を。」

瑞鶴「索敵？」

たった数隻の敵に？」

加賀「私まで？」

吹雪「だからこそ、ちゃんとした方が

良いと思うんです！」

加賀「・・・わかったわ。」

瑞鶴と加賀は矢を放ち、吹雪の指示通り

索敵機を飛ばす。

吹雪「大井さんと北上さんは、左舷雷撃戦の用意を！」

北上「そうだね、わかった！」

大井「北上さん！」

でも、誰が前に出るの？」

吹雪「私が行きます！」

一同「えっ？」

吹雪「私が引き付けますから、みんなで攻撃を！」

瑞鶴「吹雪・・・」

・・・わかったわわ！」

吹雪が指示を出した後、加賀の索敵機から通信が入った。

加賀「索敵機から入電、”敵艦見ゆ!”」

吹雪「行きます！」

敵艦発見の報告と同時に、吹雪は勢いよく前へ出た。

しばらく走ると前方に雷巡千級と駆逐艦2隻が現れた。

吹雪「見えた・・・」

千級も吹雪を発見すると、砲弾と魚雷を撃ち吹雪を攻撃した。

吹雪は砲撃を避けてなおも潜行するが、

千級の放った魚雷は海中で爆発し高波を起こした。

ザバーン！

吹雪「うわあああ！」

吹雪は海水を被りながらも倒れず持ちこたえる。

だが、すぐ目の前には雷巡千級が吹雪に再び

砲撃を仕掛けようとしていた。

ダダダダダダダダ・・・!!

だが、横から加賀と瑞鶴の艦載機達が阻止する。

その直後、艦載機の一機が千級に向け魚雷を発射。

魚雷は千級に命中し水しぶきをあげる。

千級は怯み、その隙を突いて天馬と金剛が砲弾を撃つ。



天馬「撃ち方始め！」

金剛「撃ちます！ファイヤー！！」

ズドーン！

しかし、放った砲弾は全てかわされてしまう。

だが千級は自分の左隣に大井と北上がいることに気がついていない。

北上「大井ツチ！」

大井「北上さん！」

ズドドン！！

北上と大井は魚雷数発を千級に向けて同時に放つ。

千級は魚雷が接近するのに気づくが既に遅し。

魚雷は全て命中し千級は轟沈した。

ドカーン!

大井・北上「やったく!」

この時、吹雪は少し驚いていた。

まさか自分の指示で艦隊がここまで上手く

機能するとは思ってもいなかったからだろう。

だが、安心するのはまだ早かった。

天馬「レーダーに艦あり!

9時の方向、距離3km!

一同「!!」

天馬の警告通り、9時の方向から重巡り級1隻

駆逐口級3隻、計4隻の深海棲艦が接近してくる。

吹雪「どうしよう・・・」

こんなこと予想外です・・・」

金剛「ど、どうするデース・・・」

予想外の出来事に戸惑う一同。  
すると・・・

天馬「全艦、単縦陣！

砲雷撃戦用意！」

瑞鶴「ちよ、なんでアンタが仕切るのよ!?!」

天馬「今だけ俺に指示を任せて下さい！

大丈夫、絶対に勝ちます！」

瑞鶴「・・・わかったわよ！」

加賀「配置は？」

天馬「俺を中心にして、前方から加賀さんと瑞鶴さん

吹雪さん、後方から金剛さんと北上さん

大井さんの順番でお願いします！」

一同は天馬の指示通りに並ぶ。

その直後、敵艦隊は重巡り級と駆逐口級集団の

二手に別れ、口級集団は左舷から潜行し

り級は後方から回り込んでくる。

天馬「加賀さんと瑞鶴さんは、九九式艦上爆撃機で

左舷の潜行する駆逐口級を狙ってください!

金剛さんは後方から回り込んでくる重巡り級を

叩いてください!

吹雪さん達は魚雷の発射準備をして

しばし待機を!

北上「わかった!」

加賀「目標捕捉!」

瑞鶴「発艦準備完了!」

金剛「ターゲット、ロックオン!」

天馬「攻撃開始！」

パシユーン！

加賀と瑞鶴は天馬の指示通り、左舷から潜行してくる口級目掛け1本ずつ矢を放つ。

矢は炎を纏い、九九式艦上爆撃機へと姿を変えた。

爆撃機は口級の真上に到達すると、上空から爆弾を投下。

ドカーン！

爆弾は口級3隻中2隻に命中し、口級2隻は轟沈した。

瑞鶴「よしっ！」

金剛「撃ちます！ファイヤー!!」

ズドン!

金剛は後方から回り込んでくる重巡り級に向けて

三式弾を撃つ。

三式弾は見事に命中し、り級は轟沈した。

だが、今度は生き残った口級1隻が多数の魚雷を  
発射してきた。

吹雪「左舷、魚雷接近!」

天馬「迎撃開始!

魚雷発射!」

大井・北上・吹雪「魚雷発射!」

ズドン!!

大井・北上・吹雪は、接近してくる敵魚雷に向け  
一斉に魚雷を発射。

魚雷は命中し水中で爆発、巨大な水しぶきを起こす。水しぶきは天馬達とリ級の間に厚い壁を作りだした。

天馬「今だ！

撃ち方始め！」

バシューーン！

天馬は水しぶきの中に向けシヨックカノンを撃つ。

シヨックカノンは水しぶき中を突き抜け、

向こう側のリ級に命中。

リ級は爆発し、轟沈した。

天馬「よっしゃあ！」

吹雪「天馬君、凄い……」

〈第五遊撃部隊 寝室A〉

その後、一同は部屋でもう一度誰が旗艦をやるか話し合い、結果吹雪が旗艦をやることになった。

吹雪「き、旗艦!？」

天馬「ええ、吹雪さんに決定です。」

吹雪「ちよつと待って！」

聞いたことないですよ！

駆逐艦の旗艦なんて・・・」

瑞鶴「私も思ったんだけどさ。」

加賀「空母・雷巡・戦艦が2杯ずつに駆逐艦が1杯、

本来なら絶対にありえない編成。」

北上「ならむしろ、旗艦もあり得ない方が

いいんじゃないって話になったの。」



吹雪「で、でも……」

金剛「ゴチャゴチャ言つてないでやってみるですネー！」

ワン・サウザンドの道もワン・ステップから

デース！」

吹雪「訳分らないですけど……」。

だったら私は、天馬君を現場指揮艦に

指令します！」

天馬「現場指揮艦？」

吹雪「今日みたいに予想外の出来事に遭遇したとき

指示を出す艦だよ！」

私が作ったの！」

瑞鶴「確かに、あんな状況で的確かつ迅速に

指示を出せるなんて、今考えたら凄いわね。」

天馬「でも、俺に勤まるんでしょうか？」

そんな重大な役……」。

吹雪「天馬君なら出来るよ！」

だって、天馬君はキャプテンだったんでしょ？」



金剛『ブー!!』

吹雪「……よかつたんだよね？」

すると……

天馬「吹雪さん、お先でした。」

瑞鶴「いやーサツパリしたわねえ。」

吹雪「天馬君、瑞鶴さん。」

瑞鶴「ん？」

瑞鶴と天馬は吹雪の手拭いウサギが目に入った。

天馬「なんですか、それ？」

瑞鶴「可愛いわね。」

作り方教えてくれない？」

吹雪「じゃあ加賀さんに聞いてください。」

これ、加賀さんが作つたんです。」

瑞鶴「えっ?」

そんな加賀はベッドに腰掛けてアイスを食べている。

吹雪「教えてもらってもいいですか?」

加賀「別にいいけど。」

瑞鶴「ええっ?」

吹雪「行きましよう!」

吹雪は加賀の隣にそつと腰かける。

吹雪「よいしょ。」

加賀「狭い。」

吹雪「いいんです。」

瑞鶴さんと天馬君も早く。」

天馬「わかりました。」

瑞鶴「ちよつと、待ってよお!!」

こうして、第五遊撃部隊は一日を終えた。

# Episode 11 / サッカーやりましたよ！

〈鎮守府／港〉

ある日の早朝、鎮守府の港に一人の少女がいた。

その少女は、以前とある作戦で轟沈し、

消息をたつたと思われた存在……

「……行きましょう。」

少女は港から、鎮守府の中に進む。

そして、その少女を近くの建物の物陰から

密かに見張る銀髪の少女がいた……。

「アノ艦娘、モシカシテ・・・」



く 鎮守府／グラウンドく

その日の午後、グラウンドにはサッカーの練習をする3人のサッカー少年と11人の艦娘が

7対7の紅白戦を行っていた。  
メンバーは・・・

赤組 ★天馬

神童

吹雪

睦月

夕立

瑞鶴

GK 長門

白組 ★剣城

金剛

霧島

赤城

加賀

島風

GK 翔鶴

神童「吹雪さん、天馬にパスを！」

吹雪「天馬君！」



吹雪「はい！」

神童の指示で、吹雪は天馬にパスを出す。

天馬はボールを受け取り、ドリブルで上がっていく。

赤城「行かせません！」

赤城は前に立ちただかりブロックしようとするが

天馬はフェイントで鮮やかにかわす。

天馬「瑞鶴さん！」

瑞鶴「オツケー！」

天馬は瑞鶴に向けてパスを出す。

加賀「行かせません。」

だが、加賀にパスカットされてしまった。  
加賀はそのままゴール前まで上がっていた剣城に向け  
ロングパスを出す。

剣城「いくぞ！」

でえええりやあ！」

バシユーン！

剣城は長門が守るゴールに向かって

ダイレクトシュートを打つ。

ボールは長門目掛けて一直線に突き進む。

長門「止める！」

長門は地面から鋼鉄の鎖を引っ張り出し、  
さらにその先から巨大な錨を出現させる。

長門「《ハイドロアンカー》!!」

錨はシュートを豪快に打ち上げる。

ボールはその後落下し、長門が見事にキャッチした。

天馬「ナイスです長門さん！」

長門「行けっ！」

長門は睦月に向かってボールを投げる。

睦月はボールを受けとると夕立にパスし、

夕立は瑞鶴に、瑞鶴は翔鶴に、翔鶴は天馬にと次々にパスを繋げていく。

天馬「吹雪さん！」

そして天馬は吹雪にパスを出し、吹雪は

ボールを受けとり必殺シュートを放つ。

吹雪「《エターナルブリザード》!!」

吹雪の必殺シュートは翔鶴が守るゴールへ突き進む。

翔鶴は右手から花吹雪を発生させ、吹雪のシュートを上空へと舞い上げる。

翔鶴「《はなぶき》!」

だが、翔鶴のはなぶきは吹雪の

エターナルブリザードの威力に負け、

シュートは見事ゴールに入った。

吹雪「やったー!」

天馬「吹雪さん、ナイスシュートです!」

く甘味処 間宮く

数分後、一同は練習を終えて間宮の店にいた。

天馬「みんなどんどん上手くなってますね。」

神童「ああ。」

吹雪「初めは私達四人だけでサッカーをしたのに、

いつの間にかこんなにメンバーが

増えてたなんて。」

長門「上手くいけば、サッカーで得た技術を

実戦で生かせるかもしれないな。」

島風「でもく、最近どうも面白味が

無い気がするく……」

加賀「確かに、毎日毎日練習ばかり。

試合と言っても7対7の紅白戦のみ。」

金剛「1度でいいから、本格的なゲームを

してみたいデース。」

霧島「そうですね。」

夕立「でも、この鎮守府の残りの艦娘達で

チームを作るのは難しいッポイ。」

睦月「それに、この鎮守府でサッカーをやってるのは

私達くらいだし……」

かれこれ頭を悩ませる一同。

すると……

天馬「試合の件なら、俺が何とかしますよ。」

一同「えっ?」

劍城と神童以外の全員が声をあげる。

瑞鶴「何とかしますっつて?」

天馬「宛があるんです。

ちよつと向こうに出掛けてきます。」

天馬は店を後にし灯台へと向かう。

灯台に到着すると灯台の扉から稲妻町の

木枯らし荘へ出て、そして雷門中を目指す。

---

く雷門中学校／サッカー棟／グラウンドく

天馬はサッカー棟のグラウンドへとやって来た。

グラウンドでは雷門中サッカー部が練習の合間の休憩をとっていた。

すると、天馬に気づいたのか信助が天馬を呼ぶ。

(ちなみにメンバー全員、鎮守府や艦娘について

天馬達から既に聞いている。

信助「おーい天馬！」

天馬「やあ信助！」

皆さん、お久しぶりです！」

三国「おおキャプテン！」

一同は天馬に気づき、天馬は一同の近くまで行った。

霧野「よお天馬。

元気にしてたか？」

浜野「ちゅーかキャプテン、いくら鎮守府が

忙しいからって練習サボっちゃだめっしょ？」

天馬「大丈夫です、ちゃんと毎日練習は欠かさず

やってますよ！」

錦「それで、今日は何の用事で来たぜよ？」

天馬「はい、実は練習試合の申込みをしたくて。」



倉間 「練習試合？」

天馬 「向こうの世界でサッカーチームを

作ったんですけど、まだ試合経験が

ないチームでして・・・」

青山 「それで俺たちに練習試合をお願いしよう

ってことか？」

速水 「向こうの世界のサッカーチームとなると

ほとんどのメンバーは女性ですよ？

僕たち女性との試合は経験がありません。

ちゃんとプレーできるかも怪しいですよ。」

狩屋 「いいじゃないすか。

ちよつとした気分転換になると思いますよ。」

一乃 「そうだな。」

車田 「それに、天馬達が指導してるんだろ？

相当強いんだろうな。」

三国 「よし、決まりだな。

試合は明日、このサッカー棟のグラウンドで

午後2時から行おう。

天馬、明日は遅刻するなよ?」

天馬「はい!」

↓ 鎮守府 / グラウンド ↓

天馬「・・・というわけで、明日の午後2時

雷門中サッカー部との試合を行います!」

赤城「明日の午後2時ですか。」

天馬「場所は雷門中学校サッカー棟の

グラウンドです。」

翔鶴「天馬君達の世界に行くのですか?」

楽しみですね。」

瑞鶴「私達が勝ったら、稲妻町の観光案内でも

お願いしよつかな。」

吹雪「とりあえず、今日は明日に備えて

しつかり休みましよう。」

長門「そうだな。

明日の正午、灯台の前で集合だ。」



く港／灯台前く

次の日の正午、一同は灯台の扉の前に集まっていた。

そこにはマネージャーとして足柄と羽黒の姿も。

吹雪「いよいよ天馬君達の世界に行けるんだ・・・」

睦月「楽しみだね。」

足柄「ここんとこ合コンで失敗続きだけど、

これを期に新たな出会いを見つけて  
みようかしら。」

天馬「それじゃあ、行きますよ！」

天馬は灯台の扉を開ける。

一同は開いたと同時に扉の向こうへと向かった。

---

く 稲妻町 / 木枯らし荘く

扉の先は天馬の住む木枯らし荘の庭。

吹雪達は初めて来た世界に興味深々だ。

長門「ここが、天馬達の世界か・・・」

天馬「で、これが俺の家、木枯らし荘です。」

翔鶴「ここが天馬君のお家ですか？」

瑞鶴「なんだろう、古いと言うか・・・」

赤城「ボロいと言いますか・・・」

その・・・」

「ボロいはちよつと言い過ぎかな？」

一同「ん？」

突然誰かの声がし、一同は振り向いた。

振り向いた先には買い物帰りの若い女性がいた。

瑞鶴「もしかして、天馬君のお母さん!？」

翔鶴「凄く若いですね。」

天馬「違いますよ！」

この人は秋姉。

俺の親戚のお姉さんで木枯らし荘の  
管理人さんです。」

睦月「ええっ!?

そうなの!?

夕立「すっごい美人ツポイね。」

赤城「あの、先程はボロいだなんて失礼なことを

言って申し訳ありません・・・」

秋「別に大丈夫よ。」

それよりも、もしかしてあなた達?

天馬の言ってた艦娘って人は。」

長門「はい。」

天馬達にはいつもお世話になっております。」

秋「そうですか。」

今後とも天馬を宜しくお願いします。」

天馬「秋姉、俺達練習試合があるから

そろそろ行かないと・・・」

秋「あら、ごめんなさい。」

よかつたら、後で皆さん家にいらしてください。

手作りクッキーをご馳走しますよ。」

吹雪「本当ですか!?

ありがとうございます!」

天馬「じゃあ皆さん、雷門中へ向かいましょう!」

---

〽雷門中学校〽

一同は雷門中にやって来た。

天馬「ようこそ!」

「ここが俺達の母校、雷門中です!」

睦月「うわあ、おつきい。」

夕立「なんだか、目が回ってきたツポイ…」

天馬「俺達サッカー部がいるサッカー棟は

この奥の建物の向こうです。

行きましたよ。」

「サッカー棟／グラウンド」

一同はサッカー棟の中のグラウンドへとやって来た。

グラウンドでは雷門中サッカー部が待っていた。

チームお互い初対面で、お互いに興味津々だ。

三国「おっ、来たか。」

天馬「三国先輩、お待たせしました!」

吹雪「この人達が天馬君達の雷門イレブン。」

影山「この人達が天馬君の言ってた

艦娘さん達ですか。」



錦「皆、中々の別嬪さんぜよ！」

金剛「みんな中々強そうネー！」

長門「さあ、私達も試合の準備をしよう。

すまないが更衣室を借りるぞ？」

三国「どうぞ、自由に使ってください。」

天馬「その前に、みんなにユニフォームを

配らないと。」

天馬は吹雪達フィールドプレーヤーには

赤いユニフォームとスパイクを、

長門と愛宕にはグレーのユニフォームと

スパイク、グローブを配った。

一同はユニフォームを広げると、

吹雪達のユニフォームには白で、

長門達のユニフォームには黄色で中央に大きく

『天』の文字があしらってある。

吹雪「このユニフォームは？」

天馬「俺がある友達とちよつと前に結成した

チームのユニフォームです。

チーム名は、俺がキャプテンだって理由で

”テンマーズ”って名前に。」

睦月「テンマーズ・・・」

いいんじゃない？」

長門「その名前、使わせて貰おう。」

天馬「えっ？」

いいんですか、そんな名前です？」

吹雪「まあ、正規のチーム名は後で決めるとして

今はテンマーズでいいんじゃないかな？」

瑞鶴「それに、天馬がキャプテンのチームだし

テンマーズってネーミングも面白いし。」

神童「決まりだな。」

こうして、天馬をキャプテンとした鎮守府イレブンの

チーム名は、テンマーズ（仮）に決定した。

数分後、両チームの試合の準備が整った。  
メンバーは・・・

雷門イレブン

FW：影山

倉間

MF：青山

速水

一乃

錦

DF：天城

狩屋

車田

霧野★

GK : 三国

ベンチ : 信助

浜野

マネージャー : 葵

水鳥

茜

テンマーズ

FW : 剣城

金剛

赤城

MF : 天馬★

神童

吹雪

加賀

DF : 睦月

夕立

霧島

G K：長門

ベンチ：瑞鶴

翔鶴

マネージャー：榛名

羽黒

足柄

となっている。

そして観客席には毎度お馴染みのこの人。

角馬「さあ、まもなく雷門イレブン対テンマーズの

練習試合が始まるうとしています！

実況は私、雷門サッカー部の練習試合

及びホーリロード地区予選の実況担当

”角馬 歩”がお贈りいたします！

今回、雷門イレブンは主力メンバーとなる

松風・神童・剣城が外れたため戦力は

大幅にダウンした模様！

対するテンマーズは、松風・神童・剣城の

3人を中心とし、チームメンバーは3人以外

全員女性というチーム！

女だからと侮るなかれ！

その実力や如何に！

ちなみに今回、化身とミキシトランスと

ソウルの使用は禁止となります！」

三国 「いいか！

相手が女だからといって、手を抜くなよ！

本気でぶつかっていけ！」

一同 「おう！」

天馬 「みんな！

俺達の全力を振り絞って、絶対に勝つぞー！」

一同「おー！」

観客席には他にも、雷門中学校応援団や

暁・響・雷・電・夕張の5人で構成された

鎮守府応援団、さらに雷門中学校の生徒が

大勢集まった。

雷門中応援団「フレー！フレー！ラ・イ・モン！！」

鎮守府応援団「ガンバレー！テンマーズ！」

電「なのです！」

角馬「さあ、キックオフです！」

ピー！

グラウンド全体にホイッスルの音が鳴り響く。

そして雷門からのキックオフで試合が始まった。

影山が倉間にボールを渡し、倉間と影山は

敵陣ゴールに向かって走り出す。

角馬「雷門中、倉間と影山が上がっていく!」

吹雪「行かせない!」

そこへ、吹雪がスライディングで止めに入る。

倉間は吹雪をジャンプでかわし影山にパスを出す。

倉間「影山!」

影山「はい!」

影山はボールを受け取る体制に入る。

だが天馬がパスカットでボールを奪い、そして

吹雪と共にドリブルで上がる。



角馬「松風がボールをカット！」

そしてお得意のドリブルで上がっていく！」

雷「いいわよ天馬！」

天馬「神童さん！」

神童「任せろ！」

神童は、まるで指揮者の様に手を動かし  
フィールドに光の道筋を出現させる。

神童「《神のタクト》！」

選手達は光の道筋に従い、次々にパスを  
繋いでいく。

そして、ボールはゴール前の剣城へと渡った。

角馬 「ボールは剣城へと渡った！」

剣城 「金剛さん！」

金剛 「了解ネー！」

剣城はボールを金剛へパスする。

ボールを受け取った金剛はボールにスピンをかけ  
地面に撃ち込む。

金剛 「《ゴールドファイバー》！」

ボールはドリルの様に地中を進み、

再び地面に現れると、金の塊を撒き散らしながら  
ゴールへと突き進む。

三国はゴール上に大きくジャンプし、地面に  
波動のエネルギーをぶつけ、分厚い岩壁を

ゴール前に出現させる。

三国「《フェンス・オブ・ガイア》！」

金剛の必殺シュートは三国の必殺技に弾かれ宙を舞い落下する。

そして三国がそれをキャッチした。

角馬「おっと！」

ここは三国が防いだ！

テンマーズ先制点ならず！」

金剛「シツツ！」

でも次は絶対に決めマース！」

三国「望むところだ！」

何度でも打ってこい！

絶対に止めてやるさ！」

三国はボールを思いつきり投げる。

ボールは狩屋へと渡り、狩屋は速水へとパスを出す。

速水はパスを受け取るとテンマーズのゴール目指してドリブルで上がる。

だが、途中で加賀と吹雪に前を塞がれる。

加賀「行かせません。」

吹雪「通しませんよ！」

速水「抜いてやりますよ！」

速水は腰を落とし、陸上のスタートダッシュの体制になる。

そして、二人の間を一瞬で駆け抜けた。

速水「《ゼロヨン》！」

速水は加賀達を突破すると錦にパスを出す。

錦は大胆とも言わんばかりに突っ走り、

テンマーズのデیفエンスを抜いて行く。

そして一気にゴール前に到達した。

錦「いくぜよ！」

錦は、右足に光輝く宝刀を出現させ

フィールドを切り裂く様にシュートを放つ。

錦「《伝来宝刀》！」

長門も必殺技を放ち応戦する。

長門「《ハイドロアンカー》！」

だが錦のシュートの威力に負け、シュートは

ゴールに入ってしまった。

角馬「ゴール!!」

雷門中ミッドフィールダー錦が決めたー!!

先制点は雷門イレブンだー!!」

長門「なんて威力だ…」

私の必殺技がこうもあつさりど…」

—————

雷門 1—0 テンマーズ

角馬「さあ、テンマーズのキックオフで

試合再開です!」

ピー！

笛の合図と共に、ボールは赤城から剣城に渡り  
剣城は天馬にパスを出した。

天馬「行くぞ！」

天馬は持ち前の素早いドリブルで  
雷門中のディフェンスをかわしていく。  
さらに後方から追う吹雪にバックパスで  
ボールを渡し、ゴールへと突き進む。

角馬「テンマーズ、松風と吹雪が雷門の  
ゴールへと蹴り混んでいく！」

暁「いいわよ吹雪！」

夕張「そのまま決めちゃえ！」

天馬「吹雪さん！」

吹雪「はい！」

天馬は吹雪に合図を出すと、吹雪はボールに  
気を集中させ必殺シュートを放つ。

吹雪「《エターナルブリザード》！」

さらに、天馬がシュートと並走しながら  
走っていく。

そしてそのままのスピードでジャンピング  
ボレーシュートを繰り出す。

天馬「《真・マッハウインド》！」



角馬「おっと！」

これはあの伝説の技、エターナルブリザードと松風のマツハウインドとのシュートチエインダー!!」

威力が増した天馬のシュートは、雷門のゴールへ一直線で突き進む。

三国は両腕を《X》のようにクロスさせ、赤色に輝く巨大な右手を出現させる。

三国「《真・ゴッドハンドX》！」

三国は天馬と吹雪のシュートを受け止めた。

角馬「おっと雷門、またもや三国が止めた！」

吹雪「決まらなかった…」

天馬「さすが、三国先輩だ。」

三国「二人とも、いい連携だったぞ!」

この後も、お互いのチームは点とボールを  
取り合ったが、得点は変わらず・・・

ピピィ!

角馬「ここでホイッスル!

1対0で雷門中リードのまま前半終了!

テンマーズ、後半は雷門中に

追い付けるでしょうか!?

—————

く休憩時間 テンマーズく

後半戦までの休憩中、天馬は吹雪に話をしていた。

吹雪「エターナルブリザードとマツハウインドの

合体技？」

天馬「さっきのシュートチェインの要領で

2つの技を上手く組み合わせれば

シュートチェイン時以上のパワーを

発揮できるはずなんです。」

吹雪「でも、上手くいくのかな？」

天馬「ダメ元で、1度やってみましょうよ！」

一方、長門も一人考え事をしていた。

長門「私のハイドロアンカーが破れるとは・・・

先程の技、取得できるか？」

く雷門く

車田「あいつら、意外にやるな。」

霧野「ああ、だが まだまだ だな。」

葵「天馬ったら、いつの間にあんな子達と

チームを・・・」

水鳥「おっ?

葵、もしかして?」

茜「焼きもち?」

葵「そっ、そんなんじゃないです!!」

-----

く後半戦く

角馬「さあテンマーズのキックオフで

後半戦開始です！」

ピー！

再びグラウンド内にホイッスルの音が響き渡る。

そして赤城からのキックオフで後半戦が始まった。

金剛はボールを剣城に渡し、剣城・金剛・赤城は

雷門ゴールへと蹴り混んでいく。

剣城「赤城さん！」

赤城「はい！」

剣城は赤城にパスを出す。

赤城は剣城からボールを受け取ると一気に

雷門ゴールへと走る。

雷 「いつけー赤城さん！」

だが、前方には霧野が立ちほだかる。

霧野 「行かせない。」

霧野は突然、フィールド一帯に濃い霧を発生させる。

霧野 「《ザ・ミスト》！」

赤城 「なっ!？」

赤城はあつと言う間に霧の中に飲み込まれた。

赤城 「どうしましょう、霧のせいで全く

見えません……」

霧に視界を奪われ戸惑う赤城。

すると、後方から霧野がこっそり現れ、ボールを奪い取っていった。

霧野「車田！」

車田「おう！」

霧野は車田にパスを出し、車田はボールを受け取るとゴールに向かって走り出した。

だが、前方には霧島が立ちはだかる。

霧島「艦隊の頭脳である私の実力、

見せてあげます。」

霧島はフィールドに無数の数式を出現させる。

霧島「《ダイフェンス方程式》！」

「そこです!」

霧島は数式で弾き出したルートで、車田からボールを奪い取った。

榛名「お見事です霧島!」

霧島「お姉様!」

金剛「了解ネー!」

霧島は金剛にロングパスを出す。

金剛はボールを受け取ると、吹雪にパスを出した。

金剛「ブツキー! マツツー!

決めるデース!

吹雪・天馬「はい!」



吹雪はボールに気を集中し、氷の塊へと変化させてゆく。

続いて天馬が後方からマツハウインドのスピードで向かい、ボールにジャンピングキックを叩き込む。二人のシュートはフィールドに突風を起こしながらゴールへと突き進む。

それはかつて、疾風のデイフェンダーと呼ばれたサッカー選手と、雪原のストライカーと呼ばれたサッカー選手が世界大会で編み出した連携必殺技。

吹雪・天馬「《ザ・ハリケーン》！」

三国は、前半で天馬と吹雪のシュートを止めた時と同じ技を出す。

三国「《真・ゴッドハンドX》！」

だが今度は、三国のゴッドハンドXは破られ  
ボールはゴールへと入った。

角馬「ゴール!!」

テンマーズ、雷門に追い付いたー!!」

暁型四姉妹「やったー!」

天馬・吹雪「やったー!」

三国「良い連携技だ、二人とも!」

すると・・・

ピピィ!

角馬「おっとここで両チーム選手交代!

雷門中、三国に代わって西園が、

テンマーズ、加賀に代わって瑞鶴  
金剛に代わって翔鶴が入ります！」

三国「後は任せたぞ、信助。

雷門のゴールはお前が守ってくれ。」

信助「はい！」

瑞鶴「後は任せて。」

加賀「そのつもりです。」

金剛「翔鶴、後は任せたネー。」

翔鶴「はい、絶対に勝ってみせます。」

—————

雷門 1—1 テンマーズ

角馬「さあ振り出しに戻って試合再開です！」

残り時間もあとわずか！

果たして、勝つのはどっちだあ!？」

ピー！

雷門のキックオフで試合が再開した。

倉間がドリブルで影山・錦と共に

テンマーズゴールへと上がる。

だが、前から夕立が向かってくる。

夕立「行かせないッポイ！」

夕立は右足に炎を発生させ、炎の回し蹴りでボールを奪った。

夕立「《じばしりかえん》！」

夕立はボールを奪うと神童にパスを出す。  
だが錦にボールを奪われてしまった。

錦「もういつちよ決めるぜよ！」

錦はゴールに向かって蹴り混む。

だが、前方に睦月が立ちはだかる。

睦月「行かせない！」

睦月は手のひらから甘い匂いのするピンクの煙を  
発生させる。

睦月「《グッドスマイル》！」

錦「な、なんぜよ？」

急に眠くなって・・・グウ・・・Z・・・Z・・・」

錦はその煙を嗅ぐと、たちまち寝てしまった。

睦月はボールを奪いこつそりその場を後にした。

睦月「吹雪ちゃん！」

睦月は吹雪にパスを出すのが、影山に

パスカットでボールを奪われた。

影山は自身の周りに球状のオーラを発すると

ボールと共に、異空間へと消えた。

そして異空間から強烈なシュートを放つ。

影山「《エクステンドゾーン》！」

異空間から放たれたシュートはパワーを増し物凄い勢いでテンマーズゴールへと突き進む。

長門「一か八か、試してみるか！」

長門は三国の様に両腕を《X》のようにクロスさせ、赤色に輝く巨大な右手を出現させる。

長門「《ゴッドハンドX》！」

長門は影山のシュートを見事に受け止めた。  
雷門イレブンは一同が目を丸くした。

角馬「止めたー！」

なんとテンマーズキーパー長門、

三国と同じゴッドハンドXで

ボールをガツチリキャッチー！」

信助「三国さんのゴッドハンドXを

見ただけで修得するなんて……」

三国「凄いじゃないか、あのキーパー！」

長門「いつけえええ!!」

長門はペナルティーエリアからボールを投げる。  
ボールは睦月に渡り、さらに瑞鶴へと渡った。

瑞鶴「このボールは、私が翔鶴姉に届ける！」

瑞鶴はセンターサークルから、まるで古代兵器の  
バリスタのごとく力を貯めて、矢のように  
ボールを放った。

瑞鶴「《バリスタショット》！」

瑞鶴のシュートは前線の翔鶴の元へと届く。



翔鶴「いきます。

いつもの大人しい私だとは思わないで  
くださいね！」

翔鶴の表情がいつもの優しい笑みから  
真剣な顔へと変わる。

赤城「しよ、翔鶴さん？」

翔鶴「五航戦翔鶴、参ります！」

翔鶴は瑞鶴のシユートを真上に強く蹴りあげる。

翔鶴「赤城さん、ジャンプです！」

赤城「は、はい！」

赤城はジャンプすると、翔鶴が蹴り上げたボールを  
今度はヘディングで急速落下させる。

そして翔鶴がそのボールを雷門ゴールに向けて  
思いきり蹴り混んだ。

翔鶴・赤城「《ツインブースト》！」

二人のシュートは信助が守るゴールへ突き進む。

信助「絶対に止める！」

信助は一瞬でゴール前から一瞬でコーナへ移動し  
再びゴールへと走る。

そしてボールへ真横からジャンピングパンチを  
叩き込む。

信助「《ぶつとびパンチ》！」

信助のぶつとびパンチはボールに見事命中したが

勢いに負け信助は弾き返された。  
だが翔鶴と赤城のシュートも上に弾かれ  
ゴールの向こうへとそれていった。

角馬「おつとキーパー西園、翔鶴と赤城のシュートを

何とか防いだ！

テンマーズ得点ならず！」

ピッ！ピッ！ピー！

角馬「ここで試合終了！！

なんと両チーム同点！

決着はつかず！」

天馬「同点か・・・

でも、いい試合でしたね。」

神童「だが、中々いい試合だったんじゃないか？」

吹雪「うん！」

三国「しかし、俺のゴッドハンドXを見ただけで

取得するなんてな。」

霧野「あの艦娘とか言う連中、思ってた以上に

強かったですね。」

倉間「次に会ったときは、それこそ勝ちたいな。」

その後、雷門とテンマーズのメンバー全員

お互いに握手を交わし、テンマーズはサッカー棟を  
後にし、木枯らし荘へと向かった。

—————

く木枯らし荘 食堂く

木枯らし荘に着いたテンマーズ一同は、秋の特製クッキーをご馳走になっていた。

天馬「どうです？

秋姉の特製クッキーは。」

吹雪「美味しいです！」

秋「よかった。

まだまだあるから、遠慮しないでどんどん

食べてね。」

長門「天馬はこのアパートに住んでいるのか？」

天馬「ええ。

俺の親、今は沖縄に単身赴任中で、

秋姉が代わりに面倒見てくれてるんです。」

睦月「お父さんやお母さんに会えなくて

寂しくない？」

天馬「そりゃ寂しくないって言えば、嘘になります。

でも、今の俺には沢山の仲間がいます。

だから平気です。」

秋「まあ中学校に上がるまでは、本当に

一人ぼっちだったけどね・・・」

吹雪「そうなんだ・・・」

天馬「ちなみに言うと、小学校3年のときから

葵がいてくれたけど。」

夕立「天馬君は葵ちゃんのこと好きッポイ?」

天馬「えっ?」

うん::

好きって言うか何て言うか、その・・・

頼りにはしてますよ。」

足柄「いいこと天馬?」

人間、恋愛こそが全てなの。

恋愛がその先の未来を左右するのよ。」

天馬「そうなんですか? 足柄さん。」

足柄 「そうよ！」

だから早いところ彼女みつげなさい！

じゃないと今の私みたいになるわよ！」

天馬 「は、はい・・・」

これを聞いて、その場にいた艦娘達は心の中で「気をつけよう」と呟いていた。

秋 「ところで、練習試合はどうだったの？」

天馬 「それが凄かったんだよ！」

長門さんなんか三国先輩の

ゴツドハンドXを・・・」

その後しばらく、一同は練習試合の話で盛り上がった。





カンツ　コンツコロコロコロ・・・

睦月・劍城「っ!？」

突然、風もないのに灯台の後ろから空き缶が転がってきた。

劍城は慌てて立ち上がり呼び掛ける。

劍城「誰かいるのか？

いるなら出てこい！」

呼び掛けに答える様に、灯台の裏から一人の少女が現れた。

二人は、その少女を見て自分の目を疑った。

何故なら彼女は、その場にいないはずだからだ。

睦月 「あ、あなた……」  
劍城 「あ、あんたは……」

睦月・劍城「き、如月ちゃん(さん)!!?」

## Episode 12 / 接近する二人

ある日、天馬達第五遊撃部隊は鎮守府である敵と交戦していた。

だが、その場には宇宙戦艦ヤマトの艦装を身につけた天馬しかおらず、辺りには全壊した建物、

吹雪をはじめとする仲間達の遺体があつた・・・

天馬「みんな・・・」

天馬の目の前には、全身から赤黒いオーラを放つ

謎の深海棲艦がいた。

天馬「くっ！」

謎の深海棲艦は右手の平を前に出すと、手のひらに

エネルギーを集中させ、まるで血のように赤い光線を放った。

天馬は艦首の艀装を正面で合体させ、深海棲艦に向けて波動砲を放った。

天馬「いっけえええ！」

バツシユウウウウウウウウ!!

だが、天馬の波動砲は敵の光線に打ち消され、光線は波動砲と艀装、天馬の腹部を貫通した。

天馬「そんな・・・」

天馬の身体は腹部から徐々にヒビが入り、  
そして・・・

ガッシャーン

「うわああああああああ!!」

—————

〈第五遊撃部隊 寝室A〉

ガバツ!

天馬「うわあ!

ハア、ハア……」

天馬は目を覚まし、布団から飛び起きた。

辺りを見ると、吹雪達が心配そうに天馬を見ていた。

天馬「皆さん、おはようございます。」

吹雪「天馬君、大丈夫？」

瑞鶴「なんか、結構驚かれてたみたいだったけど・・・

どうしたの？」

天馬「ええ、ちよつと変な夢を見ていたもので・・・」

加賀「変な夢？」

金剛「どんな夢ですか？」

天馬「今までの敵とは比べ物にならないくらい、

強い深海棲艦に、鎮守府を破壊された

夢でした。」

大井「鎮守府を破壊されたって、気味悪いこと

言わないでよ。」

北上「まあ夢なら忘れちゃいなよ。

現実のことじゃないんだしさ。」

天馬「・・・そっか、そうですね。」

すると突然、部屋の扉が勢いよく開き  
夕立がやって来た。

夕立「吹雪ちゃん！」

吹雪「夕立ちゃん、どうしたの？」

夕立「今すぐ教室に来て！」

如月ちゃんが帰ってきたツポイ！」

天馬「なんだって!？」

吹雪「如月ちゃんが!？」

—————

く 駆逐級 く

一同は急いで駆逐級の教室に向かった。  
教室に入ってみると、駆逐級の生徒達と



夕張達 元第四水雷戦隊のメンバーが群がっていた。

天馬「皆さん！」

島風「二人ともおつそーい!!」

吹雪「あの、如月ちゃんが帰ってきたって

聞いて来たんですけど・・・」

暁「ここにいるわよ。」

暁がその場から退くと、そこには見覚えのある

ゆるやかなウェーブのかかった栗色のロングヘアに

ピンクの玉に三枚の羽根飾りが付いたような

髪飾りを付け、トロつとした紫の落ち着いた瞳をした

艦娘の姿があった。

第五遊撃部隊一同はその場で目を疑った。

天馬「如月さん!?!」

吹雪「うそ!?!」

如月「やつほー、吹雪ちゃんに天馬君。」

そこにいたのは、紛れもなく如月だったからだ。

天馬「で、でもどうして・・・」

劍城「昨日の夜、俺と睦月さんが灯台近くで

如月さんを発見したんだ。」

睦月「初めは私たちも驚いたよ。」

だって、もう二度と会えないと思ってた

如月ちゃんに、もう一度会えたんだから。」

如月「皆さん、ご心配をおかけして

申し訳ございません。」

北上「でもさ、どうして無事だったの？」

大井「そうよ。」

この前のW島攻略作戦のとき、敵艦載機の

攻撃で轟沈したって聞いたけど。」

如月「ええ、確かに私はあの時の攻撃で轟沈して

しまいました。

ですが沈んでいく途中、海流に飲み込まれて  
気が付けば何処かの無人島に漂流していました。

幸いにも羅針盤とエンジンは無事だったので

怪我が治るのを待って、それから鎮守府に

帰ってきた、ということですよ。」

吹雪「そうだったんだ。」

夕張「ま、結果良ければ全て良し！」

これからも一緒に頑張っていきましょう！」

如月「はい！」

夕張「よしっ！」

じゃあ早速、演習に行きますか！」

一同は夕張を先頭に演習場へと向かった。

第五遊撃部隊と剣城・神童は遅れながらも

後に続いた。

く 演習場く

数分後、一同は演習場で演習を受けていた。

今回は敵艦隊の攻撃を避けつつ敵旗艦にダメージを与えろというのがテーマだ。

ちなみに敵艦隊役は大井・北上・加賀・瑞鶴・夕張が勤めることになり、敵旗艦には的を使用することになった。

利根 「次、天馬！」

天馬 「はい！」

お願いします！」

天馬は推進機をふかし勢いよく的に向かって突き進む。

加賀と瑞鶴は演習用の艦載機を放ち上空から、

大井と北上と夕張は魚雷と砲撃で海上から

天馬を攻撃する。

ババババババババツ!!

天馬「くっ！」

天馬は銃弾の雨を掻い潜り、魚雷と砲撃を避けながら  
標的に向かって突き進む。

だが・・・

ドカーン！

その内一発の魚雷に命中してしまった。

天馬「うわあ！」

利根 「どうしたのじゃ天馬！」

いつものキレが無いではないか！」

天馬 「すみません・・・」

夕張 「調子が良くないなら、今日はもう止めとく？」

北上 「それがいいんじゃない？」

ここんとこ結構ハードな任務ばかりだし

それにグラウンドで毎日特訓やってるし

疲れるのも無理ないよ。」

利根 「そうじゃな・・・」

天馬、今日はもうゆつくり休め。」

天馬 「はい、失礼します・・・」

天馬は艤装を外し、その場を後にした。

吹雪 「天馬君、大丈夫かな・・・」

剣城 「いつもは、あそこまで気分が落ち込むことは

ないんだがなあ……」

如月「心配ですね……」

三人が心配そうに天馬を見ていると、

潮風が吹き、三人の髪を揺らした。

だが、いつもは髪が痛むのを嫌う如月が何故か髪を押さえない。

劍城（変だな。

如月さん、たしか潮風で髪が痛むのが

嫌だったはずだが……）

|||||

く入渠ドック 浴場く

演習後、天馬は入渠ドックでゆっくり体を休めていた。だが、同時に考え事をしていた。今朝見た夢のことだ。

天馬（もし、本当に敵に波動砲が通用しなかったら  
どうしよう・・・

波動砲は俺の、宇宙戦艦ヤマトの最大の  
武器なのに、それが通用しないとすると、  
吹雪さん達を守るとは・・・

ダメだ、今よりもっと強くないと！）

かれこれ考えていると・・・

ガラガラガラ・・・

入り口の扉が開き、誰かが入ってきた。

扉の方を見てみると、そこには体にバスタオルを



巻いた吹雪がいた。

天馬「ふ、吹雪さん!？」

吹雪「あ、天馬君。」

脱衣場に服があつたからもしかしたらつて

思つたけど、やっぱりここにいたんだ。」

天馬「えっ？」

いや、その、えうつと・・・」

天馬は頬を赤くしながら、後ろを向き目をそらした。

吹雪は天馬の隣にゆっくりと浸かる。

吹雪「大丈夫？」

顔、真つ赤だけど。」

天馬「いや、その・・・お、女の人と一緒に

お風呂なんて入つたことないものですから

その、何て言うか・・・」

吹雪「そっか・・・」

すると、吹雪が突然天馬にそつと寄り添ってきた。

天馬「吹雪・・・さん？」

吹雪「なんだかね、男の人にこう寄り添うと、

気分がホツとするらしいんだ。」

天馬「そ、そうなんですか？」



く入渠ドック 脱衣場く

その頃、ドックの脱衣場に加賀・瑞鶴・大井・北上  
金剛・睦月・夕立の7人がやって来た。

瑞鶴「今日の天馬、なんだか調子悪かったね。」

加賀「もしかしたら、今朝言つてた夢の事を

気にしていたのでは？」

睦月「夢？」

北上「うん、何でも今までと比べ物にならないくらい

強い深海棲艦に、鎮守府を破壊された

夢を見たらしいんだ。」

夕立「なんだかリアルツポイー。」

大井「ま、所詮は夢ですけどね。」

すると・・・

金剛「エヴリワン！

ルック！

あれを見るですネー！」

金剛が何かに気づき、叫び、指を指す。

その先には2つのカゴ。

片方には吹雪の来ているものとおぼしき制服。

もう片方には背中に8と書かれた雷門の黄色い

ユニフォーム。

瑞鶴「これって、天馬のユニフォーム？」

加賀「8番ですから天馬君のもんです。

こっちの服も吹雪さんの物と見て、

間違いないでしょう。」

睦月「といことは……」

一同「もしや……」



く入渠ドック 浴場く

脱衣場に瑞鶴達がいるとも知らず、天馬と吹雪は一緒に話をしていた。

吹雪「天馬君って、小さいときから

サッカー上手だったの？」

天馬「いえ、昔はサッカーなんて全くのからつきしで、

周りのみんなから、テンパー天馬って

呼ばれてました。」

吹雪「そうなんだ。

全く想像出来ないなあ。」

天馬「その頃の俺、ドリブル以外サッカーなんて

全く出来ませんでしたから、学校でも

試合に出させてもらえなくて、

でも、だから、みんなと一緒に同じ

フィールドでサッカーをしたって、

いつも思っていました。」

吹雪「そうなんだ。」

なんだか似てるね、私達。」

天馬「えっ？」

吹雪「私、航行も攻撃も苦手だったから

前の鎮守府にいたときは全く実戦に

出してもらえなかったの。

でも、だから、みんなと海に出たいって

毎日思ってたんだ。」

天馬「ほんとだ、俺達って似てますね。」

吹雪「うん。」

グウ  
グウ

吹雪「あつ・・・」

突然、吹雪のお腹が鳴った。

天馬「吹雪さん？」

吹雪「ごめん、お腹空いちやった・・・」

天馬「ハハハ……」



く入渠ドツク 脱衣場く

その頃、脱衣場では瑞鶴達が扉のわずかな隙間から浴場にいる二人の様子を伺っていた。

瑞鶴「あの二人、いつの間にあんな仲になってるのよ。」

大井「私と北上さんがいる前で生意気だわ！」  
金剛「ですが、これで提督のハートを狙う

ライバルが減ったと思えばいいですネー。」

睦月 「うーん、物は言い様というか何とと言うか……」

天馬 『良かったら、お昼にラーメンでも食べに行きませんか？』

稲妻町で一番美味しいラーメン屋さん

知ってるんですよ。』

吹雪 『ほんと？』

行く行く！』

天馬 『よしっ！』

じゃあ行きましょう！』

瑞鶴 「まずい、二人が出てくる！

早く出て出て！」

瑞鶴達は大急ぎで脱衣場から外に出る。

脱衣場に誰も居なくなつたと同時に、浴場から

天馬と吹雪が出てきた。



天馬「今、誰かに見られていたような気が

したんですけど・・・」

吹雪「気のせいじゃないかな？」

二人は体を拭き服を着ると、入渠ドックから  
灯台へ向かい、灯台の扉から稲妻町の  
木枯らし荘の庭へ出た。

—————

く木枯らし荘 庭く

灯台から木枯らし荘の庭へ出た二人。

庭では秋が洗濯物を干している最中だった。

秋「あら天馬、それに吹雪さん。

「どうしたの？」

天馬 「雷雷軒のラーメンを食べに

行くところなんだ。」

吹雪 「雷雷軒？」

天馬 「ああ、さっき俺が言った美味しい

ラーメン屋さんの名前です。」

吹雪 「へえー。」

秋 「そうなんだ。」

飛鷹君にヨロシク伝えて。」

天馬 「わかった。」

行つて来ます。」

吹雪 「行つて来ます。」

秋 「行つてらっしゃーい。」

天馬と吹雪は二人仲良く、雷雷軒のある  
商店街へと向かった。

そしてその数分後、ドアから瑞鶴達

こっそりと出てきた。

秋「あら、瑞鶴さんに皆さん。

どうしたの？こそこそして。」

瑞鶴「秋さん、ここで天馬と吹雪を

見ませんでしたか？」

秋「ええ、天馬と吹雪さんならさつき、商店街の

雷雷軒っていうラーメン屋さんに

向かったけど。」

瑞鶴「商店街の雷雷軒ってラーメン屋か・・・

ありがとう！」

瑞鶴達は大急ぎで商店街に向かった。

秋「何かあったのかしら？」



「商店街アーケード 雷雷軒2号店」

ガラガラガラ・・・

天馬と吹雪は、商店街アーケードにあるラーメン屋、  
雷雷軒2号店へとやって来た。

厨房には若い店主が立っている。

飛鷹「いらっしやい！」

天馬「飛鷹さん、こんにちは。」

飛鷹「よお天馬、今日も練習帰りか？」

吹雪「天馬君、この人は？」

天馬「この雷雷軒2号店の店主、飛鷹 征矢さん。」

常連のお客さんから、「湯切りのトビー」って  
呼ばれてるんだ。」

飛鷹 「天馬、お前もしかして彼女できたのか？」

天馬 「そ、そんなんじゃないですよ！」

飛鷹 「ハハハっ！」

まあ突っ立ってないで座んな。」

天馬と吹雪はカウンター席に隣り合って座る。

そして二人はラーメンを注文した。

飛鷹 「ところでお嬢さん、名前は？」

吹雪 「えっ？」

ふ、吹雪です。」

飛鷹 「話は雷門の連中から聞いてるさ。

お前さん、艦娘って言うんだってな。」

吹雪 「はい。」

飛鷹 「稲妻町、初めてなんだよな？」

吹雪 「ええ、この間サツカー部の皆さんと

練習試合をさせてもらったくらいで、

町のことは全く・・・」

天馬 「良かったら、後で町を案内しましょうか？」

吹雪 「いいの？」

ありがとう。」

飛鷹 「けつ、羨ましい光景だな。

はいよ、ラーメンお待ち！」

天馬・吹雪 「いただきます！」



く商店街アーケード 入り口く

その頃、商店街アーケード入り口には瑞鶴達<sup>ミツツル</sup>がいた。

瑞鶴「商店街って、ここだよね？」

夕立「この中にその雷雷軒ってラーメン屋さんが

あるツポイ。」

北上「あそこじゃないかな？

あの外壁が赤いあの店。」

大井「行ってみましょう。」

一同は商店街に入り雷雷軒へと向かう。  
すると・・・

ガラガラガラ・・・

店の扉が開き、天馬と吹雪が出てきた。

瑞鶴「やばっ！」

瑞鶴達は急いで近くの路地裏に潜り込んだ。

飛鷹 「まいどあり！」

吹雪 「美味しかった。」

ありがとう、天馬君。」

天馬 「どういたしまして。」

それで、何処行きましようか？」

吹雪 「じゃあ、天馬君のオススメスポットに

連れていってくれる？」

天馬 「わかりました！」

天馬と吹雪は商店街からある場所へと向かった。

飛鷹はその様子を店先から見ていた。

飛鷹 「いいねえ、青春だねえ。」

「ヘルプミ〜・・・」

飛鷹 「ん？」





鉄塔広場です！」

吹雪「うわぁ、なんか良いところ。」

天馬「ここは、俺の一番尊敬する人が

一番のお気に入りにしてた場所なんです。」

吹雪「尊敬する人って、もしかして

サッカー関係の人？」

天馬「ええ。」

その人は、10年前の雷門中サッカー部の

キャプテンを勤めていた人で、監督としても

選手としても、キャプテンとしても

凄い人なんです。」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

円堂『勝負の行方を決めていいのは、

勝利の女神ただ一人だ！』



天馬「あの人は、俺の憧れなんです。」

吹雪「そっか・・・」

ねえ、天馬君。」

天馬「なんですか？」

吹雪「あのね、今度の反抗作戦が終わったら

伝えたい事があるんだけど・・・」

天馬「伝えたい事？」

今じゃダメなんですか？」

吹雪「だ、ダメだよ今じゃ！」

天馬「わかりました。」

じゃあ、俺と約束してくれませんか？」

吹雪「約束？」

天馬「絶対に、生きて帰ってくるって。」

吹雪「・・・わかった。」

約束だよ！」

天馬「はい！」



↳ 鎮守府 第五遊撃部隊 寝室A

その日の夜、天馬と吹雪は稲妻町から

鎮守府へ帰還した。

寝室には、加賀・瑞鶴・大井・北上・金剛の  
5人がいた。

天馬・吹雪「ただいま」

大井「お、お帰りなさい。」

北上「二人とも、今日は随分と遅かったね。」

吹雪「ごめんなさい。」

ちよつと天馬君と稲妻町へお出かけに

行つてたもので。」

金剛「ぶ、ブッキーとマツツーだけズルいデース！」

天馬「それよりも・・・」

天馬は瑞鶴と加賀へと目を向ける。

天馬「皆さん、俺達の後をつけてましたね？」

一同（ギクツ!?）

瑞鶴「な、何言ってるの天馬!!」

加賀「私たち、あなた達が一緒に雷雷軒のラーメンを

食べに行つたり、一緒にお風呂入つてたり

してたなんてこれっぽっちも知りませんから！」

珍しく加賀が動揺している。



その頃、提督室では提督と長門が書類の整理をしていた。

提督「よし、今日の仕事終わり〜つと。」

長門「お疲れさまです。」

すると・・・

「待てー!!」

「待ちなさい!!」

提督・長門「んっ?」

突然、窓の外から声がした。

窓の外を見てみると、グラウンドで瑞鶴達が天馬と吹雪に追いかけられていた。

天馬「待て瑞鶴!!」

瑞鶴「お願いだから許してよおお!!」

提督「第五遊撃部隊で何があつたんだ・・・?」

長門「さあ・・・?」

天馬・吹雪「待てーっ!!」

5人「ひええええええええええええええええ!!」

この後、瑞鶴達5人は天馬と吹雪からこっぴどく叱られたのだった。



## E p i s o d e 1 3 / 加賀と瑞鶴とヲ級と

↳ 鎮守府 指令室外 ↳

ある日、指令室では大淀が別の鎮守府からの

暗号の解読を行っていた。

だがこの時、大淀は自分以外の者が建物の外で

暗号を盗み聞きしているとは思ってはいなかった。

如月「なるほど、次の作戦目標は棲地M O。

本鎮守府からは空母機動部隊と攻略支援部隊の

出撃命令ね・・・

空母ヲ級2隻を珊瑚諸島海域に向かわせて、

しづとい空母達を叩いてもらいましょう。

その前に、ちよっとしたサプライズを用意

しておきましょう。」

如月は暗号を聞き終えると、その場を後にした。  
近くの木の影から劍城が、建物の影からヲ級が  
見ていたとも知らずに。

劍城「如月さん、いったい何を？」

ヲ級（やつぱり、彼女は如月じゃない。

彼女はきつと・・・）



く鎮守府近海く

その日の午後、第五遊撃部隊が鎮守府近海で  
深海棲艦と交戦していた。

金剛「バーニング・ラープ!!」

ズドーン

天馬「撃ち方始め!」

バシユーン!

金剛は敵艦隊に向け徹甲弾を放ち、天馬はシヨックカノンを放ち攻撃する。

ドカーン!

金剛「ヒット!」

天馬「よしっ!」

大井「北上さん!」

北上「ほーい。」

大井と北上は手を取り合い、水上を踊るように敵の魚雷を避ける。

天馬「お見事です！」

吹雪「お二人共、あまり無茶しないでくださいね。

明日はMO攻略に出撃しなければ

なりませんから。」

北上「わかってるよ。」

大井「そうそう、明日はもっと素敵な北上さんを

見せてあげるわ。」

吹雪「あはは…

楽しみですねえ…」

天馬「でも、結構いい感じじゃないですか？」

吹雪「うん。」

装備の調整に出て、バツタリ遭遇戦に

なっちゃった時はどうしようかと思っただけ  
これならきつと・・・」

だが、安心したのもつかの間。  
すぐ後ろでは、あの二人がもめていた。

瑞鶴「邪魔よ、そこの元戦艦!!」

吹雪「えっ?」

加賀「五航戦ごときに譲る進路はありません。」

瑞鶴「いいから退いて!!」

天馬「もう、またですか……」

吹雪「あはは……」

瑞鶴は加賀を押し退けると、敵艦に向けて  
九九式艦攻を複数放つ。

瑞鶴「よしっ!

そのまま魚雷を！」

瑞鶴の九九式艦攻は敵深海棲艦に向け魚雷を投下。

瑞鶴「貰った！」

だが・・・

ドカーン！

魚雷が到達する前に、別の九九式艦爆が爆撃によって敵深海棲艦を倒した。

瑞鶴は突然の出来事に唖然としている。

瑞鶴「わ、私の獲物が・・・」

瑞鶴が唖然とするということは、九九式艦爆を



だが、瑞鶴は敵の魚雷が自分に向かっていることに気づいていなかった。

天馬「瑞鶴さん、魚雷です！」

瑞鶴「えっ？」

加賀「ちっ！」

加賀は瑞鶴の元へと急いで向かう。

そして到達すると魚雷が爆発し、加賀と瑞鶴は

水しぶきの中へと消えた。

水しぶきはおさまり、辛うじて瑞鶴は無傷だったが

加賀は・・・

天馬・吹雪「加賀さん!!」





〈鎮守府 提督室〉

提督室では、長門と提督がある話をしていた。

提督「・・・と、私は思うのだが、

長門、お前はと思う？」

長門「それなら確かにW島の奇襲が失敗したのも  
納得がいきます。

ですが・・・」

すると・・・

コンツコンツ

長門「なんだ？

取り込み中だぞ。」

ガチャツ

ドアが開き、陸奥が入ってきた。

陸奥「鎮守府沖に出ていた第五遊撃部隊より、

緊急の打電です。」

長門「なにつ!?!」

|||||

く港く

長門・陸奥・提督の3人は港へとやって来た。そこでは利根と多数の艦娘達が群がっていた。

目線の先には、第五遊撃部隊のメンバー  
吹雪・天馬・金剛・瑞鶴の四人と、北上と大井に  
運ばれる傷だらけの加賀の姿があった。

暁「加賀さん……」

電「痛そうなのです……」

提督「これは、また随分と派手にやられたな……」

吹雪「私のミスです……」

旗艦なのに、みんなに的確な指示を

出せなくて……

本当にすみません！」

天馬「吹雪さんのせいじゃありません。

予想外の事態が起きたとき、艦隊に指示を

出すのが現場指揮艦である俺の役目です。

しかし、今回の遭遇戦で俺は艦隊に的確な

指示を出すことができませんでした。

責任は俺にあります……」

加賀「いいえ、遭遇戦になったのは事故のようなもの。

そこで出過ぎて被弾したのは、私の失態です。

面目次第ありません。」

瑞鶴「格好つけないでよ！

アンタは私の代わりに被弾したんじやない！

一番悪いのは、油断して前に出すぎた

私なのに……

どうして私を責めないのよ!？」

加賀「勘違いしないで。

あなたがあの無防備な状態で被弾したら、

恐らく轟沈していたわ。

でも、私は被弾箇所を選べたし、沈まずに

耐える自信もあった。

それがたとえ五航戦でも、提督の大事な

戦力を失う訳にはいかない。

私はあの絶望的な瞬間に見えた、僅かな

希望に掛けただけ。

そして勝ったわ。」

瑞鶴「なによアンタ！」

そんなボロボロのくせして、どうして

そこまで偉そうに・・・!!」

金剛「ハイハイエヴリバディ、落ち着きましょう。

被弾したのはバッドラックだけど、

高速修復剤を使えば、お湯を沸かす前に

ティータイムは終わりネー。」

長門「すまないが、それは無理だ・・・」

途中で長門が口を挟む。

天馬「何故ですか？」

陸奥「F S 作戦の発動以来、こちらの勢力範囲

そのものが拡大しているのだけれど・・・」

提督「同時に補給線も延びているだろ？」

燃料や鋼材はまだ余裕があるが、出撃が多いこともあって、高速修復剤が底をついているんだ。

先日被弾した赤城も、おかげで未だに

入渠してる状態だしなあ……」

金剛「サプライは大切なのにー！」

長門「加賀もこの様子ではとても間に合いません。

どうされますか？

MO 攻略本隊は、今頃出撃しているはずですよ。」

提督「最悪の場合、艦載機を所持している天馬に

加賀の代理を頼むしかない。

だが、それでは天馬への負担が大きすぎる。

どうすれば……」

悩む提督。

すると……

「私が参ります。」

一同「……？」

一同が顔を向けると、そこには瑞鶴の姉妹艦  
翔鶴がいた。

天馬・瑞鶴「翔鶴さん（姉）！」

翔鶴「加賀さん、瑞鶴を守っていただいたこと

本当に感謝しています。」

加賀「さつきも言いましたが、別にお礼を言われる様な

ことではございません。」

翔鶴「提督、どうかお願いです。」

この翔鶴を、加賀さんの代わりに

出撃させてください。」

提督「……わかった。」

ただ、少しばかり時間をくれ。

今日の日没までには決定しておく。」

翔鶴「わかりました。」

提督「他の皆は、明日の作戦に備えて

体力を十分に回復させておけ。

私からは以上だ。」

吹雪「……。」

—————

くグラウンドく

その後、天馬・吹雪・睦月・剣城・夕立・神童の6人は  
グラウンドの端にいた。

だが、今の吹雪は物凄く悩んでいた。

神童「……なるほど。」



それで悩んでるのか、吹雪さんは。」

天馬「ええ……」

最近、第五遊撃部隊がやつとチームとして

機能し始めたと思ったら、初めての作戦前に

これですからね……」

吹雪「なんかね、加賀さんと瑞鶴さんって

いつも口喧嘩ばかりしてるけど、いつか

凄く良いコンビになるんじゃないかって

勝手に思ってたんだけどなあ……」

はあく、やっぱりに旗艦なんて

無理だったのかなあ……」

夕立「それは無いツポイ？」

劍城「そうですね、吹雪さんは吹雪さんなりに

頑張ってたじゃないんですか？」

睦月「吹雪ちゃんが頑張ってたのは、

私も夕立ちちゃんも、神童君や劍城君も

みんな知ってるし、きつと天馬君や

第五遊撃部隊のみんなの方がもつと

いっぱい気づいてるよ。」

吹雪「そう、なのかな・・・？」

天馬「そうですよ。」

じゃなかったら、あの第五遊撃部隊なんて

とつくに解散してますよ。」

睦月「うん！」

吹雪「・・・ありがとう、みんな。」

やっぱり、友達がいるのって嬉しいね！」

神童「同感だ。」

劍城「ですね。」

天馬「俺、ちよつと瑞鶴さんの様子

見に行つてきます！」

吹雪「私も行く！」

天馬と吹雪は急いで第五遊撃部隊の寢室へ向かった。



天馬・吹雪「いや、その、どうしてるかなって……」

瑞鶴「私は誰かさんのお節介で無傷なもの！」

全っ然大丈夫だけど！」

吹雪「あの、ずいか……」

すると……

大淀『通達です。』

第五遊撃部隊、駆逐艦吹雪、及び松風天馬

提督室に出頭してください。』

天馬・吹雪「えっ!？」



数分後

く提督室く

提督室には、提督と長門がいた。

トントントント

提督「どうぞ。」

吹雪「駆逐艦吹雪、入ります！」

天馬「松風天馬、入ります！」

ガチャツ

扉が開き、吹雪と天馬が入ってきた。  
が、二人とも緊張しているのか・・・

ギギギギ……ドンッ　ギギギギ……ドンッ

長門「手と足が一緒に出てるいぞ……」

天馬・吹雪「あつ……」

二人は慌ててビシツと立つ。

長門「そう緊張するな。」

提督はお前達を譴責するために

呼ばれたのではない。

むしろ、あの面子を上手く纏めていると

褒めておいでだ。」

吹雪「ほ、本当ですか!?!」

長門「ああ。」

だからこそ吹雪、お前に聞く。

明日の作戦、加賀の代わりに翔鶴を

入れるかいなかをお前の判断に任せるそうだ。  
どうだ？ やれるか？」

吹雪「それは・・・」

吹雪は少し考えた。

そして・・・

吹雪「・・・やれます！」

長門「わかった。

よろしいですか、提督。」

提督「私は吹雪の判断に任せると言った。

だから吹雪がやれると言うのなら

構わない。」

長門「わかりました。

では改めて出撃が決まったところでもう一点

提督が二人に話しておきたいことが

あるそうだ。」

天馬「話しておきたいこと……ですか？」  
提督「実は、明日の作戦について……いや

昨今の深海棲艦との戦闘において、

とても深刻な懸念を抱いているんだ。

吹雪、天馬、これは艦隊の仕切を取る

お前達にだけ話しておくが……」



く波止場く

その日の夜、天馬は波止場にいた。

天馬「ついに明日出撃するんだな。」



MO攻略に……」

ヲ級「……怖い？」

天馬「そりゃあ、怖くないって言ったら嘘になる……って、どわあ!？」

いつの間にか隣には空母ヲ級がいた。

天馬「なんだヲ級か、ビックリさせないでよ……」

ヲ級「なによ？」

あなたが勝手にビックリしたんじゃない。」

天馬「いやそうだけどって……あれ？」

ヲ級、なんか性格変わった？」

ヲ級「まあね。」

そろそろ、本当の自分を表に出さないと面倒くさくなるから。」

天馬「どういうこと？」

ヲ級「明日、あなたは私と同じ

深海棲艦ヲ級型正規空母に遭遇するわ。  
攻撃をためらって負けてほしくないから  
もう作り物の自分を表に出すのは  
やめようと思ったのよ。」

天馬「そうなんだ・・・」

ところで、前から気になってるんだけど  
なんでヲ級は俺にこうやって接触しては  
情報提供をしてくれるの？

君達が負けるかもしれないのに。」

ヲ級「それについては、まだ言えないわ。

次に会ったときに全部話すわね。」

ヲ級はその場を後にした。

だがこの時、天馬の頭の中に新たな謎が生まれた。

天馬（なんだろう・・・）

今日のヲ級、何処か懐かしい感じがしたな。

まるで、前に会ったことがあるような・・・)



く地下ドックく

次の日、ついにMO攻略作戦が始まった。

夕張「第三艦隊旗艦 夕張、出撃します！」

劍城「劍城京介

メガルーダ、出る！」

地下ドックから、先ずは夕張率いる第三艦隊が



く地下ドックく

その頃地下ドックでは、既に第五遊撃部隊がスタンバイしていた。

大淀『第五遊撃部隊、出撃準備！』

吹雪「皆さん、頑張りましょう！」

天馬「うう……緊張するなあ……」

瑞鶴「ごめんね、翔鶴姉……」

翔鶴「もう、何を言っているの？」

私は瑞鶴と出撃出来て、本当に嬉しいのよ。」

瑞鶴「えっ？」

翔鶴「一航戦の方々が出られない今こそ、

私たち五航戦が頑張らないとね……。

さあ、行くわよ瑞鶴！」

瑞鶴「……はい、翔鶴姉！」

吹雪「さあ、いきますよ！」

第五遊撃部隊、出撃します！」

吹雪率いる第五遊撃部隊は艤装を装備し  
大海原へと出撃していった。

## E p i s o d e 1 4 / 嫌い嫌いも好きのうち

く入渠ドック 浴場く

第五遊撃部隊が出撃した頃、加賀は入渠ドックで遭遇戦時の傷を癒していた。

隣には、赤城がいる。

赤城「そろそろ出撃している頃でしょうね。」

加賀「・・・そう？

私は特に気にしなかったけれど。」

赤城「大丈夫、あなたが守った子達ですもの。」

きつと戦果を挙げてくれるでしょう。」

加賀「べつに守ったつもりでは・・・」

赤城「それにしても、あの子達に感謝

しないとね。」

加賀「えっ？」

赤城「久しぶりですもの、あなたとの

こういう時間は。」

恥ずかしくなったのか、加賀は赤城から

目をそらした。

加賀「な、何を言うの・・・」



く珊瑚諸島海域 エリアAく

一方、第五遊撃部隊は珊瑚諸島海域にいた。

大井「綺麗な海と空・・・」



まるで、私と北上さんの行く末を  
祝福しているようね。」

北上「いや・・・残念だけど大井ツチ、  
ちよつと雲行き怪しいよ?」

後方には雨雲とおぼしき黒い雲が広がっている。

大井「チツ、空のくせに空気を読まないなんて・・・」

北上「まあでも、大井ツチと一緒になら嵐でも  
へっちらただけどね。」

大井「北上さん♥」

天馬「吹雪さん、そろそろ・・・」

吹雪「うん・・・」

翔鶴さん、瑞鶴さん、天馬君、索敵機を

出してもらえませんか?」

瑞鶴 「えっ？」

翔鶴 「いいけど、作戦海域はまだ先だし

風上に進路を変えなきゃ・・・」

天馬 「大丈夫です。

夕張さん達には先行してもらいます。

あくまで念のためですから、大丈夫だと分かれば

全速で追い付きます。」

翔鶴 「いいの？瑞鶴。」

金剛 「大丈夫デース。

ブツキーとマツツは自分がやることの

意味をしつかり理解してる子ネー。」

北上 「まあ、そうだよね。」

大井 「だから旗艦や現場指揮艦にしてあげてるのよ。

ホントは北上さんの方が似合うのに・・・」

瑞鶴 「まあ吹雪の場合、戦闘そのものは旗艦なのに

勢いで突っ込みすぎたりで、ちよつとていうか

かなり危なっかしいけどね。」

吹雪「うう……」

金剛「それは私も同感デース。」

吹雪「もうっ！

金剛さん！」

翔鶴「フフっ。」

瑞鶴「どうしたの翔鶴姉？」

翔鶴「なんでもないわ。

今出すわね。」

翔鶴は背中の中の矢筒から緑色の矢を一本取りだし、

大空目掛けて勢いよく放った。

放たれた矢は炎を纏い、6機の九七式艦上攻撃機に変化した。

吹雪「ここから南へ30度ごとに。」

翔鶴「わかったわ。」

翔鶴の指示で、6機の九七式艦攻は30度ごとに南へ展開した。

天馬「凄い綺麗ですね。」

瑞鶴「さすが翔鶴姉！」

翔鶴「何をしているの瑞鶴、天馬君、

あなた達もよ。

でしょ？吹雪さん。」

吹雪「はい、三段索敵でお願いします。

確実を期したいんです。」

瑞鶴と天馬も翔鶴に続き、瑞鶴は九七式艦攻6機を

天馬は九九式空間戦闘攻撃機コスモファルコン6機を放ち、お互い南へ30度ごとに展開させた。

瑞鶴「でも、いきなりこんな密な索敵を

するなんて・・・」

翔鶴「何かあるかもしれない……のですね？」

吹雪「無ければ、一番なんですけど……」

吹雪が瑞鶴達に早い段階から索敵機を展開させたのには

訳があつた。

それは、昨日の事である。

～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～

～昨日 提督室～

天馬と吹雪は提督から、ある疑念について

聞かされていた。

それは……

吹雪「深海棲艦が私たちの使っている暗号を!?!」

天馬「そんなバカな!?!」

提督「確証はない。

だが疑念がある以上、常に最悪のケースを想定して行動してほしい。

つまり・・・」

~~~~~

吹雪（必要なのは私たちの作戦目標や艦隊の動向が

敵に漏れているかもしれない可能性を

考えること・・・）

天馬（だとすれば敵の仕掛けは・・・）

吹雪と天馬が考えている最中、突然天馬の耳に打電が入った。

天馬「MO攻略本隊の祥鳳さんからです！

我、多数の敵艦載機による急降下爆撃で

大破炎上中!？」

一同「ええっ!？」

天馬「現在も攻撃は継続中。

されど敵空母の位置は不明なり。

速やかな発見と撃破を求む。」

翔鶴「これなのね？」

吹雪「はい、司令官は予測されていました。」

瑞鶴「翔鶴姉、天馬、もっと索敵機を出そうよ!

早く敵空母を見つけないきゃ!」

翔鶴「落ちて着いて瑞鶴、イタズラに出しても

意味が無いわ。

索敵は根気の勝負、慌てた方が負けよ。」

北上「とはいっても、待つだけっていうのも

ちよつと嫌だね。」

金剛「サーチ アンド ストライク……」

先に見つけた方の勝ちですカー……」

吹雪「頑張ってください、艦載機さん達……」

天馬「頼みますよ、航空隊の皆さん・・・」



↳ 珊瑚諸島海域 エリアB

その頃、天馬の放ったコスモファルコン6機の内の一機
コスモファルコン104番機は、第五遊撃部隊のいる
海域から南南西に25キロの上空を飛行していた。
すると、パイロットの《沢村 翔》が何かを
発見した。

沢村「おっ？

いたいた。」



く珊瑚諸島海域 エリアAく

一方、第五遊撃部隊のいる海域には
巨大な雨雲が近づいてきていた。

大井「天気はかなり崩れてきましたね・・・」

瑞鶴「これ以上は艦載機達も・・・」

すると突然、天馬の耳に通信が入った。

沢村『こちら沢村、敵空母機動部隊を発見しました！

編成は、空母1・重巡1・軽巡2・駆逐2の

計6隻！』

天馬「了解！

直ちに現在位置の座標を送ってください！」

沢村『はい！』

上空に達すると、海上には空母ヲ級を旗艦とする空母機動部隊の姿が見えた。

沢村「俺も参加させてもらうよ！」

沢村は攻撃隊と共に急降下し、空母機動部隊に攻撃を開始した。

空母ヲ級は攻撃隊の爆撃を華麗にかわし、艦載機を発艦しようと頭部の口を開けるが、沢村がその隙を狙い口内へミサイルを発射。

沢村「これでも食ってろ！」

ズドン！

ミサイルは口内で待機していた艦載機と衝突し口内で大爆発を起こした。

く珊瑚諸島海域 エリアAく

翔鶴 「攻撃隊より入電！

敵空母一隻を中破！」

瑞鶴 「よしっ、先手を打ったわ！

これで敵は艦載機を出せない！」

一同 「おおー！」

吹雪 「では、私たちは残敵の総討に向かいますよう。

ただし空母のお二人は、このまま棲地MOへ

向かって、夕張さん達の支援隊に

追いついてください。」

瑞鶴 「えっ？

でも私、まだ戦えるのに・・・」

吹雪 「私たちの作戦目標は、あくまで棲地MOです。

お二人には、まだたくさんお仕事をして

いただかなくちやいけませんから！」

瑞鶴「・・・わかったわ。」

吹雪「あと、再度合流するまで無線封鎖を

徹底しましょう。

それでは！」

吹雪・天馬・金剛・大井・北上の5人は残敵の総討へ、

翔鶴と瑞鶴は棲地MOへと向かった。

だが、天馬は少し移動すると足を止めた。

天馬（何だろう、嫌な予感がする・・・）

このまま空母の二人をMOに向かわせて

大丈夫なんだろうか・・・）

不安に思う天馬は、矢筒から薄いグレーの矢と

藍色・赤・黄のストライプの矢を取りだし、

1本ずつ放った。

矢は両方とも炎を纏い、コスモファルコンへと変化した。1機はボディカラーが薄いグレーもう1機は藍色ベースで機首部分にモンスター顔の様なペイントがしてあった。

天馬「加藤さん、篠原さん、二人は

瑞鶴さんと翔鶴さんの後を追い、

二人の監視及び援護をお願いします！」

加藤『了解！』

篠原『オツケー！』

俺たちに任せといて！』

二人は瑞鶴と翔鶴の行った方角へと飛び、

天馬は急いで吹雪達を追いかけた。

珊瑚諸島海域 エリアB

吹雪達は敵空母機動部隊のいる海域へとやって来た。

そこには先程の沢村の攻撃によって中破した

空母ヲ級と、無傷の重巡リ級・軽巡ヘ級・ト級

轟沈した駆逐ロ級・ハ級の残骸があつた。

天馬（空母ヲ級・・・）

吹雪「砲雷撃戦、用意！」

天馬「大丈夫だ、彼女を信じよう・・・！」

主砲、三式弾装填！」

天馬はヲ級に照準を合わせる。

天馬「撃ち方・・・始め！」

瑞鶴「えっ？」

瑞鶴は頬を赤くさせる。

瑞鶴「・・・ない！

ないないない！

ないよそんなの！

私はあんなお高くとまった、カッチカチ釣り目の
一航戦なんて、大ツツキライなんだから!!」

翔鶴「はいはい♪」

瑞鶴「ああっ！信じてない！

もう、翔鶴姉ってばあ！」

そんな二人は、後方から加藤と篠原が監視することに
全く気付いていなかった。

加藤『しかし、ヤマト・・・じゃなくて天馬は

なんで俺達に翔鶴と瑞鶴の監視及び援護を

させてるんだろ？」

篠原『何かイヤな予感がしたんじゃないですか？』

例えば、“二人の背後から敵の艦載機が

狙ってるんじゃないか”とか……。

はたまた、“この海域の島の何処かで敵の艦隊が

待ち伏せしてるんじゃないか”とか……。』

加藤『もし敵が本当に俺達の作戦を知ってたら、

そうなる可能性は大だな。』

すると……

ナビ『レーダーに反応。』

後方より未確認飛行物体、多数接近。』

加藤『篠原、どうやら大当たりみたいだ……。』

二人の後方から、4機の敵艦載機が機銃による

前方の瑞鶴と翔鶴は敵艦載機の存在にはまだ
気付いていない。

敵艦載機は翔鶴に爆撃を仕掛けてきた。

ドカーン！

翔鶴「きゃあああ！」

瑞鶴「翔鶴姉！

(どうして……この艦載機はどこから来たの!?)

二人が艦載機の強襲を受ける一方で、

雨雲の下にある島の影では、もう1隻の空母ヲ級が
艦載機を放ち続けていた。

翔鶴は艦載機の攻撃で傷付き、瑞鶴は敵の攻撃で
艦載機を出す余裕も無い。

瑞鶴「くそつ、このままじゃ！」

翔鶴「瑞鶴！私を置いて逃げなさい！」

瑞鶴「そんなのできるわけない！」

瑞鶴は翔鶴を抱き抱えると、その場から

猛スピードで離れようとする。

だが、敵艦載機は二人をしつこく追いかけて

機銃で攻撃を仕掛ける。

後方から加藤と篠原もファルコンで援護するが……。

加藤『ダメだ、下手に銃を撃ちまくったら』

前の二人に当たっちゃおう！』

篠原『でも、このままじゃ二人とも……。』

加藤『わかってる！』

何か、何か策は無いのか!?!』

瑞鶴（吹雪たちに……だめだ、無線封鎖してるし

他の敵まで呼び寄せかねない。

一瞬でいい！艦載機を出すチャンスがあれば！
(

その時、瑞鶴は加賀の言葉を思い出した。

加賀『私はあの絶望的に見えた、わずかな希望に賭けただけ。』

瑞鶴「(絶望の瞬間の、わずかな希望……！)

翔鶴姉、スコールに入ろ。

そしたら向こうも追ってこれない。」

翔鶴「でも、私たちも発着艦ができなくなるわ！

それより私を囚にして……。」

瑞鶴「大丈夫、永遠に続くスコールはない。

必ず切れ目がある。

その一瞬でなら、発着艦は可能だよ。」

翔鶴「でも、やっぱり無理よ！」

スコールを出た瞬間、敵の餌食に……。」

瑞鶴「大丈夫、きつとチャンスは来る。」

信じよう、翔鶴姉。」

瑞鶴の顔は、今まで翔鶴にも見せたことが無いほど真剣な表情をしていた。

翔鶴はそれを見て確信したのか……。

翔鶴「……うん、行きましょう！」

翔鶴と瑞鶴は、急いでスコールの中へ向かう。

だが敵艦載機は後方から未だに攻撃をしてくる。

加藤『こうなったら、特攻で行くぞ！』

篠原『はいっ！』

加藤と篠原は、敵艦載機の両サイドから突っ込む。すると、敵艦載機達は目標を加藤と篠原に変え、襲いかかってくる。

艦載機の攻撃が止んだことに気づいた翔鶴と瑞鶴は恐る恐る後方を見た。

瑞鶴「あれって、天馬のコスモファルコン！」

翔鶴「助けに来てくれたのね！」

加藤『篠原、二人にモールス符号でメツセージを

送ってくれ！

無線は使いな！

光で伝えるんだ！』

篠原『了解！』

篠原は光によるモールス符号で、翔鶴と瑞鶴にメツセージを送る。

瑞鶴「俺たちが敵を引き付ける。

そのすきにスコールの中へ逃げろ。」

翔鶴「わかりました、行きましよう！」

二人は加藤と篠原が敵艦載機を引き付ける間にスコールの中へと入った。

加藤と篠原も二人がスコールの中に入ったことを確認すると、敵艦載機を振り切りスコールの中へ入っていった。

敵艦載機はやむを得ずその場から撤退した。



珊瑚諸島海域 エリアB

その頃、吹雪達は空母ヲ級との戦いを既に
終えていた。

吹雪「ふう、空母が1隻で良かった。

司令官の言つてた最悪の事態はこれで・・・。」

天馬「いや、まだ何かありそうな気がします。」

吹雪「どういうこと？」

天馬「最初の祥鳳さんの報告では、敵空母の位置は
不明だとあつた。

ですが今回、空母ヲ級がいたこの海域は

辺りに島などはほとんど無く、しかも空は

快晴でとてもいい天気です。

これじゃ、艦載機達も空母を直ぐ発見する

ことが出来たわけですよ。」

北上「確かに、言われてみればそうだね。」

天馬「これはあくまでも俺の勘ですが、俺達が

倒した空母機動部隊は、俺達をおびき寄せる

囚だったとしたら、祥鳳さんを爆撃した

艦載機を送り込んだ空母は、別の何処かに

潜んでいると考えられます。」

吹雪「もし、敵が本当にこちらの作戦を

全部知っているとすれば・・・。

まさか!？」

天馬「大変だ!

今すぐ瑞鶴さん達のところへ向かわないと!!」

天馬と吹雪は、大急ぎで瑞鶴と翔鶴の元へ向かった。
後から金剛・大井・北上も追いかける。



珊瑚諸島海域 エリアD

その頃、翔鶴・瑞鶴・加藤・篠原はスコールの中を進んでいた。

すると、前方に雲の切れ目が見えた。

切れ目の下には空母ヲ級と機動部隊がいる。

瑞鶴「もしダメでも最後に一矢報いてみせる！」

瑞鶴は矢筒から矢を一本取り出し、構える。

前方の空母ヲ級も、駆逐艦と巡洋艦に指令を送り

瑞鶴と翔鶴に狙いを定める。

そして二人がスコールから出た直後、攻撃を

しようとしたその時……。

ダダダダダダダダ……!!

上空から加藤と篠原が機銃での攻撃を仕掛け

敵を怯ませ

艦載機を攻撃していく。

加藤『これ以上好き勝手にさせねえ!!』

篠原『うおおおおお!!』

瑞鶴「いつけえええ!!」

瑞鶴は敵が怯んだ隙を狙い、6機の九七式艦攻を敵艦隊目掛けて放つ。

瑞鶴「お願い!一発だけでもいい!

五航戦の意地を見せて!」

だが、放った九七式艦攻は全て撃ち落とされてしまい、もはや絶望的だと思ったその時だった。

吹雪「はああああー!」

スコールの中から吹雪達が助けにやって来た。

瑞鶴「みんな！」

ズドーン！

天馬「フルファイア！」

ズドドドドドドドドーン！！

吹雪は砲撃で敵駆逐艦・巡洋艦を攻撃し、

天馬は三式弾と全身の魚雷・ミサイル・爆雷を
全て発射し、空母ヲ級と艦載機を攻撃する。

ヲ級はミサイルを食らい一瞬怯んだ。

吹雪「今！」

ズドーン！

吹雪はヲ級が怯んだ隙を狙い、砲撃する。
放った砲弾はヲ級の左目を撃ち抜いた。

金剛「ファイヤー！」

ズドーン！

大井「海の藻屑と！」

北上「なりなよー。」

ズドドドドドドドーン！！

金剛は砲弾、大井・北上は魚雷で敵艦隊を攻撃する。
艦隊はヲ級を残し全艦轟沈した。

ヲ級は損傷した左目を押さえながら、スコールの中へと消えていった。



↳ 鎮守府 指令室↳

大淀 「第五遊撃部隊から入電！」

我、珊瑚諸島海戦にて敵機動部隊と遭遇！

空母ヲ級を大破、一隻轟沈！」

陸奥 「すごいじゃない！」



↳ 入渠ドック↳

その報告は利根を通して、入渠中の加賀にも
伝えられた。

加賀 「ヲ級を大破に轟沈……」

赤城 「やりましたね、あの子たち。」

加賀 「はい、でもそれほど驚く事ではないのかも
しれません。

だって……

みんな、優秀な子たちですから。」



く 珊瑚諸島海域 エリアD く

その日の夕方、天馬達 第五遊撃部隊は金剛の指示で
あるところに向かっていた。

ただ一人、天馬は浮かない顔をしている。

天馬（もし、昨日のヲ級の話が嘘だったら、

今日戦ったヲ級のどちらかは・・・。）

心配でペースが落ちる天馬。

すると、後方から一機の敵艦載機が飛んでくる。

天馬「あれって、敵の艦載機！」

天馬は艦載機に主砲を向ける。

だが艦載機は攻撃も何もせず、徐々に速度を落とし天馬の手のひらにゆっくりと着地した。

天馬「お前は、何しに来たの？」

・・・ん？」

天馬は艦載機の背中に、あるものを見つけた。

それは、自分の着ているユニフォームの左胸にあるマークと同じイナズママーク。

天馬「これって、俺のユニフォームのと同じマーク。

・・・そうか、お前はヲ級が無事だって

ことを伝えに来てくれたんだな。」

そう答えると、艦載機は天馬の手のひらから飛び立ち、大空の彼方へと消えた。

天馬「また会おうぜ、ヲ級……。」

吹雪「天馬くん、何してるのー?」

金剛「置いて行くですヨー!」

天馬「今行きまーす!」

天馬は吹雪達の後を急いで追いかけていった。

E p i s o d e 1 5 / 大和とヤマト

珊瑚諸島海域での激戦を終えた第五遊撃部隊は、

金剛の先導で、ある場所へと向かっていた。

金剛「ルック！

見えてきたネ！」

金剛の指差す方角には1つの島が見える。

吹雪「あれがトラック島？」

大井「あんな所に、本当に前進基地があるんですか？」

金剛「FS作戦遂行のための基地ネ。

他の艦娘たちも、ここにムーブ

してきてるデース。」

瑞鶴「翔鶴姉、大丈夫？」

翔鶴「うう……」

翔鶴は珊瑚諸島海域での戦闘で被弾したせいで
体は傷だらけだった。

天馬「着いたらすぐ入渠しないとダメですね。」

吹雪「でも、そんなこと出来るのかな？」

金剛「大丈夫デース。

陸奥が言うには、あそこに行けば、

とっておきの新鋭艦が待ってるらしいデース。」

天馬「新鋭艦？」

—————

トトラック島 ビーチ

一同はトラック島のビーチへやって来た。

だが、周辺に基地らしき建物は無く、目の前にはジャングルが広がっている。

天馬「あつつい……。」

北上「ふう、まさに夏って感じだね……。」

大井「北上さん、日差しは大丈夫ですか？」

よかつたら、その茂みの中に二人で……。」

だが、既に先客がいた。

蛇「シャ〜！」

大井「ひいっ、蛇いっ！」

吹雪「本当に、ここでいいんですよね？」

金剛「相変わらずブツキーは心配性ネ！」

ノープロブレムデース！」

が、この状況にさすがの金剛も……。

金剛「メイビー……。」

吹雪「ちよつ、今メイビーって言いましたよね!？」

カサカサ……

一同「ん？」

突然、茂みの奥から音がし、一人の艦娘がやって来た。

右手には和風の日傘を持ち、首には金色の桜が

ついた鉄の首輪をし、腰の左右には錨。

膝くらいまである焦げ茶色の髪を桜の髪止めで

ポニーテールにまとめ、茶色い瞳。

体のラインにフィットした前留め式の紅白の

セーラー服と赤のミニスカート。

足には左右非対称の紺の靴下を履いており

右は普通の、左は白ラインの入ったニーソックス。

そして体つきを一言で表すなら、「ナイスバディ」

と言うべきだろう。

大和「大和型一番艦、《大和》。

推して参ります。」

吹雪「大和、さん？」

天馬「大和だ・・・戦艦大和だ！」

突然、天馬が声をあげた。

天馬「俺、宇宙戦艦ヤマトこと松風天馬と言います！」

よろしく願います！」

大和「とても元気がいいですね。

よろしく願います。」

吹雪「天馬君、急にどうしたの？」

天馬「だって、凄い事ですよ！」

あの戦艦大和の艦娘に会えるなんて！

夢みたいですよ！」

瑞鶴「大和って、そんなに凄い戦艦なの？」

天馬「知らないんですか!？」

大和型戦艦の一番艦 大和は、大日本帝国海軍が
建造した史上最強の洋上戦艦です！

全長263m！

排水量64,000トン！

ボイラーに口号艦本式缶12缶、主機に

艦本式タービン4基4軸を搭載し、

出力は153,533馬力！

最大速度は27,46ノット！

開戦直後の1941年12月16日に就役

翌年2月12日に連合艦隊旗艦となりました！

当時の日本の最高技術を結集し建造され、

戦艦として史上最大の排水量に史上最大の
46cm主砲3基9門を備え、防御面でも
重要区画では対46cm砲防御を施した
桁外れの戦艦です！

さらに大和を製造する際、作業の高効率化を
目指し採用されたブロック工法は大成功を納め、
大和型建造のための技術・効率的な生産管理は
戦後の日本工業の礎となり、重要な意味を
なすと言われています！」

吹雪「天馬君、熱くなりすぎじゃない・・・？」

翔鶴「それにしても、よくご存知ですね。

戦艦大和について。」

天馬「だって俺、宇宙戦艦ヤマトである以前に
戦艦大和の大ファンですから！」

大和「まあ、嬉しいですね。

大和同士、お互い仲良くしましょう。」

天馬「はい！」

あ、ところで大和さん。

基地って何処にあるんですか？」

大和「基地はこのジャングルの奥にあります。

ついて来てください。」

—————

くトラック島前進基地く

大和の先導で、一同はトラック島前進基地へと
やって来た。

天馬「デカっ！」

吹雪「凄い……！」

大和「FS作戦遂行の為に作られた、とても重要な
前進基地です。」

鎮守府の皆さんも、もう到着していますよ。」
吹雪「本当ですか!?!」

すると、正面玄関から見馴れた四人の男女が現れた。

睦月「吹雪ちゃん!」

夕立「ほいっ!」

如月「やつほ。」

吹雪「睦月ちゃん、夕立ちちゃん、如月ちゃん!」

劍城「天馬!」

神童「もう来てたのか?」

天馬「劍城、神童さん!

みんな、いつ着いたんですか?」

睦月「さっきだよ。」

赤城先輩や加賀さんたちも一緒なの。」

神童「ところで、今回の作戦は吹雪さんの活躍で

勝利したと聞きましたけど?」

吹雪「ううん、皆が頑張ってくれたお陰だよ。

翔鶴さんと瑞鶴さんなんか特に。」

天馬「そういえば、翔鶴さんと瑞鶴さん

いつの間にかいませんけど？」

大和「翔鶴さんなら、瑞鶴さんに付き添われて

入渠しましたよ。

皆さんは、まずは補給からにしましょう。

こちらです。」

—————

くダイニングルームく

大和に連れられて一同がやって来たのは、

基地内に設けられた巨大なダイニングルーム。

天井にはシャンデリア、テーブルにはキャンドルの

明かりが灯り、まるでホテルのレストランのよう。そして、そこには既に先客がいた。

吹雪「赤城先輩！」

赤城「吹雪さん、元気そうですね。」

赤城はとてつもなく巨大なステーキを食べていた。

吹雪「さすが赤城先輩。」

食事する姿も凛々しい。

大井「そお？」

金剛「さあ、私達もディナー・タイムの時間ネ！」

大和「はい、今日は皆さんの為に腕によりをかけた

コース料理を御用意しました。

前菜まで少し時間がありますので、

先ずは飲み物でもどうですか？」

大和はテーブルの上にあるベルを鳴らす。

チリリリリン・・・

すると、部屋の一角に設けられた冷蔵庫の扉が自動的に開いた。

中にはラムネが大量に入っている。

天馬「凄い！

これ、ラムネですか？」

大和「はい、大和特製ラムネです。

どうぞ。」

一同はラムネを一本ずつ手に取る。

大井「冷たくて気持ちいいわ。

まるで・・・」

金剛「プツはく！」

美味しいデース！」

大和「では皆さん、食事にしましょう。」

チリリリリン・・・

大和はもう一度ベルを鳴らす。

すると、テーブルの上でクロスに隠れていた銀の器が姿を現した。

蓋を開けると、中には黄金のスープが。

大和「コンソメスープになります。」

金剛「オオ！」

本格的ネー！」

天馬「これは、とても基地とは思えませんね。」

吹雪「むしろホテル？」

大井「ほ、ホテル!？」

ホテルに北上さんと二人♡」

金剛「ブツキーも大井も発音が違うネエ！」

“ ホテル ” ではなく、 “ ホテール ” デース！」

大和「ホテルじゃありません!!」

一同「えっ?」

先程まで優しく振る舞っていた大和が突然、
声をあげた。

天馬「大和さん?」

大和「あ…いえ、ごめんなさい。

では、ごゆっくり。」

大和は笑顔を見せると、その場を後にした。

天馬「ホテルじゃありません…か。」



く入渠ドツク 大浴場く

吹雪達が夕食をとっている頃、翔鶴と瑞鶴は入渠ドツクにいた。

瑞鶴 「あくあ、作戦が終わったからこれで

翔鶴姉とはまた別々の部隊か……。」

翔鶴 「仕方ないわ。

それぞれの部隊で、五航戦の誇りを持って戦いましょう。」

瑞鶴 「うん……。」

翔鶴 「そういえば、赤城さんと加賀さんも整備が完了してこの島にいらっしやってるって

聞いたけど。」

瑞鶴「ふーん、そうなんだ・・・。」

翔鶴「・・・?」

—————

〈指令室〉

同じ頃、指令室では長門と陸奥が頭を悩ませていた。

長門「やはり、こちらの動きは読まれていた様だな。」

陸奥「五航戦の翔鶴は中破。」

疲労の蓄積を考えても、次の作戦に出すのは

無理そうね。」

長門「戦術的勝利、戦略的敗北か・・・。」

陸奥「どうするの?」

MOを攻略して補給路を確保。

この前進基地に戦力を結集し、FS作戦を進めるという目論見だったけど……」

長門「補給路が伸びきっている以上、

拠点MO攻略は必須だ。

体勢が整い次第、再度攻略に向かうことを

提督に進言するつもりだ。」

陸奥「そうなるわね……。

それまでは、しばしこの南の島で休息。

ちようど良かったかもしれないわね。

皆には……。」

すると突然……。

コンッコンッコンッ

長門「入れ。」

劍城『劍城京介、入ります。』

扉が開き、劍城が入ってきた。

長門「どうした劍城？」

劍城「はい、艦隊の同行が敵に漏れているという

疑念についてなのですが。」

陸奥「ちよつと待つて。」

何でああなたがその事を知ってるの？」

劍城「MO攻略作戦前日に、天馬から聞きました。

俺の他に、神童先輩も提督の疑念について、

天馬から既に話を聞いています。」

長門「そうか。」

まあお前達にも、次期に話そうと思って

いたことだから別に構わん。

それで、疑念について何だ？」

劍城「はい、これはあくまで俺の勘ですが・・・。」



く中庭く

吹雪達は夕食を済ませ、寝室のある別館へと移動していた。

赤城と加賀も同行している。

吹雪「ふうく、お腹いっぱい。」

睦月「でしよ？

睦月も美味しくて沢山食べちゃった。」

天馬「食べたばかりなのに、明日の朝ごはんが

楽しみになってきました。」

夕立「部屋も食事に負けないくらいすごいっぱい！

ベッドふかふかっぱいよ！」

吹雪「ほんと!？」

でも、大和さんがそんなに凄い戦艦なら、

何で私達今まで知らなかったんだらう？」

天馬「俺たちの世界では、戦艦大和は大戦当時

その存在が隠され続けていたんです。」

吹雪「えっ？

そうなの？」

天馬「ええ、現在でこそ戦艦大和は、日本国民に

最も知られた軍艦と言っても過言では

ありませんが、太平洋戦争中はその存在自体が

最高軍事機密とされたこともあり、当時の

国民には長門型戦艦の長門と陸奥が海軍の

象徴として親しまれていました。

ただ海軍関係者には、名前だけがいつの間にか

広まっていたそうです。」

吹雪「そうなんだ。」

赤城「このトラツク島前進基地を管理している

大和さんも、その存在を隠すため他の

艦娘と海に出た事もないと言われています。

そのせいで、実戦に出たことは無いとの

話です。」

吹雪「大和さん、海にも出たこと無いんだ・・・。」

夕立「その辺は吹雪ちゃんに似てるツポイね。」

睦月「そうだね。」

神童「それにしても天馬、お前戦艦大和について

凄く詳しいな。」

吹雪「天馬君、戦艦大和の大ファンなんだって。」

赤城「仲良くなれると、いいですね。」

天馬「そういえば、剣城見ませんでしたか？」

睦月「剣城君なら、何か気になることがあるから

長門秘書艦に話してくるって。」

吹雪「気になること・・・大和さん、海に出たくな
ないのかな？」

一同「えっ？」

加賀「どういうこと？」

吹雪「天馬君には以前お話したんですけれど

私、今の鎮守府に来る前はほとんど実戦に

出してもらえなくて：

だから、皆と一緒に海へ出たたって、

毎日思ってたんです。」

赤城「大和さんもそう思っているって？」

吹雪「わかりませんが、艦娘だったらみんな

そう思うんじゃないんですか？」

睦月「確かにそうだけど・・・。」

天馬「うん・・・」

一同は頭を悩ませるが答えは浮かばず、
1日を終えてしまった。



くビーチく

次の日、鎮守府一同は快晴の空の下
ビーチで楽しく遊んでいた。

島風「おっおおー！」

速いでしょ、ついて来れる？」

島風は沖で波乗りをしている。

ビーチでは大井と神童が呆れた目付きで

島風を見ていた。

大井「相変わらず速い速いってうるさいわね…」
神童「同感です…」

すると…。

北上「おまたせー。」

北上が黄緑色の水着を着てやって来た。

大井はその姿を見た瞬間、目が点になるどころか、
目がハートになった。

(ちなみに、大井はフリフリがついたピンク色の水着を
神童は黄緑と青のストライプの海パンを着用。)

大井「北上さん！」

その水着は！」

北上「ダメかな？」

「可愛いかなって思ったんだけど……。」

大井「凄く可愛いです！」

「凄く凄く可愛いです!!」

神童「よく似合ってますよ。」

北上「ほんと？」

「ありがとう。」

大井「ですが……。」

辺りには、他にも水着姿の艦娘がわんさかといた。近くの波打ち際には暁型四姉妹。

電「冷たいのです！」

雷「このくらい我慢しなきゃ……。」

浜辺の方では愛宕と高雄が楽しく追いかけてっこ。

愛宕「さあ、行くわよ〜！」

高雄「ちよつと待ちなさい！」

そして近くのヤシの木では、劍城と如月がヤシの実の収穫をしていた。

劍城「如月さん、いきますよ〜！」

如月「いつでもどうぞ。」

大井「こんな大勢の前で北上さんの水着を

さらすのはちよつと・・・」

北上「凄いねあの胸。」

大井・神童「えっ？」

北上の目線の先には、暁と愛宕がいる。

北上「まるで、同じ艦娘とは思えないね。」

大井「ええ…でも大きければいいという訳では…」

と、そこへ…

大井「うつ!？」

神童「これは…。」

3人の隣に、水着姿の大和・吹雪・天馬が
やって来た。

大和は赤と黒のビキニ姿だったが、どうやら
大井達はその姿に圧倒され言葉を失っている。

(ちなみに、吹雪は黒のスクール水着。

天馬は青と黄色の左右非対称カラーの海パン。)

吹雪「さあ、早く早く！」

天馬「泳ぎましょうよ！」

大井（カチン・・・）

「どうでしょう、あちらに行かれては？」

「どうか行つてください。」

大和「は、はあ…」

吹雪「じゃあ、あつちに行きましょう。」

吹雪達3人はその場から移動した。

—————

くビーチBく

別のビーチへと移動した3人。

そこは誰もおらず、回りはヤシの木など背の高い木に
囲まれている。

天馬「ここなら誰も居ませんから、のんびり

出来ませよ。」

吹雪「さあ、大和さんも泳ぎましょう！」

大和「でも私、お昼の会食もありますし……」

天馬「後で俺達が手伝います！」

大和「そうですか。」

それじゃあ、ちよつとだけ……」

吹雪「それで、思い切つて艀装つけて

沖に出てみませんか？」

私たちも一緒に出ますから！」

大和「えっ？」

で、でも……」

すると……

長門「ダメだ。」

そこへ長門がやって来た。

吹雪・天馬「長門秘書艦……。」

長門「この前進基地から出るとは認められん。」

天馬「ですけど……！」

長門「大和。」

大和「……二人とも、ごめんなさい。」

大和はそのまま基地へと帰っていった。

長門「二人の大和に対する気持ちはよく分かる。

だが、余計なことはするな。」

吹雪・天馬「……。」

E p i s o d e 1 6 / 大和、海へ！

〈前進基地 204号室〉

海水浴を終えたその日の夜、吹雪・天馬
睦月・夕立は寝室で寝る支度をしていた。
が、吹雪と天馬は頭を悩ませていた。

天馬・吹雪「納得出来ない（ません）！」
睦月「しょうがないよ。」

長門秘書艦がそう言ったんでしょ？」

天馬「じゃあ、睦月さんは大和さんがあのまま
いいと思ってるんですか？」

吹雪「そうだよ！」

大和さんは戦艦なんだよ！

ホテルの支配人じゃないんだよ！」

夕立「じゃあ、天馬君と吹雪ちゃんは

どうするツポイ？」

吹雪「それは、わからないけど……。」

天馬「……俺、ちよつと散歩行ってきます。」

突然、天馬は寢室を後にした。

吹雪「あ、待ってよ天馬君！」

吹雪も後から天馬を追いかける。

—————

くびーちBく

天馬と吹雪は、今朝大和と3人で訪れた

ビーチへとやって来た。

辺りは暗く、夜空には星が輝いている。

吹雪「やっぱり、睦月ちゃんの言う通り

しょうがない事なのかな？」

天馬「うくん……」

すると後方から……

大和「あら、吹雪ちゃんに天馬君。」

天馬「大和さん、どうしたんですか？」

大和「ちよつと夜の散歩です。」

吹雪「大和さん、やっぱり海に出てみたいんですよね？」

大和「……はい。」

吹雪「ちよつとだけ、出してみませんか？」

大和「えっ？」

吹雪「海は素敵です。

みんなと一緒に海に出るのはとても

素晴らしいですよ。

ちよつとだけです。

私達がリードしますから、ね？」

大和「で、でも・・・」

長門「ダメだ。」

いつの間にかその場には長門もいた。

大和・吹雪「長門秘書艦。」

天馬「どうしてですか!？」

どうして長門秘書艦はそんなに大和さんを

海へ出そうとしないんですか!？」

俺と吹雪さんが大和さんを海へ出そうとすると

長門秘書艦は理由も無しに“ダメだ”と

言うだけで!!

何か俺達に言えない理由でもあるんですか!？」

珍しく天馬が激怒している。

長門・吹雪・大和は、天馬の激怒に驚いている。

長門「わ、わかった、理由はあるんだ。

ちゃんと話すから落ち着いてくれ。」

長門の言葉で天馬は落ち着きを取り戻した。

長門「ただその前に大和、お前から理由を

話してもらっていいか？」

大和「はい……。」

大和は少々恥ずかしそうに話す。

大和「実は私、凄く大食らいなんです。」

吹雪・天馬「大食らい？」

長門「二人は、大和のスペックを知っているか？」

天馬「新造時のスペックは、兵器だと

45口径46cm3連装砲塔が3基、

60口径15.5cm3連装砲塔が4基、

40口径12.7cm連装高角砲が6基、

25mm3連装機銃が8基、

13mm連装機銃が2基、

装甲だと、舷側が410mm、

甲板が200mmから230mm、

主砲防盾が650mm、

艦橋が500mmです。」

吹雪「凄い装備……」

長門「その通りだ。」

お前達も知っての通り、大和は戦艦の中でも

トップクラスだ。

だが、それだけの装備を積んでいることも

あつて、資材と燃料の消費量が破格で運用が難しいのが難点でな。

最重要艦だけあつて、ダメージを受けて

大量の資材を消費するのは避けたい。

だから今まで、大和を海上での戦闘に

出撃させなかったんだ。」

吹雪「そうだったんですか・・・。」

長門「もちろん、箱入り娘になってしまつて

いることは私もわかつている。

問題が解決され次第、実戦に参加することにな

るだろう。」

天馬「じゃあ、いずれは一緒に！」

長門「ああ、いつと約束は出来ないがな。」

吹雪・天馬・大和「ありがとうございます！」



次の日の朝、天馬はビーチでリフティングを
吹雪はランニングをしていた。

天馬「でも、あれで本当に良かったんでしょうか？」
吹雪「うん……。」

すると、大和がやって来た。

大和「二人とも、朝からトレーニングですか？」
吹雪「大和さん。」

「そうなんです。」

天馬「どうでしょう、せつかくですし3人で

パス練習でもしませんか？」

大和「いいですね、それ。」

吹雪「やろうやろう！
やりましょう！」

3人は正三角形になるように立ち、パス練習を始めた。

大和「私、この島にきた時から毎日一度は

ここに来て海を眺めていたんです。」

吹雪「大和さん……。」

大和「私だって艦娘です。」

みんなを守るために存在しています。

だから、ホテルみたいなんて言われると

寂しくもなります。

でも、今は仕方ありません。

来るべき日まで、ここで精一杯頑張ります。

だから、もう大丈夫です。

ありがとう。」

吹雪・天馬「……。」



く入渠ドック 大浴場く

同じ頃、入渠ドックでは長門が朝風呂をしていた。
すると・・・。

リス「チュツ」

森から浴場へリスがやって来た。

長門「ん?」

キヨロキヨロ

長門は誰も居ないのを確認すると・・・。

ガシッ

リス「チュ!?!」

長門はリスを両手で掴むと、そのまま頬でスリスリし始めた。

長門「可愛いでちゅね♡

私だって好きであんなこと言ってるんじや

ないでちゅよ?!

本当はこんな…!」

陸奥「朝風呂?」

長門「っ!?!」

いつの間にか後方には陸奥。

長門は驚き、リスは長門が手を放したすきに森へと逃げた。

長門 「聞いてたか？」

陸奥 「聞いてたって、何を？」

長門 「いや、何でもない……。」



くビーチAく

その日の午後、艦娘達はビーチで楽しく遊んでいた。

だが、吹雪と天馬はヤシの木の下で考え事をしていた。

吹雪 「大和さん、あれでいいのかな？」

天馬 「なんとか規律を守ったまま、大和さんを海上へ

連れていく方法って無いでしょうか？」

あれこれ考えていると、海の方から睦月と夕立の呼び声が聞こえた。

夕立「吹雪ちゃんもおいでッポイ〜！」

睦月「一緒に乗ろうよ〜！」

睦月と夕立は海上で流木の上に乗って遊んでいた。

吹雪・天馬「流木・・・？」

あつ、そうか！

そうすれば・・・ん？」

物凄くいい感じにハマった。

吹雪「もしかして同じこと考えてる？」

天馬「なら早速、行動開始です！」

吹雪「うん！」

大和と吹雪は大急ぎでビーチを後にした。

睦月「吹雪ちゃん？」

夕立「何かあったツポイ？」

—————

くビーチBく

数分後、吹雪は大和を連れて昨夜訪れたビーチにやってきました。

そこでは、天馬が海上輸送などに使用する小型の運材船を準備していた。

天馬「吹雪さん、いつでもOKですよ。」

吹雪「ありがとう、天馬君。」

大和「あの、これはいつたい…」

天馬「乗ってください。」

これに乗ったら、俺と吹雪さんが沖まで

運んでいきます。」

吹雪「それなら規律は守ったまま、沖に

出られるでしょう？」

大和「吹雪ちゃん、天馬君…」

吹雪「大和さんが言ったこと、凄く立派だと

思っています。」

でも、やっぱり私達我慢出来ないんです！

私も皆と海に出られなかった時期があるし、

天馬君も仲間とグラウンドに出られなかった

時期があるからわかるんです！

だから…」

大和「・・・ありがとう、吹雪ちゃん、天馬君。」

吹雪「大和さん！」

天馬「よし、それじゃ出航準備といきましょう！」

そして数分後、出航の準備が整った。

吹雪「じゃあ行きますよ！」

天馬君、準備はいい？」

天馬「波動エンジン回転数良好！」

いつでも、出力最大でいきます！」

吹雪「OK！」

それじゃあ、いきますよー！」

吹雪・天馬「せーの・・・ふんっ！」

ゴオオオオオオオツ!!

2人は互いにエンジンを吹かし、吹雪は大和を乗せた運材船を牽引し、天馬が後方から押す。

そして、3人は無事出航することが出来た。

大和「まあ。」

吹雪「やった!」

天馬「よしっ!」

—————

トトラック島 近海

3人は、島を一周する形でトラック島近海を航行していた。

大和「みんな海へ行くってこんなふうなんですネ。

一人で行くのは大違いです。」

天馬「陣形とか組んだりもするんですよ?」

大和「今の布陣だと、おそろく単縦陣ですね。

私の左右にもう2隻を置けば輪形陣です。」

吹雪「よくご存知ですね。」

大和「はい、出撃に備えてちゃんと勉強して

いますから。」

天馬「じゃあ、出撃の許可が下りたらすぐ一緒に

戦えますね。」

大和「はい。」

吹雪「えへへっ。」

海上で楽しい時間を過ごす3人。
だが……

大和「……？」

これって……対空電探に、感あり。」

吹雪「えっ？

どこ!？」

天馬「見えました！

1時の方向、上空です！」

吹雪は天馬の指示した方向を見る。

すると、上空を敵機が4機飛行するのが見えた。

天馬「そういえば今朝、第二艦隊から艦載機を

撃ち漏らしたと入電がありました！」

吹雪「攻撃しなきゃ！

天馬君、今の装備で制空戦か対空射撃は

「できる!?!」

天馬「ダメです!」

今ファルコンとゼロは基地でメンテナンス中

ですし、この間の戦闘で三式弾・空間魚雷

艦対空・地ミサイル共に全部使い切って

しまつて残弾ゼロ!

パルスレーザーじゃ届きませんし、この距離じゃ

ショックカノンで迎撃するのは難しいです!」

吹雪「そんな……。」

大和「私がやってみます。」

吹雪・天馬「えっ?」

突然、大和が動き出した。

背中に巨大な艀装を背負い、海上に立つ。

吹雪「大和さん、でも……。」

大和「大丈夫です。

責任は私がかかります。

敵機補足！

主砲、三式弾装填！」

大和は主砲3基を敵機の前方に向ける。

大和「仰角最大・・・照準よし！」

そして・・・

大和「全主砲、薙ぎ払え！」

ズドン！！

大和の主砲から三式弾が勢いよく放たれ、海上は砲撃時の風圧で荒波をたてる。

放たれた三式弾は上空で炸裂し、敵艦載機は一瞬にして破壊された。

天馬「凄い、一撃ですよ。」

吹雪「でも、こんな凄い音したら、流石に

みんな気づいたよね……。」



くトラック島 岩壁く

案の定、岩壁の近くで長門と陸奥が様子を見ていた。

長門「第二艦隊に伝えろ。」

『撃ち漏らした艦載機は撃破した。』とな。」

陸奥「はい。」



くビーチBく

数分後、吹雪・天馬・大和は無事に元のビーチへと戻ってきた。

天馬「何とか着きましたね。」

が、そこには既に長門がいた。

吹雪「長門さん……。」

長門「……。」

大和「待つてください！吹雪ちゃんと天馬君は

何も悪くないんです！

私が……。」

長門「何を言ってる。」

もうすぐ夕食の時間だぞ？」

3人「えっ？」

長門「吹雪と天馬も、急いで戻れ。」

そう言い残すと、長門は去っていった。

吹雪「長門さん……。」

天馬「何かあったんでしょうか？」

大和「さあ……？」

一方、長門はビーチを後にし基地に向かってしていると、何やら笑みを浮かべる陸奥に遭遇した。手には長門が朝風呂で遭遇したであろうリスが。

長門「なんだ？」

陸奥「別に。」

長門は陸奥の前を通りすぎる。

と、陸奥は朝風呂時の長門と同じ仕草をした。

陸奥「甘いでちゅね、長門秘書艦も♥」

長門「ぢゅっ?!?!」

どうやら浴場でのことはしっかり見ていたようだ。



く前進基地 ダイニングルームく

その日の夜、基地のダイニングルームでは
盛大なディナーが行われていた。

大和「今日のディナーは特別豪華ですからね。」

たくさん食べてくださいね！」

一同「おぉー！」

テーブルには、ローストビーフなど豪華な料理が
沢山並んでいた。

金剛「ウオー！」

大和ホテルの夕食、やみつきに
なりそうネ！」

天馬「ちよつと金剛さん。」

金剛「ホワイ？」

吹雪「大和ホテルじゃありませんよ？」

大和「はい。」

私は大和型一番艦・・・大和です！」

Episode 17 / トラック島の幽霊

↳トラック島 工場↳

カーンッ！ カーンッ！

ある日、天馬は工場でハンマーの音を響かせ、
何やら作業をしていた。

天馬「ふう、あと少しだ。」

と、そこへ……。

吹雪「天馬くん。」

大和「何をやられているのですか？」

天馬「吹雪さん、大和さん。」

ちよっとロケットアンカーを改造している
ところなんです。」

吹雪「ロケットアンカーを？」

天馬「はい。」

本来は岩壁とかに打ち込んで船体を固定する
為に使用される装備ですけど、上手く

改造すれば、近距離での戦闘に使える

武器になるんじゃないかって思ったんです。」

大和「どのように改造するんですか？」

天馬「アンカーの先端部分を伸縮する仕組みにして、
剣として使えるようにしようと思っています。」

で、アンカー内部に99式波動コイルを
組み込んで、アンカーに波動防壁を展開
させられるようにします。」

そうすれば、錨として、剣としての効果が
格段に上がるはずなんです。」

大和「なるほど、防御システムを攻撃に使うとは

考えましたね。」

吹雪「ねえ、よかつたら私に手伝わせて。」

大和「私もお手伝いいたします。」

天馬「ありがとうございます、助かります。」

天馬は吹雪と大和の手を借りて、ロケットアンカーの改造作業を進めた。

そして数分後……。

天馬「よし、完成です！」

大和「それじゃ、早速テストといきましょうか？」

天馬「はい！」

天馬は改造したロケットアンカーを手袋の甲にセットすると、アンカーの先を伸ばし、剣に変化させた。

シャキーン！

天馬「ロケットアンカー、波動防壁展開！」

ピカーン！

アンカー全体に青白いシールドがコーティングされた。

天馬「お願いします！」

吹雪「いくよー！」

大和「いきます！」

吹雪はハンドボールサイズのポーキサイトの塊を

大和は同サイズの鉄球を天馬に向けて勢いよく投げた。

天馬はタイミングを計り、鉄球とポーキサイトの塊を切斷した。

スパーン！ スパーン！

ドンツ！ ドコン！ ゴトン！ ドーンツ！

鉄球もポーキサイトの塊も、綺麗に真っ二つに切斷された。

天馬「うわぁ…」

吹雪「なんて鋭い切れ味…」

大和「これは… 今後の所持と使用には細心の注意が

必要ですね…」

天馬は剣を収納し、元の錨に戻した。
すると突然…

ガンツガラガラガラ…

工廠の奥の方で何かが崩れ落ちる様な音がした。

天馬「なんだ?!」

天馬達は音がしたところへと向かった。

そこでは、大量の傾向缶が棚から落っこちて転がっていた。

吹雪「傾向缶が転がってる。」

天馬「どうやら、上の棚から落ちたみたいですね。」

大和「変ですね、地震とかが起きない限りは

落ちることないはずなのですが……。」

すると……

ガタンッ!

3人「!?」

後方で又しても何かが落ちる音がした。

直ぐさま振り向くと、そこには傾向缶を持って急いで工廠を出ていく人影が見えた。

天馬「今の、人ですか？」

吹雪「でも、私達が工廠に来たときは天馬君しか

居なかったと思うけど。」

大和「もしかすると、噂の幽霊ではないでしょうか？」

天馬・吹雪「幽霊？」

ギイイイ・・・ドタン!

バタンツ! バタンツ! バタンツ!

突然、工廠にある全ての扉・窓・雨戸が閉じ、

工廠内は一気に真っ暗になった。

天馬「なんだ?！」

吹雪「今度はなんですか!？」

すると・・・。

ボウツ

大和が何処から持ってきたのかローソクに火を付け、灯りをとった。

大和はローソクを地面の上に立てると、ローソクを見るように正面で正座をして座った。

天馬と吹雪も正座をして座った。

大和「実は最近、このトラック島には正体不明の

幽霊がいるという噂があるんです。」

吹雪「正体不明の幽霊？」

大和「はい。」

しかも既に、3人も目撃者がいます。」

天馬「3人も？」

大和「ええ。」

最初に幽霊を目撃したのは赤城さんです。

ある日の深夜、お腹が空いたので厨房で

食べ物を探していた時に遭遇したそうです。」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

く某日深夜 厨房く

ガサガサ・・・ゴソゴソ・・・

赤城「缶詰めとかレトルトカレーとか

無いものでしょうか？」

赤城は厨房で食べ物を探していた。

赤城「あ、サバ缶みつけ♪」

食べ物が見つかり、喜ぶ赤城。
すると・・・。

ゴトンツ

赤城「ん？」

すぐ右隣で物音がした。

赤城は恐る恐る右を向くと、そこには青い瞳の少女が柵の中を漁っていた。

赤城「えっと、どなたですか？」

トイレに行つたとき見たそうです。

榛名「お姉様、大丈夫ですか？」

金剛「大丈夫デース！」

この金剛に任せておけばノー・プロブレム！

泥舟に乗つたつもりでいるですネー！」

榛名「それを言うなら大舟です…」

金剛は懐中電灯で暗い通路を照らし、榛名は金剛の

右腕にしがみつきながらゆっくりと進む。

すると…。

榛名「…!?」

突然、榛名が咄嗟に後ろを向いた。

金剛「どうしたんデース？」

榛名「今、誰かが後ろを通りすぎた様な……」

金剛「きつと気のせい……うっ!？」

今度は金剛が声をあげた。

榛名「どうしました?」

金剛「あ、あれを見るデース……」

金剛の示す先には、赤く光る玉が2つ
ユラユラと揺れていた。

金剛「あれって……」

榛名「火の玉……ですか……」

そして、火の玉の向こうから怪しい人影が
歩いてくるのが見えた。

金剛・榛名「きゃあああああ!!」

二人はその場から猛スピードで逃げ出した。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

大和「・・・と、いうことです。」

吹雪「そんなことがあったんだ……」

天馬「じゃあ、さっき俺達が見た人影も

その噂の幽霊だと……?」

大和「絶対とは言えませんが、もしかしたら……」



くビーチAく

ジュー

その日の夜、艦娘達はビーチでバーベキューをしていた。

羽黒「はい、電ちゃん。」

電「ありがとうございます!」

暁「ちよつと!」

お肉もう無くなってるじゃない!」

足柄「グルルルル!」

足柄がほとんど食べていた。

金剛「流石は足柄、英国で飢えたウルフト

呼ばれてただけありマース……」

夕張「大丈夫よ、まだお肉は沢山あるから

どんどん食べてちょうだい！」

一方その隣では、天馬・吹雪・大和・睦月・夕立

長門・神童・劍城・赤城・加賀・翔鶴・瑞鶴の

計12人がカレー作りをしていた。

天馬・吹雪・睦月・夕立は、ニンジンとジャガイモの皮剥きを担当。

睦月「ピーラーってあんまり使ったことないから

難しいね……」

夕立「ツポイ……」

手間取る二人を尻目に、天馬はジャガイモの皮を

ピーラーでスイスイと剥いていく。

吹雪「天馬君、お料理ほんと上手だね！」

天馬「よく秋姉の手伝いをしてましたから。」

加賀・翔鶴・瑞鶴はタマネギを担当。

翔鶴「ひつく、目にしみます……」

瑞鶴「何でタマネギを切ると涙が出てくるのよ!？」

瑞鶴「……」。

涙目になっている翔鶴と瑞鶴と違い、黙々と

タマネギを切る加賀。

が、流石に目がうるうるになっている。

そして神童・劍城・大和・長門は、皮を剥いた

ニンジンとジャガイモを切る担当。

劍城「ニンジンって、銀杏切りですよね？」

神童「いや、家では半月切りだ。」

大和「長門さん、ジャガイモは角を落とさないよ。」

でないよと煮崩れを起こしますよ。」

長門「別にいいではないか、これくらい。」

大和「ダメです！」

いくら相手が秘書艦でも、これだけは

絶対に譲れません！」

神童「ところで、さっきから切った野菜が

次々と消えていくのだが、誰か食べてるのか？」

確かに、かごには随分切ったはずの野菜が全く無い。

一同は一人の艦娘に目を向けた。

それは……。

神童「赤城さん。」

赤城「神童君、どうされました？」

モグモグ・・・」

劍城「もしかして、さつきから俺たちの切った

野菜、食べてます？」

赤城「っ!？」

そそ、そんなことは・・・。」

長門「口元に野菜のクズが付いてるぞ……」

赤城「あ……」

すると・・・

ヒュウツ…

突然、建物の灯りが一斉に消えた。

天馬「あれ？

停電かな？」

大和「変ですね。

ここは地下に発電機を設けていますから
故障とか起きない限り停電するはず無いと
思うのですが……。」

劍城「となると、原因は地下の発電機ですね。」

長門「なるほど。」

夕張、すまないが劍城と共に発電機の様子を
見に来てくれませんか？」

夕張「わかりました。」

じゃあ劍城君、一緒に……。」

すると……。

「出たああああああ!!」

一同「!?!」

建物の方から比叡の叫び声が出た。

声のした方向を見ると、比叡が猛スピードで

そんなバカな……。」

と、そこへ霧島が息を切らせながら遅れてやって来た。

霧島「ゼエ……ゼエ……。」

ですが、確かに誰かいたんですよ！

女の人の影が！」

天馬「女の人？」

大淀さんか陸奥さんと見間違えたんじゃない

ないんですか？」

長門「いや、二人は今ドックで入渠しているはずだ。」

剣城「となると、深海棲艦がトラック島内に

いるかも知れないな。」

一同「っ!？」

剣城の発言に、その場にいた一同は凄く驚いた。

天馬「深海棲艦がトラック島に!？」

剣城「実は長門秘書艦と陸奥さんには既に話して

あるんだが、今までの作戦で深海棲艦は

まるでこちらの作戦を知っているかの様な

行動を取っている。

提督の予想では、敵が俺達と同じ暗号を

使用している為の情報流出と見ているが、

俺は深海棲艦のスパイが潜り込んでいるんじゃないかと思っ

ているんだ。」

加賀「では、近頃トラック島で目撃されている

幽霊の正体は深海棲艦だと?」

剣城「あくまで、俺の勘ですがね。」

ですが、本当に深海棲艦のスパイがいたとしたら

そいつは皆が寝静まった夜のうちに情報を盗み

外部へ流出させていると考えていいでしょう。

もし幽霊の正体が深海棲艦なら、説明がつく。」

長門「確かに、可能性は十分に考えられるな。」

天馬「神童先輩・剣城・吹雪さん・睦月さん

夕立さん・大和さん・長門秘書艦・赤城さん

加賀さん・金剛さん・夕張さん、俺と一緒に

幽霊探索に来てください！

残りの皆さんは、ここで火の番と周辺の監視を

お願いします！」

一同「はい！」

天馬「よし、それじゃ幽霊探索に出撃だー！」

一同「おー！」



く前進基地 厨房く

天馬達は最初に、赤城が幽霊を目撃した厨房へとやって来た。

天馬「赤城さん、どの辺で幽霊を見たんですか？」

赤城「そこにある食料品棚の辺りです。」

食べ物を探していたら、すぐ隣に女の人が

いて、呼び掛けてみたら煙のように

その場から消えたんです。」

加賀「見たところ、特に変わったところは

見当たりませんね。」

天馬「よし、ではここからはチームを3つに分けて

別々に行動しましょう。」

劍城・睦月さん・金剛さん・夕張さんは

地下の発電施設の様子を見てきてください。」

劍城「了解した。」

天馬「神童先輩・長門秘書艦・加賀さん・夕立さんは

指令室の様子を見てきてください。」

神童「わかった。」

天馬「吹雪さん・大和さん・赤城さんは俺と一緒に

本館内部の散策をお願いします。」

吹雪「わかった。」

大和「了解です。」

赤城「わかりました。」

こうして、剣城達は地下の発電施設へ

神童は指令室へ、天馬達は本館内部の散策へ向かった。



く地下 発電施設く

発電施設へとやって来た剣城達。

が、発電機は故障も無く正常に動いている。

金剛「発電機は特に問題は無さそうですね。」

劍城「となると、配電盤のヒューズが切れて
電源が落ちたのか？」

劍城は配電盤の方に目を向けた。

が、配電盤のスイッチは全てONになっており
ヒューズが切れた様子もない。

夕張「この基地全体の電気を管理する配電盤よ。

この発電機が発電する高電圧の電気でも

耐えられる構造になってるけど。」

睦月「劍城君、これ見て。」

睦月は劍城に一本の太めのコードを見せた。

コードの先端は引きちぎれた様になっており、

配電盤の近くの壁にはコードが入りそうな程の
小さな穴が見える。

劍城「どうやら、発電機から配電盤へ電気を送る

コードが切られたようだ。

先端の様子からして、誰かが無理矢理

コードを引っ張って引きちぎったんだろう。」

夕張「となると、やはり深海棲艦のスパイが？」

劍城「かもしれないですね。」

こんな太いコードを引きちぎるってのは

俺達のような人間じゃまず無理です。」

すると・・・

ギイイイイ・・・ガチャン！

突然、入り口の扉がひとりでに閉まった。

劍城「なにつ!？」

劍城は咄嗟に扉を開けようとしたが、鍵がかかったのか扉はびくともしない。

劍城「くそっ！

完全に閉じ込められた！」

睦月「そんな!？」

金剛「どうするデース!？」

夕張「お、落ち着いて。

取りあえず、この部屋にあるもので

扉を開けられないかやってみましょう。」

劍城「くそっ！

誰か、誰かいないか!？」

このとき、劍城達は扉の外に一人の少女がいたことに全く気づいていなかった。

少女はその場を後にし、通路の暗闇へと消えた。



く指令室く

一方、神童達は指令室へとやって来た。

着いた直後、一同は早速中の書類棚やデスクの書類を確認し始める。

加賀「重要な書類が盗まれていないと

いいですけど……」

神童「反抗作戦の重要書類が外部に流出していたら

大変なことになりますよ。」

長門「それなら心配はいらない。

作戦に必要な重要書類は書類保管庫で厳重に保管してある。

鍵は私と陸奥と大淀しか開けることは

不可能だ。」

夕立「それなら安心ッポイ？」

すると・・・

バタンツ！ ガチャ！

突然、指令室の扉がひとりでに閉まった。

神童「扉が勝手に!？」

神童は扉を開けようとしたが、扉はびくともしない。

長門も加わるが、やはり空かない。

カギを開けてみても。

長門「ダメだ、びくともしない。」

夕立「もしかして、閉じ込められたッポイ!？」

加賀「そう考えるのが自然ね。」

だがこのとき、神童達も外に少女がいたことに気づかなかった。

「フフフ．．．。」

少女はその場を離れ、暗闇へと消えた。

E p i s o d e 1 8 / 幽霊を探せ！

く本館 2階廊下く

神童達と剣城達が閉じ込められている頃、天馬達は発電施設と指令室を除く、本館にある全ての部屋の捜索に動いていた。

天馬「実験室に提督室に仮眠室に入渠ドックに

ダイニングルームに作戦室、その他怪しい部屋は徹底的に捜索したのに、何も変化なしですね。」

吹雪「もしかして、この建物にいないのかな？」

大和「あと見ていない建物は、別館と工廠と

出撃用ドックです。」

赤城「本館には何も異常は無いようですよ、

ちよつと見に行ってみましょうか。」

く3階廊下 指令室前く

3階にたどり着いた天馬達。

だが、そこに謎の人影はなかった。

吹雪「あれ、見失ったかなあ？」

大和「確かに上へと上がった様

に見えませんでした。」

赤城「下りますか？」

天馬「そうですね、特に異変は……。」

ドンツ！ドンツ！ドンツ！

一同「っ!？」

突然、何処かからドアをノックするような音が聞こえてきた。

『くそっ!』

誰かいないか!』

扉の向こうから聞き覚えのある少年の声がある。

天馬「その声、神童先輩ですか?」

神童『その声は天馬か!』

すまないが、この扉を開けてくれないか!

どういう訳か閉じ込められてしまった!

カギを開けたのに開かないんだ!』

天馬「わかりました!

ちよつと待っててください!」

天馬は3階を後にし外に出ると、工廠に向かって一直線に走り出した。

く 工廠 倉庫 く

工廠に着いた天馬は、倉庫の中であるものを探していた。

そして工具箱の中を見たとき、あるものを発見した。

天馬「あつたあつた！」

天馬が発見したのは、解体工事で板を剥がす時や泥棒が扉をこじ開ける時に用いられる鋼鉄製のボール。天馬はボールを手にとると、急いで神童達のいる指令室の前へと向かった。

↳ 3階廊下 指令室前↳

指令室前では、吹雪達がどうにか扉を開けられないかと色々やっていた。

そこへ・・・

天馬「皆さん、お待たせしました！」

吹雪「天馬君！」

・・・なにそれ？」

天馬「見ての通り、ボールです。」

赤城「もしかして、これで扉をこじ開ける

つもりでは・・・。」

大和「まあ、現状では有力な手段ですね・・・。」

天馬は、ボールの先端を壁と扉の間に差し込み

そして強引にこじ開けようとする。

ギシッ！ ギシッ！

一同が冷や汗を流しながら見守った。
そして・・・

バタンッ！

開かずの扉が開き、神童達は無事解放された。

神童「助かった、ありがとう天馬。」

天馬「どういたしまして。」

長門「しかし、なぜ扉が急に？」

赤城「やはり、他に誰かいるのでしょうか？」

夕立「ひよつとして、劍城君達も私達みたいに

閉じ込められてるッポイ!？」

天馬「大変だ！

今すぐ地下の発電室に向かわないと！」

一同は剣城達がいる地下発電施設へと向かった。

—————

く地下 発電室前く

発電室の前に来た一同。

すると、ゴンゴンと扉を叩く音と人の声がある。

剣城『おい！誰かいないか！』

天馬「剣城！」

剣城『天馬か!?!』

すまない、どうやら発電室に閉じ込められて

しまったようだ！』

天馬「待ってて！

今、扉を開けるから！」

天馬は先程と同様に、壁と扉の間にボールの先端を差し込む。

ギシッ！ ギシッ！

そして……

ギギギギギギ……

バタンツ！

強引に扉をこじ開けた。

剣城達は無事に発電室から解放された。

剣城「助かった、ありがとう天馬。」

天馬「どういたしました。」

長門「ところで、発電室の中はどうなっていた？」

夕張「発電機から配電盤へと繋がるケーブルが

強引に引きちぎられていました。」

加賀「剣城君の言う通り、何かいるようね。」

金剛「これからどうするデース？」

天馬「これ以上、分散して別々に行動するのは

危ないですね。

ここから先は全員一緒にトラック島内を

散策しましょう。」

長門「そうだな。」

睦月「ちよつと！」

みんな、あそこに誰がいる！」

一同「!？」

突然の睦月の発言に、一同は慌てて睦月の示す方向を見た。

その先には、何やら人の影が見える。

天馬「お前は誰だ!?

そんな暗闇に姿を隠していないで出てこい!!」

謎の人影は天馬の呼び掛けに答えず、そのままその場から逃げ出した。

天馬「あつ、待てっ!!」

一同は天馬を先頭に、謎の人影を追いかける。



くビーチく

一方その頃、ビーチでは足柄と暁がカレーの

辛さでもめていた。

足柄「カレーは辛口よ！」

辛口じゃないと美味しくないわ！」

暁「辛口カレーなんて食べれたものじゃないわ！」

レディーには甘口カレーで丁度いいのよ！」

足柄「辛口!!」

暁「甘口!!」

そんな二人を尻目に、比叡・瑞鶴・翔鶴・羽黒は

カレー鍋の番を、霧島・響・雷・電は飯盒でご飯を

炊いていた。

電「お腹、空いたのです……」

響「ヤーハチキューイエースチ……」

雷「ねえ、ご飯まだ炊けないの？」

霧島「私の計算では、あと3分で炊き上がるかと。」

瑞鶴「まったく、いつまで言い争ってるのやら……」

羽黒「早くカレー粉を入れないと、野菜が溶けて

スープになっちゃいます……」

翔鶴「いつそのこと、メニュー変えましょうか？

ボルシチとかビーフストロガノフとか……」

比叡「そうですね、最終手段に取っておきましょう。」

すると……。

天馬「待てえええ!!」

一同「ん?」

砂浜の向こうから人影を追いかける天馬達
がやって来た。

足柄「あれって、天馬達？」

暁「どうしたのかしら?」

天馬「足柄さん!

そいつを捕まえてください!」

足柄は天馬の言う通り、謎の人影を捕まえにかかると。

だが、謎の人影はまるでスタントマンの様に

足柄の頭上をジャンプで通過した。

足柄「なっ!?!」

人影は着地して再び走り出すが、今度は比叡と霧島が行く手を塞ぐ。

霧島「何処へ行かれるのですか、幽霊さん?」

比叡「さつきはよくも!」

人影は、今度は進行方向を90度左に変え砂浜から階段の方へと走る。

天馬「逃がすか！」

天馬は急停止し、その場で右手を握り、拳を勢いよく突き出し、突き出したと同時に右手のロケットアンカーを地面スレスレで勢いよく発射。

ガシャン！

アンカーは階段の直ぐ隣にあるコンクリートの堤防に突き刺さる。

天馬はアンカーが突き刺さったことを確認するとチェーンをピンと張った。

人影は逃げるのに必死で目の前のチェーンに気づいていない。

??? 「きゃっ!？」

ズテーション!

人影は足にチエーンが引つ掛かり、そして前のめりに転んだ。

一同は倒れた人影のところに集まる。

長門「見事だ、天馬。」

すると突然、人影はその場で立ち上がり額を擦り始めた。

??? 「いったあく……」

長門「お前、いったい何者だ？」

すると突然、基地に灯りが戻り辺りを照らす。そして人影の正体があらわになった。

天馬「あつ！ ヲ級！」

謎の人影の正体は、天馬とよく接触する深海棲艦空母ヲ級だった。

ヲ級「もう、何するのよ天馬！」

天馬「ごめん、まさか幽霊の正体が君だとは

思わなかったよ……」

天馬は人影の正体がヲ級だとわかって安心したが、他の艦娘達は酷く慌てていた。

吹雪「くく空母ヲ級、空母ヲ級ですよ!!」

長門「なぜ深海棲艦がトラック島内にいるのだ!？」

天馬「落ち着いてください。」

彼女は深海棲艦ですけど、敵じゃありません。」

大和「敵じゃないって根拠はあるんですか？」

天馬「はい。」

俺と劍城と神童さんは、稲妻町で彼女と

遭遇して、この世界に来たんです。」

天馬は稲妻町から鎮守府に来るまでの経路を話した。

睦月「・・・なるほど。」

じゃあ、前に劍城君と神童君が私達に

言ってた女の子って、この子のこと？」

神童「そういうことになりますね。」

瑞鶴「ちよつと待った！」

天馬が鎮守府で度々コイツに会ってるって

ことはさ、コイツは鎮守府の中にいたって

ことだよね？」

翔鶴「そうなるけど、それがどうしたの？」

瑞鶴「最近、作戦内容の外部流出が頻繁に起きてる

らしいけど、その原因がコイツじゃないかって
誰も思わないわけ!？」

一同「!!」

一同は思い出した。

剣城の堪では、深海棲艦のスパイが夜間に作戦の
情報を盗み、それを外部へ流出していると考えていた。
現状では、空母ヲ級が一番に疑われても
不思議ではない。

天馬「ちよつと待つてくださいい！」

さつき言つたじゃないですか！

彼女は敵じゃないって！」

瑞鶴「そうやって敵をフォローして敵じゃないって

信じこませよとする！

あんた、もしかして深海棲艦とグルだったんじゃない
やないでしょうね!？」

吹雪「ちよつと瑞鶴さん！」

彼女を疑う気持ちはわかりませんが、

天馬君はグルなんかじゃないですよ！」

大和「それに、天馬君が敵ではないと言うのなら

その言葉に掛けてみませんか？」

赤城「確かに、掛けてみる価値はありますけど……」

ヲ級との遭遇でパニック状態の一同。

すると……。

如月「みんな、幽霊の探索はどうだったの？」

基地の方から懐中電灯を持った如月がやって来た。

睦月「如月ちゃん。

それがね、幽霊の正体は深海棲艦の空母ヲ級
だったんだけど、そのヲ級が天馬君と面識が

あるみたいで、敵か敵じゃないかで

言い争ってるの。」

如月「そうなんだ。」

夕立「というか如月ちゃん、何で幽霊探索のこと

知ってるツポイ？」

剣城「なるほど、そういうことか。」

突然、剣城が口を開いた。

剣城「みんな聞いてくれ。

作戦内容流出の犯人が誰なのかわかった。」

一同「えっ!？」

剣城「みんなは、そこにいる空母ヲ級が犯人だと

疑っているようだが、犯人は彼女じゃない。

犯人は俺達の身近にいた人物に成り済まし、

FS作戦の内容を外部に流していた。

しかも都合なことに、その犯人は今、俺達の

近くにいる。」

天馬「犯人が、俺達の近くに!？」

ゾロツ!

瑞鶴「えっ?」

何故か天馬と剣城以外の一団は瑞鶴に目を向けた。

瑞鶴「ちよつと待ってよ!

確かに私はソイツが犯人だって疑ってるけど、

だからって犯人は私じゃないからね!」

剣城「安心してください、瑞鶴さん。

瑞鶴さんは犯人じゃない。

犯人は・・・

元第四水雷戦隊、睦月型駆逐艦の二番艦
如月さん。
「 안타だ。」

一同「ええっ!?!」

如月「……。」

睦月「如月ちゃんが……犯人!？」

Episode 19 / 明かされる真実

劍城「犯人は・・・」

元第四水雷戦隊、睦月型駆逐艦の二番艦

如月さん。

アంతだ。」

一同「ええっ!？」

如月「……。」

睦月「如月ちゃんが・・・犯人!？」

如月「ちよ、酷いわよ剣城君!」

剣城「往生際が悪い女は嫌われるぞ？」

どうする？

このままボロが出るまで、俺とフリートーク

でもするか？

如月さん・・・いや、深海棲艦!」

一同「えっ!？」

如月「・・・」

如月はその場で静かに眼を閉じる。

そして静かに眼を開くと、その瞳はいつもの紫から血のような赤へと変わっていた。

如月『才見事。』

1 本取ラレタワ、劍城京介君。』

如月の足下から赤いオーラが現れ、如月を包み込む。赤いオーラが消えると、如月は全く別の姿に変身していた。

白い体と白い髪、そして血のように赤い瞳その姿はまさしく……。

劍城「馴れ馴れしくフルネームで呼ぶのは

やめてもらおう、深海棲艦。」

深海棲艦「我が名ハ《飛行場姫》。

才前達ノ言ウ、棲地ヲ管理スル者。

デハ劍城京介、何故ワカツタ？」

劍城「お前は俺達と初めて会ったとき、海流に

飲み込まれて無人島に漂流したと言っていた。

でも、それは間違いだ。

俺は如月さんが轟沈してから、何日も

あのW島沖の海底を探索したからわかる。

あの海域は、海流の流れがほとんどない。

だから轟沈したのなら、波に流されたとしても

その場からそんなに遠くには行かないはず。

それに……。」

飛行場姫「ソレニ？」

劍城「如月さんは潮風で髪が痛むのが嫌だった。

だから潮風が吹くと、手で髪を押さえる

癖があつたんだ。

だが、お前は髪が潮風で靡いても、髪を

押さえるということはしなかった。

そこで俺は怪しいと思つたんだ。」

飛行場姫「ホウ……、才前ノ洞察力 ニハ感心スルナ。

才前ガ私ノ僕ナラ、褒メテヤリタイ。」

睦月「如月ちゃんをどうしたの!？」

飛行場姫「案ズルコトハナイ。」

如月トヤラハ今、私ノ体内ニイル。

私ハ海底デ轟沈シタ艦娘ヲ発見シ、
ソイツヲ取り込ムコトデ、新タナチカラヲ
得ルコトガデキタ。

先程マデ、私ガ如月トヤラニ化ケタ
ヨウニナ。」

劍城「キサマ・・・如月さんを返せ!!」

劍城は飛行場姫に殴りかかる。
だが・・・。

ガシツ!

飛行場姫は劍城のパンチを掴み受け止めた。

劍城「なにつ!?!」

飛行場姫「フツ!」

飛行場姫は、今度は劍城の腹部に強烈な衝撃波を叩き込む。

ドーン！ ガーン！

劍城は衝撃波を食らい吹っ飛び、そして石垣に背中からぶつかった。

劍城「クツ・・・！」

天馬「劍城！」

神童「なんて強さなんだ・・・。」

飛行場姫「・・・モウシバラク如月ニ成リ済マシ

情報ヲ盗ムツモリダツタガ、正体ガ

ばれテシマツタ以上、我ハコレデ

失礼サセテモラウ。

劍城京介、如月ヲ返シテホシイノナラバ

我ノ管理スル棲地ヘト来イ。

ソコデ決着ヲツケヨウ。」

そう言ウと飛行場姫は、その場から赤いオーラを出しオーラと共に、その場から姿を消した。

劍城「飛行場姫・・・。

今、如月さんはヤツの中にいる・・・。」

睦月「長門さん！

今すぐ敵の棲地へと向かいますよう！

如月ちゃんを助けないと！」

長門「ダメだ。

現状況では、ヤツの棲地が何処なのかは断定できません。

それに、先程の劍城のやられ方から見てヤツのパワーは我々の想像を遥かに上回っているだろう。

作戦までに大幅な戦力アップをしておいた

方がいい。」

睦月「そうですね……」

瑞鶴「あの……」

突然、瑞鶴が口を開いた。

瑞鶴「ヲ級、その……さつきはごめん。

アンタを犯人だって決めつけてさ……」

ヲ級「……気にしないで、私はあなた達とは

敵対関係。

一番最初に疑われても、しょうがないもの。」

瑞鶴「……それとき、アンタ天馬と随分親しい

みたいだけど、友達か何か？

前にも会ったことあります的なさ。」

ヲ級「天馬には前にも言ったけど、私

以前に会ったところがあるの……」

「今から6年前に。」

翔鶴「6年前？」

神童「6年前となると、天馬が小学校1年のときか？」

天馬「俺、そんな前に君と・・・？」

ヲ級「・・・こんな姿じゃ、わからないのも

無理ないわね。」

ヲ級は頭の帽子のような物を降ろす。

彼女の銀色の髪はショートヘアで、顔の左右の髪が

少し肩にかかっている。

そして、彼女の姿を見た天馬は、思わず自分の

目を疑った。

天馬「君は・・・まさか、ユキツペ!？」

ヲ級「ええ、やつと思いい出してくれたみたいね・・・」

吹雪「ユキツペって？」

天馬「鈴音 雪菜」、通称「ユキツペ」。

俺が小1のころ、稲妻町に転校してきた

銀髪の女の子で・・・

俺の初めての友達でした。

でも、彼女はその後3年後の七夕の次の日に、
飛行機事故で亡くなったんです・・・」

一同「!?!」

神童「その事故なら俺も知っている。

エンジントラブルによって空中爆発を

起こした、博多空港行きAWA3619便の

爆発事故。

乗員乗客、計500人以上が犠牲となった

最悪の事故だ。」

長門「・・・だが、ここにいるヲ級がその死んだ

雪菜という少女だという証拠はないのだから？

死人が生まれ変わって現れるなど・・・」

天馬「そうですね、でも・・・」

雪菜「私、覚えてるよ・・・」

転校してきたばかりの頃、天馬が私を

怪我をしてまでいじめっ子達から

守ってくれた、あの日のことを・・・」

~~~~~

6年前 稲妻町／西公園

それは、ある日の夕方。

公園のベンチで泣く少女と、それを一生懸命はげます少年がいた。

雪菜「ぐすつ……うう……」

天馬「もう泣くなつて！」

あのいじめっ子たちは追っ払って

あげたから。」

雪菜「でも……でも……あなたがケガを……」

天馬は、雪菜をいじめっ子から守ろうとしてケガをしていた。

頬には殴られた跡がある。

天馬「大丈夫だよ、これくらい。」

それより、君、転校生だよね？

名前は？」

雪菜「え？ ゆ 雪菜……」

鈴音 雪菜。」

天馬「じゃあユキツペだね。

オレ、松風 天馬。

オレ、サッカーが大好きなんだけど

全くダメでさ、みんなから”テンパー天馬”

って呼ばれてるんだ。

本当は呼ばれたく無いけどね……

稲妻町に来たばかりで、町のこととか

なんにもわかないでしょ？

よかつたら、オレのお気に入り場所

連れて行ってあげるよ！」

雪菜「で、でも……」

天馬「あつ！膝、擦りむいちゃったんだ。

それじゃ、ほら。」

天馬は雪菜に背中を向け、しゃがみこむ。

天馬「オレがおんぶしてあげるよ。

さあ、いこう！」

~~~~~

雪菜「あの時の背中の中の温かさは、決して

忘れなかった……。

それに、これも……。」

雪菜はポケットから、一枚の短冊を取り出した。
短冊には、願い事が書いてある。

夕立「これって、短冊ツポイ？」

睦月「『また天馬君に会えますように。』

雪菜』

4年前 稲妻小学校 / 3年2組

ある日の夕方、夕日の照らす無人の教室で話をする天馬と雪菜。

雪菜「明日、とうとう九州に引っ越すんだ。

ママの話じゃ、もう稲妻町の友達には

会えないかもだつて。」

天馬「そうなんだ……。」

じゃあさ、一緒に短冊に願い事を書こうよ！

稲妻町での最後の思い出に！」

雪菜「……うん！」

天馬と雪菜は、白い短冊の表と裏にお互い願い事を書いた。

そして……。

雪菜「あの事故の時、私はいつ爆発するかわからない飛行機の中で、この短冊を握り絞めて、強く願ったの。

それで、事故の後に気が付けば、私は

この世界で深海棲艦の空母ヲ級と

なっていた……。

そして、あの商店街で天馬に会った……。

私为天馬達をこの世界に導いたのは、あの

不思議な艤装を扱える存在があなた達だと

知ったからだと同時に、いつまでも

天馬と一緒にいたいと思っただけなの。

でも見ての通り、今の私は深海棲艦。

いきなりみんなの前に現れても、他の艦娘に

敵だと認識されるだけだと思っただけ、天馬の

前にしか姿を出さなかった……。

でも、いきなり私は雪菜だって言っても

天馬にきつと信じてもらえないと思ったから
空母ヲ級として天馬に接触し、天馬に
色々な情報を提供して、私は味方だと
思ってもらおうとしたの。」

天馬「そうだったのか・・・」

雪菜「姿は変わってしまったけれど、記憶と心は

鈴音 雪菜として、私の中で生き続け、

そして再び天馬に会うことが出来た。

私をいじめっ子から助けてくれた、

あの天馬に・・・」

天馬「きつと、織姫様と彦星様がユキツペの願いを、

叶えてくれたのかもしれないね・・・」

雪菜「フフっ。」

雪菜は帽子を再び被り、天馬と目を合わせた。

雪菜「ただいま、テンパーの天馬……。」

天馬「おかえり、ユキツペ！」

|||||

↳ 数分後 作戦室↳

数分後、鎮守府のメンバー全員が作戦室に集まった。中には大和・雪菜の姿もある。

長門「では、今後の作戦に備え、皆に指示を出す。

まずは雪菜、お前に1つ頼みたい事がある。

深海棲艦について、何か知っている情報が

あれば教えてほしい。」

雪菜「深海棲艦の状況くらいなら分かります。」

長門「了解だ。

夕張、お前にはヤマトと同タイプの

次元波動エンジン並びにショックカノン

及び空間魚雷の量産と、専用発射管の開発

及び量産を頼みたい。」

夕張「了解です！

作戦実行までには何とかします！」

長門「他の皆は、作戦実行までにそれぞれ

練度を上げておいてほしい。

以上だ。」

一同「はい！」

劍城（待っている、飛行場姫！

絶対にお前を倒し、如月さんを
救ってやるからな！）

E p i s o d e 2 0 / 夕立のパワーアップ！

↳トラック島 前進基地／指令室↳

飛行場姫が現れた次の日、大淀は指令室で

長門と陸奥にある書類を見せていた。

大淀「こちらが、雪菜さんの証言を元に推測した

現在の敵深海棲艦の状況です。」

長門「ふむ……。」

2枚目の書類には、トラック島と沢山の艦娘の名前が書かれている。

大淀「次が、先に島に到着した主力艦隊を加えた

我が現有戦力です。」

陸奥「凄いわね。」

長門「圧倒的だな。」

大淀「この状態でMO攻略戦に入った場合、

図上演習では攻略成功の確率は、8割以上と
なっています。」

陸奥「さすが、ここに主力艦隊を集結させた

だけはあるわね。」

長門「それも全ては、今度こそMOを攻略し

敵棲地を分断するFS作戦を遂行する

ためにある。

提督もそれを想定して、ここに主力艦隊を

集結させたのだろう。」

大淀「作戦実行はいつにされますか？」

長門「昨夜の飛行場姫による作戦の流出を考えると

別の作を考えてからの方がいいとは思いますが

ここに集結したことで、他の戦線が手薄な

状態が続くのもよくない。

できるだけ早い方がいいだろう。

作が完成次第、提督に上申し決定する。」

大淀「はい。」

長門「ところで、雪菜は今どうしている？」

大淀「雪菜さんなら、天馬君と工廠で所持艦載機の

リペイント作業をされているとのことですよ。」

大淀「そうか。」

天馬が側にいるなら、まあ安全だろう。」

すると……。

コンツ　コンツ　コンツ

長門「誰だ？」

扉が開き、羽黒が入ってきた。

羽黒「あの、夕立ちゃんが・・・！」

長門「・・・どうした？」



く 工廠 く

その頃、工廠のとある一角では雪菜と天馬が艦載機達をスプレーで銀に塗装していた。

天馬「ねえユキツペ、なんで艦載機を塗り直す

必要があるの？」

雪菜「黒のまんまだと、敵の艦載機と間違えられて撃ち落とされるかもしれないでしょ？」

だから分かりやすいように、塗装し直すの。

それに、昨日の飛行場姫とか鬼・姫クラスの

深海棲艦が使ってる戦闘機とかは白が多いの。
だから銀を使ってるわけ。」

天馬「なるほど。」

ところでこれ、いったい何機あるの？」

雪菜「軽く百の位はいつてるんじゃない？」

すると、ビーチの方から何やら騒がしい声が聞こえる。

天馬「なんだろう、ビーチの方がやけに

騒がしいけど……。」

雪菜「行ってみましょ。」

天馬と雪菜はビーチへと向かった。

くビーチく

ビーチに到着すると、そこでは吹雪を含む駆逐艦達と神童が何やら集まっていた。

天馬「吹雪さん！」

吹雪「あ、天馬君に雪菜さん。」

雪菜「駆逐艦勢揃いで、何かあったの？」

吹雪「それが……。」

一同の見る先には夕立がいる。

が、その夕立の体は何故か光っていた。

天馬「夕立さんが、光ってる……のかな？」

雪菜「大丈夫？」

何処か痛くない？」

夕立「特に平気っぽいけど、何かちよつと

熱っぽいツポイ…」

神童「どうしたんだ？」

睦月「もしかして・・・恋!？」

一同「えええっ!？」

誰にするんだ？

島風「朝ごはん食べ過ぎたとか？」

雷「それとも、質の悪い燃料とったとか？」

暁「気をつけなさい！」

爆発するかもしれないわ！」

一同「ええええええええっ!？」

暁の一言で、一同はその場から1歩下がった。

電「雷ちゃん、なんとかしてほしいのです！」

雷「わ、私に任せなさい！」

響「それだけ？」

雷「う、うるさいわね！」

するとそこへ、長門が様子を見にやって来た。

長門「どうした？」

吹雪「長門さん。」

吹雪「夕立ちちゃん、大丈夫かな？」

天馬「工場に入ったことは、何かありますね。」

すると、窓が開き足柄が顔を出した。

足柄「やつほー。

みんな、どうしたの？」

睦月「あの、夕立ちちゃんの様子を見に

来たんですけど・・・。」

足柄「夕立ちちゃん？」

そうね、入っていいわよ。」

一同は工場の中に入った。

く 工場 通路く

工場内は、建造・改装・開発とそれぞれの分野で区切られ、通路からはカーテンで仕切られている。すると突然、開発区画の方でカンカンという音が聞こえてきた。

天馬「開発区画の部屋から音がします。」
神童「行ってみよう。」

く 工場 開発区画く

く 工場 開発区画く

開発区画の作業場に来ると、そこでは剣城と夕張が次元波動エンジンの量産を行っていた。

夕張「劍城君、その鉄材を取ってくれる？」

劍城「はい。」

天馬「劍城、夕張さん。」

劍城「ん？」

よお、天馬。」

雪菜「何を作っているんですか？」

夕張「長門秘書艦の指示で、宇宙戦艦ヤマトと

同タイプの次元波動エンジンを量産しているの。

私達の艦装の場合、主機の

口号艦本イ400式次元波動缶を2基と

補機の艦本式コスモタービン改を16基・4軸で

1セットになるから、結構時間が

掛かるんだけどね。」

劍城「同時に、全員の艦装の砲を天馬のヤマトと同じ

ショックカノンと実体弾を撃てるタイプに、

駆逐艦や巡洋艦の魚雷発射管を、通常の魚雷と

空間魚雷を発射できるタイプに改造、並びに

専用の空間魚雷を量産しないとならん。」

睦月「大変だね……」

夕張「うん、

けどこれも全ては、FS作戦を遂行する為だからね。

頑張って全員分、仕上げて見せるわ！」

神童「頑張ってください！」

天馬「ところで、ここで夕立さんを

見ませんでしたか？」

劍城「夕立さんなら、この先の改装区画の方に

行くのを見たが……。」

睦月「改装区画だね、ありがとう！」

—————

〈改装区画〉

一同は改装区画へとやって来た。

だが、そこには夕立は居らず、代わりに白露型の黒い制服を着た別の艦娘がいた。

瞳は赤く、髪の手端が桜色に染まっております。

吸血鬼の様におぞましくも妖艶な姿をしている。

天馬「あれ？

夕立さん、いないのかな？」

??? 「みんな、どうしたツポイ？」

睦月「私達、実は夕立ちゃんを探してて……。」

??? 「ポイ〜。」

神童「もしかして、夕立さんのお姉さんですか？」

睦月「違うよ！」

夕立ちゃんの姉艦は、白露ちゃん

時雨ちゃん村雨ちゃんだよ！」

雪菜「じゃあ、妹さん？」

吹雪「違うよ！」

夕立ちちゃんの妹艦は……。」

??? 「違うツポイ！」

夕立は夕立ツポイよ！」

一同「……えっ？」

夕立「でも、今の私は夕立じゃなくて

《夕立改二》ツポイよ！」

—————

く 工廠 中庭く

数分後、吹雪は駆逐級のメンバーを中庭に集め
夕立が訳を話した。

雷「大規模改装？」

夕立が？」

夕立「そっ！」

選り取り緑ッポイ！」

電「凄く可愛いのです！」

暁「レディーよ！」

これぞまさしくレディーだわ！」

響「装備は？」

夕立「たしか、12・7cm連装砲 B型改二とか

言ってたっツポイ。」

睦月「利根さんに聞いたら、彼女はもう駆逐艦の

火力じゃないって。」

夕立「そうらしいっほいけど、まだわからないわね。」

一同「……えっ?」

天馬「今、何て言いました?」

夕立「えっ?」

だから、まだわからないわねって。」

睦月「わね?」

神童「なんだか、少し性格変わりました?」

吹雪「大規模改装ってすごいんだね。」

前と姿も全然違うし、脚もスラーつとしたし

背もすごい大きくなったし……」

だが、吹雪の場合は夕立の胸部に目が行っているらしく……。

吹雪「……。」

島風「気になるの?」

吹雪「えっ!?

な、何が!?

島風「でも意外だなあ。

私は吹雪ちゃんが先になると思ってたけど。」

吹雪「私が?」

島風「だって、駆逐艦の中で一隻だけでしょ?

旗艦なの。」

吹雪「あ、そっか…」

一同が盛り上がる中、吹雪は不安になっていた。

夕立は改装されて改二へと変わったのに、何故

第五遊撃部隊の旗艦を務めている自分は改に

なれないのかと・・・。

そして、天馬はそんな吹雪を心配そうに

見つめていた。

くダイニングルームく

その日の夜、天馬はダイニングルームで夕食を取りながら大和に話をしていた。

大和「大規模改装ですか。」

天馬「ええ、どうやったらなれるんですか？」

大和「私も経験が無いんですけど、一般的には

戦闘経験を詰んだことによる高い練度が

必要と言われています。」

天馬「なるほど、戦闘経験を詰んだことによる

高い練度ですか。」

大和「どうかしました？」

天馬「実は、吹雪さんのことが心配なんです。」

だつて吹雪さん……。」

するとそこに……。

赤城「旗艦まで務めたのにどうして吹雪さんは

ならないんだろう。

そう思っているのですね？」

天馬「赤城さん……。」

赤城は天馬の隣に座り、食事を始めた。

大和「そういえば、吹雪ちゃんは第五遊撃部隊の

旗艦でしたね。」

赤城「練度は練習の内容や状況によって変化しますし、

大規模改装が可能になる条件も各艦によって

様々です。

気にしてもしょうがありません。」

天馬「そうですね。」

それに俺たちの目的は、深海棲艦を倒し海を奪還することでしたね。」

赤城「ええ、その通りです。」

努力に憾み勿かりしか・・・焦らず続けければ

結果はきつと身に付いてくるわ。

頑張りなさいって吹雪さんに伝えてください。」

天馬「わかりました！」

—————

く別館 204号室く

その後、天馬は寝室で赤城に言われたことを吹雪に伝えた。

吹雪「努力に憾み勿かりしか・・・。」

天馬「練度は練習の内容や状況によって変化しますし、

大規模改装が可能になる条件も各艦によって

様々。

ですから、吹雪さんもきつと諦めず頑張れば

いつか大規模改装が可能になるはずです。」

吹雪「そっか、そうだよね！」

そうと分かれば、もっとトレーニングを

積まないと！」

天馬「俺もお付き合いますよ。」

天馬と吹雪は寢室を出ると、玄関へと向かった。

—————

〈別館 玄関〉

玄関から外に出ると、夕立がいた。
身体は傷が少々目立ち、疲れているようだ。

天馬「あれ？」

夕立さん、散歩ですか？」

夕立「ううん、火力のテストをしてたツポイ。

疲れたよお……」

吹雪「そっか、お疲れさま。」

天馬「じゃあ俺たち、ちよつと走ってきますね。

吹雪さん。」

吹雪「うん！」

するとそこへ、足柄がやって来た。

足柄「吹雪、夕立、長門秘書艦が呼びよ。」

吹雪「長門秘書艦が？」

天馬「しょうがないですね。

じゃあ俺、先に行ってますね。」

吹雪「うん、後でね。」

天馬はランニングをするため、ビーチへ向かい吹雪と夕立は長門のいる指令室へと向かった。

Episode 21 / 悲劇は突然に

トトラック島 ビーチ

吹雪と別れて約10分後、天馬はトラック島を半周して小休止をしていた。

天馬「満天の星空に青白く輝く満月、そして

その光でキラキラと輝く海……。

これに勝る景色があるかなあ？」

雪菜「天馬にしては、ロマンチックなこと言うわね？」

そこへ雪菜がやって来た。

雪菜「沖縄じゃ、こんな景色は見られないの？」

天馬「俺の知る限りじゃ、今の沖縄じゃこんな

景色は見れないよ。

今思ったんだけど、俺、この世界の海が

気に入ったみたい。」

雪菜「……私もよ。」

すると突然、天馬の右側に何かが勢いよくぶつかった。

天馬はぶつかった拍子でバランスを崩し、その場で砂に尻餅をついた。

そして、目の前には同じく尻餅をついた吹雪がいた。

だが、今の吹雪は泣いていた。

天馬「吹雪さん、大丈夫ですか？」

吹雪「天馬君……うう……」

うわあああああああ!!」

吹雪は激しく泣き叫びながら、天馬に抱きついた。

天馬「吹雪さん!?

どうしたんですか!?



トトラック島 ビーチ

その頃、夕立はビーチを走り吹雪を追いかけていた。すると前方に、天馬に抱きつく吹雪と、それを優しく見守る雪菜の姿があった。

夕立「いた、吹雪ちゃん!」

夕立は急いで駆け寄った。

雪菜「あら、夕立さん。」

夕立「はあ……はあ……ふ、吹雪ちゃんは？」

天馬「泣き疲れて、寝ちゃいました。」

吹雪「スपीー……クウー……」

吹雪は頬に涙を流しながら眠っていた。

雪菜「夕立さん、いったい何があったの？」

夕立「実は、その……」

天馬「話は後です。」

先ずは吹雪さんを基地に連れていかないと。」

天馬は吹雪を抱き上げると、そのまま

基地の方へと向かった。

夕立「あれって、お姫さま抱っこッポイ？」

雪菜「ととにかく、私達も行きましょう！」

|||||

〈前進基地 本館1階／廊下〉

基地に着くと、天馬は大和から基地内にある和室を借りて布団を敷き、吹雪を寝かせた。

その後、天馬は夕立に何があったのか尋ねた。

天馬「長門秘書艦に呼ばれたとき、

何かあったんですか？」

夕立「うん、実は長門秘書艦から提督からの

辞令を伝えられて・・・。」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

〈指令室〉

それは数分前、吹雪と夕立が長門に呼び出されたときだった。

長門「こんな時間に悪いな。」

吹雪「いえ、トレーニングの途中だったので。」

夕立「夕立はもう眠いッポイ……」

長門「二人を呼んだのは、先ほど提督から二人に辞令が下ったからだ。」

先ずは、駆逐艦夕立。」

夕立「はあい？」

長門「明日から第一機動部隊へ転属を命ずる。」

夕立「えっ？

ゆ、夕立が？」

長門「ああ、提督がお前に頼みたいそうだ。」

夕立「でも、本当に夕立でいいの？」

どうしよう・・・夕立、主力艦隊になっちゃった！」

長門「FS作戦成就に向けて、今後戦いは激化していくだろう。

常に準備を怠るな。」

夕立「了解！」

深海棲艦に悪夢、見せてあげる！」

長門「・・・続いて、駆逐艦吹雪。」

吹雪「はい！」

長門「・・・明日中に、鎮守府に帰艦せよ

とのことだ。」

吹雪「・・・えっ？」

でも、作戦の方は、第五遊撃部隊のみんなはどうなるんですか!？」

長門「皆と出撃する必要は無いと仰っている。

第五遊撃部隊は解散、旗艦の任を解くと

次いでに連絡があつた。

信じられないかも知れないが、受け入れて

ほしい……。」

吹雪「そんな……。」



天馬「そんな……どうしてだよ!？」

どうして吹雪さんがこんなことに

なるんだよ!？」

この前の戦いでも活躍したし、みんな

すごいって言ってたのに、何故だ!？」

夕立「夕立にも、分からないツポイ……。」

雪菜「でも、きっと提督にも考えがあつてのことよ。

提督は吹雪さんが頑張っているのを

知らないはずないもの。」

天馬「くっ……！」

天馬は突然、和室の扉を開けるとそのまま中に入り内側から鍵を閉めた。

夕立「天馬君、相当怒ってるッポイ……」

雪菜「それもそうよ。」

天馬は第三水雷戦隊でも南西方面艦隊でも

第五遊撃部隊でも、吹雪さんと一緒に

海に出ていた。

鎮守府の中では吹雪さんのことを一番よく知る

人物は天馬と言つても過言じゃない。

吹雪さんと一緒にいる時間が長い分

彼女の頑張りをよく知っている。

天馬は何故、吹雪さんが提督に呼び戻されたのか納得がいかない。

きつと、それで怒ってるのよ。」

夕立「天馬君……。」



く和室く

和室では、吹雪が布団の中でスヤスヤと眠っている。

天馬は吹雪の横で胡座をし、腕を前で組んだ。

天馬（なんで、吹雪さんがこんなことに……。

ユキツペの言う通り、吹雪さんが

頑張ってたことは提督だって分かっている

はずなのに、なんで……。）

「どうやら起きたようだ。」

天馬「ふあああああゝ・・・。」

「いつの間にか寝ちやつてたのかな？」

吹雪が寝ていたハズの布団の中に吹雪はいない。

「天馬は部屋一帯を見回したが、部屋には自分以外に誰も居ないとわかった。」

天馬「・・・吹雪さん。」

—————

くトラック島 演習場く

天馬は演習場にやって来た。

するとそこには、一人で夜明けの海を眺める吹雪がいた。

天馬「吹雪さん、おはようございます。」

吹雪「天馬君、おはよう。」

天馬「少しは落ち着きましたか？」

吹雪「うん。」

でも、寝てるとき嫌な夢を見たんだ。

私は一人で海の上を走ってたんだけど、

後から赤城さんと夕立ちちゃんが追い越してきて、

私がどんなに頑張って走っても二人には

追い付けなくて、離されるばかりで……。

ダメだなあ、あんな夢を見るなんて……。

天馬「吹雪さん……。」

すると・・・。

夕立「ハンモックを張つてでも、戦うよ！」

天馬・吹雪「ん？」

港の入り江で朝練をする夕立の姿が見えた。

夕立は海面を移動しながら次々と的を

撃ち抜いていく。

栈橋の先には、夕立に指導をする神通の姿も。

神通「夕立ちゃん、今度はもう少しスピードを

上げてやってみましょう。」

夕立「はい！」

吹雪「夕立ちゃん・・・。」

川内「ここに来る随分前なんだけどき。」

いつの間にかその場には川内がいた。

天馬「川内さん。」

川内「特型駆逐艦が第五遊撃部隊の旗艦になった

頃から、アイツ、練度を上げたいって

朝練するようになってさ。

がんばっている姿を見て、自分も努力

しなきゃって思ったんだって。

同じ駆逐艦として、水雷魂を忘れちゃ

だめだって。」

吹雪「水雷魂……。」

天馬「そういえば俺達、任務に気を取られて

水雷魂を忘れてましたね……。」

吹雪「……。」

突然、吹雪が顔を下に向けうつむいた。

天馬「吹雪さん？」

吹雪「バカだな・・・」。

みんな頑張ってる、みんなみんな頑張ってる。

自分の為に、みんなの為に・・・」。

吹雪は思いきって顔を上げ、そして笑顔で手を大きく振りながら叫ぶ。

吹雪「おーい！おーい！」

吹雪の声に気づき、神通と夕立はこちらに顔を向けた。

天馬「どうやら、吹っ切れたみたいですね。

吹雪さん。」

吹雪「おーい！」

夕立も、海上を走りながら左手を高く上げ……。

夕立「ホイー！」



く港く

その日の午後、吹雪は鎮守府に戻るため港で準備をしていた。

そこには天馬・雪菜・睦月・最上・長門・陸奥さらに第二航空戦隊、蒼龍と飛龍の姿もある。

長門「蒼龍、飛龍も追って鎮守府に向かう。

その先行隊として偵察と護衛、頼んだぞ。」

一同「はい！」

吹雪「睦月ちゃん、本当にいいの？」

一緒に来てもらっちゃって。」

睦月「うん！」

最上「睦月ちゃんは、本当に吹雪ちゃんが

好きなんだね？」

自分から志願するなんて。」

天馬「如月さんが聞いたら、物凄く焼きもち

妬いちゃいそうですね。」

雪菜「如月さんは今は居ないでしょ？」

天馬「居たらの話だよ。」

吹雪「フフツ。」

そういえば、最上さんは睦月ちゃんと同じ

艦隊だったんですね？」

よろしくお願いいたします！」

最上「こちらこそ。」

蒼龍「じゃあ、よろしく頼んだわよ？」

五人「はい！」

天馬・吹雪・雪菜・睦月・最上の五人は
鎮守府に向かって元気よく出港した。

陸奥「大丈夫そうね。」

長門「ああ。」

すると、天馬達の出港を見送る長門の耳に
大淀から情報が入った。

大淀「長門秘書艦、提督から入電です。

“直ちにMO作戦を中止し、鎮守府へ
帰還せよ。”と。」

長門「中止だど!？」

間違いないのか？」

大淀「はい。」

長門「大淀、もう一度提督に伝えてほしい。

今ならMO攻略は可能だど。」

大淀「はい。」



く棲地MIく

同時刻、深海棲艦の棲地MIには、以前

如月に化けて情報の漏洩をしていた飛行場姫がいた。

飛行場姫「今ナラ敵ノ防衛線モ薄イ。

ヲ級は頭部の帽子から爆撃機を数機発艦させ
鎮守府に向かわせた。



く鎮守府近海く

その頃、鎮守府近海を航行していた天馬達は
敵の艦載機がこちらに向かっていることに
気づいていた。

吹雪「対空電探に感あり！」

12時の方向、上空です！」

最上「何っ!?!」

一同が気付いた頃には、敵の艦載機は一同の
遙か上空を飛行していた。

天馬「くそっ！」

この距離じゃ三式弾でも届かない！」

雪菜「もうすぐ鎮守府よ！」

こんな近くに敵がいるなんて……」

吹雪「最上さん、直ちに鎮守府とトラック島に

打電を！」

最上「了解！」

睦月「みんな、あれ！」

睦月が何かを見て突然叫んだ。

一同は睦月が示す方向を見ると、鎮守府の
あちらこちらから炎と黒煙が上がっていた。

一同「鎮守府!?!」



くトラック島 指令室く

その情報は、大淀を通して長門に伝えられた。

長門「なんだって!？」

大淀「はい、ヒトフタヒトゴーより爆撃を

うけた様です。」

長門「手薄になった防衛線を突破されたか…

深海棲艦の機動部隊がそこまでするとは…

まさか、提督はこの動きを察知して戻れと…?」



く鎮守府 港く

く甘味処 間宮く

吹雪は間宮の店へとやって来た。

店は半壊し、店内は滅茶苦茶になっている。

吹雪「間宮さん！」

間宮「吹雪ちゃん！」

戻ってきてくれたのね！」

吹雪「他のみんなは？」

間宮「無事よ。」

間一髪だったけど、提督が皆を避難させてね。」

吹雪「司令官は？」

提督「ここにいますよ。」

突然、吹雪の後ろに提督が現れた。

真っ白だった軍服も、煤と埃で汚れている。

吹雪「司令官！」

提督「さて、長門達には帰ったら総手で

働いてもらわないとな。」

—————

数時間後、長門達が鎮守府に戻ると、艦娘達総手で鎮守府の修復作業が行われた。

利根「吾輩は何度も言っとなるぞー！」

工廠とドックの修理が最優先じゃとー！」

一同「はい！」

神童は修理に必要な資材を上空から運んでいた。

神童「この鉄骨はどうします？」

利根「ドックの方へと頼む！」

〽工場〽

工場では、剣城と夕張が壊れたところの修理に当たっていた。

剣城「思ったより建物の被害が小さくて

助かりました。」

夕張「これなら直ぐに終わっちゃいそうね。」

〽甘味処 間宮〽

夕方、間宮の店では吹雪・天馬・間宮がみんなに豚汁をふるまっていた。

吹雪「豚汁ですよー。」

はい、響ちゃん。」

響「スパスイーバ。」

天馬「おにぎりもありますよー。」

—————

くグラウンドく

夜、提督はみんなをグラウンドに集めた。

提督「みんなの働きによって、鎮守府復旧の

目処もたつた。

このあと工廠・港などが使用可能になり次第、
敵機動部隊への攻撃を開始する！」

加賀「反攻作戦。」

提督「夕張・劍城、君達には引き続き、

次元波動エンジンの量産を頼む。」

夕張・劍城「はい！」

提督「そして、駆逐艦吹雪！」

吹雪「はい！」

提督「君に命令を与える。」

《改
になれ!!
》

E p i s o d e 2 2 / 吹雪改への道！ 《前編》

く 鎮守府 港く

吹雪 「ほっほっほっほっ……。」

天馬 「ほっほっほっほっ……。」

鎮守府が爆撃を受けた次の日の早朝、吹雪は霧が立ち込める中、天馬とランニングをしていた。

天馬 「朝早くから頑張りますね、吹雪さん。」

吹雪 「うん、次の作戦までに改にならないと

いけないもん！」



く提督室く

それは、昨日の夜のことだった。

吹雪「改に？」

提督「私が君をここに呼び戻したのは、

君を改へと大規模改装をさせるためなんだ。

吹雪、次の作戦では君が重要な鍵になる。

どうしても欠くことはできないんだ。」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

吹雪「絶対に、改になってみせる！」

天馬「そのいきですよ、吹雪さん！」



（指令室）

その頃、指令室にな長門と陸奥、偵察から戻った蒼龍と飛龍がいた。

長門「そうか、見失ったか。」

蒼龍「はい。」

ですが、そのうち一隻は隻眼のヲ級であることを確認しました。」

飛龍「鎮守府を爆撃した機動部隊に間違い

なかったのですが申し訳ありません。」

長門「・・・我が連合艦隊の総力を以て

棲地AFを攻略。

敵の機動部隊を誘因しこれを撃滅せよ。」

蒼龍「それが、提督の指示なのですか？」

陸奥「おそらくこの間のような情報の漏洩を恐れて

夕立「なんか、机がちよつと低いッポイ…」

少々お困りの様子。

暁「わ、私も低いかもしれないわね！」

電「暁ちゃんはピッタリなのです。」

吹雪「それで他には？」

夕立「うくん…特にはないわね。」

吹雪「ええく!？」

これやった時、練度がどーんと
上がったな〜みたいなの…」

するとそこへ、天馬・雪菜・睦月が
様子を見にやって来た。

天馬「まだ聞いてるんですか?」

吹雪「だって、まだまだ足りないんだもん!

もつとやることを増やさないと!」

睦月「ええ、まだ増やすの!」

吹雪「しようがないよ!

改になるには練度を上げるしかないって

赤城先輩にも言われたし……。

ふああ……。」

雪菜「吹雪さん、寝不足は美容と健康の大敵なのよ。

一生懸命頑張る気持ちはわかるけど、

毎日ちゃんと寝なきゃ。」

吹雪「分かってるけど、ふああ……。」



く演習場く

その日の午後、吹雪は利根の指導の下
演習場で砲撃の訓練を行っていた。

利根「次、行くぞー！」

吹雪「はい！」

その隣では、天馬が榛名の指導の下、
ショットカノンによるロングレンジでの
ピンポイント射撃の練習をしていた。

天馬「これでどうだ！」

バキューン！

バコーン!

シヨツクカノンは見事、遠く離れた的に命中したが
的の中心よりやや右上だった。

天馬「少し右上寄りだったなあ……

もう一度お願いします!」

榛名「了解、行きますよー!」

そんな二人を、遠くから睦月と電が見ていた。

電「二人とも、凄く上手になったのです。」

睦月「うん……。」

睦月は吹雪のことを心配そうに見ていた。



く本館 入り口く

夕方、吹雪・天馬・雪菜・睦月・夕立は
本館の入り口付近にいた。

夕立「じゃあ、行くわね！」

吹雪「うん、また明日。」

夕立はその場を後にし、吹雪達は夕立の行った
方向と逆の方に歩く。

天馬「なんか、夕立さんが普通口調だと

凄く違和感があるね……」

雪菜「ええ……」

睦月「そういえば、今日から間宮さんの所、

正式に営業するらしいよ。

みんなで寄ってかない？」

吹雪「今日はいいや。

トレーニングのメニュー残ってるし…

あんまり食べると眠くなっちゃうし…」

天馬「俺も吹雪さんのトレーニングに

付き合いますし。

間宮さんによろしく伝えといてください。」

睦月「うん……」

吹雪「じゃあね！」

吹雪と天馬は、その場から走り出した。

すると、少し行つた先で赤城と加賀に会つた。

吹雪「あ、赤城先輩！」

すみません、失礼します！」

赤城「え、ええ……」

吹雪と天馬はその場で立ち止まることなく
行ってしまった。

加賀「めずらしい。

あの子が赤城さんを見つけて、そのまま
行ってしまうなんて。

何かあったのかしら？」

赤城「……」



〈指令室〉

次の日の朝、指令室に第三水雷戦隊のメンバーが集められ、長門から指示が与えられた。

神通「MI方面ですか？」

長門「ああ、状況を確認してきてもらいたい。」

陸奥「ただし、深入りは禁物よ。」

あと、火にも気を付けてね。」

長門「理由はあくまで、棲地AFの特定だ。」

既に北方海域には島風・大井・北上を

南西海域には最上と第六駆逐隊を、

珊瑚諸島海域には剣城と雪菜を偵察に

出している。

鎮守府を襲った機動部隊が敵の主力部隊で

あることは間違いない。

近づけば必ず動きがあるはずだ。」

吹雪「つまり、近づいて動きのあつた方に

機動部隊がいる。」

陸奥「そういうこと。」

長門「以上だ。」

では第三水雷戦隊、直ちに攻撃せよ！」

一同「はい！」

三水戦一同は、急いでドックへと向かった。

長門「……。」

陸奥「何か引つかかるの？」

長門「いや、なぜ提督は吹雪を選んだのかと
思つてな。」

特型駆逐艦の一番艦ではあるが、

装備機動性において特に秀でた物はない。

大規模改装を行った所で劇的な変化は

望めないはずだが……」

陸奥 「提督はきつと気まぐれなのよ。

あなたを秘書官に任命するぐらい

なんだから。」

長門 「何が言いたい？」

陸奥 「やきもち妬くのも悪くないわよ。

私だつて妬いてるのよ、自分の大切な娘を

秘書艦にした提督に。」

陸奥は長門にウインクをすると、指令室を後にした。

長門 「自分の大切な…

…っ!？」



く棲地M I近海く

第三水雷戦隊は棲地M I近郊を航行していた。

那珂「くく」

新曲なのか、那珂は鼻歌を歌っている。

川内「那珂ちゃん、集中して。」

那珂「だって退屈なんでもん……。」「

夕立「天馬君、コスモゼロの方は？」

天馬「これといって特に変わった様子は

無いとの報告です。」

睦月「海も静かだね。」

川内「じゃあ、こつちじゃないってことかな？」

神童「それとも、嵐の前の静けさか……。？」

すると・・・。

吹雪「見てください!」

吹雪が突然、上空を指差して叫んだ。

上空には深海棲艦の黒い艦載機が一機飛行している。

神童「天馬、あの艦載機は?」

天馬「ユキツペの艦載機じゃありません。」

川内「となると、確実に見つかったね…」

那珂「写真は鎮守府を通さなきゃダメー!」

神通「至急、この海域から離脱します!」

一同は神通の指示で、現在いる海域から

急いで離れた。

だが、しばらく走ると・・・。

神童「っ!？」

敵艦発見!

九時の方向、距離2000!」

川内「回り込まれたみたいだね!」

那珂「もう、しつこいんだから!!」

夕立「こうなったら素敵なパーテイー

始めるしか無いわね?」

天馬「神童さん!!

敵の数は!？」

神童「敵、駆逐八級4、計巡ホ級2!」

天馬「その程度なら・・・」。

神通さん、ここは俺が引き受けます!

俺が奴らの相手をしている際に鎮守府へ!」

神通「わかりました、ここは任せます!」

天馬「はい!」

天馬はエンジンの出力を上げ、敵艦のいる方向へと向かう。

天馬「主砲、エネルギー装填!

照準合わせ!」

すると・・・

吹雪「私、前に出ます!」

一同「えっ!?!」

吹雪が後方から後を追うようにやって来た。

天馬「吹雪さん!?!」

吹雪（司令官、見ててください。

私がいっつもつけちゃうんだから!）

ズドーン！

吹雪は軽巡ホ級に向けて砲撃を行う。

砲弾は見事に軽巡ホ級に命中、敵を中破まで損傷させた。

ドカーン！

吹雪「当たった！」

だが・・・。

ドンドンドンドーン！

敵軽巡ホ級が吹雪に反撃を開始した。

吹雪は素早く動き、ホ級の砲撃を避けていくが。

ドカーン!

吹雪「きゃああ!!」

睦月「吹雪ちゃん!」

天馬「吹雪さん!」

砲撃の1発が命中し、吹雪は中破した。

吹雪「まだまだ…」

「あともう一度、当てることができれば…」

痛みに耐えながらも、吹雪はホ級を攻撃するため
ゆっくりと接近する。

だが、他の駆逐八級と軽巡ホ級が吹雪に
砲撃を仕掛けてきた。

天馬「吹雪さん、危ない!」

天馬は吹雪の前に立ち盾となる。

敵艦は天馬に容赦なく砲撃をしてくる。

砲弾は天馬の身体中に当たり、天馬の身体は悲鳴をあげている。

天馬「くっ・・・！」

神童「天馬!!」

神童は背中の中の2つの大砲を両脇の下まで持っていき、敵艦隊に照準を合わせる。

大砲に徐々にエネルギーが溜まり、発射口辺りにエネルギーが集まり始める。

そして・・・。

神童「デスラー砲、発射!!」

バツシユウウウウウウウ!!

発射の掛け声と共に、発射口から極太の赤紫色のビームが敵艦隊に向かって放たれ、敵艦隊を一瞬で吹き払った。

神童「天馬!!」

一同は急いで、天馬と吹雪のところに駆け寄った。天馬の機装は酷く損傷し、身体中傷だらけになっている。

睦月「吹雪ちゃん!!」

吹雪「睦月ちゃん、みんな……。」

神童「天馬、大丈夫か!？」

天馬「神童さん、ありが……とう……。」

吹雪「天馬君? 天馬君!？」

天馬はその場で気を失った。



↳ 鎮守府 104 病室 ↳

天馬「う、うん…」

目が覚めると、天馬は病室のベッドで寝ていた。

神童「気が付いたか？」

天馬「神童さん、ここは？」

神童「鎮守府に新しく設けられた病室だ。」

棲地A Fの場所を割り出そうとしていた。

長門「三水戦が一番激しい攻撃を受けたとなると、

棲地M Iが本命か？」

陸奥「でも、それだけで決めるのは早計じゃない？」

長門「わかっている。

何かもう一つ、決め手となるものが欲しい。」

すると……。

大淀「もうっ、何なんですかこれ!？」

陸奥「どうしたの？」

大淀「さつきから千歳と連絡を取っているのですが、

どうやら混信しているようで……。」

長門「混信？」

もしや……大淀、今現在、千歳達は

何処にいる？」

大淀「先程の連絡では、棲地MI近海にいるとの報告です。」

長門「二人に直ちに撤退するように伝えてくれ。

それから・・・。」

ガチャツ

丁度そのとき、劍城と雪菜が偵察任務から戻ってきた。

雪菜「長門秘書艦、雪菜及び劍城、帰還しました。」

劍城「珊瑚諸島海域では、特に異常は

確認されませんでした。」

長門「ちょうど良かった。

雪菜、所持艦載機の中に黒の艦載機は

まだ残っているか？」

雪菜「非常に、数機残してありますけど・・・？」

長門「すまないが、直ちに黒の艦載機を1機、
棲地MIに向けて飛ばしてくれ。

少し調べたいことがあつてな・・・。」

雪菜「調べたいこと？」

Episode 22 / 吹雪改への道! 《後編》

↳ 鎮守府 岬↳

長門達が指令室にいる頃、吹雪は岬で

海を眺めていた。

そこへ……。

天馬「吹雪さん。」

吹雪「天馬君、怪我の方は大丈夫なの？」

天馬「ええ、まだ節々が少々痛みますが、動くのに

支障はありません。」

吹雪「そっか、よかった……。」

天馬は吹雪のすぐ隣に腰かけた。

吹雪「昼間はゴメンね……」

私の身勝手な行動のせいで、天馬君に傷を負わせちゃって……」

天馬「気にしないでください。」

俺が盾になつたおかげで、吹雪さんは

中破で済んだんですから。

でも、もうあんな無茶はしないでください。

もし吹雪さんが居なくなったら、俺や

睦月さんに夕立さん、鎮守府中のみんなが

悲しい思いをすることになるんですから。」

吹雪「うん、ゴメン……」

天馬「ところで、今更聞くのもあれなんですけど、

吹雪さん、何でこの鎮守府に来たんですか？」

吹雪「うん、天馬君達に会うちよつと前の

ことなんだけど、私、司令官に呼び寄せられて

この鎮守府に来たんだ。

……あのね、私、ここで司令官に

声かけてもらったの。

前に長門さんと天馬君がバトルをした日にね。

後ろから声をかけてもらえて、振り返ったら

司令官だった。

まだ鎮守府に来たばかりで、すっごく不安で、

何で呼ばれたのかなって、思ってた。

だから、思い切って聞いてみたの。

“ どうして私なんですか？ ”

私を呼んだんですか？ ” って。」

天馬 「答えてくれましたか？」

吹雪 「うん……。」

夢で見たんだって。」

天馬 「えっ？」

吹雪 「夢の中で、私が一生懸命司令官に話している

らしくって……。」



く夕方 岬く

吹雪「教えてください司令官。

どうして私なんですか？

私を呼んだんですか？」

提督「・・・夢で見たんだ。」

吹雪「えっ？」

提督「夢の中で、君は私に一生懸命話していた。

不思議な夢だった。

まるで、いつか現実にかかることなのでは

ないかと思ったんだ。」

くく私、司令官のこと、信頼しています！



天馬「それだけですか？」

吹雪「うん。」

だからここから始めて行こうって、

そう言われたの。

だから私も、夢をもって進んでいこうって。」

天馬「吹雪さんの夢？」

吹雪「誰かの役に立つこと。」

どんな些細なことでもいい、皆の役に

立ちたいの。」

天馬「改になるのもそのためですか？」

吹雪「うん。」

天馬「そうですか……」

吹雪「私、絶対いなくなったりしないから。

約束するから。」

天馬「頑張ってください、吹雪さん。」

その二人の様子を、遠くから赤城と加賀が見ていた。

赤城「以前、提督に言われたことがあるんです。

私の随伴艦は、私が決めなさいと。」

加賀「赤城さん……」



〈指令室〉

次の日の朝、指令室では長門が雪菜の艦載機が獲た情報を聞いていた。

長門 「戦力が増強されている？」

間違いないのか？」

大淀 「雪菜さんの艦載機の情報ですと、

間違いないそうです。」

陸奥 「重要拠点であれば、情報伝達の量が

多くなる。」

長門 「航空戦力もかなりの数終結しているな。

やはり……。」

陸奥 「でも、あくまで可能性の話よ。」

長門 「わかっている。

だが……。」

指示にある棲地A Fは、M Iと断定する！」



く鎮守府 演習場く

その頃、外では天馬が鎮守府をドリブルで走っていた。

すると、演習場の側を通りかかったとき、海上に吹雪、堤防の上に赤城と加賀を見つけた。

天馬「あれって、吹雪さん？」

それに赤城さんと加賀さん。

何をしようとしてるんだ？」

~~~~~

加賀「今度の戦いは、機動部隊同士の航空戦が

予想されるわ。

護衛艦として、防空能力も必要。

今から演習用の機体を放ちます。

その攻撃を避けながら撃破してみせて。」

吹雪「はい！」

赤城と加賀は、それぞれ橙色の矢を放ち

演習用の艦載機を数機発艦させた。

吹雪は艦載機に向け砲撃を行うが、艦載機の

攻撃を恐れ上手く動けなかった。



吹雪「きやあ！」

加賀「それでは赤城さんの護衛艦を務めさせる

訳にはいかないわ。

もう一度。」

吹雪「はい！」

~~~~~

天馬「大変だ！

今すぐ睦月さん達に知らせないと！」

天馬は駆逐級の教室へ急いで向かった。

~~~~~

く 駆逐級 く

その頃、駆逐級では睦月が吹雪の行方を追っていた。

電「吹雪ちゃん？来てないのです。」

睦月「えっ？

トレーニングから戻ってこないから  
てつきり……。」

夕立「まだ走ってるツポイ？」

すると……

ガラガラガラ!!

教室の扉が勢いよく開き、天馬が慌ててやって来た。

天馬「大変だ!!」

今、演習場の方を通ってきたら、

吹雪さんがいて・・・!!」

睦月・夕立・雪菜「えっ!?!」

—————

く演習場く

天馬・睦月・夕立・雪菜は、急いで演習場へと  
やって来た。

だがそこで見たのは、既にボロボロとなった  
吹雪と、容赦なく機体を放ち続ける  
赤城と加賀の姿だった。

天馬「吹雪さん……」

加賀「立って！」

それとも、あきらめるの？」

吹雪「まだ、まだやります！」

天馬「無茶です！」

これ以上は、吹雪さんの身体が持ちません！」

吹雪「まだ諦めない、私、赤城さんの護衛艦になりたいの。」

誰かの役に立ちたいの……」

睦月「吹雪ちゃん……」

天馬「くっ……！」

天馬は突然走りだし、その場を離れた。

雪菜「ちよつと天馬!？」

吹雪「もう一度、お願いしま……す……」

吹雪はその場で力尽き倒れた。

赤城「・・・立ちなさい！」

あなたのこれまでの努力は、そんなものでは  
なかつたはずですよ！」

吹雪「先輩・・・。」

赤城「私は知っています。

海上を進むことさえままならなかつたあなたが  
悖らず、恥じず、憾まず、いかに前を向いて  
ここまでできたか。

あなたなら、出来るはずですよ。

立ちなさい!!」

吹雪「・・・くっ！」

吹雪は立ち上がった。

全身の痛みを耐え、体力を振り絞り、赤城と共に  
海へ出るという願いを叶えるために。

吹雪「絶対に諦めない……!」

私は、赤城先輩の護衛艦に……

絶対になるんだから!!」

赤城「行きます!!」

赤城と加賀は、再び吹雪に向けて演習用艦載機を放つ。

吹雪は、現状況では想像できない程の機敏な動きで艦載機の攻撃を避け、撃ち落としていく。

そして、残すところあと一機となった。

睦月「あと一機!」

頑張っていきましょー!」

吹雪「当たってください!!」

だが、吹雪は艦載機の攻撃を食らいバランスを崩し攻撃の勢いで後ろに倒れる形となった。

だが、吹雪は諦めていなかった。  
後ろに倒れながらも、艦載機が真正面に来た  
タイミングを狙い・・・。

吹雪「行つけええええ!!」

ズドーン!

ドカーン!

見事に全機、撃ち落とすことに成功した。  
だが、このままでは水面に身体を強打する  
ことになる。  
その時だった。

天馬「吹雪さーんっ!!」

ヤマトの艀装を装着した天馬が猛スピードで

海上を走ってやって来た。

天馬は倒れる直前の吹雪の背後に回り込み、

吹雪の身体を受け止めた。

だが勢いに負け、天馬は海上を滑り、堤防に激突した。

激突した衝撃で水飛沫が勢いよく上がる。

水飛沫が治まると、堤防の下にはボロボロになった

吹雪と、吹雪を受け止め堤防に背中を強打した

天馬の姿があつた。

睦月・夕立「吹雪ちゃん！」

雪菜「天馬!!」

吹雪「はあ……はあ……」

天馬「吹雪さん、大丈夫ですか？」

吹雪「天馬君、また助けられちゃったね……」

すると突然、吹雪の身体が光出した。



天馬「これは・・・。」

赤城「よくがんばりました。

すぐ工廠にいきなさい。」

吹雪「はっ、はい！」

—————

く工廠 改装区画く

その後、一同は吹雪を工廠へと連れて行き、

吹雪の大規模改装が行われた。

そして数分後、吹雪改が姿を現した。

夕立「大規模改装終了ッポイ！」

吹雪「これが改？わーっ」

吹雪は、鏡で新しくなった自分を見た。  
だが……。

天馬「あのく、これ言っちゃあれですけど

あまり変わってない気が……。」

吹雪「ホントだ、なんで!?

まさか改装されてないとか?」

睦月「改装されてるよ。

ほら、長10cm砲になってるし、服も

ちよつと変わったし。」

雪菜「ただ姿は変わらないこともあるらしいわよ。」

吹雪「うう、頑張ってちよびり損した気分……」

天馬「あはは……」

すると突然、鎮守府中に放送が入った。

『秘書艦の長門だ。

皆、そのまま聞いてほしい。

たった今、次元波動エンジン及び新装備の  
量産が終了した。

これより全ての艦娘達の艦装に次元波動エンジン及び  
新装備の取り付け作業を開始する。』

天馬「おお、ついに完成したんだ！」

『全ての艦装に波動エンジンを取り付けるには  
丸1日を要する。

よって、明日1日は各艦娘、海上での戦闘  
演習、遠征などは一時禁止。

M1作戦での艦隊編成発表は2日後、  
作戦開始は3日後とする。

それから、明日はトラック島から大和が鎮守府へ  
来ることになっている。

皆、温かい目で迎えてやってほしい。  
以上だ。』

吹雪「大和さん、鎮守府に来るんだ！」

するとそこへ・・・

赤城「吹雪さん。」

吹雪「赤城先輩！」

赤城「約束通り、次の戦いの随伴艦はあなたに

お願いします。

引き受けてくれますね？」

吹雪「はっ、はい！」

このとき、吹雪は嬉しさのあまり泣いていたが同時に今までで一番の笑顔をしていた。

天馬「よかったですね、吹雪さん！」

吹雪「うん！」

天馬「じゃあ俺、ちよつと特訓してきますね！」

吹雪「行ってらっしゃい！」

吹雪は特訓に向かう天馬を笑顔で見送った。

だが……。

吹雪（あれ？

なんだろう、胸の辺りが妙にモヤモヤする

この感じ……。

さっきまでは、なかったのに……。

雪菜（吹雪さん？）



く提督室く

その日の夕方、赤城と加賀は提督室へとやって来た。

提督「ご苦労だったな、二人とも。」

赤城「いえ、私も望んでいたことですから。」

加賀「ですが提督、何故そこまで吹雪さんの事を？」

提督「今はまだ、詳しい事は言えない。」

ただ、これだけは理解して欲しい。

次の作戦、吹雪が重要な鍵になる。  
赤城「重要な、鍵・・・。」

# Episode 23 / ついに結成!バトルシップイレブ

ン!

〜教会〜

ある日、とある教会で結婚式が行われていた。

仲人には長門、席には鎮守府の艦娘達が勢揃いし

そして白いタキシード姿の提督と、

白いウエディングドレスに身を包んだ

吹雪の姿があった。

司祭 「提督殿、汝は吹雪を妻と認め、彼女を

幸せにすると誓いますか？」

提督 「はい、誓います！」

司祭 「吹雪殿、汝は提督を夫と認め、いつまでも

彼のお側にいると誓いますか？」



吹雪「はい、誓います！」

司祭「わかりました。

では・・・。」

ダーン!!

一同「っ!?!」

突然、教会の扉が勢いよく開いた。

一同は扉の方を見ると、そこには天馬の姿があつた。

天馬「その結婚、ちよつと待ったー!!」

吹雪「なんだ、今は結婚式の真最中だぞ！」

天馬は教会の中に入ると門を閉め、

バージンロードを歩き、吹雪の正面で立ち止まった。

吹雪「天馬君……。」  
天馬「吹雪さん……。」

俺と、結婚してください!

吹雪「……えっ!?!」



睦月「吹雪ちゃん？」

夕立「大丈夫？」

ベッドの上から睦月が、下から夕立が顔を出す。

吹雪「睦月ちゃん、夕立ちゃん、おはよう。

大丈夫大丈夫、ちよつと変な夢を見ちやつた

だけだから……。」

夕立「夢つて、どんな……。」

吹雪「うくん、言つていいのかな？」

あのね……。」

ガチャツ

突然、寝室の扉が開き、天馬が入ってきた。

天馬「ただいま。」

あれ？

吹雪さん、起きてたんですか？」

吹雪「あつ、お帰り天馬君。」

今さつき起きたところだよ。」

睦月「天馬君、トレーニングから帰ったにしては

ちよつと早くない？」

天馬「ええ、実は・・・。」

天馬が話そうとしたとき、背後から少し懐かしい人が顔を覗かせた。

大和「お久しぶりです、吹雪ちゃん。」

吹雪「大和さん！」

いつ、鎮守府に？」

大和「ちよつと前に来たところですよ。」

天馬「俺がトレーニングで港を通り掛かったとき

大和さんに会ったんです。」

で、大和さんが吹雪さんに会いたいって  
言ったので、案内したんです。」

吹雪「そうなんだ。」

でも、何で鎮守府に来たんですか?」

長門「理由は簡単。」

大和の艦装に波動エンジンを取り付ける為に  
提督が呼んだんだ。」

一同「うわっ!?!」

いつの間にか天馬と大和の背後には長門。

長門「次の作戦は大和も参加することになってな。」

大和にも皆と同様の改装を施す必要が

あると判断したんだ。」

吹雪「大和さん、とうとう出撃するんだ!」

大和「はい!」

ただ、私は本日の夕方、波動エンジンを

搭載した後、トラック島に戻ります。

重要な基地を一日中留守にするわけには  
いきませんから。」

長門「そういうことだ。」

それから、大和と雪菜がテンマーズに  
加わることになった。

天馬、この間の宿題は？」

天馬「バツチリです！」

夕立「宿題って？」

天馬「長門秘書艦から、サッカーチームの

正式名を考えるようにって言われてたんです。」

長門「大丈夫なら問題ない。」

それと、少しでも練度を上げるために

本日ヒトヒトマルマルよりグラウンドで

サッカーの練習を行う予定だ。

その時、次いでに発表してもらいたい。」

天馬「わかりました。」

長門「では、私からは以上だ。

吹雪・睦月・夕立、練習に遅れるなよ。」

長門はその場を後にした。

天馬「じゃあ俺、またトレーニングに

行つてきますね。」

吹雪「うん、頑張つて。」

天馬はトレーニングへと向かった。

吹雪「……。」

—————

く工廠く



天馬はトレーニングの次いでに工場へ寄った。  
工場では足柄と羽黒がミシンで何かを縫っていた。

天馬「足柄さん、羽黒さん、おはようございます。」

羽黒「天馬君、おはようございます。」

足柄「こんな朝早く、どうしたの？」

天馬「例のデザインが決まったので、  
持って来ました。」

天馬は足柄に一枚のメモを渡した。

足柄「・・・いいデザインね。」

使わせてもらうわ！」

天馬「お願いします！」



く食堂く

その後、吹雪・睦月・夕立の3人は食堂で朝食を食べていた。

だが、吹雪は何やら不満そうな顔をしている。

吹雪「はああく……」

夕立「吹雪ちゃん、顔色悪そうね。」

睦月「何かあったのかな?」

すると、吹雪の隣に雪菜が座った。

雪菜「ここ、お邪魔するわね。」

吹雪「雪菜さん、どうぞ。」

雪菜「顔色悪いけど、何かあったの?」

吹雪「……実は、昨日から胸の辺りが妙に

モヤモヤしてるんです。

大規模改装を終えて改になってから……。

それで、オマケに今朝は変な夢まで

見ちゃうし……。」

睦月「夢つて、どんな？」

吹雪「夢の中で私、提督と結婚式を挙げていて、

そしたら突然、天馬君が結婚式に乱入してきて

“俺と結婚してください！”って

言ってきた夢だった。」

雪菜「なるほどねえ。」

もしかして吹雪さん、天馬のこと

好きなんじゃないの？」

吹雪「好きって言っちゃ好きだよ。」

雪菜「それは友達としてでしょ？」

私が聞いたのは、天馬を異性として

好きかってこと。」

吹雪 「・・・えっ？」

睦月 「それって・・・。」  
榛名 「吹雪ちゃん、あなた天馬君のことが

好きなのですか？」

吹雪「えっ？」

いつの間にか、吹雪の真後ろには

赤城、榛名、瑞鶴がいた。

赤城「まさか、提督以外の男性が好きだなんて。」

瑞鶴「ヒューヒュー♪」

吹雪「ちよ、ちよっと待ってください！

私はまだ天馬君が異性として好きだなんて

思っていないです！

まあ、嫌いと言うわけでは

ありませんが……。」

瑞鶴「まあ、嫌いになれない理由は目星が付くけど。

吹雪はよく、天馬に助けてもらってるからね。」

夕立「最初は鎮守府正面海域の敵棲地の強襲任務で

三水戦が挟み撃ちされそうに

なったときに、神童君と劍城君と一緒に助けに来てくれたツポイ。」

赤城 「2度目は長門秘書艦とのバトルで

流れ弾から守ってくれましたっけ。」

睦月 「3度目はW島攻略のときだね。」

艦載機の攻撃から守ってくれたの。」

榛名 「4度目は南西海域で吹雪さんが戦艦ル級に

やられそうになったときですね。」

夕立 「5度目はこの間のM I 方面の偵察任務で

自ら盾となって吹雪ちゃんを敵の猛攻撃から

守ってくれた。」

赤城 「そして6度目は昨日の演習ですね。」

吹雪さんを受け止めて扉に衝突するのを

身体を張って防いでくれました。」

瑞鶴 「まあこんだけ世話になっちゃったら

嫌いにはなれないわな。」

吹雪 「そうですね、でも・・・。」

すると・・・

天馬「吹雪さくん。」

吹雪「は、はいっ!!」

天馬「ど、どうしたんですか……?」

吹雪「えっ?」

い、いや何も・・・。」

天馬「・・・まあいいや。」

そろそろ練習を行うので、皆さんグラウンドに  
集合してください。」

一同「はいっ!」

天馬は要件を伝えると去っていった。

吹雪（はあく、ようやくモヤモヤの原因が判明した。

私、いつの間にか天馬君のことが好きに





ボールは炎の翼を出現させ、大空を飛ぶ鳥のようにゴールへと突き進む。

赤城・加賀「《炎の風見鶏》！」

長門「行くぞ！」

長門は両腕を《X》のようにクロスさせ、ゴッドハンドXを放つが、以前に比べ、赤く輝いている。

長門「《ゴッドハンドX・改》！」

長門は赤城と加賀の炎の風見鶏を見事に受け止めた。

長門「よし、次だ！」

その隣では、大和と雪菜が天馬の指導で

ドリブルの練習をしていた。

天馬「大和さん、始めはゆっくり落ち着いて

ステツプワークを覚えましょう。」

大和「はいっ!」

天馬「ユキツペはもう少しタイミングを

合わせてみよう。」

雪菜「わかったわ!」

そんな天馬の様子を、吹雪は遠くから見ている。

吹雪「天馬君……。」



く食堂く

その日の正午、神童と剣城は食堂で昼食を食べていた。

すると・・・。

雪菜「ここ、いいかしら？」

神童「どうぞ。」

そこへ雪菜がやって来た。

雪菜は神童・剣城と向かい合う様に座る。

雪菜「二人にちよつと聞きてほしいことが

あるんだけど、いいかしら？」

神童「聞いてほしいこと？」

劍城「なんだ？」

二人はコップを手に取り水を飲み始める。

雪菜「どうも吹雪さん、天馬のことが

好きらしいの。

“異性”としてね。」

劍城・神童「グフっ!？」

突然の発言に、二人は噎せて水を吐き出した。

雪菜「天馬の好みのタイプってどんなのだと思う？」

劍城「ゲホツゲホツ・・・」

ちよちよちよ、ちよつと待て!!

何で俺達に聞くんだ!？」

神童「聞くなら天馬本人に聞け!!」

雪菜「二人にしか聞けないと思ったから聞いたの。」  
劍城「そうか、だがすまない……」

俺達は天馬の好みについては知らないんだ。」

神童「もつとも、ヤツは恋愛に関しては鈍感だから

聞いてもしようがないかもな……。」

雪菜「そっか、ありがとう。」



く 甘味処 間宮く

その頃、吹雪は大和と長門と共に間宮の店にいた。

吹雪「大和さん、長門さん、相談があるんですけど

いいですか？」

長門「相談？」

大和「どうかしたんですか？」  
吹雪「はい……。」

実は私、天馬君のことが  
好きみたいです……。」

……。

無音の空気が2・3秒留まり……。

大和・長門「ええええええっ!？」

店内に大和と長門の驚きの声が響いた。

大和「て、天馬君が好きって・・・！」

長門「それ、まさか恋愛相談!？」

吹雪「なんか、妙にモヤモヤするんです・・・。」

モヤモヤしているというより、顔が熱で

真っ赤になっている。

長門「だだだがそんなことを、私達に聞かあ!？」

私は、男性との面識は提督と作戦などで

話をするくらいだぞ!!」

赤城「私はトラックでずっと一人でしたから、

天馬君と会うまで男性との面識なんて

全くありませんでした。

私達なんかより足柄さんや金剛さんの方が

経験豊富ではないかと・・・。」

吹雪「だって、足柄さんは合コン失敗続きで

アテにならないし、金剛さんは口が軽いから

絶対皆に言いふらすだろうし・・・。」

あと相談できる相手といえは二人しか

いなかったんですよおお!!」

長門「そ、そうか・・・。」

吹雪「それで、ちよつと不安なんです。

天馬君は他のみんなと仲良く接してますし

それに私、天馬君に助けてもらってばかりで

凄く迷惑してますし、もし天馬君が私のこと

嫌いだったらどうしようって・・・。」

大和「そうですね・・・。」

長門「天馬が他の艦娘と接する理由は、恐らく

作戦などの話か、サッカーへの誘いが

ほとんどだろう。」

大和「それに、もし天馬君が吹雪ちゃんのことを



嫌っていたら、逆に助けたりはしないと

私は思いますよ？」

吹雪「そっか・・・。」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

吹雪の脳裏には今、様々な天馬の様子が  
浮かんでいた。

『吹雪さーん！』

頑張ってきてください！

吹雪さん、お待たせしました！

大丈夫でしたか？

やらせるかあああ!!

吹雪さん、大丈夫ですか？

安心してください。

吹雪さん達は、俺が絶対守ってみせます！

吹雪さん、危ない！

吹雪さーんっ！！

よかったですね、吹雪さん！』



大和「それに、それだけ吹雪ちゃんのことを

助けるってことは、逆に言うなら天馬君が

吹雪ちゃんのことを好きだと思っている

可能性もあります。」

長門「まあ天馬には、いつも通り接触すれば

いいだろう。

変に勢いで突っ込み過ぎると、お前は必ず

失敗するからな。」

吹雪「酷いですよ！

でも、今は明後日のM I作戦を成功させるのが

先ですね。」

長門「そうだな。

だが、私は少し嬉しいよ。

お前が人間の女性らしい悩みを、私達に

聞いてくれて。」

大和「そうですね。

私達艦娘の悩みと言えば、作戦とか

戦いに関することがほとんどですものね。」

吹雪「大和さん、長門さん……。」

すると……。

『♪ピンポンパンポ〜ン♪』

霧島：マイク音量、大丈夫？

チエツク、ワン、ツー……。

えー、吹雪さん大和さん長門秘書艦、

練習を再開しますので、そろそろ

グラウンドへ戻って来てください。

みんな待ってますよー。

♪ピンポンパンポ〜ン♪』

長門 「もうそんな時間か？

意外と早いものだな。」

吹雪 「行きましょう！」

吹雪、大和、長門はグラウンドへ向かった。



くグラウンドく

その頃、グラウンドではテンマーズが練習を  
している中、天馬・劍城・神童は何やら  
話をしていた。

神童「俺達のスキルがサッカーと関係がある？」  
劍城「どういうことだ？」

天馬「ええ。」

神童さんがデウスーラ2世を動かすのに  
必要なスキル、“艦隊を勝利へと導く

リーダー”・・・。

恐らくそれは、神童さんのゲームメイクが  
大きく絡んでいると思うんです。

リーダーは艦にとって、廻りの状況を瞬時に読み取ることが出来る、人間でいうところの目のような存在。

艦隊を勝利へと導くリーダーとは、おそらく廻りの状況を瞬時に判断する洞察力です!

そして、その洞察力を駆使して使う

神童さんの必殺タクティクスといえば・・・。」

神童「勝利への道筋、“神のタクト”!」

天馬「そうです。

そして劍城がメガルータを動かすのに

必要なスキル、“敵の装甲を貫く程の

威力を生む撃鉄”・・・。

おそらくこれは、強烈なシュートを生む

劍城の足腰のことだと思うんだ。」

神童「なるほど。」

劍城「となると、次の戦いは俺達が肝に

なりますね。

神童さんは神のタクトを、俺はシユートを  
出さなくちゃならない。」

神童「だが、天馬はどうなんだ？

天馬のスキル、〃決して止まらないエンジン〃は  
サッカーと直接的な関係は無さそうだが。」

天馬「きつと、俺のスキルは二人のような  
戦いに直接関係するものじゃ無い気が  
するんです。

今はまだわかりませんが…」

すると・・・。

吹雪「お待ちせ〜！」

大和「お待たせしました。」

長門「すまない、遅くなってしまった。」

吹雪、大和、長門が遅れてやって来た。

天馬「おつ、来ましたか。」

それじゃあ皆さん、全員揃ったところで

重大発表があります!」

瑞鶴「重大発表?」

天馬「ただ今より、このチームのチーム名を

発表します!」

加賀「そういえば、テンマーズは仮のチーム名

でしたね。」

天馬「けどその前に、榛名さん足柄さん羽黒さん

お願いします!」

三人「はい。」

榛名・足柄・羽黒は吹雪達に黄色いユニフォームを

長門に深緑のユニフォームを配った。

ユニフォームのデザインは、吹雪達は半袖で

生地は黄色。



首・肩から袖口にかけて青いラインが引かれ、背番号は青で書かれている。

長門は深緑の生地に白い長袖。

袖には太めのオレンジ色のラインが引かれ背番号は白で書かれている。

吹雪「これって、雷門のユニフォームじゃ……。」

天馬「パツと見は、俺達雷門中サツカー部の

ユニフォームですけど、よーく

見てください。」

夕立「エンブレムが違うわね？」

ユニフォームの左胸辺りには、ピンクの桜のロゴの中に金色で《艦》と書かれたエンブレムが  
あしらわれていた。

大和「金色で艦って書いてあります。」

天馬「チーム名にちなんでデザインしました。

チーム名は、

《バトルシップイレブン》です!」

神童「バトルシップ・・・。」

劍城「イレブン・・・。」

長門「・・・なるほど、戦船の魂を持つ我々に

相応しい名だ。」

赤城「ですね。」

金剛「ベリー・グッドなネーミングデース!」

天馬「ありがとうございます!」

長門「よし、ではチーム名はバトルシップイレブンに

正式に決定する。

それから、皆ユニフォームに着替えて

再度ここに集合だ!」

—————

数分後、バトルシップイレブンは新たなユニフォームに着替え集まった。

背番号は、天馬が8、神童が9、剣城が10

吹雪が22、睦月が62、夕立が2、雪菜が7

大和が80、金剛が11、霧島が4、赤城が25

加賀が21、翔鶴が39、瑞鶴が27、そして

長門が1となっている。

加賀「なんだか、新鮮ですね。」

瑞鶴「みんな似合ってるじゃん！」

翔鶴「チーム一新、新たなスタートって

感じがします。」

大和「いつか私も、このユニフォームを着て

皆さんと同じフィールドに。」

天馬「よし、みんな！」

天馬の掛け声で、一同は円陣を組む。

すると・・・。

提督「おー、みんなカッコ良くなったじゃないか。」

一同の元に提督がやって来た。

金剛「テートクツ！」

提督「みんな、楽しんでいるところ悪いんだが

大和、先程エンジンの取り付け作業が

終了した。

直ちにトラック島へ戻り、明後日の作戦に

備えてほしい。」

大和「えっ？

でも、トラックに戻るのは夕方の

予定では？」

提督「そうだ。

だが作戦までの間、重要拠点である

トラック島にトラブルが起きると困る。

よって、時間が前倒しになったんだ。」

大和「そうなんですか……。」

天馬「仕方無いですね。」

よし、それじゃみんな！」

一同は天馬の掛け声で、再び円陣を組む。

そして……。

天馬「俺達はMIを攻略し、絶対に鎮守府へと帰る！」

そして、みんなで一緒に、

サッカーやろうぜええええ!!」

一同「おおおー!!」



く港く

その後、バトルシップイレブン一同は大和を見送るため、港へと集まった。

天馬「気を付けて帰ってくださいね。」

大和「ありがとう、天馬君。」

夕立「そういえば言っていなかったけど、今度の作戦は提督の知らない秘策があるツポイよ。」

長門「秘策だと?」

天馬「ホントは、さっき言おうと思ってたんですけどいきなり提督が来たので言えなかったんです。

バレると不味かったので……」

吹雪「それで、その秘策って?」

天馬「・・・オペレーション《ライトニング》。

俺達バトルシップライブンの初舞台に

なるかもです。」

長門「どういうことだ？」

天馬「皆さん、耳を貸してください。」

一同は天馬に耳を貸した。

天馬「ゴニヨゴニヨ・・・」

ゴニヨゴニヨゴニヨ・・・」

赤城「・・・なるほど、そういう事ですか。」

翔鶴「掛けてみる価値は大いにあるかと。」

瑞鶴「でもさ、提督は怒らない？」

命令無視とか自己判断による行為とか。」

加賀「海上に出してしまえば、その場での指揮と

判断は私たちに委ねられる。

問題ありません。」

金剛「これで決まりですネー!」

霧島「今度の作戦、面白くなりそうですね。」

夕立「素敵なパーティーになっちゃう!」

睦月「私達が頑張らないとね!」

神童「俺達のスキルが試されるな。」

劍城「ですね。」

天馬「よし、それじゃあみんな!

今度の作戦は、絶対に勝とうぜえええ!!」

一同「おおおー!!」



## E p i s o d e 2 4 / 発動！ M I 作戦！

：「M I 作戦」発動17時間前：

↳ 鎮守府 指令室↳

バトルシップイレブンが結成された次の日、  
指令室では長門と陸奥がM I 作戦での艦隊の  
編成を考えていた。

陸奥 「まだ決まらないの？

いい加減決めないと、みんな浮き足

立ってるわよ。」

長門 「わかっている。

だが、どうも決めてに欠けるんだ。

どんな編成にしてもこれでいいという

確証が得られない……」

すると突然、赤城がやって来た。

赤城 「一航戦、赤城です。」

長門秘書官に意見申したいことがある

参りました。」

長門 「どうした?」

赤城 「MI作戦における、私の第一機動部隊の

編成について、少し考える所があつて。

今の編成案を聞いても?」

長門 「構わない。」

長門は編成案の書類を赤城に見せる。

長門 「五航戦も参加させたかったが、修理が

間に合わないようだ。」

赤城は書類に目を通す。

すると、突然目の色を変えた。

赤城 「お願いがありません。」

長門 「ん？」



：「MI作戦」発動16時間前：

〈食堂〉

その約1時間後、食堂では雷がコップの牛乳とにらめっこをしていた。

雷「ムムム・・・!」

電「雷ちゃん、牛乳ちゃんと飲まないと

だめなのです。」

暁「立派なレディになれないわよ?」

雷「わかつてる!

フルーツ牛乳なら飲めるんだけど……」

響「高雄さんと愛宕さんは、ミルク好きだつて

聞いたことがある。」

あと、私達が明日の作戦に出撃することに

なったら……。」

電「ミルクは栄養タップリ!

出撃前にはピツタリなのです!」

雷「そ、そうね……。」

一方、雷の後ろでは吹雪と天馬がお互い大きなアルミマグカップとにらめっこをしていた。

吹雪「ム……。」

天馬「ヌ……。」

雪菜「レディー……ゴー！」

雪菜の合図と共に、二人は同時にカップを持ち  
グビグビと牛乳を飲んでいく。  
そして……。

吹雪「かあ〜っ!!」

天馬「ぷっはあ〜っ!!」

雪菜「勝負あり！」

僅差で吹雪さんの勝利！」

睦月「吹雪ちゃんすごい！」

夕立「新記録ツポイ？」

天馬「いやあ〜、参りました。」

吹雪「改になってから、前よりもーつとご飯が

美味しくて、いくらでも入っちゃう  
感じなの!」

睦月「さすが、赤城先輩の護衛艦だね!」

すると突然、鎮守府内に放送が入った。

『秘書艦の長門だ。』

皆そのまま聞いてほしい。

これより、明日実施されるMI作戦の  
艦隊編成を発表する!』

天馬「ついに来たか・・・。」

『まずは作戦の要となる第一機動部隊から。』

一航戦赤城、加賀。二航戦、飛龍、蒼龍。

護衛として戦艦金剛、比叡、重巡利根、筑摩

雷巡北上、駆逐艦夕立、吹雪、そして

宇宙戦艦ヤマトこと松風天馬、  
空母ヲ級こと鈴音雪菜。』

吹雪「ついに、赤城先輩と一緒に！」

天馬「あまり調子に乗りすぎないで

くださいね……。」

雪菜「フフっ♪」

北上「ふーん。」

大井「なっ!?!」

『また攻略の主力艦隊には、本鎮守府から戦艦榛名、霧島、雷巡大井、特一等航空戦闘艦  
デウスーラ2世こと神童拓人が、トラツク島から  
出撃する大和を旗艦とした艦隊と合流すること  
なっている。』

天馬「大和さん、とうとう出撃

するんですね!」

吹雪「うん!」

『さらに、本作戰には攻撃目標が棲地MIで

あることを敵に悟られぬよう、陽動部隊を

棲地ALに向けて出撃させることも含まれている。

AL作戦には、他の鎮守府から隼鷹と龍驤が  
参加する。

この2隻の軽空母と共に重巡那智、軽巡球磨、多摩

駆逐艦睦月、暁、響、雷、電、そして

メダルーサ級殲滅型重戦艦メガルードこと

劍城京介。

以上だ。

他の艦娘たちには鎮守府および近海域の

警備にあたってもらう。

『諸君の検討を期待する!』



電「わわわ、電達も出撃するのです!？」

響「遠征以外の任務で出撃なんて、初めて。」

暁「いよいよ本当に暁の出番なのね！」

と、いつの間にか雷は牛乳を飲み干し・・・。

雷「おかわり！」

川内「しつかりやって来るんだよ、宇宙戦艦！」

特型駆逐艦改！」

那珂「今回は二人にセンターを譲るから！」

天馬・吹雪「はいっ！」

-----



長門「編成を変えるだど？」

赤城「はい。」

長門「言つとくが、吹雪と天馬は外せんぞ？」

改になつた吹雪と天馬を必ず第一機動部隊に  
配備するようにと提督に命じられたからな。」

赤城「わかつております。」

私が指定させていたきたいのは、

吹雪さんと天馬君以外の艦娘達なのです。」

長門「どういふことだ？」

赤城「実は……。」

ガチャツ

突然、指令室の扉が開き、提督が入ってきた。

提督「長門、編成は決まつたか？」

長門「もう少し時間をください。」

赤城から吹雪と天馬以外の艦娘達を  
変えてほしいと言われたもので。」

提督「そうか。」

赤城、何か気になることがあるのか？

私に言えないことでないなら聞かせてくれ。」

赤城「・・・ときどき、頭の中で何かが囁くのです…

私たちをある方向へと常に誘う何か…

まるで、かつておきた出来事を再び

繰り返させようとしているかのような…

長門さん、あなたはそんな大きな流れにも

似た何か…

定めの頸木のようなものを感じたことは

ありませんか？」

長門「・・・。」

赤城「思い過ごしかも知れませんが、もし本当に

そんなものがあるのなら私は…

私はその運命に抗いたいです！」

提督「赤城……。」

~~~~~

長門「定めの頸木……」

陸奥「信じるの？」

長門「実を言うと、暗号名A Fが棲地M Iを

刺すと判断した時、全くと言っていいほど
迷いがなかった。

何故かそこだとわかったし、今もそれが
合っていることに疑いはない。

私たちは絶対に棲地M Iに向かわなければ
ならないと、そう思ったんだ。

まるで、何かに突き動かされるような……」

陸奥「長門……」

長門「陸奥……ときどき、どうしても考えて

すると・・・。

「北上さんっ!!」

劍城「ん？」

近くで大井の声が聞こえた。

声が聞こえた方向を見ると、そこには北上と大慌ての大井がいた。

北上「やあ、大井ツチ。」

大井「こ今回の作戦、私と北上さんが、有ろうことか・・・！」

北上「ああ、別々の艦隊になっちゃって

ビックリだよねえ？」

大井「ですよね!？」

(まったく、長門秘書艦っては何を

考えてるのかしら？

嫉妬・・・まさか嫉妬？

有り得るわ、だって北上さんは素敵

過ぎるもの！

たとえビッグ・セブンでも、その魅力には

抗えないのよ！」

北上「でもさ、楽しみだよねえ。」

大井「えっ？

楽しみ、ですか？」

北上「久しぶりにどっちがたくさん倒すか

競争しよっか。

じゃあお互い、頑張ろうねー♪」

大井「あ・・・。」

北上はその場から去り、大井の足下に冷たい
風が吹いた。

劍城「あくららら……」。



：「MI作戦」発動まで9時間：

く埠頭く

その日の夕方、埠頭では赤城が艦載機と飛ばして
独自演習をしていた。
するとそこへ……。

吹雪「赤城先輩。」

天馬「一人で演習ですか？」

赤城「あら吹雪さん、天馬君も。」

3人は腰を下ろし、夕陽でキラキラと輝く海を眺める。

赤城「明日の準備は、もう済んだの？」

吹雪「はい！」

やつと先輩と一緒に艦隊で戦えます！

これも、みんな先輩と天馬君のおかげです！」

天馬「吹雪さん……。」

赤城「それは違いますよ、吹雪さん。

誇るの、頼わず努力し続けたあなた自信。

私はほんの少し手を貸しただけにすぎません。」

吹雪「……私、この鎮守府が大好きなんです。

睦月ちゃんに夕立ちちゃん、三水戦の川内さん達

金剛型のお姉さん達や第五遊撃隊のみんな、

暁ちゃん達や高雄さん達や最上さん、

間宮さんに利根さん、島風ちゃん、

どの艦隊でも一緒に戦ってくれた天馬君、

そしてもちろん、赤城先輩！

この鎮守府にきて皆すごいなって。

皆素敵でかつこよくって、私もみんなの仲間に。

この鎮守府の本当の仲間になりたいって、

そう思ってたんです。

私が頑張れたのは、皆のおかげなんです！

だから、ありがとうございます！」

このとき、吹雪は真つ直ぐな笑顔を浮かべていた。

その笑顔を見た時、赤城は決心した。

赤城（提督が、この小さな駆逐艦にどんな光を

見たのかはわかりませんが、たしかなのは

私はこの眼差しに応えなければならぬ

ということ。

私を慕う後輩たちの……。

共に戦う仲間たちの……。

もう迷わない。

それが定めだというのなら、打ち砕いて見せる。

私は一航戦、赤城なのだから！)

天馬「赤城さん？」

吹雪「先輩？」

赤城「吹雪さん、天馬君……。

勝ちましょう、絶対に！」

吹雪・天馬「はいっ！」



く鎮守府 グラウンドく

次の日、作戦は日の出と共に始まった。

長門『諸君、ついにこの時がきた。

いよいよM I作戦が発動される。

我々にとつて、これはかつてない規模の
大作戦となる。

今後の我が方の戦い、全ての帰趨を決すると
言っても過言ではなからう。

本作戦の目的は、敵の空母機動部隊を
叩くことにある。

そのために棲地M Iを攻撃目標とし、ここを

攻撃することで敵の機動部隊をおびき出し、
撃破する。

この作戦は提督の意志だ。

その想いは常に我ら艦娘と共にある。

諸君!

暁の水平線に勝利を刻むのだ!』

一同「はいっ!」

—————

く 鎮守府近海く

赤城「第一機動部隊、参ります!」

榛名「お姉様、ご武運を!」

金剛「榛名たちも、グッド・ラックデース!」

天馬「では、お気をつけて！」
神童「検討を祈る！」

艦娘達は直ちに出撃、それぞれの
作戦海域へと向かった。

Episode 25 / 定められた運命と希望の光

MI近海 合流地点

赤城達 第一機動部隊は、棲地MI近海にある小島で大和達を待っていた。

しかし合流地点に大和達は現れず、一同は仕方なく索敵をしながら来るのを待ったが……。

金剛 「大和達、来ませんネー。」

比叡 「霧島達が場所を伝えているハズですから

先に来てると思ってたのですが……。」

雪菜 「この天気だと索敵がうまくいかなくて

敵も味方も見つからないかしら？」

利根 「吾輩のカタパルトが不調でなければ……」

天馬 「可笑しいなあ……」

大和さん、絶対に張り切ってるハズなのに……」

飛龍「赤城さん、どうします？」

赤城「うーん……」

（無線封鎖しているとはいえ、敵の勢力圏に

留まる時間が長いほど、敵に発見される

可能性も高くなる……

けれど、今動いてしまえば大和隊と合流

できなくなってしまうかもしれない。

私の取るべき道は……）

加賀「進みましょう、赤城さん。」

突然、加賀が口を開いた。

加賀「合流のために数艦を残し、私たちは索敵を

続けながら先行すべきです。」

赤城「……そうですね。」

吹雪さん、金剛さん、天馬君、雪菜さん

あなた達はこの集結ポイントで待機。

大和を要する攻略主隊と合流後、全速力で

私達を追ってきてください。」

雪菜「えっ？」

吹雪「でも私、赤城さんを護衛するために……」

赤城「勝つためには、私達第一機動部隊と

主力艦隊の密の連携が必要です。

それに、天馬君の考えたオペレーション

ライトニングを実行するにも、主力艦隊は

必要になります。

だからこそ、あなた達にお願いしたいのです。」

天馬「確かに、赤城さんの言う通りです。」

金剛「ブツキー、私達で大和達を待ちましょう！」

吹雪「……はい！」

こうして、赤城達は合流地点に

吹雪・天馬・雪菜・金剛を残し、

棲地M Iへと向かった。

天馬（何だろう、この前の様な嫌な予感がする・・・。

いや、前よりずっと強い・・・。）

不安に思う天馬は、矢筒から薄いグレーの矢と

藍色・赤・黄のストライプの矢を取りだし

薄いグレーのファルコンとモンスターペイントの
ファルコンを放った。

そしてその後、両肩にカタパルトを出現させ

コスモゼロ・アルファ1とアルファ2を放った。

天馬「古代さん、山本さん、加藤さん、篠原さん

皆さんは赤城さん達の後方から監視及び

護衛をお願いします。

それと、敵機動部隊に気づかれたくないので

通信は暗号打電で、飛行中はステルスモードで

「お願いします。」

『OK!』

4機は赤城達を追うため、全速力で飛んでいった。



「棲地M I 近海 エリアA」

数分後、M I 近海を航行していた赤城達は

筑摩の零式水偵が得た情報を聞いていた。

遙か前方には、棲地M Iとおぼしき火山島が見える。

筑摩「・・・何ですって!？」

棲地M Iに飛行場姫が!？」

加賀「今ならおそらく奇襲が成功します。」

このまま放置して主力艦が来たら、戦艦たちに
甚大な被害が……。」

赤城「そうですね……。」

(これで、正解だったかも知れません！)

第一機動部隊、一航戦、二航戦に命じます！

艦載機を爆装！

飛行場姫への攻撃を開始します！」

3人「はいっ！」

赤城・加賀・蒼龍・飛龍は第一次攻撃隊として、
九九式艦爆を数機を棲地M Iに向けて放った。

~~~~~

〽棲地M I〽

その頃、棲地M Iにいる飛行場姫は遠くから来る赤城達の第一次攻撃隊の存在に気づいた。

飛行場姫「・・・来タカ。」

飛行場姫は、後ろ髪の一部を滑走路に変化させ白球形の戦闘機を数機発進させた。

第一次攻撃隊は敵戦闘機の存在に気づき、敵の攻撃を避けると共に、飛行場姫へ爆撃を行った。飛行場姫の辺りはたちまち、火の海と化した。



く 棲地M I 近海 エリアA く

蒼龍「第一次攻撃隊、奇襲に成功！」

飛行場姫は被害甚大！」

比叡「やったー！」

飛龍「第一次攻撃隊より、更に入電！」

河、河、河！

赤城「第二次攻撃ノ要ヲ認ム、ね。」

加賀「どうします？」

赤城「（こちらの損傷は数機の艦載機のみ。

敵が発進させることのできた攻撃隊は僅か：

これなら勝てる……！）

わかりました！

残りの機体も爆装させ、飛行場姫攻撃に

向かわせましょう！」

赤城・加賀・蒼龍・飛龍は第一次攻撃隊と同様、

九九式艦爆数機を第二次攻撃隊として放った。

だがこのとき、一同は上空から敵の艦載機が、

はるか後方から隻眼ヲ級率いる機動部隊が狙って

いることに気づいていなかった。

だが、赤城達のすぐ後方を飛行する古代達は敵艦載機存在に気づいていた。

山本『後方より、機動部隊と思われる艦隊が

接近しています！』

篠原『上空にも、敵の艦載機とおぼしき飛行機を

多数検知！』

加藤『戦術長、どうする？』

古代『俺達の任務は、あくまで偵察と護衛だ。

こちらから手を出せば、機動部隊が甚大な

被害を受ける。

今しばらくは、敵の動きに注意しよう。』

すると・・・

山本『後方より、敵艦載機数機が急速接近！』

篠原『ここで撃ち落としてやろうぜ！』



古代『そうだな。

これより敵艦載機の迎撃に向かう！』

古代達は直ちに機体を180度転回させ、

敵艦載機の集団に向かって猛スピードで飛行する。

敵艦載機集団も、古代達に気づいたのか速度を上げ

真正面から突っ込む形となった。

古代達は敵艦載機に照準を合わせ、ミサイルの  
発車準備をする。

だが、敵艦載機集団は上下左右にカーブを描きながら  
分散し、古代達をかわした。

古代『しまった！』

古代達は急いで機体を再び180度転回させ

敵艦載機集団を追いかける。

古代『加藤、ヤマトに暗号を打電！

羊達ハ狼ノ眼差シヲ受ケタ！』

加藤『了解！』



ㄱ 棲地MI近海 合流地点ㄱ

その頃、合流地点では吹雪達が大和達を待っていたが、未だに来る気配が無い。

金剛「来ませんネー、大和達。」

雪菜「何かトラブルでもあったのかしら？」

金剛と雪菜が大和達が来るのを待つ頃、吹雪は何やら一人で考え込み、天馬はずっと耳をすまし

古代達からの通信を待った。  
すると・・・。

天馬「・・・コスモファルコン100番機より

暗号を入電!

羊達ハ狼ノ眼差シヲ受ケタ!

吹雪「えっ?」

金剛「ワッツ?」

雪菜「どういうこと?」

天馬「赤城さん達が敵の機動部隊に

狙われてるってことです!

吹雪「っ!?!」



北上・比叡・夕立は、砲撃で艦載機を攻撃する。

赤城「皆さん、直掩機を！」

加賀「赤城さん、直上!!」

赤城達の真上から、爆装した複数の敵艦載機が急降下してきた。

艦載機は爆弾を落とすと同時に、赤城達に対して容赦ない銃撃を仕掛けてきた。

ドカーン!

加賀「うわあああ!!」

赤城「加賀さん！」

加賀は爆撃をモロに食らい大破。

赤城も銃撃によって、飛行甲板を破壊され、

弓の弦を切断されてしまった。

蒼龍、飛龍も傷を負い中破。

さらに……。

夕立「敵艦、多数接近！」

九時の方向から、敵の雷巡数隻が近づき

赤城達に向かつて砲撃・雷撃を仕掛ける。

敵の容赦ない攻撃に、第一機動部隊は成す術が  
なかった……。

赤城（どうして…）

こんな事態だけは避けようと…

なのに…）

夕立「赤城先輩、直上!!」

赤城「っ!?!」

直上から、爆装した艦載機が赤城に向かって急降下していた。

赤城（やっぱり、抗えないの？

運命には…）

赤城は絶望し、その場で呆然としていた。

そして、敵の艦載機が爆弾を投下しようとしたその時だった……。

バシューン！ ドカーン！

突然、2つの青い光が艦載機のボディを貫き  
艦載機が目の前で爆発した。

赤城「・・・っ!？」

赤城は突然の出来事に驚き、辺りを見た。  
すると、目の前に二人の人影が見えた。

吹雪「赤城先輩！」

天馬「大丈夫ですか!？」

赤城「吹雪さんに、天馬君!？」

「私達もいますよー！」

天馬と吹雪に続いて一人の少女が、多数の  
銀色の艦載機と共に現れた。



赤城「雪菜さんまで!?

いつたい……。」

『俺達が読んだんだ。』

突然、赤城の無線に誰かの声が聞こえてきた。

声の正体は、コスモファルコン100番機の加藤だ。

赤城「あなたは?」

古代『宇宙戦艦ヤマト航空隊 隊長、加藤三郎!』

天馬から、あんた達をこっそり監視及び

援護するように命じられてたんだ。』

赤城「天馬君が?」

天馬「航空隊、全機発艦!」

天馬はコスモファルコン全機を発艦させていた。

加藤 『まあ、予想外の邪魔が入っちまったせいで

援護出来なかったのは事実だがな…』

赤城 「ですが、助かりました。」

雪菜 「赤城さん、今は敵の艦載機を

何とかしなきゃ！」

赤城 「ええ、でも…。」

天馬 「赤城さん、これをつ!!」

天馬は赤城に、自分の使っている弓を

投げ渡した。

赤城は見事にキヤッチし、そしてすぐ矢筒から矢を取り出し構えた。

赤城 「天馬君…ありがとうございます！

一航戦の誇りに賭けて…

稼働機、全機発艦！」

赤城は発艦できる機体を全て放つ。

加藤『戦術長、俺達も行こうぜ！』

古代『ああ！』

航空隊はこれより、敵艦載機の撃墜に向かう！

これ以上、奴らの好きにはさせるな！』

『了解！』

古代の指示で、ヤマト航空隊は敵艦載機の撃墜へと向かった。

雪菜「さあ、あなた達も行ってらっしゃい！」

雪菜の指示で、雪菜の艦載機達はコスモファルコンの後に続いた。

吹雪 「加賀さんと比叡さんは、至急退避を！」

加賀 「大丈夫、平気よ。」

比叡 「そうです！」

「ここで逃げたら、お姉様に叱られます！」

「よくぞ言ったネ、比叡!!」

比叡 「えっ!?!」

いつの間にか、比叡の直ぐ近くには金剛の姿が。

比叡 「お姉様！」

来てくれたんですね！」

金剛 「私だけじゃありません！」

フオロ・ミー！」

皆さんも、ついてきて下さいネー！」

金剛の目線の先には大和たち主力艦隊と、

修理中のはずだった翔鶴と瑞鶴、そして神童と棲地A.Lに向かっていたハズの剣城がこちらに向かっていた。

比叡「榛名に、霧島まで…」

天馬「剣城!？」

なんでお前がここに!？」

剣城「棲地M.Iに飛行場姫がいると、筑摩さんの

零式水偵からの通信を偶然聞いてな。」

神童「それを聞いた途端、大急ぎでこっちに

飛んできたらしい。」

赤城「翔鶴さん、瑞鶴さん…」

瑞鶴「高速修復剤が、なんか急に手配されてさ!」

翔鶴「大和さんに追い付いちゃいました♪」

吹雪「大和さんに?」

大和「それはまた後でお話ししましょう。」

・・・M.I攻略主力艦隊、旗艦大和!

推して参ります!!」



〈棲地MI〉

飛行場姫「仲間ヲ何人呼ンデモ無駄ダ。

才前達ハ、私ニ勝ツコトハ絶対ニ

出来ヌノダカラナ!」

飛行場姫は再び、白球形の戦闘機を大量に放った。



〈棲地MI近海〉

天馬「敵機多数、発進を確認!」

瑞鶴 「五航戦 瑞鶴！」

翔鶴 「五航戦 翔鶴！」

全航空隊、発艦始め！」

瑞鶴と翔鶴は、直ちに艦載機達を出撃させた。

天馬 「俺達も行きますよお！」

吹雪 「はいっ！」

天馬と吹雪も、艦載機の後続きに先行する。

赤城（一撃・・・いえ、それまでに至る全ての行動で

この子達は変えてしまった…

私たちが必死に抗おうとしてできなかった

何かを…

天馬君、吹雪さん、あなた達は一体…)

大和「やっと、この時が来ました。

ずっと悠久の昔から、私は待ち望んで

いたのかも知れません・・・。

皆さんと手を取り合い戦う、この時を・・・。

左舷、砲戦用意！三式弾装填！」

大和は主砲の照準を飛行場姫に合わせる。

天馬「主砲、副砲、三式弾装填！」

天馬も大和と同様の手順を取る。

大和「第一、第二主砲、斉射！」

天馬「全砲門、撃ち方始め！」

ズドン！！



二人はほぼ同じタイミングで三式弾を放ち、二人の周囲は荒波をたてる。

二人の放った三式弾は飛行場姫の直上で爆発。

大量の弾子が雨のように降り注ぎ、飛行場姫は炎の海へと消えた。

吹雪「やった！」

大和「まだです！」

炎がおさまり、飛行場姫が姿を現した。

飛行場姫は防壁を張り、三式弾の攻撃を防いでいた。

天馬「さすが姫クラスの深海棲艦、手強い……」



（棲地MI）

飛行場姫 「コノ程度ノ攻撃デハ、私ハ倒セヌ。

何度デモ、何度デモ沈ンデイキナサイ。」

## E p i s o d e 2 6 / 棲地M I を撃破せよ！

ゝ棲地M I 近海ゝ

大和と天馬が三式弾を放つてから、周囲の深海棲艦の攻撃は先程より激しさを増した。

夕立「本気にさせたッポイ？」

赤城「敵艦載機は私達が迎撃します！

第一機動部隊はその隙を突いて、

敵機動部隊の撃破を！

大和さん達 主力艦隊は、飛行場姫の撃破に

向かってください！」

大和「わかりました。」

剣城「赤城さん、俺も飛行場姫の撃破に

行かせてくれ！」

神童「劍城？」

劍城「アイツの中には如月さんがいる。」

W島沖海戦で守れなかった以上、奴の中から

如月さんを助け出す・・・。

それが、今の俺に出来る唯一の償いなんだ！」

大和「劍城君……」

赤城「わかりました！」

あなたには、大和さん達と共に行動して

もらいます！」

劍城「ありがとうございます！」

赤城「天馬君、吹雪さん！」

吹雪・天馬「はいっ！」

赤城と加賀を残し、吹雪達 第一機動部隊は

敵機動部隊の撃破へ、劍城と大和達 主力艦隊は

飛行場姫の撃破へ向かった。

榛名「榛名、全力で参ります！」

比叡「ひええええ！」

なんて言ってる場合じゃなくて、気合い！

入れて！撃ちます！」

金剛「バーニング・ラブ！！」

ズドーン！

金剛・比叡・榛名が敵の駆逐艦を攻撃。

計3隻の駆逐艦を沈めた。

霧島「ふふふ、負けてられませんね。

マイクチェックも十分済んだようですし。」

密かに霧島の後方から敵の駆逐艦数隻が近づいていた。

金剛「霧島！」

霧島「分かってますよ、お姉様。」

霧島は静かに、自分の眼鏡を外した。

榛名「霧島が…」

比叡「眼鏡を取った!?!」

霧島「さあ、攻撃開始です！」

ズドーン！

霧島は振り向くと同時に敵駆逐艦に向けて砲撃。  
見事に全弾命中した。

霧島「よく出来ました。」

その頃、別の海域では北上が敵駆逐艦と交戦していたが、敵の雷撃を避けるので精一杯だった。

北上「参ったな…

これじゃ魚雷を撃つ隙も無い…」

後方から敵の駆逐艦二隻が容赦なく魚雷を撃ち続ける。

北上は魚雷を避けながら魚雷を撃つタイミングを探すが……。

ウガアアア!!

後ろに振り向いた瞬間、進行方向から別の駆逐艦イ級が口を開けて襲いかかってきた。

北上「そんな……大井ツチ……」

助けて大井ツチ!!」

その時……。

ガンツ!

大井「でやっ!」

何処からともなく大井が表れ、駆逐イ級に強烈な飛び蹴りを叩き込んだ。

北上「えっ?」

大井「私の北上さんに、何してけっつかるのよおお!!」

大井はイ級を投げ飛ばし、そしてイ級に向けて砲撃イ級を撃破した。



大井「北上さん！」

北上「大井ツチく〜！」

突然、北上が泣きながら大井に抱きついてきた。

大井「北上さん。

怖かったの？」

北上「うん……。」

大井「なな何という可愛さ健気さ。

いえ、そんな言葉では語り尽くせない

この美しさは何に例えましょう？

まるで、春に萌える若菜の様な……

そう、萌えよ！

この可愛さを私は萌えと名付け……)

北上「あの、大井ツチ……。」

大井「はい！」

北上「敵が…」

大井「えっ？」

いつの間にか多数の敵駆逐艦に囲まれていた。

大井「いつの間…」

北上「でも大丈夫！」

恐れることは無いよ。

大井ツチと一緒にだから、今の私は

スーパ―北上様だよ！」

大井「は、はいっ！」

北上「二人合わせて、片舷40門！」

大井「両舷80門の魚雷は伊達じゃないわ！」

二人は手を取り合い、回転しながら魚雷を敵駆逐艦に放った。

北上「海の藻屑と！」

大井「成りなさいな！」

ドカーン！

---

一方、吹雪達 第一機動部隊は敵機動部隊を発見し  
撃破へと向かっていた。

吹雪「敵の護衛部隊を！」

雪菜「了解！」

飛龍「任せといて！」

バシユーン！

雪菜は飛行中の艦載機に指示を出し、 飛龍は

新たに九九式艦攻数機を放ち、護衛部隊の半数を雷撃によって沈めた。

ドカーン!

夕立「パーティー始めよう!」

ズドーン!

夕立も負けじと砲撃を行い、敵駆逐艦1隻を破壊した。

吹雪「金剛さん! 比叡さん!」

比叡「いきます!」

金剛「バーニング・ラブ!」

ズドーン!

金剛・比叡が敵旗艦の空母ヲ級に徹甲弾を放つ。  
放たれた徹甲弾は空母ヲ級の頭部と腹部に命中した。

天馬「今だ！

撃ち方始め！」

バシユーン！

すかさず天馬が空母ヲ級に向けてシヨツクカノンを放った。

シヨツクカノンは空母ヲ級の胸部と腹部を貫通し空母ヲ級は爆発、轟沈した。



〈棲地M I〉

飛行場姫「ナカナカヤルナ。

ダガ言ツタハズダ、才前達ハ私ニ

勝ツコトハ絶対ニ出来ヌトナ!

飛行場姫は再び、白球形の戦闘機を大量に放った。



「棲地MI 近海」

赤城「これではキリがありません。」

加賀「赤城さん、矢が……」

赤城は傷付いた加賀の代わりに艦載機を放ち  
続けていたが、お互い手持ちの矢の数は残り

二本となっていた。

すると……。

翔鶴「一航戦の先輩方！」

赤城・加賀「っ？」

「翔鶴と瑞鶴が予備の弓と矢を持ってやって来た。

赤城「翔鶴さん、瑞鶴さん。」

瑞鶴「きつとヘマをする空母が一杯や二杯は

いるかと思つてね、持ってきた。」

瑞鶴は赤城に弓を投げ渡し、翔鶴は二人に数本の矢を渡した。

瑞鶴「じゃあね。」

二人はその場を離れた。

加賀「少し頭にきましたね。」

赤城「行きましよう、私たちも。」

赤城は天馬から受け取った弓を背負い、瑞鶴から受け取った弓で艦載機を放った。

加賀も赤城に続いて艦載機を放ち、飛行場姫の爆撃へと向かわせた。

艦載機達は飛行場姫の真上に到達すると同時に爆弾を投下。

飛行場姫の辺りは再び火の海と化し、滑走路にヒビが入った。

榛名「飛行場姫の滑走路を無力化しました!」

霧島「制空権確保しました!」

天馬「神童さん!

劍城!」

神童・劍城「おう!」



榛名と霧島からの情報を聞いた途端、天馬と神童は砲台全ての照準を飛行場姫に合わせ、劍城は飛行場姫に向かって猛スピードで走り出した。

吹雪「天馬君、何する気!?!」

天馬「如月さんを助け出すんです！」

主砲及び副砲、撃ち方始め！」

神童「照準よし！」

撃て！」

バシューン！

天馬はショックカノン、神童は陽電子レーザーを飛行場姫に向けて放った。

二人の攻撃は飛行場姫の腹部に命中し爆発。

飛行場姫の腹部に黒く渦巻く大穴が出現した。



く飛行場姫 体内く

飛行場姫の体内へと潜入した剣城。

内部は暗い洞窟のようで、ドクドクと鼓動の様な音が聞こえてくる。

剣城「これが飛行場姫の中・・・。

ここは何処かに、如月さんが・・・。」

剣城は洞窟のような体内を走り回り、如月を探した。すると、前方に光る繭のような物体を発見した。

剣城「何だあれは？」

剣城は恐る恐る繭のような物に近づき、僅かな裂け目から中を除き混んだ。

すると、繭の中にあるものを発見した。

劍城「あれはっ!？」

繭の中には、繭の繊維で宙吊りに拘束された

如月の姿があつた。

劍城「如月さん!!」

如月は劍城の呼び声で目を覚ました。

如月「劍城・・・君？」

劍城「今助けます！」

劍城は繭の裂け目に手をかけ、左右に

抉じ開けようとした。

だが・・・。

ビリビリビリッ!!

劍城「ぐああああああ!!」

突然、劍城の身体を電流が走ったかのような強烈な痛みが襲った。

劍城は痛さのあまり手を放してしまい、もう一度繭の裂け目に手をかけた。

ビリビリビリッ!!

劍城「ぐっ!

ぬうううう!!」

劍城は痛みに耐えながら、繭を抉じ開けようと腕に力を加える。

如月「もうやめて！」

これ以上は劍城君の身体がもたないわ！

私に構わないでここから出て！」

劍城「嫌です！」

俺は絶対に如月さんを助ける！

それが、俺が如月さんと睦月さんにできる

唯一の償いなんだ！」

如月「劍城君……」

劍城「うおおおおおおお!!」

劍城は自分の手と腕に全ての力を込める。

ピキツ・・・ピキピキピキ・・・バリントツ！

そして、如月が捕らわれていた繭を破壊した。

繭は跡形もなく消え、如月を拘束していた繊維も

跡形もなく消えた。

劍城「如月さん！」

如月「劍城君……ありがとう、助けてくれて。」

劍城「よかった、如月さんが無事で。」

二人はお互い、優しい笑みを浮かべた。

劍城「さあ、いっちょ派手にいきますよ！」

如月「ええ！」

如月は劍城の右腕にしがみつき、劍城は左腕の  
火焰直撃砲を上方へと向けた。

徐々に火焰直撃砲にエネルギーが集まり、  
太陽のような炎球を作り出す。

劍城「準備はいいですか？」

如月「いつでもどうぞ!」

劍城「了解。

火焰直撃砲・・・発射!!」

バシユウウウウウウウウ!!



く 棲地MI 近海く

MI近海では、天馬達が劍城のことを心配しながら飛行場姫の様子を伺っていた。

大和も飛行場姫に狙いを定め、いつでも攻撃できる体勢で準備している。

天馬「劍城、大丈夫かな?」

雪菜「大丈夫よ。」



彼なら・・・剣城君ならきつと。」

すると、そこへ一人の艦娘が息をきららしながら  
やって来た。

睦月「みんなく！」

はあ……はあ……」

吹雪「睦月ちゃん!？」

どうしてここに!？」

睦月「剣城君が急に艦隊を離れて何処かへ行くから、  
心配になって追いかけてきたの。」

剣城君は？」

赤城「如月さんを助けに、自ら飛行場姫の中へ  
飛び込んでいきました。」



ㄱ 棲地 M I ㄱ



MI近海で飛行場姫の様子を伺っていた天馬達は突然の出来事に驚いている。

赤城「いつたい、何が？」

すると、火柱が消え中から二人の少年少女が現れた。

二人の姿を見て、一同は喜びの笑みを浮かべた。

天馬「劍城！」

睦月「如月ちゃん！」

劍城は上空から火焰直撃砲を飛行場姫に向けた。

劍城「これで最後だ!!」

バシユウウウウウウウ!!

劍城は再び火焰直撃砲を発射。

飛行場姫は防壁を展開しようとしたが間に合わず、飛行場姫は炎の中へと消えた。

劍城は如月を背中に担ぎながら飛行し、天馬達の前で着水し如月を降ろした。

睦月は如月に抱きつき、泣き出した。だが、今回の彼女の涙は喜びの涙だった。

睦月「如月ちゃん！」

よかった、今度こそ如月ちゃんに会えた！」

如月「ただいま、睦月ちゃん。」

遅くなつてごめんなさい。」

筑摩「劍城君、飛行場姫は？」

劍城「火焰直撃砲を直で食らったんです。」

きつと生きているはず無いでしょう。」

だが、安心するのは早かった。

榛名「新たな敵空母です！」

一同「!?!」

いつの間にか、一同の前方には新たな空母ヲ級と多数の駆逐艦・巡洋艦がいた。

比叡「いつの間に!?!」

神童「赤城さん、どうしますか？」

赤城「敵の拠点はすでに叩いたわ。

一度退却して、体制を立て直してからでも…」

大和「ダメです。

皆さんは感じませんか？

まだ何か、強い力が働いていることに。」

雪菜「強い力？」

大和「そうです。」

私がここに遅れたのも、新たな敵が現れたのも  
まるでかつてあったものを、あった通りに

しておこうとする力。

退却したら、その力はさらに大きくなる

気がするのです。

ここで打ち破らなくてはいけない。

私たちを縛りつけている何かを。」

赤城「・・・その通りです。」

「ウワアアアア!!」

突如、棲地MIから謎の叫び声が聞こえた。

吹雪「何っ!?!」

天馬「なんだ!?!」

一同は棲地M Iを見た。

そこには、飛行場姫とは別の深海棲艦の姿があつた。

利根「なんじゃ!?!」

雪菜「あれは、姫クラス深海棲艦《中間棲姫》よ!」

睦月「そんな…」

夕立「また最初に戻っただけっぼい?」

中間棲姫の出現により、棲地M I周辺は物凄い数の

深海棲艦によって埋め尽くされた。

瑞鶴「どうやっても…」

翔鶴「逃げられないというのですか…」

天馬・吹雪「ダメです!!」

突然、天馬と吹雪が叫んだ。

吹雪「そんなものに負けちゃ駄目です！」

皆が、私たちの勝利を信じて待ってるんです！



私、司令官に始めて会ったときに

言われたんです！

ここから始めようって！」

天馬「何もないとところから全て始まるんです！

何にも囚われず立ち向かわなきや

駄目なんです！

それが、全てを変えるんです！」

赤城「吹雪さん…天馬君…」

「その通りだ!!」

一同「っ!？」

突如、謎の女性の声が海上に響いた。

声のした方をみると、そこにいたのは…。

長門 「怯むな!

運命に抗うと言う事は簡単な事ではない!

しかし、だからこそ価値がある!

成し遂げる意義がある!」

一同 「長門秘書艦!」

長門 「艦隊!

この長門に続け!!」

## E p i s o d e 2 7 / オペレーション・ライトニング!!

ㄱ 棲地M I 近海ㄱ

飛行場姫が中間棲姫へ姿を変えてから、棲姫M I  
周辺は多数の深海棲艦で埋め尽くされ、戦いは  
激化していた。

夕立と神童は砲撃と雷撃を同時に行い、持ち前の  
火力をフルで出していたが。

夕立「凄い火力ッポイ！」

神童「これじゃキリがありません！」

するとそこへ、思わぬ人物がやって来た。

川内「苦戦してる?。」

夕立「あれ？」

何でここにいるツポイ？」

神通「長門秘書官と共に援軍で来たの。」

那珂「やっぱりセンサーには那珂ちゃんがないとね！」

神通「神通さんに、那珂さんまで。」

神通「私たちだけじゃないわ。」

一方、別のエリアでは劍城が睦月と如月を庇いながら戦っていた。

劍城「くそっ！」

これじゃキリが無い！」

すると突然、後方から一人の艦娘が現れた。

陸奥「どうやら私の出番ね。」

睦月「陸奥さん!?!」

一方、天馬達第一機動部隊にも援軍がやって来た。

雷「わ、私たちを頼ってくれてもいいのよ？」

吹雪「雷ちゃん!？」

棲地ALに向かったんじゃないの？」

赤城「まさか、長門秘書官が？」

電「はいなのです。」

暁「司令官は作戦の指示を出すとき、長門さんに

『全ては見せかけだ。』と伝えてたらしくて、

それを聞いて長門さんは考えたの。

想定される全ての作戦を遂行したように

見せかけて、全軍をこのMIに集結させる。」

響「それがハラショーな決断。

だから。」

後方からさらに、四隻の巡洋艦がやって来た。

愛宕「おまたせ！」

最上「僕もいるよ！」

球磨「クマあ！」

多摩「にやあ！」

雪菜「凄い……」

吹雪「何かを変えるには、決められた何かに

抗うにはそれしかない。

長門さんはその事に気づいて……」

天馬「……さあ、俺たち第一機動部隊も負けて

いられませんよ！」

吹雪「吹雪、行きます！」

天馬と吹雪は、共に棲地MIを取り巻く敵艦隊の撃破へ向かった。

球磨「ここが見せ場だクマああ!!」

多摩「多摩もやるにや!」

球磨・多摩も後に続く。

加賀「私達も!」

赤城「はい!」

負けじと、赤城と加賀も艦載機を可能な限り放ち

敵機殲滅へと向かわせた。

一同はありつたけの戦力を振り絞り、そして……。

赤城「制空権、取りました!」

榛名「敵防衛線も寸断しました。

中間棲姫射程内です!」

長門「天馬!今だ!」

天馬「はい!」

天馬は主砲と副砲の照準を中間棲姫に合わせた。

天馬「主砲・副砲、エネルギー装填！」

撃ち方始め！」

バシューン！

天馬は中間棲姫に向けシヨックカノンを放った。

シヨックカノンは中間棲姫の胸部と腹部に命中し

中間棲姫の身体は穴だらけになった。

だが……

天馬「……っ!？」

中間棲姫の身体の穴が徐々に塞がり、元の無傷の身体へと戻った。



吹雪「そんな・・・。」

長門「再生しているだと・・・!?!」

多摩「敵は無敵なのかニヤ？」

球磨「こんなのに勝てるわけないクマー!」

すると、吹雪が棲地M Iの近くである物を発見した。  
空母ヲ級率いる機動部隊である。

吹雪「…空母です。」

長門「何っ!?!」

天馬「・・・そうか!

提督は“棲地M Iを叩け”と命令していません!

“敵機動部隊を叩き棲地M Iを攻略せよ”と

命令していました!”

長門「では、空母を倒せば何かが変わると?」

吹雪「確信はありませんが、恐らくは・・・。」

長門「駆逐艦吹雪！」

夕立、最上、川内、神通、那珂と共に

敵空母を撃沈せよ！」

一同「はい！」

長門「天馬は敵空母が撃沈されたと同時に、

中間棲姫へシヨックカノンを撃ち込め！」

天馬「はい！」

吹雪、夕立、最上、川内、神通、那珂は敵空母の

撃破へと向かい、天馬は主砲を中間棲姫へ向け

エネルギーを装填し構えた。

吹雪「対空防衛は私が！」

みなさんは空母を！」

川内「任せて！」

川内・神通・那珂は雷撃を行い敵機動部隊を攻撃。

駆逐艦数隻を沈めた。

最上「いつけえええ！」

最上は甲板から瑞雲2機を発進させ空母ヲ級を爆撃。  
空母ヲ級にダメージを与えた。

夕立「何から撃とうかしら？」

ズドーン！

最後に夕立が機動部隊へ砲撃。  
敵機動部隊の破壊に成功した。

天馬「よしっ！

主砲、撃ち方始め！」

バシューーン!

敵機動部隊の破壊を確認したと同時に、天馬は再び中間棲姫へシヨックカノンを放った。

シヨックカノンは中間棲姫の腹部に命中し再び腹部に大穴が出現したが、再生し直ぐに塞がってしまった。

愛宕「あらら…ダメなの?」

陸奥「空母を倒せば、何かが変わるんじゃない

なかつたの!?!」

赤城「やはり、抗えないの…。」

長門「提督…。」

形勢逆転のはずが、逆に追い詰められてしまってもはや打つ手は無いと絶望する艦娘達。

だが、ある1人は未だ諦めずに戦い続けていた。

天馬「うおおおお！」

天馬は艦装に搭載された三式弾・魚雷・ミサイル爆雷を全て放ち、上空の戦闘機と中間棲姫を攻撃し続けていた。

天馬「諦めるな！

状況的にはこちらが不利かもしれないけど、

まだ負けた訳じゃない！

勝利を信じて、最後まで戦い続けるんだ！」

雪菜「天馬……」

すると突然、一同の後方から新たな九九式艦攻数機が現れ、機銃によって敵の戦闘機を攻撃した。

長門「誰だ？」

一同が艦載機の飛んできた方角を見ると、遙か彼方にボウガンを持った一人の艦娘がこちらに接近してくる姿が見えた。

電「誰なのです?」

雪菜「味方?」

??? 『本日付で鎮守府に配属になった装甲空母、

《大鳳》です。

提督の指示により、皆さんの援護に

やってきました。』

長門「大鳳だ?!」

大鳳は一同の前で停止した。

大鳳「提督からの伝言を伝えます。

『敵機動部隊を殲滅せよ、それがこの戦いに

勝利する唯一の手段だ。』」

長門「しかし、敵の空母はもう……」

すると……。

吹雪「長門さん、もう一杯現れました！

空母です！」

長門「何だどっ!？」

吹雪の目線の先には、隻眼ヲ級1隻と重巡リ級5隻で構成された艦隊がいた。

夕立「一体いくついるツポイー!？」

那珂「サインは勘弁だよ！

キリ無いから！」

吹雪「きつとこれが最後：最後の一杯。」

川内「何でそう言えるのさ!？」

吹雪「分かりません。

でも、敵の主力空母は3杯……。

そんな気がするんです。」

天馬「でも……何か変ですよ!」

敵艦隊6隻に加え、今度は海中から戦艦ル級が  
5隻出現。

合計11隻の巨大艦隊と化した。

金剛「急に増えたデスカー!?!」

長門「こうなればアレしかない。

天馬!」

天馬「はい!」

天馬は大きく深呼吸をし、そして全ての艦娘に  
無線を接続した。



天馬「オペレーションライトニング発動!!  
バトルシツプイレブン全員集合!!」

天馬の発動指令が全艦娘に伝わった。

長門「大和、行くぞ！」

大和「はいっ！」

赤城「大鳳さん、蒼龍さん、飛龍さん、対空防御は

あなた達にお願いします！」

大鳳「ええっ!？」

金剛「霧島、行くデース！」

霧島「了解です！」

吹雪「夕立ちゃん、行こう！」

夕立「オツケー！」

パーティー始めよう！」

睦月「如月ちゃんをお願いします！」

陸奥「ちよ、いきなりナニ!？」

如月「睦月ちゃん・・・?」

神童「俺達も行くぞ！」

剣城「はい！」

天馬の掛け声で、バトルシップイレブン全員が終結。敵機動部隊の前に壁を作るかの様に並んだ。

睦月「いったい、何をやる気なの？」

すると、バトルシップイレブンメンバーが突然衣服を脱ぎ捨てた。

そして一瞬の内にユニフォーム姿へと変わっていた。

天馬「パターン乙で敵の護衛艦を誘導し、旗艦である空母ヲ級の視界を塞ぎます！」

一同「はい！」

天馬「劍城、敵の間を狙って空母ヲ級に

シュートを叩き込め！」

劍城「おう！」

天馬「よし、作戦開始！」

一同散開！」

合図と共に、神童はジャンプして上空で停滞し、天馬を含むその他のメンバーはバラバラに動きながら敵の護衛艦へと突っ込んでいく。

隻眼ヲ級「行キナサイ、才前タチ。」

それを迎え撃つかの様に、隻眼ヲ級は護衛艦達に

指示を送り撃破へと向かわせた。

神童「予想通り、動いてくれたな。」

神童は上空から仲間と敵の動きを観察し、ベストなルートをはじき出す。

神童「・・・見えた！」

そして、神童が指揮棒を振るように腕を振りかざすと勝利へと導く炎の道筋が現れた。

だがその道筋は天馬達にのみ見え、敵の深海棲艦には見えないものであった。

神童「《神のタクトF1（ファイアイリユージョン）》！」

天馬達は神童の導きに従い海上を駆け、敵艦隊を誘導。複雑に動きながら、隻眼ヲ級の視界を塞いだ。

劍城「・・・見えた！」

天馬「劍城、行けっ！」

天馬は劍城の上空に向けてミサイルを放つ。

放たれたミサイルは突然空中分解し、中から

サッカーボールが現れた。

劍城はゆつくりと落下するサッカーボール目掛けてダッシュし、ボールに強烈なオーバヘッドキックを叩き込んだ。

ボールは黒いオーラを纏い、暗黒の剣となって放たれた。

劍城「《バイシクルソード》！」

劍城のバイシクルソードは敵艦隊の間を縫う様に突き進み、隻眼ヲ級へ命中。

隻眼ヲ級は頭部の艤装を破壊され爆発、炎上し海へと沈んだ。

劍城「よしっ！」

ピキンッ！

神童・劍城「っ!？」

突然、劍城と神童の艤装の表面にヒビが入り始めた。

ビキビキビキ・・・

ヒビは徐々に広がり、ついには艤装絶対日まで広がった。

バリンッ！

艦装の表面が砕け、光輝くメタリックの艦装が姿を現した。

神童・剣城を始め、一同は突然の出来事に驚いている。

神童「これは・・・？」

剣城「いったい、何が起こったんだ？」

天馬「きつと、二人が自分のスキルを戦いで活かすことが出来たから、艦装が進化したんだ！」

神童「なるほど、なら名前もバージョンアップしてこれからは《デウスーラ2世改》だ！」

剣城「ならば俺は、《メガルーダ改》です！」

睦月「凄い！」

長門「光輝く艦装か。  
なんて美しい・・・。」

天馬「よし、みんな！」

一同「おうっ！」

天馬はさらに7発のミサイルを放ち、新たに7個のサツカーボールを出現させた。

大和・赤城・睦月・瑞鶴・金剛・神童・天馬は

ジャンプしてボールを受け取ると、大和は長門、

赤城は加賀、睦月は夕立、瑞鶴は翔鶴、金剛は霧島、

神童は剣城とペアになり構え、天馬は吹雪・雪菜と共に構えた。

天馬「行くぞ！」

みんなの運命は、みんなで変えるんだ!!」

天馬の掛け声と共に、一同は必殺技の体制に入った。

赤城と加賀は、ボールを同時に高く蹴りあげ、

赤城はボールの上からジャンピングキック

加賀は下からオーバーヘッドキックを叩き込んだ。



ボールは炎の翼を出現させ、大空を飛ぶ鳥のように突き進む。

赤城・加賀「《炎の風見鶏》！」

翔鶴はボールを真上に強く蹴りあげる。

翔鶴「瑞鶴！」

瑞鶴「了解！」

瑞鶴はジャンプすると、翔鶴が蹴り上げたボールを今度はヘディングで急速落下させる。

そして翔鶴がそのボールを思いきり蹴り混んだ。

翔鶴・瑞鶴「《ツインブースト》！」

大和はボールを高く蹴り上げ、長門と共にジャンプし回転しながら炎の渦を発生させボールに蹴り混んだ。

大和・長門「《ファイアトルネードDD》！」

金剛・霧島は互いに両手を繋ぎ、ボールを中心に勢いよく回転し竜巻を起しながら浮かび上がる。そして上昇しきると、2人の足でVを描くようにしてボールを突き刺すようにシユートした。

金剛・霧島「《レポリューションV》！」

睦月・夕立は互いに手を繋ぎ、お互いにボールの外からまるで蝶のように舞うシユートを繰り出した。

睦月・夕立「《バタフライドリーム》！」

神童・剣城は互いにボールを蹴りながら空高くジャンプし、白い光と黒い稲妻を纏ったシユートを

黒い雨と共に叩き込んだ。

神童・剣城「《ジョーカーレインズ》！」

6つのシュートは海上を駆け抜け、衝撃波で海上の深海棲艦を全て吹き払い、中間棲姫目掛けて突き進む。

中間棲姫「ナニツ!?!」

中間棲姫はバリアを展開しシュートを防ごうとした。バリアは全てのシュートを1度に受けあっさりとは破られ、シュートは中間棲姫の周囲の溶岩に激突し爆煙をあげた。

天馬「これで最後だ！」

吹雪さん！ユキツペ！」

吹雪「はい！」

雪菜「了解！」

天馬はボールを高く蹴り上げる。

ボールは紫色のオーラを纏い、さらに稲妻を纏い落雷の様に落下。

左下から吹雪、右下から雪菜がオーバーヘッドキック。

天馬が直上からジャンピングキックを三人同時に叩き込んだ。

神童「あの技は!？」

剣城「10年前、雷門中サッカー部最強と言われた

伝説の……!!」

天馬「《イナズマ!》」

吹雪・雪菜「ブレイク!」

天馬「いっけえええええつ!!」

天馬・吹雪・雪菜の渾身のイナズマブレイクは  
中間棲姫へ勢いよく放たれた。

中間棲姫「ナンノオオオ!!」

中間棲姫は再びバリアを展開しシユートを受け止めた。  
だがシユートの勢いに押され、徐々にバリアに  
ヒビが入り始めた。

中間棲姫「私ハ負ケルワケニハイカヌ!

我々ノ悲願ヲ果タスソノ日マデ!

ガシャーン!

中間棲姫「ッ!?!」

ドカーン!

バリアは粉々に砕け散り、シユートは中間棲姫に見事命中した。

中間棲姫の居た場所は炎に包まれ、中間棲姫の姿は無かった。

霧島「攻撃の命中を確認。

中間棲姫、撃破しました。」

天馬「俺たち、勝ったんですね。」

長門「ああ……。」

中間棲姫が撃破されたことにより、M I 作戦は成功という結果で終了。

一同の心は安心で満たされた。

ドカーン！

・・・だが、安心したのはホンの束の間だった。

天馬「なんだっ!?!」

突如、棲地M Iの火山が大噴火を起こした。

噴火により棲地M Iのあちこちからマグマが吹き出し始めた。

吹雪「皆さん、あれ!」

吹雪が突然、噴火口の方を指差した。

噴火口から、白い体に黒い装甲を装備した巨大な猛獣と、長い髪をした赤い瞳の女性らしき人影が姿を現した。

神童「何だ、あれは・・・。」

雪菜「ついに復活した・・・。」

最強の姫クラス深海棲艦・・・戦艦棲姫が。」

天馬「あれが、戦艦棲姫……。」



## E p i s o d e 2 8 / ヤマト、敗北・・・

神童「何だ、あれは……。」

雪菜「ついに復活した……。」

最強の姫クラス深海棲艦……戦艦棲姫が。」

天馬「あれが、戦艦棲姫……。」

戦艦棲姫「……。」

戦艦棲姫の後方の猛獣は、両肩に仕組まれた

三連装砲を吹雪に向けた。

猛獣「グルルルル……。」

吹雪・天馬「ッ!？」

ズドーン！

猛獣は多数の砲弾を吹雪に向けて放った。

天馬は慌てて吹雪の前に立ち、両腕をクロスして構えた。

吹雪「天馬君!!」

天馬「波動防壁、出力最大!!」

ピカーン！

天馬と吹雪の目の前に、今まで誰も目にした事のない程の輝きを放つ波動防壁が展開された。

ドカーン！

猛獣の砲弾は波動防壁に激突し爆発。

天馬と吹雪は爆煙の中へと消えた。

煙がおさまると、そこには中破し海面に膝を着く吹雪。そして大破したものの、辛うじて海面に立つ天馬の姿があつた。

吹雪「くうう・・・！」

天馬「くつ・・・！」

睦月「吹雪ちゃん！」

雪菜「天馬！」

バトルシッププレイレブン一同は直ぐ様二人の元へ  
駆け寄つた。

夕立「吹雪ちゃん！」

赤城「大丈夫ですか!?!」

吹雪「私は平気です。」

でも天馬君は・・・。」

劍城「さっきの砲撃で、波動砲以外の全ての

武器が破壊されてしまいました。」

長門「波動防壁を出力最大で展開していたにも関わらず

大破まで追い込むとは、なんて破壊力だ・・・。」

天馬「こうなったら、波動砲で・・・。」

天馬は唯一生き残った艦首型艦装を正面で合体させ

波動砲の発射体制に入った。

劍城「やめろ天馬！」

艦装が大破した状態で波動砲を撃つなど、

言わば自殺行為だぞ！

やめるんだ!!」

劍城の忠告を他所に、波動砲発射口辺りに

エネルギーが集まりだした。  
バトルシツプイレブン一同は天馬の遙か後方へと  
避難した。

天馬「波動砲フルパワー！」

いっけええええええええええ!!」

バツシユウウウウウウウウ!!

天馬は渾身の波動砲を戦艦棲姫に向けて放った。  
戦艦棲姫はバリアを展開し波動砲を防いだが、  
勢いに負け少しずつだが後ろへと下がっていた。

天馬「よし、このまま!!」

天馬はエンジンが焼き切れるまで波動砲を戦艦棲姫に  
放ち続けるつもりでいた。

だが・・・

ピキンッ！

天馬「っ!？」

突然、艦首艤装にヒビが入り始めた。

ヒビは数秒で全体に広がり、一部のヒビから炎が吹き出し始めた。

剣城「まずいつ！

天馬！

波動砲を切り離して後退しろ!!」

だが、剣城が叫んだ頃には時既に遅し。

ドカアアアアアン!!

天馬の波動砲は大爆発を起こし、巨大な爆音を辺りに響かせた。

爆風は棲地M Iの地面を抉り、海上は荒波をたてる。

艦娘達は爆風と荒波に耐え、爆風が止むと、

前方には火山の高さを遥かに超える黒煙が上がっていた。

大和「……天馬君、どうなっちゃったんでしよう？」

神童「微弱だが、波動エンジンの反応があります。

沈んではいません。」

すると、黒煙の中から天馬が姿を現した。

吹雪「天馬君!!」

吹雪と雪菜は慌てて天馬の元へと駆け寄る。

だが……

ザバーン！

天馬は力尽き、その場でうつ伏せに倒れ気を失った。

吹雪「えっ・・・？」

雪菜「天馬・・・。」

天馬の身体は傷だらけになり、血が出ている所もあつた。

波動砲は爆発で前部二分の一が無くなっていた。

吹雪と雪菜は共に天馬を担ぎ、急いで長門の元へ向かった。

吹雪「長門さん、天馬君が！」

長門「全艦娘に通達！」

現時刻をもってM I作戦は中止！



直ちに現海域より離脱し鎮守府へ帰還せよ！  
繰り返す、鎮守府へ帰還せよ！！」

長門の指示で、棲地M I周辺にいる艦娘達は  
その場を離れ鎮守府へと向かった。

戦艦棲姫「・・・ツマラナイワ。

モット齒応エノアル連中ダト

思ッテタノニ。」



く鎮守府 指令室く

その日の夜、長門と陸奥は指令室にいた。  
そこには夕張と大和の姿も。

長門「夕張、天馬の艀装の修復状況は？」

夕張「波動砲を除く武装は全て応急修理を終え、

これから本格的な修復作業に入ります。

ですが、艀装本体と波動砲は損傷が激しすぎる

ので、応急修理だけでも難航しています。

波動エンジンは冷却装置とコンデンサの一つが

やられました。が、機材を交換すれば問題

ありません。

完全修復までの期間は早くて1週間と

見ればよろしいかと。」

長門「大和、天馬の容態は？」

大和「意識は無事に回復しました。」

ですが戦闘で受けたダメージが酷く、等分は

まともに動けないかも知れません。

今、吹雪ちゃんと雪菜ちゃんが看病を

してくれています。」

長門「そうか……。」

夕張「それと、長門秘書艦。」

長門「何だ？」

夕張「天馬君の艦装を修理していて、分かった事が

あるんです。」

長門「分かった事？」

夕張「天馬君の艦装には、次元波動エンジンの要

ともなる重要部品……



それは一番近くにいたあなたがよく知ってるはずよ？」

吹雪「うん……。」



く甘味処 間宮く

次の日の午後、バトルシップイレブン一同は間宮の店にいた。

赤城「まさか天馬君が負けるだなんて、思ってた

ませんでしたね……。」

加賀「戦場では何が起るかは分からないと

言いますが、あそこまでするとは正直

予想外でした。」

瑞鶴 「天馬が復帰するまで、私達正規空母が

頑張らないとね。」

翔鶴 「そうね・・・。」

大和 「空母の皆さんだけではありません。

我々戦艦も天馬君の穴を埋めなければ

なりません。」

金剛 「マツツの宇宙戦艦ヤマトは、私達戦艦

数人分の戦力となっていました。

だから、マツツの戦力をカバーするには

今のメンバーでは足りないデス・・・。」

霧島 「その通りですね・・・。」

吹雪 「前から思ってたんだけど、天馬君が戦闘で

怪我するのって私が悪いのかな・・・?」

睦月 「どうということ?」

吹雪 「天馬君は私達を守るために戦ってくれてたけど、私なんか毎回の様に戦闘の度に負傷して、その度に天馬君は身体をはって守ってくれてその度に怪我もしてる。

今回だって天馬君は私を戦艦棲姫の攻撃から守ろうとしたせいで大怪我を負う

結果になった・・・。

だから、天馬君が傷を負うには、私が

一緒にいるのが原因なんじゃないかって

思っちゃうの・・・。」

夕立 「それは、少し考えすぎじゃない？」

吹雪 「えっ？」

神童 「天馬は自らの意思で吹雪さん達を守るため戦うと決心しました。

例えは悪いですけど、仮に吹雪さんが自分を守るように天馬に指示を出して守らせていたとすれば、それは吹雪さんの責任と





MI作戦が発動する少し前、天馬は誰もいない  
工場で艤装の修理をしていた。  
すると……。

天馬「ん？」

波動エンジンを修理をしていた際、見知らぬ部品を  
発見した。

長さ1・2センチあるかどうか分からないくらい  
小さなオレンジ色の楕円形のカプセルだ。

天馬「何だろう、これ？」

すると……。

吹雪「天馬君、何してるの？」

突然、吹雪がやって来た。

天馬「吹雪さん。

作戦前に自分の艀装の修理をしているんです。

万が一故障なんかのトラブルがあつては

いけませんから。」

吹雪「なるほど。」

天馬「あ、そうだ。」

天馬は先程発見したカプセルを吹雪に渡した。

吹雪「何これ？」

天馬「俺にも分からないんですけど、波動エンジンを

見ているときに出てきたんです。

重要部品って可能性もありますから、

吹雪さんに預かってほしいんです。」

吹雪「えっ？私に？」

天馬「今俺にとつて安心して預ける事が出来る

人物は吹雪さんしかいないんです。

お願いします。」

吹雪「うゝん・・・わかった！

私が預かってあげる！」

~~~~~

吹雪「というわけで、なくしたらいけないと思つて

首飾りにして持つてゐるんです。」

雪菜「なるほどねえ。」

すると・・・

『鎮守府ノ提督、及び艦娘達ニ告グ。

提督「大変な事態だな……」

長門「どうされますか？」

このまま待つても、全滅するだけです。

直ちに鎮守府から退避するべきかと……。

提督「しかし……」。

すると……

大淀「長門秘書艦、大変です！」

長門「どうした？」

大淀「たった今、工廠の夕張から連絡が入りました！」

天馬君が宇宙戦艦ヤマトの艀装を装備して

海へ出たそうです！

それも怪我が治っていないうえに、艀装の

修理が完了していない状態です！」

長門「な、なんだと!?!」

Episode 29 / 放て!俺達の波動砲!!

〈鎮守府東側 沖合3km〉

戦艦棲姫「キタカ、松風天馬。」

天馬「あの忠告を聞けば、寝てる場合じゃないからね。」

鎮守府の沖では、戦艦棲姫と天馬が対立していた。

戦艦棲姫は白い肌非常に長い黒髪とネグリジエの

ようなワンピースを身に着け、瞳は真紅で輝きが無く

額には鬼のように一对の角が生えている。

戦艦棲姫は背後の猛獣の三連装砲を鎮守府に

向け、天馬は己の身体と艦装が完治していない

状態で、鎮守府を背にして構えている。

空には厚い雲がかかり、海は波も無く静かである。

戦艦棲姫「我ノ忠告ヲ聞イテイルノナラ分カツテ
イルデアロウ。

ソノ身体ト装備デハマトモニ戦鬪モ
不可能。

今スグ鎮守府カラノ退避ヲオススメ

スルガ？」

天馬「俺は絶対に逃げない！

ここは、吹雪さん達が暮らす大切な家なんだ！

誰かの大切な物を壊させるわけにはいかない！

命に替えてでも、俺は……。

……俺はこの鎮守府を守ってみせる!!」

戦艦棲姫「ソウカ、デハ目標変更ダ。

鎮守府ヲ破壊スル前ニ……

「マズハオ前ヲ破壊スル。」

「甘味処 間宮」

「一方そのころ・・・」

吹雪「ど、どうしよう……。」

雪菜「私達の今の戦力じゃ、戦艦棲姫に対抗出来るかどうか分からないわ。」

長門秘書艦ならきつと、無理は戦闘は避けて

一時的な退避をするはずよ。」

金剛「逃げるなんて戦艦の恥ネー！」

ここはオール・メンバーで正面对決ネー！」

赤城「無茶です！」

ただでさえ天馬君の空いた穴を埋めることも

出来ていないというのに……。」

加賀「ですが、このままノコノコと引き下がるのも

シヤクですね。」

一同が「大人しく退避する」か「不利を承知で正面对決を行うか」で抗議していると……。

長門「ハア……ハア……。」

長門が息を切らしながらやって来た。

大和「長門さん、どうしたんですか？」

長門「ハア・・・ハア・・・」

みんな、今すぐ出撃してくれ!

天馬が修理中の艦装を装備して海上へ

出たらしいんだ!

一同「えっ!?!」

神童「なんですって!?!」

長門「バトルシップイレブン全員は直ちに出撃!

天馬の援護に向かう!」

一同「はいっ!」

一同は間宮の店からゾロゾロと外へ出た。
すると・・・

ドカーン

突然、鎮守府全域に爆発音が響いた。

長門「爆発音？」

戦闘が始まったか。」

すると・・・

夕立「ねえ、何か飛んできたツポイ？」

吹雪「えっ？」

上空から何かが吹雪達に向かって飛んできていた。

一同はその場から後退りすると、飛んできた何かは

物凄い砂煙をたてて地面に勢いよく落下した。

落下してきたのは、何処と無く見覚えのある

三連装砲だった。

吹雪「これは……天馬君の三連装砲です!!」

長門「まさか……」。

みんな、急げ!!」

—————

〈鎮守府東側 沖合3km〉

天馬「ハア……ハア……」。

戦艦棲姫「フツツ、ヤハリマトモナ戦闘ハ

無理ミタイダナ。」

天馬は戦艦棲姫の砲撃を食らい、右側の主砲を破壊されていた。

戦艦棲姫は上空に向かい砲撃。

放たれた砲弾は勢いを失い、天馬に向かって

勢いよく落下し始めた。

天馬「マズイ！」

天馬は瞬時にその場を離れ砲弾を避けた。

砲弾は海に落ち爆発し、海上に高波を作り出した。

天馬と戦艦棲姫は高波から逃げるが、天馬は高波に飲み込まれ大量の海水を浴びた。

天馬（くそっ！）

補助エンジンの出力だけじゃ、思い通りに

動けない！（

艦装の損傷が激しいうえ、己の傷が完治していないため普段の攻撃が出来ないでいたが、彼は他にも問題を抱えていた。

天馬（M I作戦の時と同じだ。

やっぱり波動エンジンが全く動かない!

M I作戦の時は波動エンジン内の残存

エネルギーを補助エンジンに回して、

バイパス経由でショックカノンを撃って

何とかなったけど、昨日の波動砲でエネルギーを

大量に消費したから、今の残存エネルギーじゃ

補助エンジンも十分な出力を出せない。

波動エンジンさえ動いてくれば、奴に

勝つ望みはあるのに……)

戦艦棲姫「ソロソロ終わりにシヨウ。

安ラカニ眠ルガイイ。」

ズドーン!

戦艦棲姫は天馬の進行方向に砲撃。

天馬は砲撃に気付いたが時既に遅く、砲弾は天馬の正面にあつた。

天馬「っ!？」

ドカーン



く 鎮守府東側 沖合2km く

そのころ、バトルシップイレブン一同は天馬と戦艦棲姫が交戦している海域へ向かっていた。

吹雪「天馬君、無事かな・・・。」

吹雪は首飾りのカプセルを見て呟いた。

長門「それは・・・!」

長門はカプセルを見て驚いた。

長門「吹雪、それ、何処で手に入れたんだ!?!」

吹雪「M I 作戦の前に天馬君が預けてくれたんです。

ヤマトのエンジンから出てきた知らない

部品だつて。」

長門「まったく、あのバカが・・・。」

それは波動エンジンの核となる要の部品、

波動コアだ。

それが無いと、ヤマトの波動エンジンを

動かすことが出来ない。」

吹雪「えっ!?

じゃあ、天馬君は……。」

長門「恐らく、波動エンジン内の残存エネルギーを

補助エンジンに送って推進力を得ていたのだろう。

だが、戦艦棲姫相手に波動エンジン無しでは

勝ち目は無い。」

吹雪「急ぎましょう!」

一同は天馬のもとへ急いで向かった。

すると、前方に天馬と戦艦棲姫の姿が見えた。

だが、天馬は海面に右膝をつきしやがみ込んでいた。

吹雪「いた!」

一同は天馬の元へ大急ぎで向かった。

吹雪「天馬君!」

天馬「ハア・・・ハア・・・吹雪さん・・・。」

雪菜「無茶しないでよ・・・。」

艤装と怪我が治つてない状態で戦艦棲姫に

怠慢張るなんて・・・。」

天馬「無茶でも、俺は奴と戦わないとならないんだ!」

天馬は痛みに耐えながらゆっくりと立ち上がった。
すると・・・。

ポタツ・・・ポタツ・・・

睦月「天馬君、血が出てるよ!」

吹雪「えっ!?!」

天馬は額から血を流していた。

顔は流れ出た血で左半分が赤く染まっている。

長門「大変だ！

直ちに止血しなければ！」

天馬「大丈夫です、このくらい……。」

戦艦棲姫「ナカナカシブトイ奴ダナ。

松風天馬、才前ハソコマデ傷付イテ

何故戦ウ？」

天馬「南西海域戦の時に、吹雪さんに約束したんだ。

吹雪さん達は、俺が絶対守ってみせるって。

だから俺は、どんなに自分が傷付いても、

どんなに不利な状況でも戦い続ける！

約束を守るために！！」

吹雪「天馬君……。」

ピカーン！

突然、吹雪の波動コアが強く光り出した。

吹雪「これは・・・!」

天馬「俺は最後まで、絶対に諦めない!」

天馬は残りのエネルギーを補助エンジンに送り、
全速力で戦艦棲姫に向かって突き進む。

戦艦棲姫は主砲の照準を再び天馬に合わせた。

戦艦棲姫「今度こそ最後だ。」

永遠二眠ルガイイ!」

ズドン!

戦艦棲姫は天馬に向けて砲撃。

神童「マズイ！」

劍城「避ける！」

吹雪「こうなったら一か八か！」

吹雪は波動コアを自身の長10cm砲に装填し
照準を天馬に合わせた。

吹雪「天馬君！受け取って!!」

ズドン！

天馬「っ!!」

吹雪は天馬に向け波動コアを発射。

天馬は吹雪の呼び声に気付き、体を回転させ
波動コアを掴んだ。

キイイイイイインツ!

その直後、波動コアは強力な輝きを放ち天馬の身体と艤装を包み込む。

ドカーン!

だがその途端、戦艦棲姫の放った砲弾が天馬に命中。天馬は爆発と共に炎と黒煙の中に消えた。

戦艦棲姫「今度こそ、終ワリダ。」
吹雪「そんな……。」

バーン!

一同「っ!？」

突然、物凄い衝撃波が発生し炎と黒煙を消し去った。黒煙が消えると、吹雪達の目の前には新たにメタリックグレーに輝く宇宙戦艦ヤマトの艤装を装備した天馬の姿があつた。

戦艦棲姫「ナニツ!？」

吹雪「あの姿は!？」

神童「ついに天馬も、自分のスキルを見つけ出し

宇宙戦艦ヤマト改へ進化したんだ。」

剣城「アイツのスキル、決して止まらないエンジンは何度傷付き倒れてもまた走り出す、アイツの

“諦めない心”だったんです。」

長門「諦めない、心……。」

戦艦棲姫「クッ!!」

ズドーン!　ズドーン!　ズドーン!

戦艦棲姫は天馬に向けて砲弾を数発放った。

天馬は静かに右手を前に出し、正面に波動防壁を展開した。

波動防壁は戦艦棲姫の砲撃を防ぎ、打ち消した。

夕立「あれだけ受けてびくともしないッポイ!」

長門「恐らく波動コアを取り込んだだけでなく、

改へと進化したことで性能が大幅に

向上したのだろう。」

吹雪「凄いです。」

戦艦棲姫「コウナレバ、我ノ最終兵器デオ前モロトモ、

鎮守府ニ生キル艦娘ヲ全テ破壊シテクレル!」

猛獣「グガアアアアア！」

戦艦棲姫の猛獣は大口を開け、口内にエネルギーを
充填し始めた。

長門「マズイ！」

全員退避！」

長門はその場から全員を避難させた。

だが、天馬だけはその場から逃げようとはしなかった。

長門「天馬！」

天馬「ここは俺が引き受けます。

皆さんは逃げて。」

長門「しかし！」

天馬は波動砲の発射準備に入り、照準を猛獣の

口へと向けた。

砲門に徐々にエネルギーが溜まり、金色に輝くエネルギー体へと変化していった。

天馬「あの攻撃を受け止められるのは、俺のヤマトの波動砲しかない。

だから、俺がこの場を離れる訳には

いかないんです!」

睦月「天馬君……。」

すると突然、天馬の右後ろから吹雪が、左後ろから雪菜が支えに入った。

天馬「吹雪さん!

ユキツペ!」

吹雪「私も、天馬君と一緒に戦う!」

雪菜「天馬だけに、いい格好はさせないわよ!」

すると今度は、後方から長門達が一列に並び天馬の後押しに入った。

長門「吹雪と雪菜が共に戦うと言うのなら、私達も

手を貸そう！」

睦月「水雷魂で、絶対に勝とう！」

夕立「ツポイ！」

赤城「一航戦は、誰も見捨てません！」

加賀「私達は絶対に負けません！」

瑞鶴「私の幸運の女神の力を分けてあげるわ！」

翔鶴「行きましょう！」

一緒に！」

金剛「タマにはフォローするのも悪くないネー！」

霧島「後ろですが、右に同じです！」

大和「全力で、天馬君を押し参ります！」

神童「お前は俺たちサッカー部のキャプテンであり、

バトルシツプイレブンのキャプテンなんだ!」

劍城「キャプテンであるお前が、こんな所で

命を落とされちゃ困るんだよ!」

天馬「みんな・・・ありがとう!!!」

戦艦棲姫「食ラエ!!

《ブラッディ・インパクト》!!」

バツシユウウウウウウウ!!

天馬「これが正真正銘の・・・

波動砲フルパワーだああ!!!」

バツシユウウウウウウウ!!

天馬の波動砲と戦艦棲姫のブラッディ・インパクトは

ほぼ同時に放たれ、中間地点で衝突し辺り一帯
広範囲に強い衝撃波を発生させた。

海上は荒波をたて、一同は強い衝撃波と荒波に
耐え続けた。

—————

〈鎮守府 第三水雷戦隊寝室B〉

ガラガラガラ!!

ガシャーン!

バーン!

強い衝撃波は鎮守府にも届き、鎮守府にある屋根の
瓦・トタン板を全て吹き飛ばし、窓ガラス全てを

粉々に砕いた。

鎮守府に残された艦娘達は机・テーブルの下や布団の中、窓の無い壁に身を隠していた。

川内「吹雪・・・天馬・・・」

|||||

〽鎮守府東側 沖合3km〽

戦艦棲姫「ウオオオオオオオオオ!!」

負ケルモノカー!!」

天馬「諦めない!

俺達が!!」

吹雪・雪菜「私達が!!」

神童・劍城「青い海を!!」

睦月・夕立・大和・赤城「取り戻す!!」

長門・加賀・金剛・霧島・瑞鶴・翔鶴

「その時まで!!」

天馬達と戦艦棲姫は、互いにその場から動かず
踏ん張り続けた。

だが……。

バーン!

戦艦棲姫「ナニツ!？」

ついに戦艦棲姫のブラッディ・インパクトは、天馬達の

波動砲フルパワーに打ち消された。

一同「いつけえええええええ!!!」

波動砲は猛獣の口内に到達し、後頭部へと貫通し

猛獣の頭部を破壊した。

猛獣は全身からバチバチと電気が流れるような

音を放ち大爆発を起こした。

ドカアアアアアン!!

巨大な爆音を辺りに響かせ、爆風は鎮守府の木々や

電柱を薙ぎ倒し、海上は荒波をたてる。

天馬達は爆風と荒波に耐え、爆風が止むと、

戦艦棲姫がいた場所は火の海と化していた。

天馬「……」

すると、炎と黒煙の中から戦艦棲姫がうつ伏せの状態で姿を現した。

白い肌は煤で黒く汚れ、傷ついている。

一同は静かに戦艦棲姫へ歩み寄った。

戦艦棲姫「うう……」

天馬「大丈夫？」

天馬は戦艦棲姫と目を合わせた。

先程まで輝きが無かった真紅の瞳には輝きが

宿っている。

戦艦棲姫「何故、敵である私を？」

戦艦棲姫は膝をつき立ち上がった。

話し方も先程より少し変わったように聞こえた。

天馬 「敵だからといって、傷を負ってたら

放っておく訳にはいかないでしょ?

もつとも、君に傷を負わせたのは

俺だけど……。」

大和 「あのー……。」

突然、大和が割り込んだ。

大和 「単なる見間違いかも知れませんが、あなた

もしかして〃山城〃さんではないですか?」

戦艦棲姫 「……えっ?」

E p i s o d e 3 0 / 悲しい過去、希望の未来

大和「単なる見間違いかも知れませんが、あなた
もしかして“山城”さんではないですか？」

戦艦棲姫「・・・えっ？」

神童「天馬、山城って何だ？」

天馬「山城は、扶桑型超弩級戦艦の2番艦です。

1917年就航、1944年戦没。

国家の威信をかけて建造された艦でしたが、
機関や主砲の配置に問題があり、幾度となく
改装を繰り返した結果、艦隊にいるより
ドックにいるほうが長くなり、欠陥戦艦と
呼ばれるようになってしまった戦艦です。
戦争においてはほとんど戦闘に参加せず
内地で練習艦として使われ、しごきが凄い

ことでも有名だったため、当時の言葉に

“ 鬼の山城、地獄の金剛、音に聞こえた

蛇の長門、日向行こうか伊勢行こか、

いつそ海兵団で首つろか” なんてのや、

“ 地獄榛名に鬼金剛、羅刹霧島、夜叉比叡、

乗るな山城鬼より怖い” などの言葉があり、

そういった言葉ができるほど当時の海軍では

特に戦艦、重巡などの大型艦で教育が熱心に

行われていて、特に山城と金剛は

“ 横須賀の山城、佐世保の金剛” と戦慄され、

日本帝国海軍における“ しごきの東西両横綱”

として知られる苛烈さだったそうです。 「

劍城 「ある意味凄い戦艦だったんだな。」

戦艦棲姫 「・・・確かに、私はこの姿になる前は

戦艦山城として生きていたわ。

久しぶりね、大和。」

一同 「えっ？」

吹雪「大和さん、知り合いだったんですか？」

大和「以前少しお話した程度ですが……」

ですが、何故山城さんが戦艦棲姫になつてしまつたのですか？

数ヶ月程前に提督とご結婚されたと伺つておりますが。」

天馬「えっ？」

提督と結婚？」

長門「我々の提督ではない。

別の鎮守府の提督だ。」

戦艦棲姫「いえ、提督と結婚したという山城は

私ではないわ……」

一同「えっ？」

霧島「どういう事ですか？

ここにいる戦艦棲姫……じゃなくて山城さんが

大和さんが言う提督とご結婚された

山城さんではないって。」

戦艦棲姫「話してあげるわ。

あのとき私が目にした光景を・・・。」

~~~~~

～某日 某海域～

山城「主砲、よく狙って……ってー！」

ズドーン！

ー私がまだ山城だった頃、私はある鎮守府で

扶桑姉様率いる艦隊と永喜に渡り、

その鎮守府で最強艦隊と言われ活躍していたわ。

ドカーン！

山城「やったわ！」

扶桑姉さま、見ててくれた!？」

扶桑「ええ、よくやったわ。」

ーある日、私は扶桑姉様と共に深海棲艦と

戦っていた

けれど……。

扶桑「山城、魚雷よ！」

山城「えっ？」

ドカーン！

ー私は砲撃に夢中になって、敵の魚雷が接近していることに気付かなかったの。

私は魚雷をモロにくらって海に沈んだ……。

でも、運良く生き延びることが出来て、





——私を呼ぶ提督と、返事をする私の声を……。

山城「私の声？」

「どうということ……？」

——私は恐る恐るドアの隙間から部屋の中を見て、

そして見てしまったの……。

提督の隣にいるもう一人の私と、まるで

何事も無かったように楽しそうにしている

提督と扶桑姉様の姿を……。

山城「そんな、嘘でしょ……。」

——そして、さらに見てしまったの。

もう一人の私と提督の左手の薬指に、同じ

指輪があったのを……。

扶桑 『そういえば、明日は山城と提督の

結婚式でしたね?』

山城 『ええ!』

扶桑姉様、明日は絶対見に来てくださいね!

私の花嫁姿!』

提督 『おいおい、はしやぎすぎて体を壊すなよ?

お前は壊れやすい艦なんだから。』

山城 『ちよつと、まさか提督まで私のことを

また欠陥戦艦なんて言うつもりじゃ

ないでしょうね!』

提督 『そんなこと一言も言っていないだろ!?!』

扶桑 『フフフ。』

山城 「うそ・・・うそよ、こんなの・・・。」

~~~~~

神童「ちよつと待った！」

提督室にもう一人の山城さんが居たというのは

どういう事だ？」

霧島「・・・それに関しては、艦隊の頭脳と言われた

私でも判断しがたいのですが、恐らく

提督か他の誰かが何らかの方法で山城さんの

複製を作り出し、それに本来の山城さんの

記憶を植え付けたというのが、最も正当な

解答だと思われまます。」

長門「そんなことが可能なのか？」

霧島「現に天馬君の世界では、皮膚細胞に特定の

4つの遺伝子を導入することで、さまざまな

細胞への分化が可能になった万能細胞、

人工多能性幹細胞、通称“iPS細胞”という

ものが存在します。

今はまだ実用化はされていませんが、

iPS細胞を利用して患者と同じ遺伝子を持つ臓器を再生し、移植するということも

可能です。

その他にも、分子・DNA・細胞・生体などのコピーを作るクローン技術など、人間の

複製を作ろうと思えば出来ないことも

ありません。」

神童「なるほど、コピーを作ろうと思えば

いくらでも出来るか……。」

天馬「山城さん、続けてください。」

戦艦棲姫「はい……。」

~~~~~

〽某日 無人島（棲地MI）〽

——私は絶望した……。

提督は私のことなど綺麗に忘れ、もう一人の私と結婚の約束までしていたことに……。

そしてその日の夜、私の中で、提督と扶桑姉様に捨てられた悲しみと、私を捨てた提督と扶桑姉様に対する恨みと憎しみの感情が蠢き始めた……。

山城「提督、扶桑姉様……。」

——そしたら、私の目の前にあの猛獣が現れた……。

猛獣『ソウダ……。』

モット恨メ、モット憎メ!』

山城「っ!?!」

誰なの!?!」

猛獣『才前ヲ捨てタ者達ニ対シ、モットダ!!』

己ノ身ヲ焼キ付クスホド、絶望ノ炎ヲ

タギラセルノダ!!」

山城「・・・扶桑姉様も提督も、私を捨てた・・・。

信じてたのに・・・。

うわああああああああ!!」

ー私の恨みと憎しみが頂点に達したとき、私の体は黒いオーラに包まれた。

そしてオーラが消えたとき、私は姿を変え戦艦棲姫になったの。

戦艦棲姫「こ、この姿は!？」

ーそしたら、今度はあの猛獣とコードみたいな物で繋がれた。

そして、私は本当の深海棲艦になったの。

猛獣『今こそ我トヒトツトナリ、才前ヲ捨テタ

コノ世界ヲ滅ボスノダ。』

戦艦棲姫「消シテヤル・・・。

コノ世ニ生キル者達ヲ全テ!!」

~~~~~

戦艦棲姫「そしてあなたが棲地MIに来た

あの日まで、私は火山の中に封印されたの。」

天馬「そんなことが・・・。」

戦艦棲姫「今じゃ私、本当の孤独になっちゃった。

私にはもう、守るものなんてない・・・。

誰かのために命を掛けて戦っても、

私が居なくなれば、後々みんな私の

事なんか忘れてしまう・・・。

扶桑姉様も、私が一番愛していた提督も

代わりの私に満足していた・・・。

だから私には、守る人も、私が死んで
悲しんでくれる人も居ない……。
今の私は、本当の孤独なのよ……。」

戦艦棲姫は泣き出した。

天馬「戦艦棲姫……。」

すると、天馬が戦艦棲姫に手を差し伸べる。

戦艦棲姫「……何？」

天馬「よかったら、俺達の鎮守府に来ませんか？」

一同「ええっ!？」

その場にいた全員が驚きの声をあげた。

戦艦棲姫「でも、今の私は深海棲艦よ？」

天馬「そんなの関係ないです。

見た目や種族は違うけど、心があれば

たとえ人間でも深海棲艦でも、こうやって

話し合い、分かり合うことだって出来ます。

現に、あなたもこうやって自分の過去を俺達に

話してくれたじゃないですか。」

戦艦棲姫「……。」

天馬「俺、いつか人間と深海棲艦が互いに共存出来る

世界を作りたいと思ってるんです。

だから山城さん、あなたに手伝って

ほしいんです。

艦娘でもあり、深海棲艦でもあるあなたに。」

戦艦棲姫「天馬……。」

吹雪「私も、天馬君の理想の世界を作る

お手伝いしたいな。」

雪菜「私も。」

大和「私もです。」

長門「私も同じ意見だ。

もし、ここにいる戦艦棲姫と同じ経験をした
深海棲艦が他にも居るのなら、私はその者達と
共に生きる道を歩みたい。」

戦艦棲姫（見た目や種族は違うけど、心があれば

人間でも深海棲艦でも話し合い、
分かり合うことだって出来る……。

……もう一度だけ、信じてみようかしら
彼を……。

松風天馬の目指す理想の世界を……！）

このとき、戦艦棲姫は今まで忘れていた
笑顔を浮かべた。

戦艦棲姫「……わかったわ、これからはあなた達と

行動を共にするわ。

松風天馬、あなたの理想の世界を

実現するために。」

天馬「ありがとうございます。

これからよろしくお願いします、山城さん。」

戦艦棲姫「……マーズ。」

天馬「マーズ？」

マーズ「《マーズ・アレース》。

それが、戦艦棲姫になった私の名前よ……。

それと天馬、今後はタメ口でお願い。」

天馬「わかった……。」

じゃあ、これからもよろしくね、マーズ！
マーズ「ええっ！」

天馬とマーズは、固く握手を交わした。
いつの間にか空を被っていた雲は晴れ、青い空が
広がっていた。

天馬「さあみんな、帰ろう。

俺達の鎮守府に！」

E p i s o d e 3 1 (終) / 戦いを終えて

↳ 鎮守府 港 ↳

戦いを終えたバトルシップイレブンは港へ戻った。
港では、艦娘一同と提督がバトルシップイレブンの
帰りを待っていた。

天馬「バトルシップイレブン一同、ただいま

戻りました！」

提督「ご苦勞様。

で、ひとつ気になるんだが、何で戦艦棲姫が

君達と同行しているんだ？」

天馬「彼女はもう深海棲艦の戦艦棲姫ではありません。

今は俺達の一員です。」

マーズ「はじめまして、マーズ・アレースと

申します。

以後、お見知りおきを。」

提督「そうか、こちらこそよろしく。」

マーズは提督と握手を交わした。

川内「しっかしびつくりだね！

姫クラスの深海棲艦まで仲間にしちゃうん

だからさ！」

如月「確かに、深海棲艦を仲間にしようなんて

私達では考えられません。」

榛名「これも、天馬君の優しさのお陰なのでしょいか？」

天馬「いやあ、俺は……。」

ドサツ

一同「っ!？」

突然、天馬が体制を崩し倒れた。

吹雪「天馬君!？」

雪菜「ちよつと、大丈夫!？」

天馬「スピーイー……クウ……」

大和「どうやら疲れきって眠ってしまった様です。」

長門「全く、傷だらけの体で出撃したうえに

最後はこの様か……」

長門は少々呆れた口調で言うが、静かに笑っていた。

長門「吹雪、雪菜、大和、マーズ、悪いが四人で

天馬を病室へ運んでやってくれ。」

四人「はいっ!」

吹雪・雪菜・大和・マーズの四人は天馬を病室へと連れていった。

足柄「天馬ったら、いつの間にかあんなに

女の子を増やしちゃって。」

羽黒「三角関係を通り越して五角関係ですね。」

北上「そのうち、別の意味で戦闘が起きそうだね。

それも鎮守府内で・・・。」



く鎮守府 グラウンドく

それから数日後、鎮守府のグラウンドでは

バトルシップイレブンが雷門イレブンとの練習試合を行っていた。

その中には、背番号46番のユニフォームを着たマーズの姿もある。

天馬「マーズ！」

天馬はマーズに向けてパスを出した。

マーズはボールを受けとると、ボールを両足で上から勢いよく踏み地面に埋め込んだ。

すると、まるでボールの下で火山が噴火したかのようにボールは勢いよく飛び出し、炎を纏い勢いよくゴールへ飛んで行く。

マーズ「《カザンガン》！」

マーズのシュートは雷門ゴールへ突き進む。

ゴールを守るのは背番号20番の信助。

信助「うおおおおおっ!!!」

信助が叫びながら力を溜める。

すると、彼の背中から深い藍色のオーラが現れた。

オーラは形を成すと、大木のような剛腕を持つ

青を強調した剣闘士のような鎧を着けた巨人になる。

信助「《 護星神タイタニアス 》!!」

マーズ「何あれ!？」

吹雪「彼の背中から巨人が!？」

天馬「あれは化身です!」

信助は勢いよく両手を突き出すと、タイタニアスも

信助の動きに合わせる様に両手を突き出し

シュートを受け止めた。

信助のタイタニアスはシュートを見事に受け止め、

ボールは信助の手にあつた。

信助「霧野先輩！」

信助は霧野にパスを出すのが、雪菜にボールを奪われた。

雪菜「私もいくわよ！」

はあああああああつ!!」

雪菜が叫びながらグラウンドを走る。

すると、彼女の背中から信助と同じ色のオーラが現れた。

オーラは形を成すと、白い魔女が姿を現した。

雪菜「《魔女クイーンレディア》!!」

天馬「ユキツペもいつの間にか化身を!?!」

雪菜とボールの下に魔方陣が出現し、中からクイーンレディアが現れた。

クイーンレディアは両手を前に出し魔方陣を出現させ、雪菜が魔方陣の内側からシュートを放った。

雪菜「《チエックメイト》!!」

信助は大きく右腕を引き、タイタニアスもそれに合わせるように腕を引く。

そして信助が腕を掌底のように突き出すと

タイタニアスもその剛腕から掌底を繰り出しシュートにぶつけた。

信助「《マジン・ザ・ハンド》!!」

タイタニアスのマジン・ザ・ハンドとクイーン

レディアのチェックメイトが衝突した。
だが、タイタニアスはチェックメイトのパワーに
押され消滅。

ボールは雷門ゴールのど真ん中へ突っ込んだ。

雪菜「やったー！」

信助「もう天馬、化身が使えるなんて

聞いてないよ!!」

天馬「ごめんごめん！」

でも、化身を出すなんて凄いやユキツペ！」

雪菜「ありがとう、天馬。」

天馬「よし、みんな！」

この調子でガンガン攻めるぞー!!」

一同「おー!!」



く岬く

その日の夕方、天馬・吹雪・雪菜・大和・マーズは岬から海を眺めていた。

吹雪「今日の試合、楽しかったね！」

天馬「まさかユキツペが化身を出すなんて、

思ってたなかったなあ。」

大和「天馬君、その化身とは一体何ですか？」

天馬「化身とは、俺たちの世界では『人の心の強さが

気の塊として形になったもの』、そう

呼ばれていて、化身が出せる人は化身使って

呼ばれてて、凄いパワーを発揮できるんです！」

大和「心の強さ……。」

私たちにも出せるでしょうか？

その化身を。」

天馬「きつと出来ると思います。

だって、皆さんは激戦を戦い抜いた軍艦の強い魂を内に秘めているんですから。」

マーズ「そうね。

いつか、私も化身使いに。」

天馬はその場で静かに立ち上がった。

天馬「・・・さて、とんだイレギュラーが舞い込んで

来ましたけど、これで本来の作戦に

戻れますね。」

吹雪「あ、そっか・・・。

まだFS作戦は終わっていないかったもんね。」

マーズ「ここから先、あなたが今まで見たこと

無い程強い深海棲艦が出てくるかも

知れないけど、大丈夫？」

天馬「大丈夫、今の俺なら・・・。

いや俺達なら、どんなに強い敵が現れたって怖くない！」

大和「そうです、その通りです！」

天馬「俺達は必ず、この海を深海棲艦から取り戻す！」

そして、いつか人間と深海棲艦が共存できる

理想郷を作ってみせる！

俺達の手で！」

吹雪・雪菜・大和・マーズ「私達の手で！」

夕日は5人を優しく照らし、頭上の空には一番星が輝いていた。

《完》

season 2 　　く鉄底海峡を抜けてく

Episode 32 / もう一人の山城! マーズの決意!

く鎮守府 演習場く

MI作戦から数日が経ったある日、演習場では天馬と改二となった吹雪が完成した雪菜とマーズの新たな艦装を見ていた。雪菜とマーズは恥ずかしながらも新たな艦装を装備し、剣城は満足そうな笑みを浮かべている。

剣城

「どうだ? 新しい艦装は?」

雪菜

「もう最高! 艦載機を出すだけじゃなくて、砲撃やミサイル攻撃まで出来るんだもん! これ以上の何を望むと言うの?」

雪菜の艦装は、宇宙戦艦ヤマト2199 星巡る方舟に登場したゲルバデス級航宙戦闘母艦《ミランガル》。空母でありながら、高い砲撃性能を持つガミラス軍の航宙戦闘母艦である。パット見の作りは赤城の艦装と似ているが、足に大型の推進機を装備し、さらに右肩には艦載機の格納庫と艦橋がある少々厚めの飛行甲板、腰には280mm三連装陽電子カノン砲塔を2基装備。全体カラーは赤で、白と黒の迷彩柄が入っている。

マーズ

「私のドメラーズも凄い！攻撃力・防御力共に言うこと無しだわ！ただ小回りがちよつときかないかしら……。」

マーズの艦装は、宇宙戦艦ヤマト2199に登場したゼルグート級一等航宙戦闘艦《ドメラーズ3世》。最大口径490mm陽電子ビーム砲塔を7基28門も搭載し、同時に装甲も随一の厚さと固さを誇り、ヤマトに撃ち合いで十分に對抗しうるガミラス軍の超弩級宇宙戦艦。だがその反面、重装甲が祟って機動性が劣っているのが弱点である。形状は金剛改二のものと似ているが、全体カラーが

白1色で統一され、金剛改二では二連装砲があった部分には490mm陽電子ビーム

砲塔を4基16門、サイドにも2基8門搭載。煙突と電探があつた部分には艦橋部分。さらに脚部には6門と7門の空間魚雷発射装置を2基ずつ計26門、足には大型の推進機を装備。腕部にも330ミリ三連装陽電子ビーム砲を4基と鋼鉄製の盾を装備している。

天馬

「二人とも強そうだなあ。」

雪菜

「でも、実戦でこの性能を發揮出来なきや意味無いわよね……。」

マーズ

「ええ……。次の戦闘までに、もう少し上手く扱える様になりたいわ。」

すると……。

「あの……。」

一人の艦娘が演習場に訪れた。儂げな雰囲気を感じさせる白い肌にボブカットの黒

髪。艦橋を意識した髪飾りと緋色の瞳。肩が露出した紅白の巫女風の着物に赤いミニスカート。天馬達には見覚えのない姿だが、マーズは驚いた様に目を見開いていた。

山城

「私、扶桑型戦艦の《山城》と申します。あの、提督室はどちらに？」

一同は名前を聞いて驚き、そして思った。

天馬

「扶桑型戦艦の山城……？てことはもしかして……。提督室なら、この先にある本館の最上階にあります。」

山城

「そうですか、ありがとうございます。えーつと……。」

天馬

「俺、松風天馬って言います。」

山城

「天馬さん、ありがとうございます。それにしても、噂は本当だったのね？」

天馬

「噂?」

山城

「いえ、何でもありません! では私はこれで!」

山城はその場を去っていった。その左手には、キラキラと輝く指輪が見えた。

天馬

「マーズ、あの人つてもしかして・・・。」

マーズ

「間違いない。提督と婚約したもう一人の私だわ!」

吹雪

「でも、何で山城さんがこの鎮守府に?」

劍城

「何かあったのか?」



〈提督室〉

提督室に到着した山城は、提督と長門に話をした。

提督

「深海棲艦を見たい？」

山城

「はい。私達の提督があなた方の鎮守府に居られる深海棲艦の空母ヲ級と戦艦棲姫を一回お目にかかりたいらしく、許可を頂けないかと思ってお伺いしました。」

提督

「別に構わないが、1つ忠告しておく。彼女達は我々の仲間であつて見せ物ではないということだけは覚えておいてくれ。」

山城

「わかりました。それから、先程演習場を通り掛かった際に深海棲艦のお二人に会いました。まさか、本当に深海棲艦を仲間にされているなんて正直驚きです。」

長門

「全くだ……。それもこれも、天馬が来てくれないければ仲間にするなど考えなかつたな。」

山城

「天馬って、もしかして松風天馬君ですか? 黄色いユニフォーム姿でパーマしてる。」

長門

「……。お前、天馬に会ったのか?」

山城

「はい。こここの場所を教えていただきました。」

長門

「……。そうか。」



〈第八特殊艦隊 寝室〉

その日の夜、天馬達はM I 作戦後編成された特別艦隊、第八特殊艦隊(メンバーは現

在、旗艦吹雪天馬・雪菜・大和・マーズの5人。)の寢室にいた。だが、全員表情が暗い。

大和

「そうですか、昼間にそんなことが……。」

雪菜

「しかも明日、その提督が視察にくるらしいしわ……。」

マーズは一人、窓の外を眺めていた。

天馬

「マーズ、大丈夫？」

マーズ

「大丈夫。ただ会うとなると気が重くなるって言うか、心配って言うか……。」

吹雪

「見捨てられたからですか？」

マーズ

「それもあるわ……。」

天馬

「・・・。」



「鎮守府 港」

次の日、第八特殊艦隊は例の提督を出迎えるため港にいた。

天馬

「・・・遅いな。もう30分近く過ぎてるのに・・・。」

吹雪

「何かあったのかな？」

『ウウウウウウウウウウウ……』

突然、鎮守府全体にサイレンが鳴り響いた。

大淀

『緊急事態発生！鎮守府へ向け提督を護送中の戦艦扶桑より緊急連絡！我、南西海域にて敵艦隊に遭遇！…応援を求む！』

長門

『第八特殊艦隊、直ちに出击せよ！』

天馬

「扶桑と山城、きつと提督の護衛艦として来てたんだ！」

吹雪

「急ぎましょう！」

一同はドックへ向かった。

天馬

「第八特殊艦隊、出撃!!」

一同はドックから勢いよく放たれ、扶桑と山城がいる海域へと急いだ。

マーズ

「提督、扶桑姉様、待ってて!」



く南西海域く

南西海域では、扶桑と山城が小型の台船に乗った提督の護衛を行っていた。二人の前には、鎮守府に恐怖を振り撒く純白の墮天使、深海棲艦の戦艦夕級と随伴艦として戦艦ル級1隻と雷巡り級1隻がいた。

扶桑

「強すぎます。」

山城

「これじゃ焼け石に水です・・・。」

提督

「くそつ、戦艦二人で大丈夫だと思い込んだ自分が間違いだった!」

夕級達は目標を定め、静かに接近してくる。すると・・・。

キイイイイイイン!!

一同の上空を緑色の戦闘機が通過した。

ドカーン!

戦闘機は通過した際にミサイルを放ち、雷巡り級を破壊した。夕級達は戦闘機が飛んで来た方向を見る。目線の先には天馬達 第八特殊艦隊がいた。

天馬

「マーズと大和さんは、扶桑さん達と提督の保護を！ユキツペと吹雪さんは俺と奴らを攻撃だ！」

吹雪

「はいっ！」

雪菜

「了解！」

マーズと大和は提督達の護衛、天馬・吹雪・雪菜は夕級撃退へ向かった。

夕級

「・・・っ!!」

ズドーン！

ズドーン！

夕級は天馬達に向けて、ル級は提督達に向けて砲撃。

マーズ

「やらせない!」

マーズは自ら前に出て、盾を正面に構えた。相手の砲弾はマーズの盾に当たり爆発したが、マーズの盾には傷一つ無かった。

マーズ

「凄いわねこの盾!」

天馬は波動防壁を展開して攻撃を防いだ。

雪菜

「バトルモードへ切り替える!」

雪菜は甲板の先を夕級に向け構えた。さらに甲板を回転し遮蔽式砲戦甲板を出現させた。砲戦甲板には三連装ビーム砲台が6基搭載されている。

天馬

「照準合わせ！」

天馬の指示で、その場にいた全員が夕級とル級に照準を合わせた。二人は流石に分が悪いと判断したのか、その場を去っていった。

吹雪

「敵艦、撤退して行きました。」

天馬

「ル級と一緒にいた深海棲艦って、戦艦？」

雪菜

「戦艦夕級。今まで会ってきたノーマルクラスの深海棲艦の中じゃ最強よ。」

天馬

「厄介だな……。」

天馬・吹雪・雪菜は大和とマーズの元へ向かった。

提督

「助かりました。ありがとうございます、皆さん。」

天馬

「敵が少数だったのが、不幸中の幸いでした。」

吹雪

「ここから鎮守府までは、私達が護衛を手伝います。天馬君と雪菜さんは私と一緒に曳航及び前方の警備、大和さん、マーズさん、扶桑さん、山城さんは後方の警備をお願いします。」

山城

「了解です。」

扶桑

「わかりました。」

天馬・吹雪・雪菜は台船と自身をロープで繋ぎ曳航し、大和・マーズ・扶桑・山城は後方で護衛艦を行うことになった。一同は鎮守府へ向かって動き始めた。だが・・・。

マーズ

「あの……。」

扶桑

「はい？」

マーズと山城は、途中で足を止めた。

マーズ

「姉……いや扶桑さん、私の顔に見覚え無いですか？」

扶桑

「はて、初対面のハズですが、何処かでお会いしましたか？」

マーズ

「あ、いえ、何でもありません。」

扶桑

「そうですか。では、また後程。」

扶桑は天馬達を急いで追いかけた。

マーズ

「やっぱり、分かるハズ無いわよね……。」

マーズも扶桑の後を追いかけた。

↳ 鎮守府 港↳

扶桑達と第八特殊艦隊は無事に鎮守府に到着した。港では、提督・長門・陸奥・大淀が出迎えてくれた。(以降は吹雪達側の提督を”提督A”、扶桑・山城側の提督を”提督B”と称します。)

提督 A

「ようこそ、お待ちしております。」

提督 B

「突然の訪問で申し訳ない。空母ヲ級と戦艦棲姫の噂を耳にしてから、どうしてもこの目で見たいと思ひまして。：：それにしても、本当に空母ヲ級と戦艦棲姫が仲間になっていたとはな。どうやって仲間にしたんだ？」

提督A

「それについては詳しくは言えない。だが全ては彼、松風天馬君のおかげなんだ。」

提督B

「なるほど。」

陸奥

「どうでしょう？立ち話もあれですし、間宮さんのお店でお茶でもしながらお話しされては？」

提督A

「・・・そうだな、そうしよう。」

長門

「では私は、提督の寝室の準備をしてくる。天馬、すまないが扶桑達をお前達の寝室に泊めてやってくれ。それと、誰か二人に鎮守府を案内してやってほしい。」

天馬

「わかりました。」

〜第八特殊艦隊寝室〜

天馬達は扶桑と山城を連れて寝室へとやって来た。部屋の角には一人分の布団が畳んだ状態で用意されている。

天馬

「ここが俺達の寝室です。ベッドが一つ空いてますから、どちらか一人はベッドを使ってください。」

扶桑

「山城、あなたが使っていいわよ。」

山城

「ホント? ありがとう、姉様!」

扶桑は山城にベッドを譲り、山城は笑顔で喜んだ。二人の様子を、マーズは静かに見

ていた。

マーズ

(もし、あそこにいる山城が私だったら……。)

扶桑

「マーズさん。」

マーズ

「は、はいっ！」

扶桑の呼び掛けに、マーズは慌てて答えた。

扶桑

「あの、私達にこの鎮守府を案内して頂けないでしょうか？」

マーズ

「わ、わかりました姉、いや扶桑さん！」

扶桑・山城・マーズは部屋を後にした。

天馬

「マーズ、大丈夫かな・・・。」

吹雪

「完璧に動揺してたね・・・。」



〈 鎮守府 食堂 〉

その日の夜、扶桑・山城と第八特殊艦隊は同じテーブルで夕食を摂った。ちなみに、天馬は醤油ラーメン、吹雪はきつねうどん、雪菜は親子丼、大和はカツ丼大盛り、マーズは唐揚げ定食、扶桑と山城は天丼だった。

扶桑

「山城、私の海老あげるわ。」

山城

「ありがとう！」

扶桑は自分の海老天を山城にあげた。二人の正面にはマーズが座っており、マーズは暗い表情をしていた。

山城

「ねえ、大丈夫？」

マーズ

「えっ？」

扶桑

「なんか、昼間から元気無いみたいですけど、何かあったのですか？」

マーズ

「な、何でもない。大丈夫よ。」

マーズは席を立ち、一人その場を後にした。

天馬

「マーズ……。」

大和

「ボソツ……やっぱり、扶桑さんと山城さんの事を気にしているのでしょうか？」

雪菜

「ボソツ……そうとしか、考えられませんね。」

く 鎮守府 港く

その日の深夜、マーズは一人眠れず港の棧橋に腰掛け海を眺めていた。

マーズ

「……。」

すると・・・。

扶桑

「マーズさん。」

マーズ

「扶桑さん。」

扶桑はマーズの隣に腰掛けた。

扶桑

「眠れないのですか？」

マーズ

「ええ。扶桑さんは？」

扶桑

「私も、同じです。」

・・・。

数秒間、無言が続いた。

扶桑

「マーズさんは、大切な人を失ったことってありますか？」

マーズ

「えっ? いや、ありません。扶桑さんは?」

扶桑

「1度だけ、ありました。何か月前前に、私の姉妹艦の山城が被弾して、轟沈した事がありました。」

マーズ

「・・・。」

扶桑

「でもその数日後に、山城は帰って来ました。傷だらけになって、私と提督の前に。」



〃某日 某鎮守府 提督室〃

提督B

「山城……俺のせいだ。俺がああ海域へ出撃するよう命令したから、山城は沈んだ……俺が命令しなければ、山城は!!」

扶桑

「提督……。」

——あの時の提督は、とても悲しんでいました。自分のせいで、最愛の人であった山城を失ってしまったと、毎日毎日繰り返して言っていました。ですが……。

ガチャッ

提督B

「誰だ!! ノックも無く無断で・・・っ!？」

「ー山城は、突然私達の元へと帰って来ました。」

扶桑

「山城!？」

山城

「せ、戦艦山城、ただいま戻りました・・・。」

提督B

「山城・・・山城おおおお!!」

提督は突然、山城を抱きしめた。山城と扶桑は提督の突然の行動に驚いている。

提督B

「山城! お前なんだな! 本当にお前なんだな!？」

山城

「……。」

扶桑

「マーズさん?」

マーズは静かに立ち上がり、その場を後にした。

扶桑

「……。」

—————

く工場く

その後、マーズは工場の裏で一人泣いていた。

マーズ

「提督は、私の事を捨ててなんていなかった。私の事を愛し続けてくれていた。なのに、私は……私は……！うう、ううううううう……！」

彼女は、明け方まで泣き続けた。



く鎮守府 港く

次の日、艦娘一同は提督の見送るため港に集結した。

提督B

「皆さん、短い期間でしたがありがとうございました。」

長門

「向こうの艦娘達にも、よろしくお願ひします。またいつでも来てください。」

マーズは一人、寂しい顔をしていた。

天馬

「マーズ、大丈夫?」

マーズ

「ねえ、私このままお別れしていいのかな?もしかしたら、提督とも扶桑姉様とも2度と会えなくなるかもしれない。ここで私の正体を打ち明けるべきか、心の中に仕舞っておいて、このまま見送った方が良いのか、どうすれば……。」

雪菜

「マーズ……。」

すると……。

「キャツ!!」

突然、扶桑の悲鳴が聞こえた。一同が駆け寄ると、そこには目を疑う光景が見えた。

提督B

「ぐっ・・・くっ・・・!!」

山城が扶桑を押し倒し、提督の首を右手で掴み持ち上げていた。提督はもがき苦し
み、抵抗しようと暴れている。

マーズ

「ッ!?!提督! 姉様!」

マーズは咄嗟に走り出し・・・。

マーズ

「提督を放しなさい!!」

ドンツ!!

ザパーン!

そして山城に向かって勢いよくタツクルした。山城はタツクルされた拍子に手を放し、バランスを崩し海に転落した。

マーズ

「大丈夫ですか!?!」

提督B

「私は平気だ。だが山城は……。」

ザバーン!

口級

「ギャアアアアア!」

突然、深海棲艦の駆逐口級が鎮守府に現れた。

ガコンツ!

口級は提督と扶桑を堤防ごと飲み込み、そのまま鎮守府を去っていった。

マーズ

「待ちなさい！」

マーズは口級を追いかけるためドックへ向かった。

天馬

「マーズ待って！」

天馬・吹雪・雪菜・大和の四人も艀装を装備し、急いでマーズの後を追いかけた。

睦月

「長門秘書艦、私達も！」

長門

「いや、ここは天馬達に任せよう。我々は周辺の警備に当たる。ひよつとすれば先程の

口級以外にも居るかもしれないからな。」



く洞窟く

提督

「う、うくん……。」

扶桑

「……は……。」

口級に丸飲みにもされた提督と扶桑。気が付くと、二人は暗い洞窟の中で十字架に掛けられていた。洞窟の中は暗く、周囲には数本の松明の灯りしかない。

「目ガ覚メタ?」

突然、誰かの声があった。声があった方向を見ると、そこには戦艦夕級がいた。

提督B

「戦艦夕級!？」

夕級

「スマナイワネ。ウチノ駆逐艦ガ手荒ナ真似ヲシテ。」

扶桑

「私達を捕まえてどうしようと言うの？」

夕級

「我ヲノ裏切り者、戦艦棲姫マ―ズヲ誘キ寄セ破壊スル。ソレガ、私ノ使命。」

提督B

「では、なぜ私達なんだ？彼女を誘き寄せるのならば、第八特殊艦隊の誰かでもよかつたはず。」

夕級

「奴ガ一番愛シテイタ人物ガアナタタチダツタカラヨ。モットモ、今ハ恨ンデイルカモ知レナイ。」

提督B

「私達は深海棲艦に恨まれる様な覚えはあるが愛していた覚えは無い！私が愛していた

のは戦艦山城ただ一人だ！」

扶桑

「そういえば、山城は何処なの？あなた、山城が何処にいるのかご存知ない？」

夕級

「エエ、モチロン知ツテイルワヨ・・・。」

．．．姉様。」



く 鎮守府南東 55 km 沖合く

一方、第八特殊艦隊は提督と扶桑、二人を誘拐した駆逐口級を探していた。天馬と雪菜は偵察機を飛ばし搜索するが．．．。

天馬

「ヤマト航空隊より、入電。周辺海域に敵影認められず。」

雪菜

「こつちも同じです。」

吹雪

「二人とも、何処行っちゃったのかなあ…。」

すると…。

ピロン

加藤

『100加藤よりヤマトへ。深海棲艦の偵察機とおぼしき機体が島の洞窟へ入るところを発見した。座標を送るので、確認されたし。』

天馬

「座標確認。引き続き偵察を続けてください。」

加藤

『了解。引き続き、偵察を続ける。』

ピー

天馬

「加藤さんが怪しい洞窟を発見したそうです。敵偵察機とおぼしき機体の出入りを確認しているらしいですから、深海棲艦の秘密基地である可能性があります。」

吹雪

「行ってみましょう。」

く某島 洞窟入り口く

第八特殊艦隊は加藤の送った座標を頼りに洞窟の入り口へとやって来た。長年波に削られて出来た海触洞で、入り口の高さは5 m程ある。

天馬

「ここです。」

雪菜

「なんか、恐ろしい雰囲気ね．．．。」

マーズ

「感じる……この奥から提督と扶桑姉様を。」

マーズは真つ先に洞窟へと進入。天馬・吹雪・雪菜・大和も後に続いた。



く洞窟 最深部く

第八特殊艦隊は洞窟の最深部にある巨大な空間へとたどり着いた。そこには十字架に掛けられた提督と扶桑、さらに艦装を装備した山城の姿があった。

マーズ

「提督! 扶桑さん!」

マーズは提督達のところへ駆け寄る。だが……。

ズドーン！
ザバーン！

山城がマーズの足元に向けて発砲。さらに提督と扶桑に砲身を向けた。マーズはその場で動きを止めた。

山城

「少しでも動いたら、あなたの大切な提督と扶桑を粉々にするわよ？」

第八

「っ!？」

山城の予期せぬ発言に、第八特殊艦隊は驚いた。

提督B

「みんな騙されるな！コイツは深海棲艦の戦艦夕級だ！」

天馬

「なんだって!？」

山城

「……。」

山城は静かに目を閉じる。すると、彼女の身体を黒いオーラが包み込み、彼女は戦艦タ級へと姿を変えた。

天馬

「山城さんが、戦艦タ級?!」

タ級

「ソウ。私ハトアル戦闘デ轟沈シタ山城ノ姿ト記憶ヲ自分ニこびーシ、鎮守府ヘト侵入シタ。」

提督B

「タ級、山城は……山城はその後どうなったんだ!」

タ級

「山城ハソノ後、深海棲艦ノ戦艦棲姫トナツタ。デモ奴ハ我々ヲ裏切り、敵ノ艦隊ニ加ワツタ。」

扶桑

「……ちよつと待つて。じゃあまさか、本当の山城は……。」

扶桑はマーズに目を向け、マーズは扶桑と目を合わせた。

提督B

「まさか……。」

マーズ

「……そう、本当の扶桑型二番艦山城は、この私です。」

扶桑

「やはり、そうだったのですね……。始めて声をかけられた時から、何とも言えない違和感がありました。初対面のハズなのに、どこか身に覚えのある様な感覚で……。」

タ級

「サアまーず、才前ノタメニ用意シタすてーじダ。思ウガママニヤルガイイ。」

マーズ

「私のためのステージ? どういうこと?」

タ級

「才前ハ心ノ中デ思ツテイルハズ。自分ヲ捨テタ提督ト扶桑ニ復讐シタイ、殺シテヤリ

タイト。ココハソレヲ叶エルタメニ用意シタすてーじナノダ。サア、今こそ自分ヲ捨テ
タ者達ニ復讐ヲ果タセ!

マーズ

「……。」

マーズは艤装に搭載された陽電子ビーム砲塔4基を提督と扶桑に向けた。

吹雪

「マーズさん!」

吹雪はマーズを止めに向かおうとするが、天馬に止められた。

天馬

「大丈夫、俺はマーズを信じてます。」

マーズ

「……確かに、以前の戦艦棲姫であつた私なら復讐したいと今でも思っていたかもしれ

ない。でも、今は違う！」

マーズは照準を合わせ提督と扶桑に向け発砲。

バシユーン！

ドカーン！

タ級

「ナツ!?!」

だが、放った陽電子ビームは全てタ級に命中した。タ級は提督達の後方へ吹き飛ばされた。

マーズ

「私はもう、戦艦棲姫のマーズじゃない！今の私は第八特殊艦隊のマーズ、又の名をゼルグート級一等航空戦闘艦ドメラーズ3世！私は私が信じた者のために最後まで戦うと

決めた!」

バシユーン!

ガシヤーン!

マーズは陽電子ビームを提督と扶桑に向けて放ち、二人の拘束具を破壊した。二人は地面に下り立ち、天馬達が救護に向かった。

タ級

「・・・ちっ。」

ズドーン!

ドカーン!

戦艦タ級は洞窟の壁の一部を破壊し大穴を作り出した。穴の向こうには海が広がっている。

夕級

「イツカマタ会オウ。マーズ。」

夕級は穴から海へと逃げ、そのまま水中へと姿を消した。

天馬

「戦艦夕級……。」

—————

く某鎮守府く

その後、第八特殊艦隊は提督と扶桑を鎮守府へと送り届けた。だが着いた頃には既に夕方だった。

扶桑

「ありがとうございます。皆さんのおかげで無事に帰る事が出来ました。」

吹雪

「またいつでも鎮守府に来てください。それでは……。」

第八特殊艦隊はその場で轉身し、鎮守府を後にした。だが……。

提督B

「あ、待ってくれ!」

突然、提督に呼び止められた。

提督B

「マーズ……いや山城、ちよつといいか?」

マーズ

「……みんなは先に帰っててちようだい。大丈夫、後で追い付くから。」

天馬

「わかった。」

マーズは提督と扶桑の所へ戻り、天馬達はその場を後にした。

提督B

「山城……私達の鎮守府で共に暮らさないか？今の君は深海棲艦だが、そんなことは私にとつて関係ない。私は最愛の人である君と、共に同じ人生を歩みたい。」

マーズ

「……」

マーズは目を閉じ数秒ほど黙り混む。そして……。

マーズ

「提督、申し訳ありません。今の私はもう、以前の扶桑型二番艦山城ではありません。私は、第八特殊艦隊所属マーズ・アレース。又の名をゼルグート級一等航宙戦闘艦ドメラーズ3世。今の私には、共に戦ってくれる大切な仲間がいる。守るべき場所がある。叶えてあげたい少年の理想がある。今は第八特殊艦隊が……いえ、あの鎮守府が、私の居るべき居場所なんです。」

提督B

「そうか……。それならば、仕方あるまい……。今までありがとう、山城。」

提督は山城に指示を出し、共にその場を後にした。

扶桑

「さようなら、山城。元気でね……。」

扶桑はマーズに手を振り、マーズも扶桑に手を振った。そして提督と扶桑は鎮守府の中へ、マーズは夕日と共に水平線の彼方へと姿を消した。

マーズ

「……さあ、私も帰りますか。みんながいる鎮守府へ。」

Episode 33 / 吹雪、最大の危機！

（鎮守府近海）

ある日、第八特殊艦隊は近海のパトロール中に深海棲艦と遭遇していた。敵は重巡り級3隻に輸送ワ級3隻の計6隻。

天馬

「大和さんと吹雪さんはワ級、俺とユキツペとマーズはり級を攻撃だ！」
「おうっ！」

大和・吹雪は輸送ワ級、天馬・雪菜・マーズは重巡り級の撃破に向かった。

吹雪

「当たってください！」

大和

「第一、第二主砲、斉射!」

ズドドン!!

ズドーン!

吹雪はワ級集団に向け魚雷を発射し、大和は砲弾を放った。

ドカーン!

砲弾・魚雷は全て命中し、ワ級は爆発し破壊された。だが、爆発の拍子にワ級の破片が辺り一面に飛び散った。

グサツ!

破片の1つが吹雪の長10cm砲に突き刺さった。

吹雪

「あつ、もう…」

吹雪は破片を引き抜こうと左手で破片を掴み引き抜いた。そしてそのまま、破片を海へと捨てた。

天馬

「主砲、撃ち方始め！」

バシユーン！

天馬はリ級集団にショックカノンを放ち攻撃。ショックカノンは3隻中1隻に命中、リ級は爆発し撃沈された。

雪菜

「バトルモード！」

雪菜は甲板を回転させ遮蔽式砲戦甲板を出現させた。

雪菜

「照準合わせ！撃ち方始め！」

マーズ

「主砲、よく狙って……つてー！」

バシユーン！

雪菜とマーズが残りのリ級2隻に陽電子ビームを放った。陽電子ビームは両者共リ級に命中し、リ級2隻は撃沈された。

吹雪

「敵艦隊、排除完了。鎮守府に帰還します。」

一同は吹雪を先頭に動き始めた。すると……

天馬

「吹雪さん、左手どうかしたんですか？」

吹雪の左手の手のひらには切り傷があった。

吹雪

「あ、さつきワ級の破片が艦装に刺さっちゃって、引き抜こうとしたときに破片で手を切っちゃった……。」

大和

「帰ったら、手当てしなければいけませんね。」

┆ 鎮守府 医務室 ┆

鎮守府に着くと、吹雪は医務室で陸奥に左手の治療をしてもらった。治療した左手に

は包帯が巻かれている。

陸奥

「はい、これでOKよ。」

吹雪

「ありがとうございます。」

長門

「お前達の今日の任務はこれで終了だ。皆ゆつくり休んでくれ。」

「はい!」

この傷が、吹雪にとって悲劇の始まりであったとは、この時誰も思わなかっただろう。



↳ 第八特殊艦隊寝室

次の日の朝、天馬は一番に起きた。

天馬

「ふああ、よく寝た。」

吹雪

「くっ……ううっ……。」

その時、天馬は吹雪のうめき声を聞いた。吹雪は壁の方を向き、左手を押さえていた。

天馬

「吹雪さん、大丈夫ですか!？」

吹雪

「天馬君……左手が……うううっ……。」

天馬

「左手?！」

天馬は吹雪の左手の包帯を外した。
すると……。

天馬

「なんだこれ・・・!?」

吹雪の左手の傷口周辺の皮膚が白く変色していた。

天馬

「大和さん! ユキツペ! マーズ!」

天馬は直ぐ、大和と雪菜とマーズを呼び起こした。

大和

「・・・どうなさいました?」

天馬

「これ見てください!」

天馬は大和と雪菜とマーズに吹雪の左手の傷を見せた。

大和

「何ですかこれ……。」

マーズ

「白く、変色してる!?!」

雪菜

「大変!今すぐ医務室に運ばなきゃ!」

天馬

「わかった!吹雪さん、失礼します!」

天馬は吹雪を抱き上げ、大急ぎで医務室へと向かった。大和と雪菜とマーズも後に続いた。

—————

〈医務室〉

医務室に到着すると、一同は陸奥に診察を依頼した。騒ぎに気付き、剣城・神童・睦月・夕立・赤城・金剛・長門、そして提督が集まっている。

陸奥

「不味いわね……。傷周辺が深海棲艦の細胞に侵されてる……。。」

天馬

「そんな……。じゃあ、吹雪さんは……。。」

陸奥

「このまま放っておけば、吹雪ちゃんは次期に深海棲艦に生まれ変わる……。。」

睦月

「そんな……。！」

その場にいた誰もが耳を疑った。

雪菜

「きつとワ級の破片を触った時に、傷口から侵入したんじゃないかしら。」

天馬

「・・・治せないんですか？吹雪さんの怪我を治すことは出来ないんですか!?どんな貴重な薬でも手に入れます!どんなに難しくても危険度の高い任務でも受けます!だから、吹雪さんの怪我を治してください!!」

天馬は陸奥の前で床に膝を着き土下座をした。

長門

「・・・吹雪を助けたいと思う気持ちは皆同じだ。皆で協力して、治療法を探そう!」

「はいっ!」

天馬

「長門さん・・・ありがとうございます!」

↳101病室↳

その後吹雪は病室へと移された。

吹雪

「天馬君……。」

天馬

「心配しないでください。吹雪さんの身体、必ず治しますから!」

吹雪

「……うん!」

その日から、鎮守府の艦娘達は吹雪の身体を治すため一生懸命になった。戦闘に出撃した艦娘は撃破した深海棲艦の破片を集め、夕張が治療薬を作るため実験を重ね、吹雪が長期出撃不能になるため駆逐艦達は穴を埋めるため毎日演習を行い、遠征に向かった艦隊は遠征先にて情報を集め、大淀は仕事の合間を縫っては書類保管庫で治療に役立ちそうな資料を探した。



〈指令室〉

そして数日が経ったある日、金剛が指令室に天馬を呼び興味深い資料を見せた。

長門

「黄金の薔薇?」

金剛

「中世の英国で確認された薔薇デース! 太陽の光と月の光が交わる場所に咲くと言われる伝説の薔薇で、その薔薇の花弁を煎じた汁を飲めば、どんな病気や怪我も一瞬で治ると記されてマース!」

天馬

「じゃあ、その薔薇を手に入れる事が出来れば吹雪さんは助かるんですね!」

金剛

「イエース! ですが、黄金の薔薇は何処に咲くか分かりません。世界中を探し回っても見付からない可能性が極めて高いデース。」

天馬

「・・・長門秘書艦、俺に長期遠征の許可をください! 黄金の薔薇を探しに行かせてください!」

長門

「言われなくてもそのつもりだ。松風天馬、お前に無期限長期遠征任務を言い渡す! 世界中を巡り、黄金の薔薇を探すのだ!」

天馬

「はいっ!」



く地下ドックく

その後、天馬は遠征の準備を済ませ地下ドックで待機していた。ドックには天馬達の外他に、大勢の艦娘が来ていた。

暁

「大丈夫? 無期限の長期遠征なんて私達でも経験無いからどうなるか分からないけど・・・。」

電

「でも、燃料とかはどうするのです？もし燃料切れになって海上を漂流する羽目になったら……。」

夕張

「大丈夫よ。波動エンジンは真空からでも無限にエネルギーを取り込んで動く事が出来る無限機関なの。だからエンジンが動く限り、半永久的に航行が可能なの。」

赤城

「薔薇を発見出来ても、満身は禁物ですよ？何事も無事に帰るまでが任務ですからね。」

天馬

「皆さん、ありがとうございます。それじゃあ……。」

「待って！」

突然、天馬は誰かに呼び止められた。声のした方を見ると、大和・剣城・神童・雪菜・マーズ・睦月・夕立が、車椅子に乗った吹雪と共にこちらに向かっていた。吹雪の侵食は進んでおり、左腕全体から首もとまでが白くなっていた。

天馬

「吹雪さん!?ダメじゃないですか、病室で安静にしてなきや！」

睦月

「私達も同じ事言っただけ、吹雪ちゃんがどうしても天馬君のお見送りに行くって聞かなくて……。」

吹雪

「だって、もしかしたら天馬君に2度と会えないんじゃないかって思って、そしたら寝てる場合じゃないって思ったから……。」

天馬

「安心してください。俺は絶対に、黄金の薔薇を手に入れて帰って来ます。」

吹雪

「……その言葉、信じるね。」

すると、吹雪が天馬にあるモノを渡した。黄色い布と青い紐でできた小さな巾着だ。

吹雪

「お守り。私の手作りだよ。」

天馬

「吹雪さん……ありがとうございます。」

天馬はお守りを受け取るとカタパルトに乗り、ゆっくりと下りていった。そして艀装を装備し、黄金の薔薇を探す旅へと出発した。

天馬

「松風天馬、宇宙戦艦ヤマト改、行きます！」

一同は天馬の船出を見送った。黄金の薔薇を見つけ、無事に帰ってくると信じて。



く101病室く

それから1ヶ月後、吹雪と雪菜は病室の窓から海を眺めていた。吹雪の体は殆ど白く染まり、元の色の肌は残すところ顔の右半分だけとなっていた。

吹雪

「もう1ヶ月だね・・・天馬君、今日は何処を走ってるのかな・・・早く帰ってきてほしいな・・・。」

雪菜

「天馬はきつと帰ってきてくるわ。信じて待ちましょう・・・。」

吹雪は天馬の帰りをずっと待っていた。だが突然・・・。

バタツ

吹雪は力尽きた様に倒れた。

雪菜

「吹雪さん!? ねえ、吹雪さん、しっかり!」

雪菜は吹雪に声をかける。だが吹雪は気を失っていた。

雪菜

「吹雪さん！吹雪さんってば！」



くエベレスト山頂く

その頃、天馬はエベレストの山頂に来ていた。この1ヶ月の間に世界中を飛び回り黄金の薔薇を探し求めたが、結果は散々であった。時刻は夜中。空には天ノ川が広がっていた。

天馬

「どこにも無いや、黄金の薔薇……。必ず見つけるって約束したのに、これじゃあ吹雪さんに会わせる顔が無いよお……。」

天馬は波動防壁を身体中に展開し寒さを凌いだ。そして地面に腰を下ろし、星空を見

上げた。

天馬

「吹雪さん、大丈夫かな・・・。」

『私は、特型駆逐艦の1番艦吹雪です！』

お手本の為に、赤城先輩を見に行くというのはどうだろうか!?

エターナルブリザード!!

天馬君にも感謝してるよ! 天馬君が私にサッカーを教えてくれたから、ここまで強くなれたんだよ!

私、艦隊に戻ります！天馬君のお陰で、やる気出て来ました！

天馬君なら出来るよ！だって、天馬君はキャプテンだったんでしょ？

じゃあ天馬君、お互い頑張ろう！

なんだかね、男の人にこう寄り添うと、気分がホッとするらしいんだ。

そうなんだ。なんだか似てるね、私達。

やっぱり、友達がいるのって嬉しいね！

そっか、そうだよね！そうと分かれば、もっとトレーニングを積まないと！

ダメだなあ、あんな夢を見るなんて・・・。

次の作戦までに改にならないといけないもん！

分かってるけど、ふああく・・・。

私、絶対いなくなったりしないから。約束するから。

まだ諦めない、私、赤城さんの護衛艦になりたいの。誰かの役に立ちたいの…

はい！ やつと先輩と一緒に艦隊で戦えます！ これも、みんな先輩と天馬君のおかげです！

この鎮守府にきて皆すごいなって。皆素敵でかつこよくって、私もみんなの仲間。この鎮守府の本当の仲間になりたいって、そう思ったんです。私が頑張れたのは、皆のおかげなんです！ だから、ありがとうございます！

天馬君！ 受け取って！！

私も、天馬君と一緒に戦う！

私、天馬君のこと・・・

大好きだよ!』

ふと、天馬の脳裏を吹雪の言葉が過った。

天馬

「大好きか・・・よし、明日も探すぞー!」

天馬はそのまま眠りについた。そして次の日の夜明け前、天馬は目を覚ました。

天馬

「う〜ん、良く寝た。」

すると、天馬の右側から太陽が上り始めた。

天馬

「エベレストの山頂で日の出をみるなんて、夢みたいだ。」

天馬はふと反対側を見た。反対側にはまだ満月が姿を見せている。

天馬

「まだ月が見えるや。．．．ん？そういえば、黄金の薔薇は太陽の光と月の光が交わる場所に咲くって金剛さんは言ってた．．．もしかしたら！」

天馬の予想は当たっていた。徐々に太陽と月の光が天馬の正面に集まりだし、そこから小さな芽が顔を見せた。芽は徐々に大きくなり、やがて蕾を作り出す。そして、黄金色に輝く一輪の薔薇が咲いた。

天馬

「見つけた……ついに見つけた！黄金の薔薇だ!!」

天馬は嬉しさのあまり泣いていた。天馬は薔薇を根ごと掘り出し、そしてカプセルに納めた。

天馬

「これで、吹雪さんは助かる!」

天馬は太陽に向かって大声で叫んだ。

天馬

「ありがとう!!」

『ありがとう!!』

天馬の叫び声は辺りに木霊した。



く南沙諸島沖く

天馬はその後すぐ下山し、インド洋へと出た。そしてマレー半島を迂回し南シナ海の南沙諸島沖を航行し日本へ向かっていた。

天馬

「待っててくださいね、吹雪さん！」

だが・・・。

「ギャアアアアア！」

後方から敵艦隊が追いかけてきていた。

天馬

「余計な時間は削りたくなかったけど、仕方ない！」

天馬は180度轉身し、主砲を敵艦隊に向けた。

天馬

「主砲、三式弾装填！」

だが……。

ガシッ

天馬

「っ!？」

何か为天馬の足を掴んだ。足元を見ると、ガスマスクのようなスキューバダイビング用のレギュレーターを装備した深海棲艦、潜水力級2隻が天馬の足にしがみついていた。

天馬

「まさか、潜水艦!？」

ザバーン!

潜水力級は天馬を海中へと引きずり込んだ。

く洞窟 牢く

天馬

「う、うん……。」

気が付くと、天馬は牢の中で倒れていた。

天馬

「……は……俺は確か、海中に引きずり込まれて……。」

天馬はその場を動かこうとした。

ジャラッ

だが、いつの間にか手首と足首には鎖が繋がれており、鎖は岩壁に繋がれていた。舩装も手袋とアンカー以外は外され、鉄格子の向こうで鎖に吊るされている。

天馬

「なんだこれっ!?!」

ガシャンツ！

「目ガ覚メタミタイネ。」

突然、扉の開く音と共に誰かの声がした。正面には那珂に顔立ちと髪型が似ている、黒いセーラー服を身に纏った青い瞳の深海棲艦がいた。

天馬

「・・・那珂さん？」

???

「はい！艦隊ノあいどる、那珂チャンダヨ。ヨツロシクウ・・・ツテ、違ウワヨ
！」

天馬

（ノリ突つ込み・・・。）

イシス

「私ハ《軽巡棲鬼》ノいしす。ソシテココハ、私ノ秘密基地。」

天馬

「何で、俺をここに？」

イシス

「アナタガ面白イものヲ持ツテイタカラネ、欲シクナツタノヨ。」

イシスの手には、黄金の薔薇を入れたカプセルがあつた。

天馬

「黄金の薔薇！それは大切なモノなんだ。返してくれないかい？」

イシス

「悪イケド、御断リヨ。私ハ自分ガ気ニ入ツタものハ絶対ニ返サナイ主義ナノ。タトエ
ぼすノものデモネ。」

天馬

「頼む、返してくれ！それを持って、急いで鎮守府に帰らないと、大切な人を助けられな
いんだ……。」

イシス

「ソウネ……コノ薔薇ガ枯レタラ返シテアゲルワ。フッフッフ……。」

ガシヤンツ！

イシスは不敵な笑みでその場を去り、牢の扉を閉めた。天馬は絶望し、岩壁に寄りかかった。

天馬

「そんな……。俺はいつたい、どうすれば……。」

天馬はポケットから吹雪がくれたお守りを取り出した。

天馬

「すみません吹雪さん……。吹雪さんとの約束、守れそうにありません！」
すると……。

天馬

「・・・何か、入ってる。」

お守りの中に何かが入っていた。中身を取り出すと、綿と一緒に手紙が入っていた。

『天馬君へ。』

この天馬を読んでいるってことは、ひよつとして黄金の薔薇は見つからなかったのかな?』

天馬

「・・・見つかりました。見つかりましたけど、でも・・・。」

『この手紙が、私にとって最後のメッセージになるかも知れません。でも私、最後まで天馬君を信じて待っています。元気になって、また一緒にサッカーやりたいです。』

天馬

「俺も同じですよ、吹雪さん・・・。俺も、また一緒にサッカーがしたい・・・!」

『本当はいつか自分の口で言いたかったんだけど、言えるかどうか分からないので、この手紙に記します。』

私、天馬君のことが大好きです！仲間として、友達として、そして一人の男の子として……。』

天馬

「吹雪さん……。」

『天馬君、絶対に諦めちゃダメだよ。どんなに不利な状況でも、負けが決まった訳じゃない。勝利を信じて、最後まで前に進み続ける。それでこそ、私の……私の大好きな、松風天馬君だよ！』

特型駆逐艦吹雪型1番艦 吹雪より。』

天馬

「・・・そうだ、そうだよ。俺が諦めて、どうするんだ!」

この時、天馬は自分の中から物凄い力が湧いてくる感じがした。

天馬

「俺は絶対に諦めない! 吹雪さんが、俺を信じて待っていてくれるんだ! こんなところで、諦めるもんかっ!!」

天馬はありったけの力を右腕に込め、鎖を引っ張る。

天馬

「うおおおおお!」

ギギギギギギ・・・バキンッ!

そして右腕の鎖を引きちぎった。

ギギギギギギ・・・バキンッ！

さらに左腕。

ガシヤン！ ガシヤン！

さらにアンカーソードで両足の鎖を切断。

ジャキン！

さらに鉄格子を切断し破壊した。そして艀装を装備し、天馬は牢を離れた。



く大広間く

一方、基地の大広間ではイシスが椅子に腰掛けて、カプセル越しに黄金の薔薇を眺めていた。

イシス

「美シイワア。コノ薔薇ハ、私ニコソ相応シイノヨ！」

ギギギギギギ……!

突然、大扉が開き天馬が現れた。イシスは驚き、目を見開いた。

イシス

「オマエハ……!？」

天馬

「イシス! その薔薇は返してもらおうぞ！」

イシス

「……嫌ト言ツタラ？」

天馬

「力尽くでも取り返す！」

天馬は全ての砲身をイシスに向けた。

イシス

「無駄ヨ。アナタノ持ッテイタ三式弾ヤみさいるハ全テ外シテアル。砲撃ナンテ出来ル訳ガナイ。」

天馬

「確かに三式弾を外されたのは痛いけど、俺は三式弾が無くても砲撃出来る！全砲門、撃ち方始め！」

バシユーン！

天馬はショックカノンをイシスに向け発砲。

イシス

「ナニツ!？」

イシスは速やかに椅子から離れ、シヨックカノンは椅子に命中し爆発。カプセルは爆発の拍子に宙を舞い、天馬の手元へと戻った。

イシス

「マサカ、コンナカヲ持ツテイタナンテ・・・。」

天馬

「俺はお前と戦うつもりは無い。悪いけど、これで失礼させてもらう。」

天馬はそう言うと、カプセルを持って大広間を後にした。

イシス

「・・・。」

く秘密基地 出入り口く

天馬は秘密基地の出入り口に到達した。だが出入り口は海中にあり、外は潜水力級がウヨウヨいる。

天馬

「ここを突破しなくちゃ、鎮守府へは帰れない！こうなったら、沖田戦法で行くつきやない！」

天馬は覚悟を決め海中に飛び込んだ。そして出入り口を通り、カ級の集団へ飛び込んだ。

天馬

「撃ち方始め！」

バシユバシユバシユーン！

天馬はショックカノンを全方位に乱射。カ級を次々と沈めていく。

天馬

「ここで始めるか。」

天馬は途中で180度轉身し、艦首型艦装を正面で合体させ、波動砲の発射体制に入った。

天馬

「波動砲、発射用意! 機関圧力上げ! 非常弁、全閉鎖! 波動砲発射弁、開放! 強制注入機、作動! 安全装置、解除!」

その頃、イシスが基地から海中へと姿を現した。

イシス

「イタ。何ヲスルツモリ?」

天馬

「薬室内、エネルギー充填120%！」

射口辺りにエネルギーが集まりだした。

天馬

「波動砲、発射！」

バツシユウウウウウウウ!!

波動砲は基地の出入り口に向けて放たれた。

イシス

「全艦撤退！基地ヲ捨テテ、今スグ逃ゲルノヨ！」

出入り口付近にいたイシスは直ちに撤退命令を出し、いち速くその場から逃げた。そしてその直後、波動砲が基地に到達した。

天馬

「重力アンカー解除！」

ガシヤン!

天馬は推進機内に仕組まれた重力アンカーを解除。そして波動砲に押され、海面へと突き進む。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

く南シナ海 南沙諸島沖く

ザバーン!

ドカーン!

天馬は海中から上空へと飛ばされ、その直後基地があった場所から巨大な水飛沫があがった。

バシャーーン！

天馬

「よし、急いで戻らなきゃ！」

天馬は着水すると直ぐさまエンジンを最大出力で回し、猛スピードでその場を離脱した。イシスはその様子を近くの岩影からこっそり見ていた。

イシス

「天馬……。」



〈鎮守府 港〉

夕方、天馬はようやく鎮守府に到着した。港では剣城・神童・雪菜・睦月・夕立・和・マーズ・金剛・赤城・夕張が待っていてくれた。

天馬

「皆さん、ただいま戻りました!」

神童

「黄金の薔薇は?」

天馬

「手に入りました!夕張さん、これで薬を作ってください!」

夕張

「うん、わかったわ!」

夕張は薔薇の入ったカプセルを受け取ると、大急ぎで工廠に向かった。剣城と金剛も後に続いた。

天馬

「ところで、吹雪さんの容態は？」

「……。」

突然、その場にいた全員が口を閉じた。

天馬

「皆さん？」

赤城

「……天馬君、1つお約束してもらってもよろしいですか？たとえ、どんなに残酷な運命であっても、それを受け入れると……。」

天馬

「……まさか、吹雪さんに何かあったんですか!？」

睦月

「……吹雪ちゃん、昨日の夕方から意識が無いの……。」

夕立

「もう身体の殆どが深海棲艦化してて、ひよつとしたら、もう助からないかもって……。」

天馬

「そんな・・・くっ!」

ガシヤンツ!

天馬は臙装を外し、吹雪のいる病室へと向かった。

—————

く101病室く

病室へと到着すると、吹雪はベッドで心電計と繋がれ、酸素マスクを装着し眠っていた。肌は殆ど白く染まり、右目周辺を残すまどとなった。

天馬

「吹雪・・・さん・・・。」

吹雪のベッドの隣では、長門と陸奥が守りをしていた。

長門

「天馬、戻ったのか。黄金の薔薇は？」

天馬

「何とか手に入れました。今、夕張さん達が薬を作ってくれています。」

陸奥

「・・・吹雪ちゃんのこと、聞いたの？」

天馬

「はい。」

長門

「見ての通り、昨日から意識不明だ。もう、助からないかも知れない・・・。」

天馬

「それでも俺は・・・。」

金剛

「ハイマツツー！薬が完成したデース！」

金剛と剣城が完成した薬をフラスコに入れて持って来た。薬はキラキラと、黄金色に輝いている。神童・雪菜・睦月・夕立・大和・マーズ・赤城も合流した。

天馬

「それでも俺は、僅かな可能性に掛けます!」

天馬は金剛から薬を受け取り、病室内へ入った。薬を自身の口に含み、フラスコを投げ捨て、吹雪の酸素マスクを慎重に外し、そして……。

チュッ

「んなっ!?!」

「うえええっ!?!」

天馬は吹雪と唇を重ね、吹雪の口に薬を移した。その光景を目撃した睦月・夕立・大和・雪菜・マーズ・金剛・長門は顔を真っ赤にして驚き、神童・劍城・赤城は口をぽかんと開けて呆然とし、陸奥は「まあ…」と口元を押さえた。

神童

「く、口移し……。」

夕立

「大胆過ぎッポイ……。」

睦月

「如月ちゃんともやったこと無いのに……。」

口移しが終わると、天馬は唇を離した。

ゴクッ

「っ!?!」

一同は、葉が喉を通る音を聞いた。すると、みるみるうちに吹雪の肌は元の色に戻り、モノの数秒で、吹雪の身体は元に戻った。

吹雪

「……………ん。」

吹雪の身体がピクツと反応したかと思っただ直後、彼女はゆっくりとその瞼を開いた。そして彼女はゆっくりと起き上がり、辺りを見回し、天馬と目を合わせた。

吹雪

「天馬……君?」

天馬

「吹雪さんっ!!」

天馬はたまらず、起き上がったばかりの吹雪を抱きしめる。

吹雪

「うええええっ!!ちよつ、天馬君!」

いきなり抱きしめられた吹雪は一気に目が覚めて顔が真っ赤になる。

天馬

「吹雪さん、吹雪さん!本当に・・・本当に良かった・・・!」

天馬は目に涙を浮かべながら、吹雪をぎゅっと抱きしめていた。

夕立

「よかった、吹雪ちゃんが無事で・・・グスツ・・・。」

睦月

「吹雪ちゃん・・・本当に、本当によかった・・・!うう・・・!」

睦月と夕立も、涙で顔がくしゃくしゃになっていた。

吹雪

「睦月ちゃん、夕立ちゃん・・・。」

神童

「吹雪さん、どこか身体に異常は無いですか?」

吹雪

「あ、ううん。何とも。」

神童

「そうか……。」

神童は安心しきつたように微笑みかける。

吹雪

「天馬君、ありがとう。それと、ごめんなさい……。」

天馬

「謝るのは俺の方です！ 薔薇を見つけるのに、1ヶ月以上も掛かってしまった……。そのせいで、吹雪さんの病状を悪化させてしまいました……。」

吹雪

「天馬君は悪くないよ。私のために、一人で頑張ってくれたんだもの。……ありがとう、天馬君。」

天馬

「吹雪さん。」

一同は抱き合う天馬と吹雪を優しく見守った。



くグラウンドく

それから吹雪は順調に回復し、数日後無事に退院することが出来た。

吹雪

「んーっ！外の空気を吸うの久しぶりだなあ。」

天馬

「吹雪さん、やりますか！」

吹雪

「うん！」

二人はグラウンドで仲良くパス練習を始めた。

――――
　　〱 甘味処 間宮〱

その後、間宮の店では・・・。

天馬・吹雪

「いただきます！」

二人仲良く、特盛りあんみつを食べたという目撃情報が後を断たないとか。

――――
　　〱 波止場 灯台前〱

その日の夜、天馬と吹雪は波止場で海を眺めていた。

天馬

「……。」

吹雪

「……天馬君。」

天馬

「はい?」

天馬は吹雪に呼ばれ振り向いた。すると……。

チュツ

天馬

「っ!?!」

吹雪は天馬の両肩に手を添え、彼と唇を重ねた。吹雪の口づけは数秒間続き、唇が離れると天馬の頬が赤くなっていた。

天馬

「吹雪さん、何を……。」

吹雪

「これで、おあいこだね。」

天馬

「えっ?」

吹雪

「睦月ちゃんから聞いたよ。だから御返し。」

天馬

「いや、その……あああれはあくまで現状で最適な方法だと思って、その……。」

吹雪

「フフツ。」

吹雪の発言に、天馬は動揺した。だが、直ぐに落ち着きを取り戻した。

天馬

「・・・手紙の返事、してもいいですか？」

吹雪

「読んでくれたんだ。」

天馬

「はい。あの手紙に気付かなかつたら、きつと俺は吹雪さんを助けられませんでした。諦めかけていたときに、吹雪さんのメッセージが、俺を奮い立たせてくれたんです。そして、確信が持てたんです。」

俺も、吹雪さんのことが大好きです！」

吹雪

「天馬君……。」

ありがとう……！」

二人は共に身を寄せ、そして優しく抱き合った。そして天馬は確信した。吹雪と一緒に、きつとどんな困難でも乗り越えられると……。

今、二人の秘密を知っているのは、夜空に輝く星たちだけであることを願う。

E p i s o d e 3 4 / ショートランドと謎の声

く ショーランド泊地 港く

ある日、吹雪達第八特殊艦隊は鎮守府から遠く離れたソロモン諸島ブーゲンビル島の端に位置する前進基地、《ショートランド泊地》へと来ていた。

天馬

「ここが、あの最前線ソロモンを挑むショートランド泊地かあ。」

吹雪

「素敵！」

第八特殊艦隊は港に到着するや否や、ショーランド泊地を見て回る。泊地と言っても、工廠や寮等の建物は全て南国風の建物で作られており、軍用の設備を全て取っ払えば南国のリゾート地に早変わりしそうだった。

マーズ

「話には聞いていたけど、ホント……これじゃリゾート地間違えちゃうわよ。」

雪菜

「ですね……。」

—————

く 工廠 く

一同は艀装を預けるため工廠へと向かった。工廠では既に劍城と夕張が、既に到着していた他の艦娘達の艀装のチェックをしていた。

天馬

「劍城！夕張さん！」

劍城

「おお、天馬か。今着いたのか？」

大和

「はい、第八特殊艦隊、たった今シヨールランド泊地に到着致しました。」

天馬

「……ん？」

天馬はふと工廠の奥に目を向ける。工廠の奥では、見慣れない桃色の髪の女性が何やら見たことの無い巨大な艀装を製造していた。

天馬

「夕張さん、あの人は？」

夕張

「私達と同じく、他の鎮守府からシヨートランド泊地に配属された特務艦艇・工作艦《明石》さんよ。明石さーん！」

夕張は明石を呼び、明石は呼ばれたのに気付き駆け寄った。

明石

「何かしら？夕張。」

夕張

「紹介するわ。前に話してた我が鎮守府の特殊艦隊、第八特殊艦隊の皆さんよ。」

明石

「あなた方が、噂の第八特殊艦隊ですか。私は工作艦、明石と申します。少々の損傷だったら、私が泊地でばっちり直してあげますね。お任せください！」

吹雪

「よろしくお願ひします、明石さん！」

明石と第八特殊艦隊は敬礼し、挨拶を済ませた。

天馬

「ところで明石さん、奥でいったい何をされてたんですか？」

明石

「新しい艀装の開発中だったのよ。」

雪菜

「艀装？」

夕張

「そーあなた達が使っている、宇宙戦艦タイプの新しい艦装よ。ヤマトと同じく波動エンジンを搭載し、さらに二連装の波動砲で一条での集中射撃だけでなく、波動エネルギーを分散して多数の目標を同時射撃できる《拡散波動砲》が可能な前衛武装宇宙艦の戦艦型一番艦《アンドロメダ》と、同型の航空戦艦母艦《ノイ・バルクレイ》。そして瞬間物質移送機と38発のゴーランド巨大ミサイル、そしていかなる空間からも影響を受けない安定した航行が出来る波動制御機関を新たに搭載した超大型艦《ノイ・デウスーラ》。今度の作戦に備えて新たに建造する事になったの。」

天馬

「ひえー、聞いただけで凄まじいなあ…」

天馬達は新造する艦装のスペックを聞いて唖然とした。

劍城

「だが、建造は予定より少し遅れるかもしれない。」

吹雪

「えっ？何で？」

劍城

「どういう訳か、ここに来る多くの艦娘達の艦装が謎の損傷を受けていたんだ。と言っても、損傷箇所は至って軽微だから修理自体は大したこと無いんだが、数が数だけに
な・・・。」

天馬

「謎の損傷か・・・。」

くビーチく

天馬と吹雪と雪菜はその後工廠を離れ、島の外れにあるビーチにいた。

天馬

「赤い変色した海に謎の声、でもって今度は謎の艦装損傷か・・・。」

雪菜

「いったい、何が起きてるのかしらね？このソロモン海域で・・・。」

吹雪

「・・・。」

~~~~~

〜南方海域〜

それは第八特殊艦隊がショートランド泊地に到着する少し前のこと。第八特殊艦隊は正規空母蒼龍と飛竜、さらに途中合流した他の鎮守府所属の軽空母龍驤と共にショートランド泊地を目指していた。

天馬

「まもなくショートランド泊地です。」

蒼龍

「みんな元気かなあ？何だか楽しみ！」

龍驤

「せやな！しかし・・・聞いちゃいたけど、ホンマに海が赤なつてんねんなあ・・・」

一同の航行する海域は、所々が赤く染まり不気味な雰囲気を出していた。

大和

「情報によると、次の作戦海域であるソロモン方面はもつと赤色化が進んでいるのとこのことです。」

マーズ

「この時期なら、赤潮とかが起きても可笑しくないとはい思いますが……。」

雪菜

「それとも違いますね。赤潮と言うより、何だか海が錆びている様子にも……。」

不安に思う一同。

パキンッ！

龍驤

「な、何や!?! う、うわあ!?!」

バシャーーン!

突然、妙な音と共に龍驤がバランスを崩し転倒した。

天馬

「龍驤さん!？」

天馬は直ぐに龍驤のところへ駆け寄った。

天馬

「大丈夫ですか!？」

龍驤

「ああ、スマンなあ……。」

カエシテ……カエシテ……

天馬

「っ!？」

突然、何処からか妙な声が聞こえてきた。

大和

「何でしょう、この音？」

マーズ

「いや、音と言うより声に聞こえなくも……。。」

一同が龍驤の転倒と謎の声に困惑する中、一人だけ落ち着いている艦娘が居た。

雪菜

「……。吹雪さん？」

吹雪

「・・・うん、大丈夫。」



く ショートランド泊地 広場く

その日の夜、ショートランド泊地広場で大規模な宴会が開かれた。周囲には屋台が設けられ、艦娘達が様々な料理を振る舞っていた。

天馬

「美味しい！」

吹雪

「うん！間宮さんの新作の餡蜜、美味しいです！」

間宮

「フフツ、ありがとう。」

天馬と吹雪はショートランド泊地で合流した睦月・夕立・剣城・神童と共に間宮の新作餡蜜を堪能していた。

夕立

「ポッイ！、下が蕩けるっポッイ！」

睦月

「うん！あ、これ如月ちゃんにも食べさせてあげよ！」

劍城

「そうですね。きつと如月さんも喜びますよ。」

天馬

「・・・そう言えば、如月さんもショートランドに来てるんですね？あれから随分経つのに、まだ具合悪いんですか？」

天馬の言うあれとは、以前実施されたMI作戦の事。MI作戦にて如月を救出した後、如月は体力が回復するまで安静にするようにと言われたが、どういう事情か睦月達と共にショートランドにやって来たそうだ。

睦月

「元気なんだけど、念のためもう少し休ませておきなさいって・・・。」

神童

「じゃあ、後で持って行ってあげましょう。」

睦月

「うん、そうだね！」





天津風

「女の人の声にも聞こえるんだけど、何処か寂しげな感じがして……。」

時津風

「つて、やっぱ天津風も聞いてんじゃん！」

天津風に突っ込む時津風。が、そんな話に酷く脅える艦娘が一人。

吹雪

「天龍さん？」

天龍

「ふえっ!? な、何だ!？」

天龍は吹雪に声を掛けられビックリした。

吹雪

「天龍さんは聞いたことありますか？」

天龍

「えっ? い、いや俺はまだ・・・。」

龍田

「海の魔女と言ったところかしら? 気を許すと遠くに誘われちゃうの。」

天馬

「海の魔女か・・・。」

一方、テントの方では加賀が何やら険しい表情をしていた。

「・・・ねえ。」

加賀

「ん?」

そこへ、瑞鶴がラムネを持ってやって来た。

瑞鶴

「D事案の事、長門秘書艦から聞いたわ。あの娘は・・・どうなるの?」

加賀

「・・・軽々しく口にしないで。それは一級の機密事項よ。」

そう言つて、加賀はテントを離れた。

—————

くびーちく

その後、天馬は雪菜とマーズを連れて夜の散歩をしていた。

カエリタイ・・・カエシテ・・・

天馬・雪菜・マーズ

「っ!?!」

突然、海から南方海域の時と同じ声があった。三人は足を止め、海の方へと目を向ける。

天馬

「ユキツペ、マーズ。」

雪菜

「うん、確かに聞こえたわ。」

マーズ

「ハツキリと、”カエリタイカエシテ”って……。」

天馬

「赤い海、艦装損傷、そして謎の声……いったい、この海で何が起こってるんだ?」

## Episode 35 / 如月と加賀

シヨートランド泊地 居住区 103号室

次の日の朝、吹雪・夕立・天馬・剣城・神童は睦月と如月のいる103号室を訪れて  
いた。

睦月

「フフッ。」

睦月はスヤスヤと眠る如月の寝顔を見て、何やら幸せそうだ。

剣城

「もうすぐ起床時間ですよ？」

神童

「そろそろ起こさないと・・・。」

睦月

「もうちよつとだけ。可愛いなあ。」

夕立

「睦月ちゃん、すっかり如月ちゃんに夢中ツポイ。」

・・・と、如月が目を覚ました様だ。

如月

「・・・ん？」

睦月

「おはよう、如月ちゃん！」

如月

「睦月・・・ちゃん？」

睦月

「具合はどう？」

如月

「うん、大丈夫。」

如月はゆつくりと身体を起こす。

吹雪

「おはよう、如月ちゃん。」

天馬

「おはようございます！」

夕立

「ツポイ？」

劍城

「調子良さそうですね？」

吹雪・天馬・夕立・劍城は如月に声をかける。すると、如月は何やら不思議そうな表情を浮かべた。

如月

「……あなた達は？」

吹雪・天馬・夕立・劍城

「えっ?」

吹雪達は一瞬キョトンとした。

吹雪

「ふ、吹雪だよ?」

天馬

「天馬です・・・けど?」

劍城

「劍城ですよ!もしかして、覚えて無いですか?」

睦月

「違うよ!きつと疲れてるだけだよ!」

夕立

「そ、そうだよね・・・きつとそうツポイ。」

吹雪達は睦月の言葉を信じ、取り敢えず疲れによる一時的な記憶障害だという事にし



た。



（指令所）

それから約二時間後、指令所では大和が長門と陸奥に昨晚の声について話していた。

陸奥

「それで、その声はそれつきり？」

大和

「はい。ただ、何だか吸い寄せられる様な声で。」

長門

「実際、似たような報告が他の艦娘からも上がっている。本海峡での何らかの自然現象とも考えられるが・・・大淀、そっちはどうだ？」

大淀

「はい、水上偵察機及び同海域作戦中の艦娘によって、声が確認された場所を纏めてみま

した。」

大淀はテーブルにソロモン諸島の海図を広げ、声を確認された範囲を丸で囲んだ。

大淀

「ココです。」

陸奥

「完全に同心円だね。となると、円の中心が声の発生源。」

長門

「……《アイアンボトム・サウンド》か。」



く बीच く

同じ頃、天馬は雪菜とマーズと話をしていた。

雪菜

「アイアンボトム・サウンド？」

天馬

「別名“鉄底海峡”。ソロモン諸島のサボ島、フロリダ諸島の南方、ガダルカナル島の北方に存在する海域の通称だよ。太平洋戦争中、日本とアメリカの大消耗戦となった場所で、第一次・第三次ソロモン海戦やサボ島沖海戦等の海戦によって、多数の艦船や航空機がその海域に沈み、その残骸が海底を埋め尽くしていることからその名が付いたんだ。」

マーズ

「もしかして、例の声にはそのアイアンボトム・サウンドが関係してるって事？」

天馬

「そこまでは分からない。でも、謎の声と赤く変色した海の原因には、きっとアイアンボトム・サウンドが大きく関わってる気がするんだ。」

ドカーン！

突然、何処からか激しい爆発音が聞こえた。

天馬

「な、何だ!？」

マーズ

「今の音、港の方からみたいよ。」

雪菜

「行ってみましょう。」

—————

く港く

天馬・雪菜・マーズは爆発音がしたと思われる港へと向かった。

天馬

「なっ!?!何だコレ・・・。」

港へと着き目に入ったのは、大破したクレーンと酷く怯え身体を震わせる如月の姿だった。

天馬

「吹雪さん！」

天馬達は如月の近くに居た吹雪・睦月・夕立のところへ向かう。

吹雪

「天馬君。それに、雪菜さんにマーズさんも。」

雪菜

「いったい何があったの？」

吹雪

「それが・・・。」

「いったいどうしたんだ？」

そこへ、長門と加賀が様子を見にやって来た。

天馬

「長門さん！加賀さん！」

夕立

「あの、如月ちゃんが急に……。」

長門・加賀

「……！」

如月は何かに怯えてるかの様に身体を震わせ、睦月が如月を落ち着かせようと後ろから優しく抱き締めた。

如月

「私……私は……。」

睦月

「大丈夫。きつと混乱してるだけだよ。」

如月

「でも……」

天馬

「……何があつたんですか？」

天馬は吹雪と夕立に声をかけた。

吹雪

「実は、みんなで如月ちゃんのリハビリを兼ねて演習をしてただけど……」

夕立

「如月ちゃん、急に目の色を変えて私達に攻撃してきたツポイ。私達は演習用の魚雷で何とか如月を大人しくさせたツポイんだけど……」

加賀

「……」

-----

くびーちく

その後、加賀と長門は場所を変え、加賀はある事を長門に提案した。

長門

「いいのか？ 仮に伝えるのであれば、私が・・・。」

加賀

「いえ、私からあの子達に伝えます。それが最善かと・・・。」

長門

「・・・分かった。」

加賀

「ありがとう。」

加賀は一礼をし、その場を離れる。すると、ジャングルを抜けて直ぐ、瑞鶴に会った。

瑞鶴

「あのさ、昔聞いたことがある。艦娘の中に、轟沈した後の記憶を持っている空母が居る



んじやないかって。」

加賀

「……。」

加賀は何も言わず、瑞鶴の横を通り過ぎる。

瑞鶴

「ねえ、何で何も言わないの？」

加賀

「……。」

加賀は足を止め、小さくため息を吐くと、瑞鶴に顔を向けた。

加賀

「……そうね、貴女にも話しておこうかしら。」



〔居住区 103号室〕

夕方、如月は103号室に居た。だが身体の震えはまだ治まっていない様だ。

如月

「私は．．．私は．．．。」

コンツコンツコンツ．．．ガチャ

そこへ、吹雪・睦月・夕立・天馬・雪菜・マーズが様子を見にやって来た。

睦月

「気分はどう？」

如月

「睦月ちゃん．．．。」

睦月は如月にお粥の入った茶碗とスプーンの載ったお盆を渡した。

睦月

「はい、ご飯持ってきたよ。昨日はちゃんと食べてないでしょ?」

如月

「ありがとう……。」

如月は睦月からお盆を受けとる。その左腕にはうつすらだが、セーラー服の袖の辺りから青紫色の痣らしきモノが見えていた。

夕立

「ボソツ……あんなところに痣なんてあったツポイ?」

吹雪

「うくん……。」

吹雪達は心配と不安で一杯だった。

如月

「・・・私、ここに居ても良いのかな？」

天馬

「如月さん・・・。」

睦月

「何言ってるの!?! 良いに決まってるよ! だって、今まで一緒に居たじゃない!」

如月

「でもね・・・なんだか私、タマに意識が無くなるの。」

雪菜

「意識が、無くなる?」

如月

「うん。帰りたいつて思いながら・・・でも、どんどん離れていつて、暗いところに落ちて行くの・・・沈んで行くの。怖いんだけど、嫌なんだけど、でも行かなきゃつて思うの・・・。」

睦月

「何言ってるの!?! そんな事ある訳無いでしょ!?! 何度も怖い夢を見たから、そう思ってるだけだよきつと!」

如月

「私もそう思ってた！でも私、気付いたら撃ってた！私恐いの！このままじゃ私、いつかみんなの事も……！」

マーズ

「如月さん……。」

如月は泣いた。悲しいのか、恐いのか、とにかくひたすら泣き続けた。そして夜になり、如月は泣き疲れたのか静かに眠りについた。

—————

く廊下く

如月が眠りについたのを確認した天馬達は、剣城と神童を部屋の外に呼び、昼間の事を話した。

神童

「そうか、そんな事が……。」

劍城

「如月さん……。」

「吹雪さん、皆さん。」

するとそこへ、赤城と加賀がやって来た。

吹雪

「赤城先輩。」

赤城

「如月さんは、どう？」

吹雪

「少し前に、眠ったところです。」

赤城

「そう。」

加賀

「……。」

ガチャ

加賀は何も言わず、如月の居る部屋のドアを開けて部屋に入った。

天馬

「加賀さん？」

そして如月が眠っているのを確認すると、部屋を離れ、静かにドアを閉めた。

加賀

「……みんな、少し宜しいかしら？」

雪菜

「加賀さん？」

加賀

「貴方達に、話しておきたい事があるの。」

「  
・  
・  
・  
？」  
」

天馬



## E p i s o d e 3 6 / 深海棲艦の正体

く 居住区 広場く

加賀は天馬達を建物の外へ連れ出し、天馬達にある事を話した。

睦月

「どういう事ですか!？」

加賀

「言った通りよ。如月さんをここには置いておけない。」

天馬

「どうしてですか!?!如月さんは俺達の仲間!吹雪さんや睦月さん達と同じ艦娘じゃないですか!」

加賀

「分かっている。でも、彼女は以前の作戦で沈んだ。もう以前の如月さんじゃない。」

天馬

「そんな事無い！だって、帰って来たじゃないですか！剣城が命懸けで飛行場姫の中に飛び込んで、飛行場姫に取り込まれていた如月さんを助け出し生還した！加賀さんや赤城さんだって、あの時俺達と一緒に見たじゃないですか！」

加賀

「確かにそう。でも、彼女が沈んだという事実は変わらない。彼女は何れ、深海棲艦へと姿を変える。」

吹雪

「深海・・・!?!」

加賀の放った言葉に、天馬達は耳を疑った。

神童

「どういう事ですか？」

赤城

「加賀さんの言った通りよ。このまま放っておけば・・・いえ、恐らくどんな手を施したとしても、彼女は何れ深海棲艦へと姿を変える。」

剣城

「そんな・・・!!」

マーズ

「何よそれ・・・じゃあ、あの子は何なの!?!あの子は、如月さんの偽者だつて言うの!?!」

赤城

「違うわ。彼女は真正正銘、私達の仲間。睦月型駆逐艦の二番艦、如月。海の中へと沈み、戻りたい、帰りたいという想いを持ったまま消えていった。」

加賀

「艦娘の中には、その想いの強さ・悲しさ・口惜しさ等から、消えずに深海棲艦へと姿を変えてしまう者も居る。雪菜さんが天馬君に再び会いたいと強く願った果てに空母ヲ級へと転生した様に。マーズが自分を捨てた提督と扶桑さんに対する恨みと憎しみの感情によつて、山城から戦艦棲姫へと変貌した様に。」

赤城

「そして、臆気ながら深海棲艦として艦娘と戦っていた時の記憶を持つ艦娘も、中には居るわ。そうね、加賀さん?」

天馬

「ええっ!?!」

赤城の発言に、天馬達は驚いた。

雪菜

「まさか、加賀さんも深海棲艦だった頃の記憶を？」

加賀

「想い半ばの悲しみ、口惜しさ、未練……そして、只々苦しい、やりきれないという負の記憶……帰りたい、叶えたい、やれる筈、こんな筈じゃない……只々そんな想いを、完全な生ある者へとぶつける、悲しく辛い記憶。轟沈した艦娘の一部は深海棲艦へと姿を変え、私達のところへ帰ろうとする。」

劍城

「そんな……それじゃ全く意味が無いじゃないですか!!」

赤城

「いえ、意味はあるわ。」

赤城はそう言うと、加賀に目を向ける。

赤城

「加賀さんがここに居る。つまり深海棲艦としての記憶を持った艦娘がここに居ると言うことは、深海棲艦から艦娘として再び戻って来れたということ。」

天馬

「でも、いったいどうやって？」

加賀

「分からない。でももし、一部の艦娘が沈んで深海棲艦になったのだとしたら……。」

神童

「なるほど、その逆もまた然り。深海棲艦を沈めれば、艦娘として戻ってくる可能性があるかもしれないってことですね？」

加賀の話に神童と剣城は納得したが、残りのメンバーは納得出来なかった。

天馬

「でもそれって、永遠に終わらないって事じゃないんですか？」

睦月

「そうです！深海棲艦に沈められた艦娘は深海棲艦になって、艦娘に沈められた深海棲

艦は艦娘に戻って、それじゃ永遠に続くだけじゃないですか!」

加賀

「違うわ。もし私達が誰一人沈まずに、深海棲艦を沈める事が出来たら……。」

吹雪

「そうか!それが出来れば!」

神童

「深海棲艦との戦いに終止符を打てるって事か!」

加賀の話聞いて、吹雪と神童は終戦へと活路を見いだせたと思った。だが、まだ解決していない問題がある。

睦月

「じゃあ、如月ちゃんは……如月ちゃんはどうなるんですか!」

加賀

「……如月さんを救う唯一の方法、それは深海棲艦となった彼女を沈める。それしか無いわ。」

加賀の言葉に、天馬達は驚愕した。

睦月

「そんな……。」

天馬

「で、でも！深海棲艦になったからって、敵になるって訳じゃないじゃないですか！ユキツペやマーズみたいに、深海棲艦のままでも一緒に……！」

加賀

「確かに、彼女が深海棲艦になっても、二人の様にちゃんと自我を持ち話し合う事が出来れば、共存は可能かも知れない。でも、深海棲艦になった途端私達を襲うかもしれないという危険性もある。それに、言葉が通じてもし渡り合えない場合もある。その様な危険性を考えれば、沈めることが一番の近道なのよ。」

天馬

「そんな……。」

睦月

「そんな……そんなあああ!!」

天馬達は言葉を失い、睦月は泣き崩れた。そして、その一部始終を建物の窓から一人の少女が見ていた事には、誰も気づかなかつた。

如月

「……」



「指令所」

翌日、指令所では大淀が基地に入った通信を解析していた。

大淀

「ソロモン海域北部外縁を照海中の、第二航空戦隊旗艦飛龍より緊急入電！」

長門

「読んでくれ。」

大淀



「はい！第二航空戦隊飛龍。宛、南方海域艦隊指令府着長門。我、南太平洋ソロモン海域北部外縁部において、複数の有力なる敵機動部隊を発見。」

長門

「何だと!？」

長門は驚き、立ち上がる。

大淀

「敵機動部隊軍、各輪形陣中心は空母棲姫級のもよう。随伴・護衛艦に高速戦隊夕級、防空巡ツ級を含む。」

陸奥

「とんでもない数じゃない！」

長門

「大規模な空母機動部隊だ．．．。」

と、再び通信が入った。

大淀

「二航戦飛龍より速報！我、これより航空隊の指揮を取る。稼働攻撃隊、発艦開始する。」  
長門

「飛龍らしいな。だが流石に戦力比が違い過ぎる。一撃与えたら撤退する用に指示を。第五航空戦隊翔鶴及び瑞鶴を向かわせ撤退を援護する。合流後は直ちに全速力で退避。」

大淀

「了解！第五航空戦隊翔鶴及び瑞鶴に緊急出場命令。」

ツツツ・・・ツツツ・・・

大淀

「アイアンボトム・サウンド調査隊の金剛隊から入電！調査海域に到達したとの事です。」

長門

「っ!？」



くアイアンボトム・サウンド 調査海域く

その頃、金剛率いるアイアンボトム・サウンド調査隊は、赤く変色した海を航行し調査をしていた。

金剛

「長門が危惧した通り、ちよつと不味い事になってマース。」

ピキン



く指令所く

夜、ショートランドに帰投した金剛は調査の結果を長門達に報告した。

金剛

「このアイアンボトム・サウンドを起点とした謎のボイスは、次第に広がり、それに効するかの様に海の変色がどんどん広がっているデス。」

長門

「変色・・・他の艦隊からも同じ報告があつたな。」

カチヤ

比叡が紅茶を入れ、長門の前に置いた。

比叡

「どうぞ。」

長門

「ありがとう。」

金剛

「この変色した海域では、生態系は壊滅。しかも海域内を航行すれば、艦装が損傷すると

いう謎の現象が起きているデス。」

長門

「艀装が損傷？」

比叡

「はい。お姉様も私も、僅かながら艀装に損傷を受けました。」

大淀

「損傷は、同海域を長く航行していた艦ほど大きく、変色海域が何らかの影響を与えている事は間違いありません。」

長門

「つまり長時間航行すれば、最悪艀装が使えなくなると言うことか。ウム・・・。」

ガチャ

指令所入り口の扉が開き、大和・赤城・加賀の3人がやって来た。

大和

「大和、遅くなりました！」

赤城

「一航戦赤城、加賀、参りました！」

大和は変色海域について調べた結果を長門に報告。長門はそれを聞いて驚いた。

長門

「変色海域が拡大している!？」

大和

「はい。私の零式艦偵及び天馬君のコスモゼロ・1000式空間偵察機による航空偵察と、最新観測結果から計算すると……。」

大和はソロモン海域の地図に書かれた赤丸の外周に、約二倍の大きさの赤丸を書き足す。

大和

「1日にこれだけの速度で広がっています。もしこの速度を維持したまま拡大を続けた場合、あと三日と七時間後にはこの泊地も変色海域に飲み込まれるでしょう。」

比叡

「ヒエー！た、大変です！」

大和

「観測されたポイントから推定される発生源は以前と変わらず、鉄底海峡の一点、ポイントレコリス沖です。」

長門

「レコリス・・・過日飛行場姫を無力化したところか。」

金剛

「先手必勝！件敵必殺！それしか無いデス！」

長門

「と言いたいところだが、まだ問題がある。二航戦が会敵した空母機動部隊だ。」

赤城

「二航戦がその一軍に打撃を与えましたが、攻撃隊の未帰艦機が多く、現在最編成と補充・錬成を急いでいます。」

陸奥

「二航戦が？」

長門

「大淀、敵の機動部隊は何軍確認されているんだ？」

大淀

「空母棲姫級を主力とした、六群以上の集団が確認されています。場所はここ、マライタ島の北です。敵集団の進行方向から推測される到達ポイントは、鉄底海峡。現在の進行速度を維持したままだと、あと58時間、約二日と十時間後には鉄底海峡に到達します。」

金剛

「どうしますか？合流すれば、アイアンボトム・サウンドへの突入は不可能です。」

長門

「しかし闇雲に変色海域に突入すれば、艦装に損傷を受け、下手をすれば会敵の前に全滅の危険性もある。ウム……。」

加賀

「……。」



# Episode 37 / アイアン・ボトムサウンド突入作戦

～工廠～

次の日、赤城と加賀は工廠を訪れ、艦装の損傷について夕張から話を聞いていた。

夕張

「・・・うん、どういう力が働いたかは分からないけど、確かに変色した海を航行した艦娘は、みんな艦装に損傷を受けているわ。ただ・・・。」

加賀

「ただ？」

夕張

「変色した海を航行したはずなのに、損傷を全く受けて無い艦が二隻だけあったわーの。」

赤城

「艀装に損傷の無い艦ですか？」

夕張

「一つは天馬君の使つてる艀装、宇宙戦艦ヤマトなんだけど、これについては説明がつく。天馬君は戦闘以外にも、航行中は常に低出力の波動防壁を展開しているわ。恐らく波動防壁を展開しているおかげで、変色した海の影響を受けなかったのね。」

加賀

「なるほど。で、もう一つは？」

夕張

「もう一つは、特型駆逐艦の吹雪。あの子の艀装も何故か損傷を受けてないの。」

赤城

「吹雪？」



く 甘味処 間宮く

その後、赤城と加賀は吹雪と天馬を間宮の店に呼び、話をする事にした。

天馬

「えっ？ 艤装が？」

赤城

「はい。吹雪さんと天馬君だけが、艤装に全く損傷を受けていなかったんです。天馬君に関しては理由が分かっているのですが、吹雪さんに関しては全く理由は分からないと。」

加賀

「それと聞いたわ。あなたは例の謎の声が聞こえた時、まるで宥めるかの様に話していたと。」

吹雪

「えっ？ 私がですか？」

吹雪は何が何だか分からない様だが、赤城は驚いた。

赤城

「覚えてないんですか？」

吹雪

「覚えてないと言うか、身に覚えがないって言うか……。」

困惑する吹雪。すると、加賀がある質問をした。

加賀

「吹雪、あなた確か他の鎮守府から来たのよね？」

吹雪

「えっ？そ、そうですけど……？」

加賀

「提督とはいつ会ったの？」

吹雪

「今の鎮守府に配属されて、それから直ぐです。」

加賀

「じゃあ、以前は何処の鎮守府に居たの？所属してた艦隊と、その艦隊の旗艦は？」

吹雪

「えーっと、それは・・・あれ？」

天馬

「どうしました？」

吹雪

「変なの。今の鎮守府での記憶はちゃんと覚えてるのに、その前の記憶が全く思い出せない。」

天馬

「思い出せない？」

赤城

「・・・。」



く炊事場く

一方、剣城はふと炊事場を訪れた。

劍城

「くそっ、どうも気分が悪い。顔でも洗うか。」

するとそこへ、睦月がやって来た。

睦月

「あ、劍城君。」

劍城

「睦月さん、どうかされました？」

睦月

「ううん、ちよつとね・・・。」

「いやああああああああ!!」

突然、建物の中から悲鳴が聞こえた。

劍城

「な、何だ!？」

ガチャ

劍城と睦月は慌てて建物の扉を開ける。扉の向こうでは、如月が泣き崩れていた。

睦月

「如月ちゃん!」

如月

「っ!？」

如月は恐る恐る睦月に顔を向ける。右腕には左腕と同じ痣が現れ、額から四本の黒い角が生えていた。

睦月

「如月．．．ちゃん?!」

如月

「いや……いやああああ!!」

如月はフードを被りその場から走り出す。だが劍城に右腕を掴まれ足を止めた。

劍城

「待ってくれ如月さん！」

如月

「劍城……君。」

劍城

「心配しないで下さい。何があっても、俺達はアンタの傍に居ますから。」

如月

「でも、私……私は……。」

泣き崩れる如月に、睦月は後ろから優しく抱きしめた。

睦月

「何も言わないで。如月ちゃんは何も心配する事なんて無い。ずっと一人で寂しい思い





「吹雪が？」

赤城

「はい。変色海域を航行した艦の中で、天馬君のヤマトと吹雪さんだけが艀装に全く損傷を受けていなかった事が発覚しました。天馬君については航行中に波動防壁を使用していたため、損傷を防ぐことが出来たと思われます。ですが吹雪さんについては全く不明です。」

加賀

「しかも、鉄底海峡から発せられる声が初めて観測されたのは、吹雪がこのショートランド泊地に到着した日付と同一。単なる偶然と言ってしまうえば、それまでですが……。」

赤城

「因果関係がある可能性も、否定は出来ません。」

加賀

「この変色海域、鉄底海峡において明らかになった様に、彼女には他の艦娘とは違う何かがあると考えるのが自然です。」

長門

「だが、それを根拠に仕掛けるのは無謀すぎる。せめて……。」

ガチャ

指令所のドアが開き、夕張が慌ててやって来た。

夕張

「長門秘書艦！」

長門

「夕張か、どうした？」

夕張

「つ、ついに完成しました！新型艦装、アンドロメダ級宇宙戦艦一番艦アンドロメダと、  
航空戦闘母艦ノイ・バルグレイ、そしてノイ・デウスーラが！」



〜ビーチ〜

夜、吹雪と天馬はビーチで星を眺めていた。

吹雪・天馬

「……。」

キラーン

二人の上空を一筋の流れ星が流れた。

天馬

「流れ星……。」

吹雪

「何をお願いすれば良いんだろう……。」

ザツザツザツ……。

森の方から足音がする。目を向けると、そこには大和の姿があった。

天馬

「大和さん。」

大和

「二人とも、こんな時間にどうしました？」

吹雪

「大和さんこそ。補給と整備はもういいんですか？」

大和

「はい、もう大丈夫です。隣、よろしいでしょうか？」

天馬

「は、はい。」

大和は吹雪の隣に腰を下ろし、吹雪と天馬は上体を起こし、三人は海に目を向けた。

大和

「静かな海ね……。」

吹雪

「はい……。」

海は波も無く穏やかで、海面には綺麗な星空が写っていた。

天馬

「・・・大和さんは、最初から知ってたんですか？深海棲艦の秘密。」

大和

「そうですね・・・全く知らなかったと言えば、それは嘘になります。」

吹雪

「マーズさんの事があってから自分でも少し思ってたんですけど、まさか私達の戦ってきた深海棲艦が、みんな・・・そう考えると何だか・・・。」

大和

「この世に生まれて、艦娘として精を得て、此処に居るのは何の為か・・・私達は何の為に生まれたのか・・・大切な仲間を、大切な絆を守りたい。この想いを伝えたい。その為に、此処に居るんじゃないかって・・・。」

吹雪

「・・・。」

大和

「私達の戦いには意味がある。それはとても難しく困難な事ですけど、私達はきつと出切る。私達はそれを、『希望』と言うのかしら？」

天馬

「希望……。」

大和

「はい。みんなを守り、この戦いを終わらせる為に……。」



く指令所く

夜明け前、指令所には長門と陸奥がいた。

陸奥

「決めたのね？」

長門

「ああ……。」

ガチャ

裏口が開き、大淀がやって来た。

大淀

「作戦参加艦艇、全員揃いました！」

長門

「うむ……。」

ガチャ

長門は広場に通ずる扉を開け外に出る。広場には吹雪達三水戦、赤城達一航戦を始め、大勢の艦娘達が集まっていた。

長門

「これより、南方方面ソロモン方面への全力出撃による作戦を展開する！」



飛龍

「ヨシッ!!」

金剛

「やりますヨー!」

神童

「打って出ると言う事か。」

劍城

「面白い・・・!」

川内

「ヤッター!夜戦だ夜戦だー!!」

大規模な作戦と言う事もあつてか、全員気合が入る。

長門

「本作戦の最終目的は、ソロモン海域深部にて拡大・侵食を続けるアイアン・ボトムサウ  
ンド変色海域の発生源の発見及び破壊・殲滅だ。変色海域では敵深海棲艦以外の生命は

死滅し、我ら艦娘の艦装も侵食され破壊される。この中で作戦を遂行する事は困難を極める。しかし放置すれば変色海域は拡大を続け、終いにはアイアン・ボトムサウンド中枢部へ攻撃を仕掛ける事は永久に不可能となる。よって、このショートランド泊地の水上部隊全力をもって、突入作戦を執行する！各艦は、各々全力で作戦に当たってほしい。それから、神童、雪菜、そしてマーズ、お前達に新しい艦装を預けたい。」

神童

「新しい艦装？」

雪菜

「それって……!？」

マーズ

「まさか……!？」

長門

「そうだ。神童、お前にはノイ・デウスーラを。マーズ、お前にはアンドロメダを。そして雪菜、お前にはノイ・バルクレイを託す。後に工廠にて艦装の受け取り及び調整を受けるように。」

神童・雪菜・マーズ

「はいっ!!」

長門

「艦隊の編成及び作戦の詳細については追って知らせる。各艦、出撃準備に掛かれ!」

「はいっ!!」



く工廠く

その後、工廠では弾薬・物資の補給と最終調整が急ピッチで行われた。

明石

「これで全部かな?」

夕張

「もう一回確認しよっか？」

工廠の一角では、神童・雪菜・マーズが新しい艤装を装着・調整をしていた。

神童

「これがノイ・デウスーラか。」

神童は背中に多数の大型ミサイルを搭載した大型のバックパックを背負い、両肩には新型のデスラー砲と瞬間物質移送機を2基装備。

雪菜

「これがノイ・バルクレイ。で、マーズのがアンドロメダね。」

マーズ

「何だか、イける気がしてきたわ！」

雪菜とマーズは脚と背中に天馬の宇宙戦艦ヤマトと似た形状の艤装を装着し、両腕に

は重力子スプレッド発射機4基と、二連装次元波動爆縮放射機、通称“拡散波動砲”を搭載した艦首型の大型の艦装を装備。さらに雪菜は背中に大型の艦載機格納庫を装備していた。

金剛

「三式弾と鉄鋼弾も、しっかり頼むデース！」

瑞鶴

「よし、アウトレンジで決めてやるわ！」

加賀

「今回は最悪の事態も考えておくことね。」

加賀が瑞鶴の背後から静かに告げた。

瑞鶴

「何？私が沈むかもって事？・・・でも、もし沈んでもまた戻ってこれるんでしょ？」

加賀

「二度と口にしないで。それは言葉では言い表せない程、辛く苦しい事だから・・・。」

加賀は歩きだし、静かに工廠を離れた。

瑞鶴

「  
・  
・  
・  
。」